大正元年九月二十三日印刷納本
毎月一回二十三日印刷納本
明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可

十月一日發行

# 女學世界

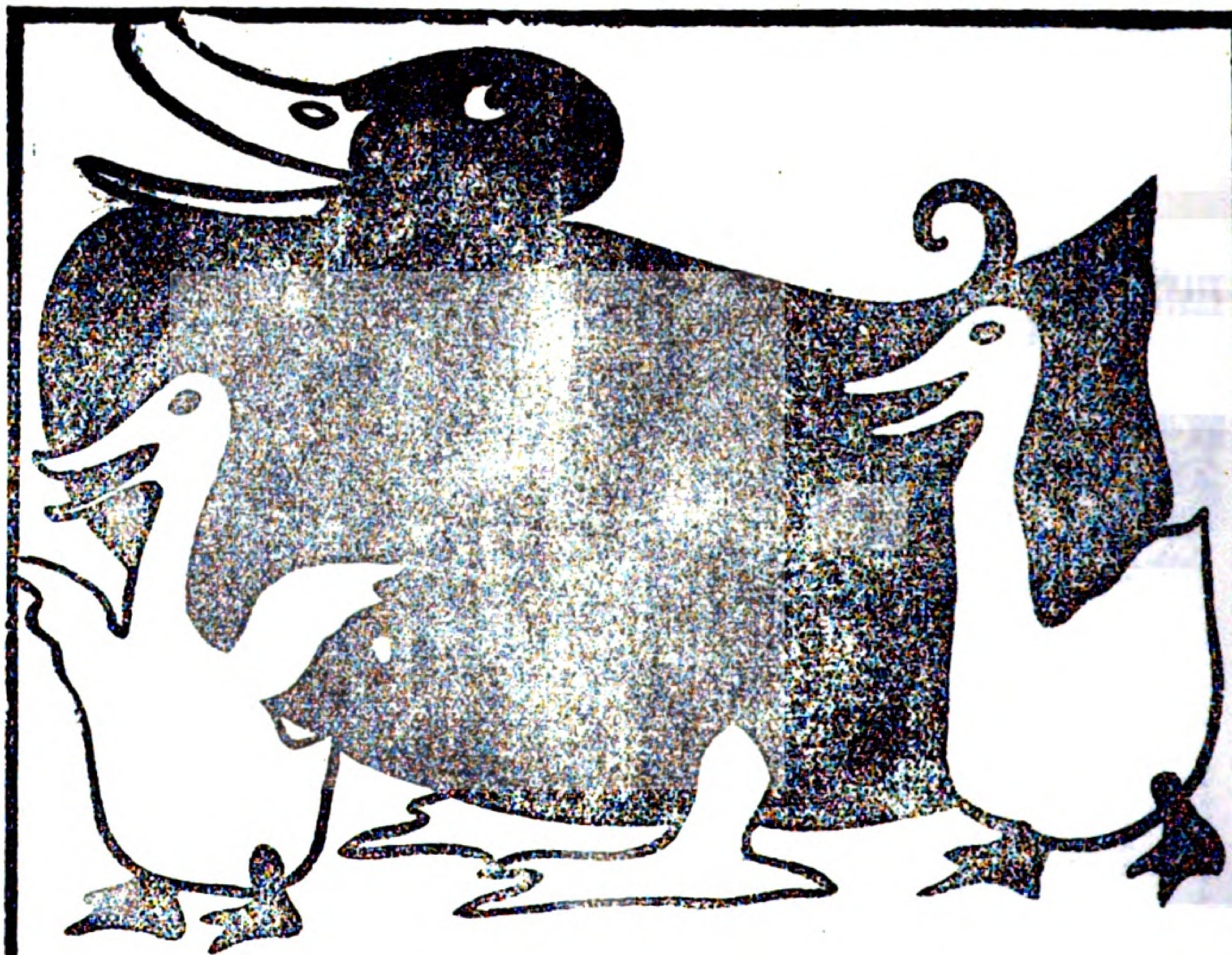


第十二卷
第十三號

博文館



美顔水
冷き秋にも菊は咲く
美顔水さへ
絶えずお用あれば
冷き風にも膚荒れず色艶
損はず美しさ益々加はり
お顔は花と咲匂ふ！
◎顔色艶かに膚を美にす
◎白粉の溶水に最も宜し
本舗　大阪　桃谷順天館



十月一日より

第廿四回新柄陳列會

第三回美術及美術工藝品展覽會

附 諸國名物品陳列

雜貨新製品陳列會

懸賞裾模樣圖案陳列會

懸賞寫眞及參考寫眞陳列會

寄切れ見切反物大賣出し

右何れも盛大に開會仕候間何卒賑々しく御來遊被下度偏奉願上候

東京駿河町

三越呉服店

# 女學世界 第拾貳卷第拾參號 目次

# クラブ新聞

## ●諒闇

恐れ多くも諒闇の最中にあつて、喪章も附けずに往來を歩いて居る方も間々あるやうですがこれは誠に不謹愼と云はればなりません。

取りわけ婦人は愼ましやかでなければなりません。よしや喪章は忘れずに附けましても、白粉をこて〳〵と塗り、けば〳〵しい服裝をして往來を歩いて居るのを見ると、一種の不快な心持を他人に起させます。

諒闇中のお化粧は、成るべく目立たぬやうに而して瀟洒として清々しい姿を整へるのが肝要であります。目立たぬ化粧にはクラブ洗粉が第一であります。清楚な化粧にはクラブ白粉が第一であります。クラブ化粧品を常に用ひらるゝ方は、如何なる場合に於ても、人から厭惡されるやうなことはありません。

## ●大切な忘れ物

麹町の通りを急せき切て駈けて來た女中體の女、今しも重さうな旅行鞄を提げて電車に乗らうとする主人夫婦を呼留めて、「お大切な品をお忘れになりましたから」と出したのはクラブ歯磨の包でした。すると奥様は「此頃は途中の停車場にちやんと備付けてあるから態と置いて來たのよ」と言捨てゝ乗つてお了ひになりました。女中は詰らなさうな顔して暫時電車の跡を見送つて居ました。

**禁轉載**

| |
|---|
| クラブあらいこ |
| クラブおしろい |
| クラブはみがき |
| クラブ美身クリーム |
| 煉香油クラブ美髪用ポマード |

**本店新案**

## ●壹等金牌

上野の納涼博覽會で、中山太陽堂出品のクラブ化粧品各種は、審査の成績に因り一等賞金牌を授與されました。

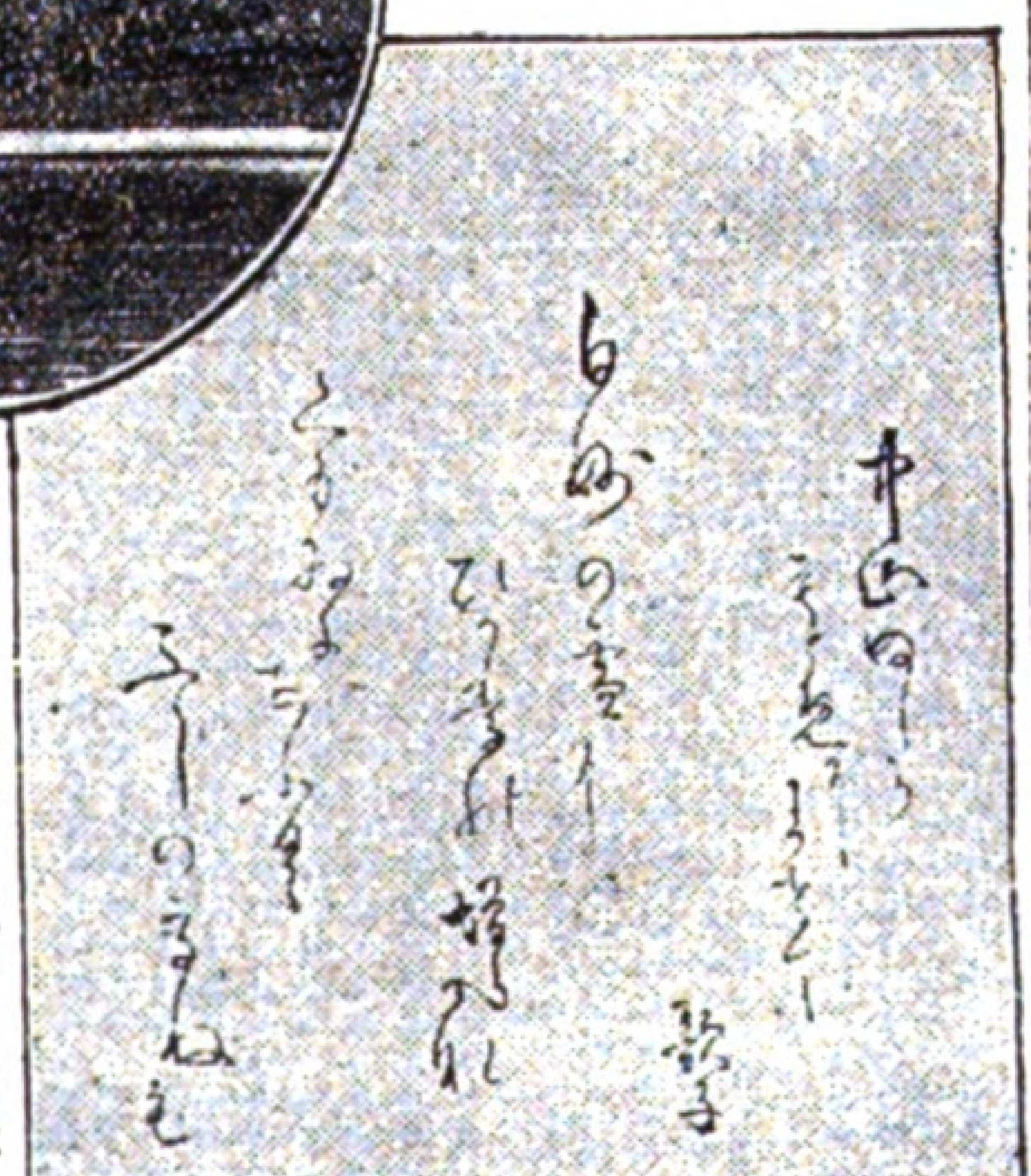
## ●新化粧品

美身マッサージ用クラブマッサージクリームは昨今何處へ行つても大評判。

實踐女學校長
下田歌子女史筆



山は富士
化粧はクラブ



中山ぬしの
もとめに
まかせて
　　　歌子

白妙の
雪にひかりの
増るかな
くもゐにあふぐ
ふじの高ねも

富士の高嶺も白妙の雪の色によりて、幾倍の崇高さと美しさとを増すが如く、日本の淑女も品質の最も優れたるクラブ白粉のお化粧によつて増々け高き氣品と美しき容姿とを、磨き出されんことを切望致します。下田先生のお歌の意味も、畢竟玆にある事かと存ぜられます。

此の切取を添へ御注文の方は送費無料
女學世界切取券 十月號

現世稀なる新奇藥の提供

藤本藥學士發見

紳士淑女は必ず見落す勿れ



生毛液 ピローゲン

●世に流布する毛はへぐすり實に不完全なるの餘り藤本藥學士數年間諸藥學博士と合議の上全く毛生の實を得る現世一の偉効新藥を發見せらる▲御婦人紳士等の難者よ「かれこれ」と迷はず完全無比のピローゲンを試よ凡そ毛根のあるべき所毛のなき方又ぬけ毛を止め、薄毛を増し

●實に不思議の奇藥▲眞に發毛することを實驗説明せらる▲ゼヒ御試見あれ

大罎金壹圓　小罎六十五錢　特製金貳圓　送費各四錢

振替東京四五一四番又は小爲替で御注文あれ

發賣元　東京市兩國横山町三丁目　電浪五一〇、一五四二番　賣藥問屋　玉置文治郎

文學士 内海月杖先生著

# 新體 女子書翰文

忽三版

◎四六判凡五百頁　上製頗美本　正價九拾錢　送料拾錢

女學世界評先づ女子の書くべき書翰文の作法を述べ、次に候文及び言文一致の文例を出したれば一般の女子の爲めに頗る便利也云々。婦人世界評この書は説明も叮嚀に詳しく、作例も氣が利いてゐる。例題だけ讀んでみても面白い云々。

東京本郷森川町　文成社　振替壹九四六七番

女(いの一)

女(いの二)

# 大阪小笠原病院長實驗皮膚病專門新劑

## 皮膚石鹼

久しく小笠原病院に於て患者に投與せられし者にして巧妙なる製劑の配伍により眞に色を白くしキメを細かにし輕き皮膚病を治せしめ其他各種の病毒を豫防消毒するの力強大に而かも香氣馥郁且價格低廉なるが故に今や衞生と經濟上不可缺物として各家庭に常備せらるゝの光榮を有するに至れり由來藥石鹼は常用せらるべきものにして發病後慌てゝ用ゆるが如きは愚の極なりと嘲らるべし

定價 一個五錢送費二錢 半打廿八錢送費四錢 壹打五十錢送費八錢

## 艶美羔

にきび並にざくろ鼻の特効劑なり由來此種の藥劑は汗牛充棟啻ならずと雖も眞にニキビを治せしむる効力ある者は本劑を措て他にあらざる事は愛用者諸氏の熟知せらるゝ所なるべし

定價 小八錢 中十五錢 大廿八錢 送費各二錢

## 皮膚軟羔

いんきんたむしくさかんさなまづ、ひぜん、かゆがり、ひびくさ、肛門の痒み、たい毒、しもやけ等凡て痒みある皮膚病の特効劑にして奏効神の如しとの讃評は過言に非ず加之しゆまず痛まず又攻せず盡し天下の皮膚病藥の上乘なる者也

定價 小十錢 中廿錢 大五十錢 送費各二錢

## 美膚練

わきがの腋臭に用ひて奏効顯著ナ、其他しらくも、はたけ等には一二回にして奏効確實ひゞ、あかぎれ、顏手足のあれ等に用ひて卓効を現はす事世上に有り觸れたるアレシラズの比に非ず敢て試用を祈る

定價 小五錢 中十錢 大二十錢 送費各二錢

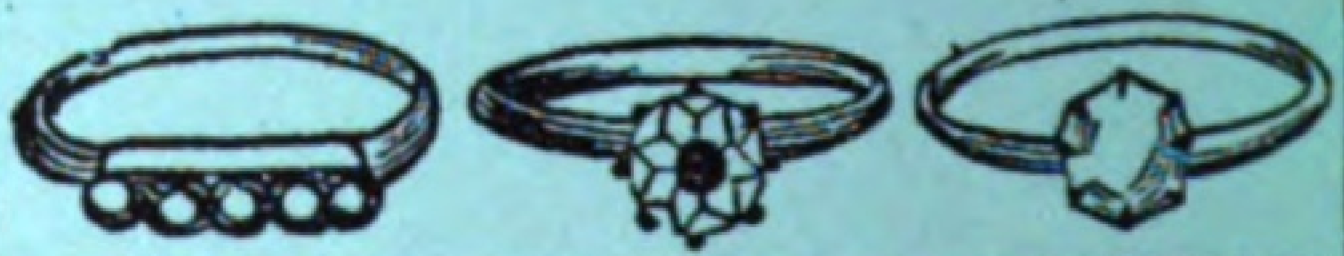
高等香油 **エンゼル香油** 毛髮を黑く艶かにしてフケぬけ毛等を防ぐ偉効ある逸品なり

定價 十五錢送費六錢 廿五錢送費八錢 四十五錢送費八錢

本舖 大阪東區北久太郎町四丁目 **回天堂** ◎東京小石川武島町廿一 **回天堂出張店**

◎各地藥店にあり品切の節は本舖又は出張店へ御注文あれ

# 大流行金メッキ製



## 壹個參拾五錢宛 送料三錢

## 安くてよい指環

これは金メッキ製で模造寶石を入れた指環で、人のはめてゐる所を見ると、どうしても十圓か廿圓もする眞正の金指環と思ふ程によく出來てゐます。故に東京では只今大流行です。それで大切にすれば二三年間は色も變らず模造寶石も眞物の樣です、今回廣告のため一個三十五錢送料三錢小爲替で送金次第御送り致し升二錢切手なら一割增四十二錢分送れ◎形色々あり誰の指にも合ふ樣に出來てゐます

東京神田錦町 錦城學校南隣 **小島工場**

## 御大葬紀念、章は金張懷中時計廉價發賣

今回の御大葬は上下萬民の永久に紀念し奉るべき一大御儀式也依て弊堂が東都有名の意匠家に囑托製造せし金製紀念徽章は一面に **明治天皇陛下** 御製の國風を謹寫し一面は皇城二重橋の壯嚴を彫刻せし絶好の美術的 **時計用徽章** にして體裁高尚優美にて眞に紳士淑女の御携帶に適す◎本時計は夙に聲れ高き米國時計會社美人商標刻印付特製品にして兩蓋紀密斜子刻み中蓋付三枚蓋龍頭卷引出し針廻し機械最新アンクル式寶石入四十時間持紳士用15 16 17 18形 賞



婦人用金張梨地片硝子13形均一特價 **五圓五拾錢** 本品は製造會社が多年の實驗と斬新なる化學を應用して十八金張に製造したるものにして普通瑞西製メッキ側等の粗製品と異り眞の金張故に金色燦爛として優に **十八金側** を凌駕し尚ほ機械の要所には寶石を鏤めたるものなれば完全無缺にして進遲振止の憂なく故に **卌ケ年** の保險を附す **景品** には舶來 **鎖** の三品を進呈望の方は前記紀念徽章[illegible]にて鹿皮

弊舖は責任を重じ女學世界廣告に依り御注文の旨御申越次第代金引換小包郵便にて送る

弊舖は信用を重んじ遠隔の購客にして現品御覧なく御送費廿錢爲替は玉局宛 **注意** 購求後尚一貴意に適せざる時は無割引他品交換亦は代金返戻す

大阪上本町五丁目 時計商 **夏目時計商舖**

女(いの三)

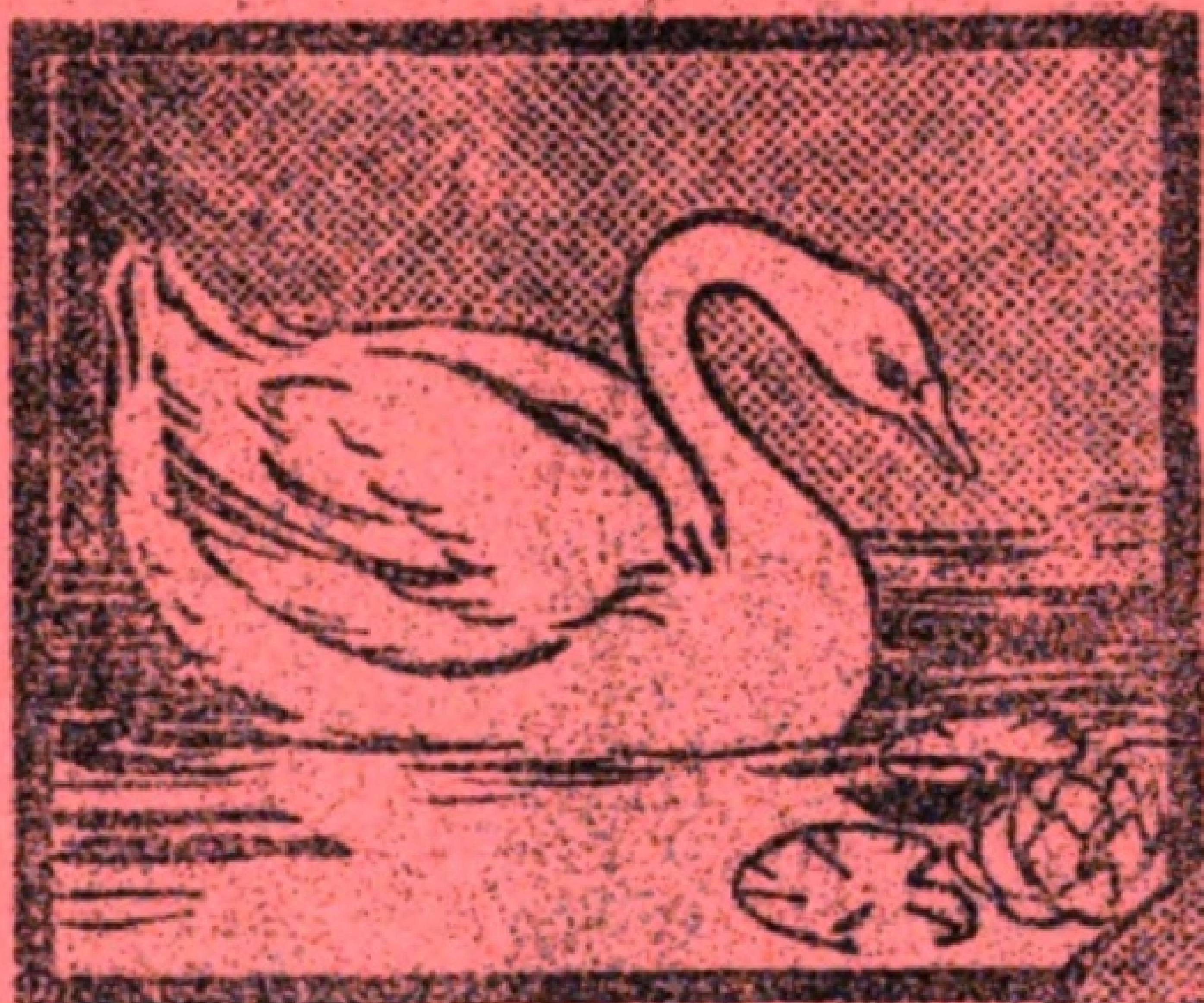


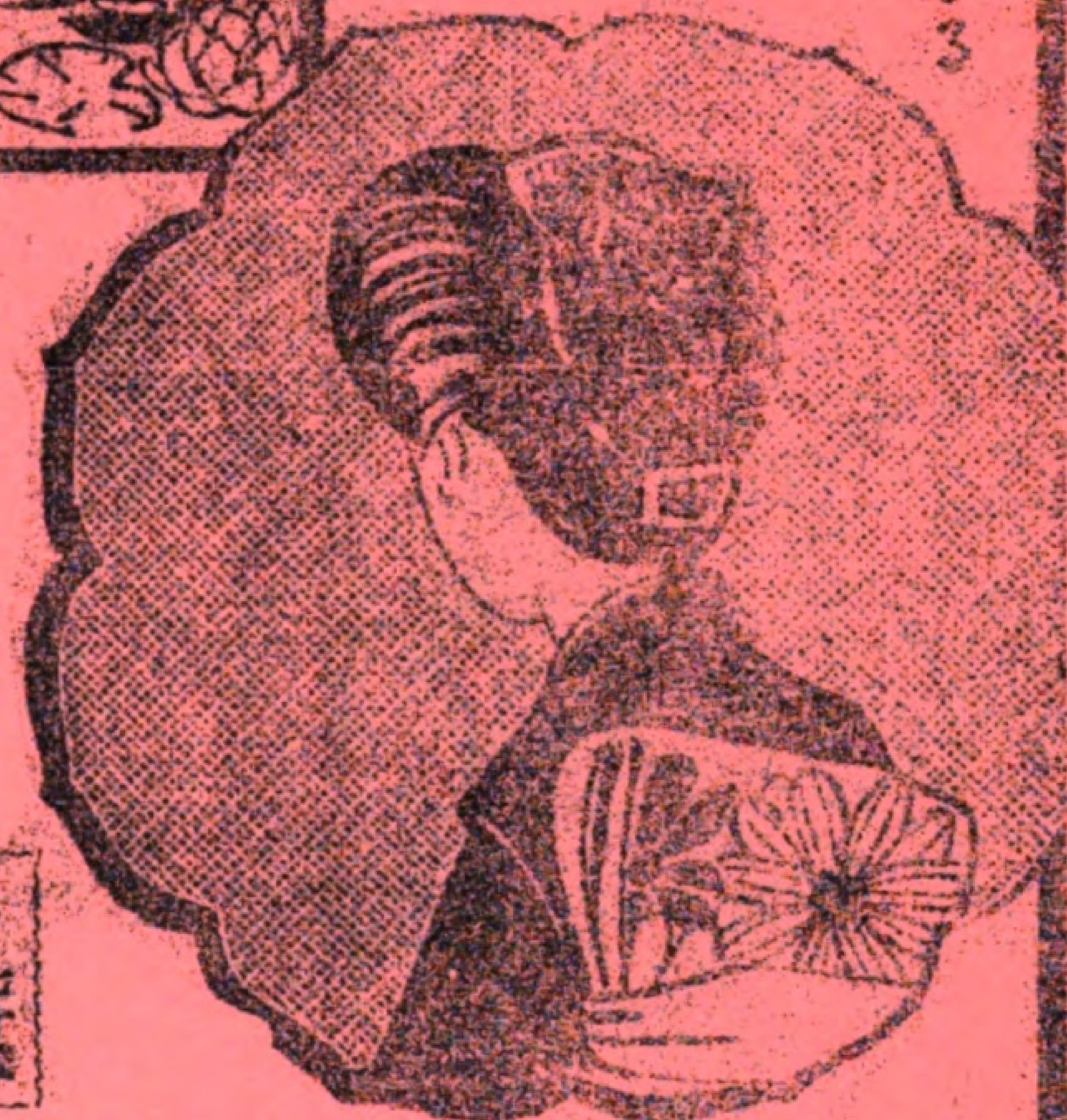
新秋


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一番

香水の代用となる

# 千代田香油





英國ソーパー會社製
スワン石鹼發賣元

本舗　山岸三之助

東京馬喰町
大阪鹽町二

定價
七十錢
卅五錢
廿五錢
十七錢

千代田を
花に例ふれば
今を盛りの
菊の花
菊は香でもち
品でもち
千代田は香でもつ
品質でもつ




岡落葉筆

## わきが

ラピヨン

本劑は最新の學說と實驗とにより研究の結果發見し得たる腋臭症と對する新劑にしてこれを患部に塗擦すれば其**主成分**の力に依り皮膚を刺劇する事なく其組織を變更し**惡臭を起す原因**たる毒素の分泌を止むる作用を有する**純理想的製劑**にして**頑固重症**には特別製を用よたやすく**奏効**す若し種々の治療を試み効無く空しく迷ひ苦しむ患者は速に試み苦惱を脫せよ

丙價七拾錢 乙價壹圓卅錢 特別製貳圓五拾錢 五圓

## 通經新劑 月やく下し

名藥 リルピン

本劑は子宮身體に害なく如何程永き月經止りも安全に通經し永く月經を見ざる**血塊**にても特製を用ゆれば**容易に流經**を催する製劑なるが故に月經閉止にて困難する婦人は速に試み其特効を知られよ又月經不順月經停滯等に依りて起る子宮病血の道を治し古血惡血を一掃す本劑は効能極めて著しきも毫も子宮身體に害なくたやすく下る●半劑六拾五錢壹劑壹圓廿錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢

## ぢを治す

從來迂遠なる內服藥に治績を委れ適切なる治方を講ずる者少し本劑は近世醫學界にて**賞讃を博**しつゝある藥品を以て座藥に調製し之れを肛門內に挿入するも**少しも疼痛を覺ず**體溫のため徐々適切に溶解し直接病患部に作用し蓮痔穴痔いぼ痔裂痔脫肛又は痔瘻の初期等痔疾一切に對し偉大なる著効を奏す速に用よ價半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

## にきびそばかす

男女青春の時期に多く發生し羞花の美貌も彩なく醜貌に歎かしめ提へ得し幸運も不幸の境に終らしむるニキビソバカス吹出物に對する從來の姑息療法たる外用藥に依らず**內服藥**の力を以て皮膚間の組織に及ぼし原因的療法を講ずる獨逸皮膚病學博士ウンナ氏の學說に基き調製したる新劑なれば躊躇する事なく速に試み今日の苦しみを昔噺に終らしめよ本劑はニキビソバカスを治するの外に色を白くするの効著しければ速に用て天賦の美貌を遺憾なく發揮せよ●半劑五拾錢壹劑壹圓特別製貳圓

**注意**——各藥共に小包料拾貳錢と●ラピヨン●ハンドコロン●ペクネス●ニキビ藥●ぢの藥を御注文の方は外に小包料實費三錢と都合拾五錢藥價の外に拂込下され度爲替は神田猿樂町振宛

## 色の白くなる

ハンドコロン溶液

本劑は多年歐米各種の身體白色法を研究の結果發見せられたる新液にして世上雜多の白色化粧水の比にあらず本邦に於ても貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ白色劑にして本劑を塗擦すれば主成分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる價A印並製壹圓B印特別製壹圓五拾錢

## 毛のはへる

毛髮生養液 原名ベグネス

本劑は最も進步せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛囊を肥沃し毛芽の發育を速にし健なる毛髮發生す又本劑は拔毛落毛を止むる効能著しく常に香油に混用すれば生際惡きを直す眉毛口ひげ其他の所に毛なき人は一刻も速に試みられよ學理にも實際にも適合せざる怪しげなる無名の賣藥に迷ふ勿れ並製壹圓卅錢特別製貳圓

## りん病

キーロン

最有力藥の合劑にして急性慢性の痳病消渴に內用すれば輕快を覺え膿血次第に止り痛を止む惡性の慢性病にても特別製を用ゆれば効を奏す本劑は體內に於て強度の殺菌防腐液となり小便を共に排泄せられ自然の洗滌法となりて痳菌を驅逐し人に知られず自ら新治療を施し得速に用よ 輕症用六十五錢重症用壹圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

## 梅毒（はいどく）

キーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の有力なる一種稀有の新法劑にして全身の毒を大小便にとり永年痼疾の梅毒さう毒かさ吹出ものよこねかんそ骨うづき其他惡性の梅毒にも大効あり本劑は容易に著効を奏する事あれども尙持長して益々効驗を明にす世間雜多の驅梅藥の比に非ず速に試みよ藥價半劑八十五錢一劑壹圓六拾錢貳劑參圓

## らい病

ダービンの發見

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にして其**有効**なる本劑に優る者なし速に奮て先づ試用し見よ**大効を奏**す一劑廿日分參圓二劑四拾日分五圓特別製九拾日分拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

**專賣** 東京神田區小川町四十 **オリエンタル藥館**

# 「お姉様どちらがよくッて」

と花さんが両手に清書を二枚持て馳て參りました。近頃はこんな幼い御子供衆でも字の巧拙を知つて居るやうになつて參りました。之れを見ても今の世に字が何れ位必要になつて來たかゞわかりましよ。殊に御婦人方の字の拙いのは損なばかりでなく、實に一生の耻です。今の中に例の評判の高い特許習字速成法で練習なさい、六ケ月で他人からうらやまれるほどの能筆家となられます。殊に手本の書者は小野鵞堂先生であります御希望の方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會へ「ハガキ」を御出しなされば見本附會則を無代で差上げます。尚本月中の入會者に奇妙奇拔の特許水書草紙を差上ます。近來類似の會が續出御注意なさいませ。




(はの四)



秋の歌　　細木原靜岐筆

# 婦女界

## 十月號

▲結婚に對する近代思想の缺陷……山路愛山
▲同情すべき婦人犯罪の徑路……法學博士 花井卓藏
▲孝道の話……猪熊夏樹
▲世界の女……モンブラン
▲繪噺 遠人……竹久夢二
▲十月の繪暦……中野修二
▲人にするまで 鳩山春子
▲筑摩の鍋祭 芳賀博士

◎不良少年

▲家庭が生んで社會が育てる 下田次郎
▲斯ういふ家庭から不良少年が出る 外山英會
▲ブース夫人と不良少年 山室軍平
▲通俗衛生 家庭に對するお醫者の注文 吉岡彌生

◎いろ／＼の御飯のたき方

おいしい栗飯―松茸飯―其他いろ／＼

▲白痴の子を抱く淋しい母
▲醒めかゝりたる女の手記
▲家庭の副業と家政
▲大切な産後の心得

▲戀を戀する女……サツフォー……野上臼川
▲鳥が鳶を産むか 安藤盧沼
▲風變りの女……沼波瓊音
▲住居は如何に選定すべきか
▲髪の手入れは斯うありたい
▲秋着の種類と仕立方…
▲天目山の悲劇
▲細川忠興の妻
▲墨色判斷

一冊十五錢 税一錢半
六冊税共九十錢

東京神田表神保町 同文館
振替東京一三五

女(にの一)

東京産婆看護講習會編纂　（總ふりかな附）

# 產婆試驗及第秘訣

八月一日發行

ポケット形總クロース金文字入正價金七十錢

本書は最近數年間東京府を始め各府縣及本會に於て施行せし產婆試驗問題答案を悉く蒐集し願書書式其他を掲載し產婆受驗者無二の參考書なり

東京市四谷區内藤町一番地
東京產婆看護講習會

第十五回自宅獨習生募集!!!

# 產婆科看護科講義錄

產婆科六ケ月卒業　看護科四ケ月卒業

本講義錄は斯道の博士學士ドクトル諸氏によりて講述せられたる簡易にして何人にも解し易き書なり、かな附の現代唯一の模範講義錄なり、今や本會卒業生にして内務省產婆及看護婦開業試驗に合格せし者千人に達す時は入會の好機、希望の諸姉よ期を逸する勿れ

會長陸軍二等軍醫正ドクトル　渡邊鼎
正六位勳四等

規則郵劵三錢

東京市四谷區内藤町一番地
東京產婆看護講習會

# 見よ◎月經なき女子◎病める婦人

婦人病の多くは月經不順月やく止り發する者少なからず故に一日も早く女月丸を服用して健康と成れよ本劑は學理上有効なる藥種を蒐集し製劑したる良藥なれば




## 血塊

婦人血の道月經不順月やく滯り又はなど稱へ永き閒經水なき爲め腹痛する人或は女子十七八歲に至り月經なき人等に用ゐて特効あり必ず服用試られよ

藥價一劑六十錢　二劑一圓十錢　特製二圓二十錢　三圓三十錢　送料各四錢

# ●肥滿病藥




本劑は肥滿病内服藥と皮膚外用藥の二種有れば御注文の時は必ず患部御容體を書き添へ御申込有れば其容體に適合の方を送付致します

藥價一劑一圓五十錢　三劑四圓三十錢　送料各八錢
二劑二圓九十錢　四劑五圓半

惡性固疾の方は三四劑分の多き方が御利益になります

必ず御試用下さい

## 艶美白色美容劑

子供の折は美愛と賞せられし人も年頃になりて脂肪多くぶと／＼太り血太りニキビ吹出物ソバカス等の爲めに醜婦となる人少なしとせず故に美容白色ならんと思へば是非本劑を御試用あれ至くキレーに艶美白色と成る事を信じます

一手販賣　東京京橋中橋和泉町一　振替東京一〇六七七番

小宮愛生堂

女(にの二)

# 慰安號

# 婦人之友

十月號

●御大葬を拜し奉りて……棚橋絢子　跡見花蹊　戸野みちゑ

●女の弱即强……文學博士　三宅雪嶺

●不平少く暮す工夫……羽仁もと子

●何處に慰安を求むべきか……山室軍平

●宗教に依るの外なし……近角常観

●御稱名を唱へつゝ……岩佐千賀子

●信仰談……廣岡淺子

●今日此頃の感想……石本鐵子

●友に慰められて……門野駿子

●眞の慰安……小崎弘道

●病人を慰めたる經驗……大關和子

一冊金十八錢郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓十七錢

婦人之友社　東京小石川雜司ケ谷町　振替東京一一六〇〇番

女(にの三)


ライラック
エメラ化粧水
美顔術實驗有効
嗜み深き御婦人は
常に缺かさず
品質本位名に高き
ライラック
エメラ化粧水お用ひなるが故
肌理から艶から
眞に外に見られぬ
其麗はしさ!!
TOILET WATER
THE LILAC MFG CO
OHIO
U.S.A.
東京新橋南金六町十五番地
輸入元 理容商會
電話新橋二三〇二番
振替口座東京二三〇〇〇番

女(にの四)



河崎蘭香筆

鹿野千代夫先生編

# 乃木大將言行録

乃木大將肖像筆蹟
高貴寫眞數葉挿入

正價壹圓　特價八拾錢　送料八錢

## 嗚呼！軍神逝けり矣

其志や忠誠其意氣や壯烈、日本國民の典型として、我が武士道の權化として、公明正大の偉人格と、世界史上に赫奕たる偉勳功業と、永く萬民崇憬の中心となれる乃木大將は、嗚呼　明治天皇の聖靈に殉ひまつりて、大君に捧げまつれる最後の恪勤を全ふせられぬ。國民は不幸にも、更らに新たなる涙に咽ばざるを得ざりき。本書は此の仰ぐべき大將が光輝ある人格閲歷と、模範とすべき逸事言行とを傳へて現時の頽敗せる士氣を作興し兼ねて國民が人格修養の鍼となせる一大好著にして、日本國民たるものが、必ず一讀すべき好記念書也。

●黑岩周六先生「乃木大將の自殺を聞きて」と題する長論文添附

東京市神田今川橋大通　東亞堂　振替東京一七一一番　電話本局八八四番

女(ほの一)

第七高等學校造士館教授文學士
鴻巢盛廣先生著

# 口譯落窪物語

全一冊洋裝　菊判上製美本
紙數三百卅餘頁　口繪彩色刷四枚
正價金八十五錢
郵稅八錢

落窪物語は落ち窪んだむさ苦しい部屋に押し籠められて種々の困難に遭遇してゐた中納言の姫君が左近少將に知られて漸々立身し遂々太政大臣の北の方になるといふ波瀾ある生涯を寫したもので平安朝小說中の傑作である。描寫の精致、筆路の暢達してゐることは他に其類を見ない。殊に滑稽趣味に富んでゐる點は此物語の大なる特色である。かくの如き名篇も讀み難いので現代人には殆顧みられないのを慨いて現代口語を以て譯出したのが即ち此口譯落窪物語である。原書の味ひを出來る丈其儘傳へる爲めに一々語を逐うて譯して猥に省略してはない。これ一は古文研究者に對して直ちに註釋書たらんことを期したからである。本書は又家庭に於ける善良な讀物たるを欲したので譯者は又此點にも周到な注意を拂つてゐる。

東京　博文館　本町

# 婦人世界

十一月一日發行 七巻拾壹號 定價一冊拾五錢 郵税壹錢五厘 半年分壹圓五錢

◎御大葬拜觀の記……中村高女校長 戸野みちゑ

■現代婦人の贅澤調べ……婦人記者

■七人の幼兒を殘して逝きし我が妻……八十島親德

■チヨツト見て來た歐米の婦人……小笠原伯爵

■私の掌に乘る可愛い猿……佐藤千枝子

## 乃木大將夫妻の殉死

大隈伯爵
棚橋絢子
嘉悦孝子
比志島夫人
與倉母堂
新山母堂

■諒闇と日本婦人……下田歌子

■洋服の取扱ひ方……村岡末藏

■張物の仕方……島雪子

■巴里の獨立祭……與謝野晶子

○島根縣の婦人……蘇川漁郎

○野菜の料理……櫻井女史

○最新式の美顏術を見る……

○育兒の心得(五)……加藤博士

○園藝の為(?)家……磯部野人

○十月の總菜献立……

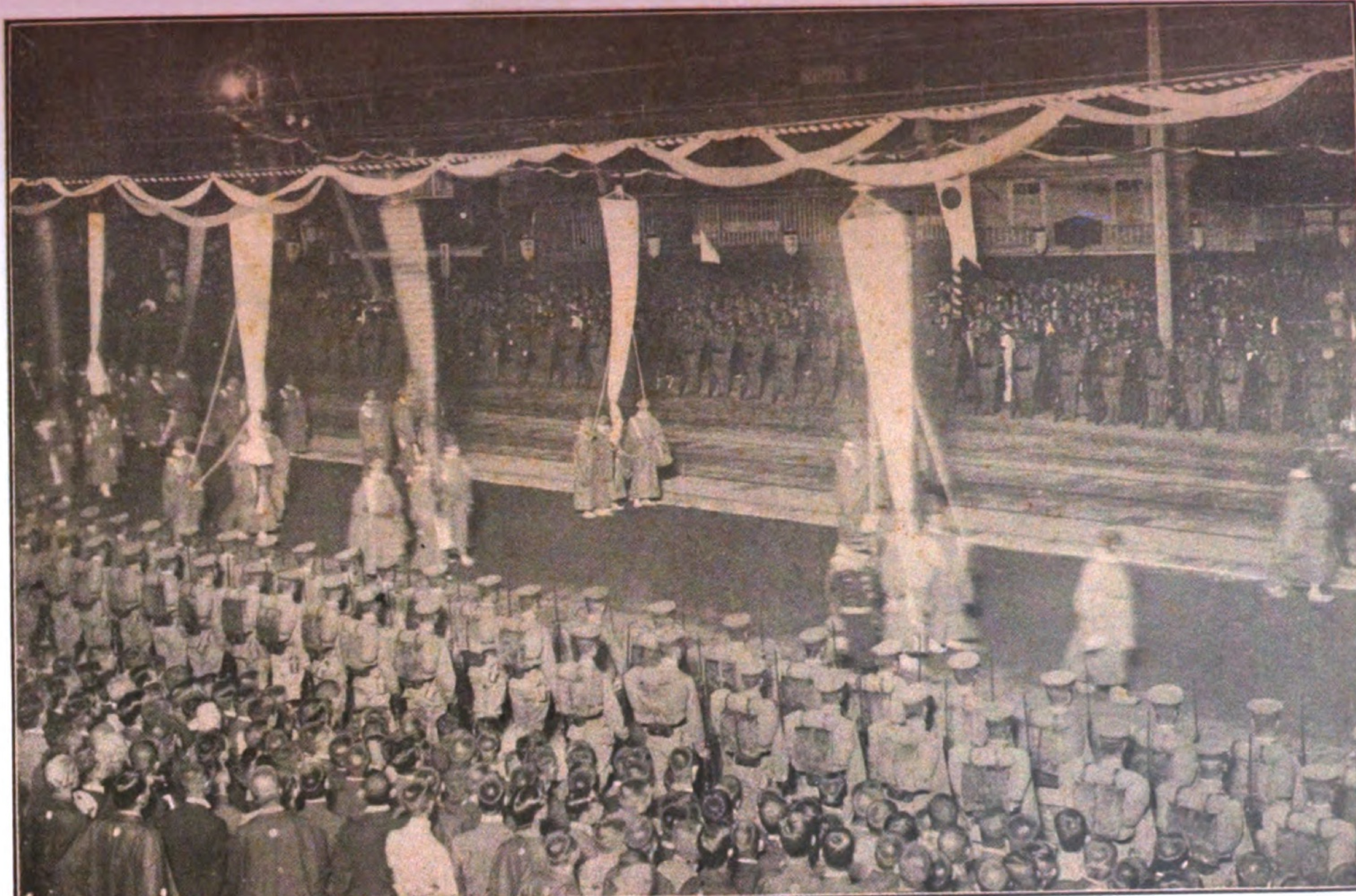
◎家庭長篇小說『子寶』……村井弦齋

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (振替口座三二六番) 賣捌 全國書店

女(ほの三)



御大葬儀拝観の民衆



轜車の進御







"MODEL"
SANITARY TOOTH POWDER
Trade Mark
モデル歯磨
NIPPON SHIKWA SEIZAI & Co.




（二の一）

文學士 横山健堂君著

# 評論漫筆 人と水

黒頭巾氏の文、趣味の富、論斷の精、既に世評あり。此の書、裝幀は意匠を凝らし、瀟洒たる小册子、恰もボツケツトに入るに適す。車上に讀むべく枕上に讀む可く、眞に、殘暑を一掃するに足るの寸珍たり。全篇の項目、著者得意の壇場に屬し、すべて其の三四年來の短文短句を集英したれば、秀句、勁句疊出す。書は小さくして內容は甚だ博し。奇警の觀察、淸新の造語著者の眞面目、收めて、唯だ此の一巻の中に在り。人をして一讀、耽讀、自から快然として微笑せしむるものあるべし。敢て江湖に薦む。

全一册洋裝三六判總クロス上製紙數四百四十餘頁

正價七十錢　郵稅八錢

東京日本橋本町三丁目

博文館

振替貯金口座東京二四〇番

文（一の二）

十月號發行 定價 壹冊貳拾八錢郵税貳錢五厘 六冊前金郵税共壹圓七拾錢

# 新婦人

**小說文がら** 現代男性觀著者 小島文子著

刀利魔の如く直に匕首を咽喉に擬せずんば已まざる現代男性觀著者の小說は果して如何なる情緒をか流露し來る

**家庭金蘭簿添附** 電話番號所氏名を記入し切取りて保存さる

函谷關 油繪極彩色……川村清雄筆

秋雨 蕭條たる秋雨濇々として窈窕たる美姫の膝を潤うす……鏑木清方筆

ダリア力薫 郎に問ふ花美なるか妾が顔美なるか……コロタイプ寫眞

所謂新らしき女として聞えたる現代名媛の肖像を始めとして當代の淑女は花の如く錦のごとし

寫眞印畫紙と寸分の軒輊なく口繪印刷術の美善を盡せり

讀物

大隈伯の女子の修養 エリセーフ氏日本女子觀 澤田氏の最新美容法

女子美術評判記 女の姿、媛月旦、繼母の解剖、處女時代の腦髓、新婚の回顧、女天下等數十名家

慰安顧問附券 **家庭日誌** 十月分 温度表晴雨表献立表來客控●九星彩附添

新婦人見本 郵券一冊發一名 全國著名書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 聚精堂 振替東京三〇五八番 電話下谷四〇九七番 電話下谷一四七二番

女(への三)

女(への四)

葱華輦の渡御



故乃木大將夫人



女(その一)

# ちゞれ毛くせ直し（複法ベント）

本劑は一度之れを使用すればちゞれ毛、くせ毛を直伸し永く使用すれば殆んど治す

定價九十錢
小包料一個に付八錢

# 毛はへ藥（エフ、ビコール）

本劑は頭髪は勿論眉、口鬚其他凡そ毛の生ずべき所に皮膚病其他故障の爲め生毛せざる者又は發生せるも極めて微弱なるに塗抹すれば生毛疑なし

定價 特製金三圓
並製金一圓五十錢
小包料一個に付八錢

# 生毛強壯劑（エフ、トニツク）

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして毛髪を美化するにありされば身體強健血行良好となり皮膚腺の分泌を盛んにして毛根の營養を能くし從つて薄毛、細毛、赤毛、髪等に運用せば奇効あり

定價 卅日分三圓五十錢
小包料十六錢
十日分一圓
小包料八錢

發賣元 東京市本所區外手町八十七番地
深澤國華堂
振替貯金口座東京二一〇八二五番

# 美髪法（けをよくするはふ）

□毛の無き處に毛を生す法……
□くせちゞれ毛を治す法……
□呑んで毛を良くする法……
□白毛赤毛を黒くする法……

郵券二錢封入御申越あれば直ちに贈呈すべし

---

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町廿八 淺草橋通 瓦町停留場横

# 中央醫院

ぢ 諸病 梅毒（横根 下疳） 全身梅毒等 りん病消渇

子宮病 血の道 月やく（とまりたる病） 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等 生殖器病 夢精 萎縮 遺精 早漏 發育不充分症等

わきが 色の黒き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきん たむし等症

▲病症記し郵券二錢送れば其病を速治する専門醫中央醫院々長處方の特効新藥説明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地
淺草橋通瓦町電車停留場横

# 中央藥院

女（その二）

THE LADY'S GRAPHIC.

# 婦人畫報

## 御大葬記念畫報

十月一日　十月卷　本號に限り價卅八錢　郵税三錢　六冊税共一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

### 畫報

●先帝御大喪儀を永遠に記念し奉らんが爲めに本號を記念畫報として發行し普く忠君愛國の紳士淑女に提供す

●畫報は七十有餘頁のアート紙に本誌獨特の鮮明なる百數十の寫眞及繪畫を以て表はし—二重橋より青山葬場殿に至る御葬列並に桃山に於ける御葬列の御模樣を初め御名代宮殿下各國使臣御葬儀に關する調度御大喪の前後雜況參列婦人喪服其他苟くも御大喪儀に關する事項は細大洩さず滿載せり

●此國家の大儀を拜察せんとせば須らく本誌を備へよ

**萬世に傳ふべき絶好記念**

### 讀物

●御大喪儀…………

●嗚呼乃木將軍と夫人…………井上博士

●大正の婦人…………三宅博士

●若き妻…………宮田修　三宅安子　長谷川時雨

●大正式婦人散步…小波

●歐洲より…與謝野晶子

●旅行みやげ　小笠原伯夫人

●崩御…三宅花圃

●下町の女學生　戸野みちゑ

●織物の見分方　井上秀子

●隆鼻術…田中院長

●小說(藤村)　其他滿載

東京市麴町區飯田町四ノ四　振替口座東京一一八一番

東京[illegible]

電話番町二三三九番　[illegible]到る處の書店に有り

女(との三)

最上醤油

〈キバク印〉

千葉縣野田町
茂木七郎右衛門釀

日本橋區小網町
東京支店
中野長兵衛

新製

ランラン香油

椿製



ランラン香油は
毛髪の艶が
見違ひる程に
美しくなり升
一度御ためし
下さい

定價 廿錢 三十錢

大阪新町三
福田源次郎
東京馬喰町三

女(その四)

# 令孃かゞみ



右上圖、堀ドいつ子（京橋） 中圖、川村政子（芝） 下圖、齋藤竹子（本郷）
左上圖、安住すゑ子（赤坂） 中圖、荒井清子（麻布） 下圖、玉利菊子（青山）

裏千家茶會席



大正元年十月

# 新學期開講會員大募集

會則附き內容見本申込次第進呈

# 女子大學家政講義

編輯所 東京小石川區高田目白臺 日本女子大學校通信教育會

家庭の和樂と幸福なる生涯は家政講義に得らるべし、開講以來空前の好評を博したるは本講義の優秀なる所以なり、講述が如何に懇切に平易に實際的なるか、科目の選擇と解說の方法の如何に注意せるか、先づ內容見本によりて本會の趣旨と講義錄內容の一班を知られよ。

## 學科と講師

○修養談 ○修身講話 ○敎育 ○實驗心理學 ○兒童研究 ○法制大意 ○經濟大意 ○社會衞生 ○家庭理科 ○家事

諸名士敎育大家 成瀨仁藏 麻生正藏 文學博士 松本亦太郎 高島平三郎 法學博士 奥田義人 文學士 中隈敬三 醫學博士 三宅秀 近藤耕藏 井上秀子

○作法 ○日本料理 ○西洋料理 ○裁縫手藝 ○挿花 ○家庭園藝 ○自然研究 ○文藝 ○美文評釋 ○科外講話女子演劇歌劇結婚問題家庭衞生問題等

小笠原清務 笹木幸子 手塚かね子 櫻楓會研究部 兒島晩翠 農學士 佐々木祐太郎 大橋ひろ子 文學士 武島羽衣 文學士 下村莢

◎九月、十月中の入會者に限り入會料免除◎

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂 電話番町九百三十二番 振替口座東京二八三八

女（ちの三）




# レーベン

## レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長、等の證明による明白なる事實なり。

**醫治効用**は回性、興奮、鎭痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の泪に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥として

レーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし、夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ ●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

| 定價 | | |
|---|---|---|
| 三十錠 三十錢 | 五十五錠 五十錢 | 百錠 八十五錢 |
| 二百錠 一圓六十錢 | 四百錠 三圓 | 八百錠 五圓五十錢 |

各藥店にあり無ば發行所へ全國送費無料信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

發行所 東京銀座弓町電話京橋三〇八番 振替東京七七七七番
大阪市安土町電話東三二四六番 振替大阪三四四番
弘濟藥院 中南定太郎

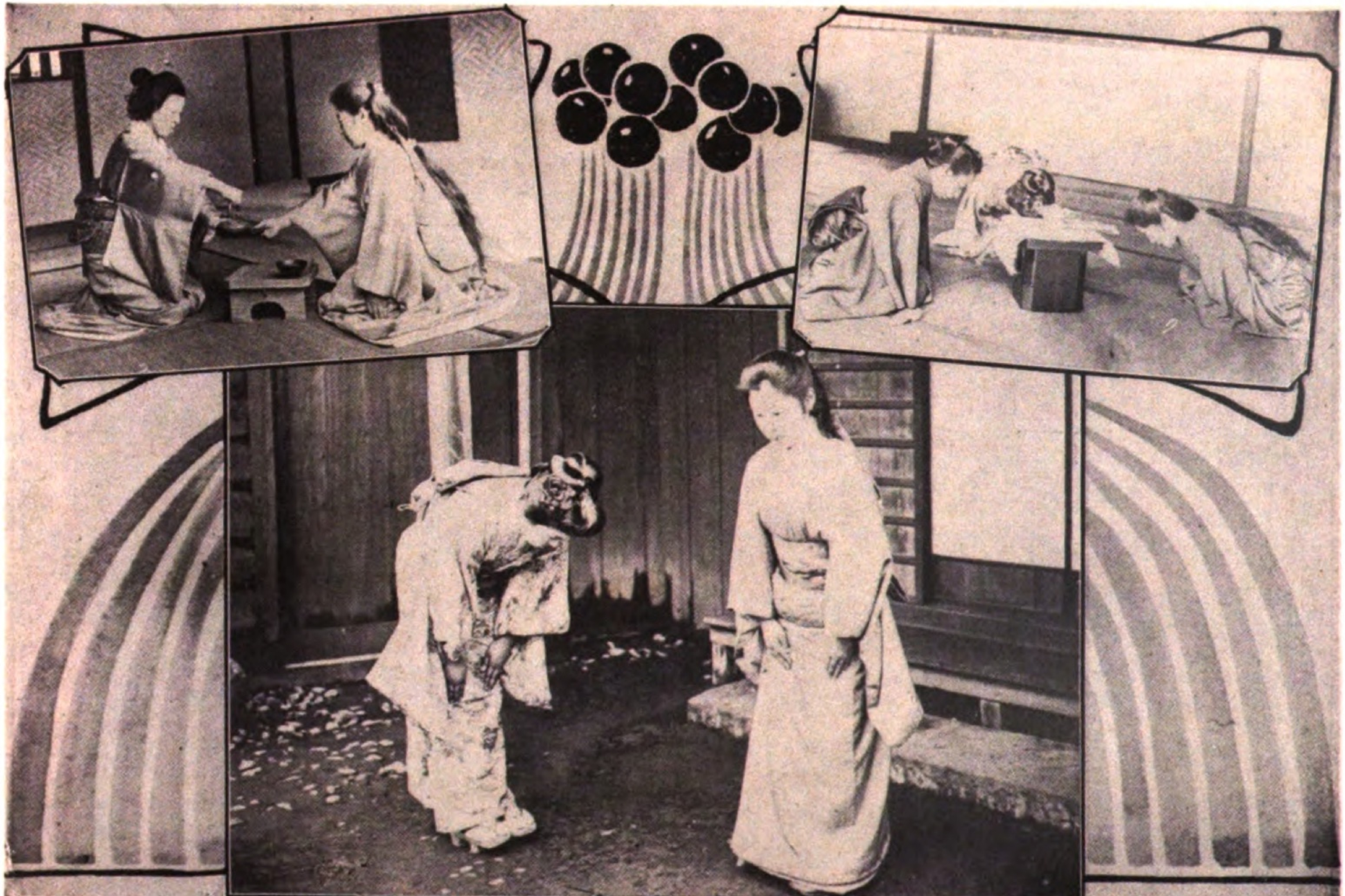
（ちの四）

# 令嬢かゞみ



上、辻よし子（京橋）　中、森谷さと子（四谷）　下、和田とし子（牛込）

# 日常の作法



上段右は三寶の進め樣　左は杯の受け方　下段は行違ひの禮

# 校風



上段右中川かつゑ子（上野高女）、左新田千歳子（跡見）、中央前田喜賀子（福島高女）、
下段右園師崎光子（女學館）、左田村さすゑ子（女子大學）

割烹教室と菓子の調製



# ●誰でも出來る 子宮病自宅療法

一口に子宮病と申しましても其種類は澤山ありますが、其中で最も多い病氣は云ふ迄もなく子宮内膜炎でありまして、素人方の所謂子宮病とは大抵本病を指して言はれるのであります。

## ▲子宮内膜炎の病狀

子宮内膜炎の病狀としては下腹の緊滿又は緊引痛、腰痛、腰部と手足の冷感、不定の子宮出血頭痛、頭重、逆上、眩暈、耳鳴、月經不順など種々ありますが、取分け白帶下と申して膣内から分泌する粘々した下物の多い事が、本病の重なる特徴であります。白帶下と申しても總て皆同樣でありませぬ。黄色い鼻汁の樣なのもあれば、水の樣に澄んだのもありますし、又卵の白味の樣に粘稠なのもあれば、血液を含むだ膿汁の樣なのもありまして、其他種々樣々の種類があります而して毎日の樣に澤山下る御方もあれば月經の前後にほんの少しかない御方もあります、斯樣に種類の違ひますのは、つまり病氣が急性であるとか、慢性であるとか或は病氣の性質によつて違ふのであります。何れにしても多量の白帶下のあるのは、已に病氣に罹つて居られる證據であります。

## ▲恐る可き帶下の害

斯樣に白帶下と子宮内膜炎とは密接に相關連するものでありますが、特に此の白帶下の恐るべき所以は、姙娠を妨げて不姙症の第一の原因となる事であります。詳しく申せば子宮内膜炎から來る白帶下の分泌物は酸性を帶びて居りますので精蟲を直に死滅して了ひ姙娠の根本を絕つ事となるのです。又偶精蟲が死滅しないで卵子と接合する事がありましても胚胎した所の卵子の發育を妨げて、往々姙娠の中絕即ち流產を來す事となるのであります。つまり病的の白帶下と云ふものは、不姙娠の唯一の原因となるばかりか、餘り長い間多量の白帶下がありますと身體中の液體が消耗して、爲に全身の貧血と衰弱とを招き、從つて貧血症狀を惹起しまして、或は習慣性の頭痛眩暈、心悸亢進、手足の冷感などを來たすのであります、婦人病の御方に多く見まする所の頭痛、眩暈、逆上、耳鳴 手足の冷感などは大抵以上の理由に基くのであります、又子宮内膜炎には多くはヒステリー的の病狀の現はれるものであります即ち神經過敏となり物に感じ易く、さもない事に怒つたり、或は種々の取越し苦勞をして、くよ〳〵物案じしたりするもので、御婦人の癇癪持は實に此の生殖器の病氣ある方に多いものであります。

## ▲誰でも出來る治療法

以上は其概略でありますが子宮内膜炎は一般婦人病の代表的病氣でありまして上に不姙の最大原因ともなることが御了解になり升左れば何誰も之に對する處置法は必ず心得て置く事が肝要であります、それには婦人科專門の大家醫學士北島佐藤兩先生の御書になりました『婦人病者心得』が一番完全で又一番平易で御座います、此方法によると大體の子宮病血の道は自宅で容易に癒治せられ、御希望通り姙娠も出來ます、皆樣、理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んとしなくて、是迄一度も姙娠した事がない方、又は流產難產の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて成程と得心が出來たら速かに本療法を試みなさい。後悔は先に立たすです。

因に曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる。

女(りの一)

文學博士

# 佐佐木信綱先生新著

## 歌集 新月

洋裝四六判總布上製
紙數約百六十頁

▼近刊▲

■東京本町 博文館發行■

歌集新月は出でたり。長く歌界の期待せし佐々木先生の歌集新月は出でたり。夙く明治の歌壇に清新なる竹柏園の歌風を唱道せられし佐佐木先生、さきに歌集思ひ草を著して、其さやかなる調に世人の耳を新たならしめしより九年、爾來詠出せられし數千首の詠草の中より、數百首を精選してこゝに新歌集を公けにせらる。和歌に志ある士女はもとより、世の文藝を愛する人は、須からく來りて歌壇の陰雲を拂ひ出たるこの新月の清光を仰ぎ見ざるべからず。

女へりの二)

# 女學世界

第拾貳卷

第拾參號



# 風俗かゞみ

磯千鳥



女の顔容こそいとも樣々なれ——明眸皓齒、氏なくして玉の輿とは昔の事也。今の世は自動車にこそ乘るべけれ　よしや時間定の貸車なりとも、などて面覆の風に靡かぬ事やある。道行く人の鼻打押へて後振向かぬ事やある。

太く逞ましき女、瘦せ細りたる女、腰の邊肉つきよく足短く、洋燈のほやの如き女、浴衣着の姿飽く迄しなやかに　風鈴に短冊さげたる樣の女、鼻の上に汗溜め、髮の毛を顳顬に濡しつけたる女、脣厚く空氣草履の踵の如く見ゆる女——

前より見るべき女、橫より見るべき女、眼と眼との間の低きは前よりすべし。頰骨出でたるは橫よりすべし　鼻筋通らず、頰骨突出で、小鼻越後獅子したるは……詮方なし。後姿をなむ賞でん。飴色の後差さゝせ、

髮毛の頂にも飾にもリボンの花を咲かせて……

其他、美服美裝するにあらずば顏榮えぬ女、粧飾を施す程反りて姿あしうなる女　平素の洗ひざれの浴衣などに髮の毛ほつらせ、額、斜に三角に露れたるなどの却々に風情のあるがあり。

前者は令孃に適すべく、後者は婢女・女敎師等に應はし　家を守るには此婢女の流なるこそ養ひ易かるべし。

されどありとあらゆる女一人として醜きは無き道理なるべし。我と我身を醜しと蔑む女なれば、かくてこそ世は常久に圓滑に、美はしき戀の花も咲き出づるなれ。

○

女の姿のいとも哀れに見らるゝは、眞夏海邊に行きて、汐に濡れし女を見る時也。濡れぬ内こそ經木眞田の被物目深に海水服とか云ふ物纏ひてげに露をも厭ふ風情なれど、一度水を出づれば、花の朱唇徒に褪せ、淸々しかりし布子を蝋の如く身にまつはり、わな〳〵と打慄ふ袖口さては裾のあたりよりはしと〳〵と雫したる、白猫の沐浴したるにも似て、有情の人誰か惻隱の心を起さゞるべき。とり分け年とりたる老嫗などの骨張りたる、只鳥居の樣に見ゆるは哀れなり。

なべて女には肌を愼しむ心あらまほしき物也。車の昇降に靴下のちらと見ゆるさへ嗤笑せらるゝ彼の國の譬は引かずとも、遠路に裾の切るゝを厭ひて、裾端折る上方の風俗は寔に顰蹙すべし。只ぶく〳〵と水肥に太りたる足は、禮非禮の詮議立をする前に、先づ醜きを隱す心よりこそ人眼に觸るゝを恥づべきなれ。決して肌身につくる汚の物を、唯赤旗の樣に竿にかくるは恥づべき事にやあるらむ。

○

顏容にも增して樣々なるは女の心樣、性格也。娘に

は——

生れ落つるより苦を知らず不幸を味はず、ふくぶくと恰も生牀の様に生立ちし女、又不和の家庭に育ちて萬事僻心を以て物見る癖は、人の好意親切をも曲解する女。

男子に逢へば我にもあらで顔赧め睫毛を伏せ、相手を正視し得ず、あるは逢ふ年頃の男輩を、一度は我が夫ならばと假定して、打羞ふ性。

亦一方には男をぞ弄し易しと思做す女あり男の我身に言寄るを女の勝利と心に誇り、戀するにあらず、男の歎賞を嗜む。かくして少しにても多勢の心をそゝるを快しとする女、されどかゝる心の傾は孰れの女にもあるべし。強ち責むる事にもあらじ。

さては『此人に限りては戀等といふ物し給はじ』と信じ安き女、世にも戀せぬ男と、藥の能書ばかりは信を措き難し



食はずとも柘榴興ある姿かな（太祇）

此三つの性、いづれも誘惑に對して最も弱しと知るべし。古來敷島の國は男女の交情はその遲速こそあれ、

はしたなき戀愛に落ちずと云ふ事なし。一方より見れば男女七歳而不ㇾ同ㇾ席と云ふ君子の國を、寔に猥なる國とこそ言ふべけれ。

更に進みては

姓氏ばかり一寸聞き知りし男をば、如何にも親しきごとく云做し、亦或る人を指して『渠は用心すべき人也』等暗に其人の己に向ひて艶しき素振ありしごと誣ひて喜ぶ女、艶きし文の數々を獵人の獲物のごとく蒐め樂しむをんな。



甲州御嶽山中覺圓峯

己が秘事をば『こは君にのみ知らせ參らすべし』等云ひて何人にも打語り、亦己の事洩らせし報償に人の隱事聞かずば不興がる女。

行きかふ女の後振返らずば心休まらぬ女。

新聞の續物、小說を第一にしたる女。

學校にて習ひし語學等忘れ果てたるを誇のごとく言ひなす女。

肺病に罹りて見たしと思へる女、かゝるは文學書に讀み耽りたるに往々あり。才子佳人の此病に斃るゝ事多ければしか思へる也。一種の虚榮心とや云ふべき。

男もするてふ日記して見むと書きしは、紀貫之の昔也。今は男も飲むなる强き酒呷り、女にして女を娶り、顏赧むべきことをも口にする女出でたり。男は唯その子供らしきを、いぢらしくも亦可愛ゆくも思ふらむ。女の人を魅する力はかゝる處にも露れたるぞいみじき。

名月やはだしでありく草の中　（傘下）



○

既に嫁せる女、年重ねたる女房の癖、心様ぞ更に多様なる……

されど女迎へてその半年あまり、夫の眼に映りし妻は、悪しき癖等およびもなく何處も此處も唯美はしく寔に此世の者とも見えずやあるらむ。但し妻の癖は新しき夢の覚むる頃より露る。

顔形優れ朝夕の化粧に越度あるべくもあらねど羽織の襟浪打たせて縫ふ若き妻、又米炊かすれば煙飯、朋友飯と云ふ物炊く。朋友しんありと云へば朋友飯とは心ある米の謂也。

げに今様の若人輩によりては、日に三度の鉢洗ふ事も物憂く、九十枚の鉢、茶碗買へば一と月が程は洗はず濟む物を等思ふ事ある也。

夫の外出より歸り來る時、我下駄も雪駄も婢女の物迄締りなく脱ぎ散して顧みぬ妻。また何れの着物も皆着さしにして汚れたるを納戸の隅にいと夥しく蓄へたるもあり。總じて、貧しげなる家の女房は却々に調度の類を潔げにし、手忠實なるが多し。子供の顔は汚るるとも、釜、鍋の日毎に磨かずで心安せず、殊にお櫃は木目立ち、金輪鋲のごとく光らさずば止まずと云ふがあるよ。其他

家の表の柱の根元々々に水打かけ、庭の三和土を暇あ

らば洗ふ癖。

慓悍にして我爲る事には苟も家人の容喙を欲せざる女房。

蓆のごとく亭主を臀に敷きなす妻、女の夫に接する、初は遠慮すれど、彼に備の無き限り、何處迄も進擊してやむことなし。男の日常生活に疎きを見ては、己あらざりせばと思上り夫の足らぬ處をさへ語れば己の能顯るゝと思へるにや、一家の內事を皆人に語る。

また召使に對して誠に峻嚴なる家婦あり。さゝやかの越度をも、己は過と云ふ物爲したる事あらぬ樣に責め罵り、亦過失せし折に、戒むれば足る事を態と見ざる如く裝ひ、しかも當附がましき振して無言の內に嘲る。たとへば婢女の心入れて洗はざりし衣を是見よがしに、水灑四方に飛立たせて洗ふの類是也。

名月や海は思はす山も見す（去來）





いつしかも蟬聲淋しくなりにけり訪ぬる萩のうはかぜ（升子）

概して言へば内に悪しき女は外に宜しく、長上に阿り、何人にも媚ぶる女は必ず内にわろし。

世話女房の下司びたるも亦憎むべし。

これは女房に限りたるにあらねど、物見すれば其値知りたげなる顔する女あり。更に恥知らぬは「こは何處にて得給ひける。値は幾何幾何。我家にても欲しと

思ふ處也」など云ふは見下げべき振舞也。

其他、卅路過ぎたる女は面紅むる事を知らず、年若き者の座に居堪へぬ事をも平氣に口にし、甚きに至りては、それを時にとりての座興に心得るがあり。

譬へば、嫁がむとする娘に、程なく母親になり給はむ」など言ひ、あるは妙齢の女を前にして、「誰々は斯かくの妾持ち給へる。かの如き美しき妻持ちたる上に、寔に無用の事におはさずや」等あげつらふ。

これらは、これと云ふことなけれど苦々しく愼しみ深き女の心すべき事也。

○

總じて下賤に身を起せし者は一目見て明也。これ醇雅を缺けばなり。物見る眼附、笑ふ口元、可笑しからぬ節に強て笑ひ、笑ふには己が口大きくならむを恐

るゝにや態と口窄めて笑ふ。されどあくどく〳〵も入れたる金の義歯などのきらびやかなるは隠すべくもあらじ。

亦かゝる女にして、拔衣紋して長煙管啣ゆるもありぬべし。亦露程己の世話したる人あらば、「彼人には是是の世話したり」など不問語に打語りて、かならず其恩に悖けるを詰るが常なり。

かゝる成上者の世に忌まるゝは

一つ。何事につけても今の我身を此上なき事に思做し、人を人とも思はぬこと。

二つ。かゝる男女に限りて嫉妬の念強く、他人の賞めらるゝを己の貶さるゝが如く怒り、苟くも己を引較ぶることなくして人を見す。

其他かゝる輩に限りて僅少の功名にも人に誇り、「今日あるは全く我力の賜也。汝も是に見倣へ」等さかしらに教訓めきし物言す。かゝれば、苦學に地位を造りし男、獨學に官祿を得し女、商機を利して富を得し一家、何れも深く交るべきにあらじ。若し假分限にして酸きにも甘きにも思遣厚く、糟糠の妻にして情深ければ、そは誠に得難き人と云ふべし。



羽後滑床の瀧

今よりは庭の淺茅に鳴くむしの
朝つゆさむく聲よわるなり
（從三位光成卿）

# 京都の美と大阪の美

茅野雅子

## 祇園祭

更けてゆく夏の夜の濕つた空氣をふるはして、コン、コン、チキ、チキ、コン、チキチンと、祇園囃の鉦の音が、幾分の哀愁を含むだ、併し優雅に華やかな調子に響出すと　私はいつも春や秋に優つた　美しい京都の姿を見る日の近いのを悦ばずには居られない。

島原で錦繪のやうな太夫の道中を見てから、菜の花の咲き揃つた田圃道をぬけて、長閑な鐘の音をしるべに壬生寺の古風な無言劇を見に行つたり、黑い土に麥の青むだ紫野を、加茂堤の松櫻の間から比叡の霞んだ姿を喜び乍ら、上加茂の方へそゞろ歩きをしたり、或は嵯峨、高雄に紅葉見に行つたり、さうした種々の行樂にも、云ふ迄もなくなつかしい、舊都の匂は十分に味はゝれるけれども、私には祇園祭程奥床しい京都を見せてくれるものは無いやうに思はれる。それは一つには、私が都會に生育つた爲めと、又殊に夏祭といふものを、幾時の祭よりも一番美しいものゝやうに考へてゐる故にもよるであらう。

夏の祭の美しさは凡てが瀟洒として氣のきいた處にある。着る物等も薄く輕やかに、女の化粧も薄つすりとして、肌のきめの細やかさも見られるやうな、それが夜といふ不可思議が與へる特別の陰影に美化せられて、見る人も見る人も人の心を引寄せる力を持つて居て、それが皆踊りの足どりのやうな彈力を持つて灯の紅い街を歩いてゆく。さういふのを見ると、私はいつも靜として居られなくなつて、一緒に踊出し度いやうな心持になるのである。

祇園の祭でも私は一番佗がいゝやうに思ふ。それは去年の夏であつた。退院して間も無い夫と一緒に、四つになる女の子を伴れて、私は所謂宵山を見やうと、寺町を眞直に南へ下つて行つた。二條から南の兩側の店は大方商品を取片付けて、祖先から傳はつた、家什の屏風を立並べて居た。店の先には高さ七八寸の結楷のやうなものを立てゝ、それが紙や葭簀で貼つてある。美しい毛氈の上には碁盤が据ゑてあつて、西京式に品のよい若い者が石をカチカチやつて居る處もあつた。香筆墨を賣る家、佛具商、書肆等には數百年來の老舗も交つて居た。さすがにさういふ家の装飾は古雅の趣に富むで、京都でなくては見られないやうな上品な處があつた。屏風も裏箔に墨畫と云つた樣なおつとりした奥ゆかしい處に、しきつめてあるのも古渡りらしい花毛氈である。三條へ曲ると祭見の人は一層に賑ひで居た、その中には美しく着飾つた中京の娘達が、侍女をつれてそつと街の片隅を通つて行くのもあつた。人に顔を見られるのを晴がましく思ふのであらう。美しい頬を小さい扇にかくして、うつむき勝にあるいて行く。私はそのつつましい娘姿を



萩に萎れ薄によわる秋日かな　（士朗）

振返へりふりかへりして見た。

『矢張り京都ですわねえ。』

『さうさな。』

『まあがれつともいゝけれども、島田の方が奥ゆかしいのね。』

『ほんとうに祇園祭は純日本趣味ですね。』

『さあ。』

私達はこんな會話をし乍ら三條通を西の方にぶらぶら歩いて行つた。金屏風銀屏風を立廻して、坪庭迄も見えるやうにしてある處も少なくなかつた。中には小暗い物影から一心に屏風の畫に見入つて居る好事家も見えた。凡て、間口が狭く奥行の深い京都風の家が、平生は可なり不便なのにも係はらず、こんな時には殊に奥ゆかしく見せる力があつた。屏風の奥の葭簀を透いて見える若い女の影や、謠曲をうたつて居る老人の姿等も、奥深く幻のやうに見えるのが却つてよい。

金屏風を幾双か立廻して、古風なぼんぼり許りを幾つもつけ並べ、草花等を品善く活けてある店があつた。一團を作つて祭の樣を見て歩いて居た外國人の女が、

『おゝ、きれい』と甲走つた聲で叫んだのも無理はなかつた。

この宵山は屏風較べと云はれる丈けなつて、各々の家が、昔から持傳へた佳什珍品を惜しまず、今日を晴れと飾り立てるのみならず、これに伴ふ小さい器具迄にも、一々長い歴史や舊い文明を語つて居ないものはない。

左樣は云ふものゝ又他面から考へて見ると、斯ういふ古い都會の舊慣を再現する祭禮にさへ、明かに時勢の波といふものは押寄せて、その暴威を一部的乍ら示して居る。電燈の用ゐられて居ない家は殆どない。中には古い金屏風の前で恥かしげもなく呂昇の淨瑠璃を蓄音器で聞かせて居た所さへある。よく考へて見ると、一概に舊習に泥んで居るやうに思はれてゐる京都の生活も、川東一帶の空氣は別としても、尚ほ案外に西洋人の影響と云ふものを受けてゐる處が少くないや

うに思はれる。歸る途すがら、私達の話は期せずして、そんなことに落ちて行つた。

此祭を純日本式だと見る説もあつたやうだけれどよく觀察すると決して左樣でも無いやうだね。』

『ほんとうに左樣ですね、あの雞鉾の送り（鉾樓の後部に垂れる布）のごぶらん織等は何うしたつて日本や支那で出來たものではありませんわねえ。』

『さうだね。あの畫の具合等何うしたつて希臘式だねえ、あの心持左の方に立つて仰向いて居る子供の顔つき等は何うしたつて東洋人ぢやあ無い。』

『それにあの繪だつて何か希臘あたりの宗教書めいて居ますのね。』



乙女らが裳玉裾ひく此庭に秋風ふきて花はちりつゝ（讀人不知）

私は彼の美しい織物を現に目前に見るやうな心持がして、暫時うつとりとなつた。青竹の仕切をして兩側にしつらへた赤い棧敷の間をゆるやかに、美しい稚子を乘せて、練つて行く鉾樓の兩側からは、囃子の鐘を打つ撞木の柄についた二間にも餘る長い總が、調子につれてゆらゆらと動いて居る。其後ろに垂れたあのクリーム白の織物に、七月の日なかの強い光

線が、颯と流れた光景、私は身内が戰へる程にさへ思つた。

「それ許りぢやあ無い。あの舊い家々に敷いてあるあの古風な花毛氈の模樣に氣をつけて御覽どうしたつて堺の港を通つて來た和蘭物の匂がほのめいて居るぢやあ無いかね。それが斯う金屛風の南畫等としつくりと調和して感ぜられるのだからね。時の力といふものは恐ろしいものぢやないか。」

斯んな臆測澤山な話をしながら、私達は涼しい風に吹かれ乍ら靜かな上京の夜を歸つたのであつた。



玉の江にすむといふなるたとめこが光の色もかくや咲くらむ　（花山院）

實際京都の京都らしい美しさといふものは、その四圍の風景の四時、眺望よりは、寧ろ、數百千年の間此都會が經驗して來た文明の歷史を暗示する、古い寺院の建築とか、繪畫とか、或はそれが人間の血液を濾過されて現れる斯ういふ祭禮等にあるのではあるまいか。

## 都會と自然

私は靑々とした稻田と、その向ふの未だ輝いて居る湖を越えて、鹽尻峠の上に重なつて居る飛驒境の連山や、乘鞍、鎗ケ嶽等が、遠いのから次々と薄れて行く有樣を眺入り乍ら、緣先の欄干に身をもたせて、土用の半ばからは秋風が

吹といふ山國の夏の夕ぐれを味ひ乍ら、運命の不思議といふやうなことをしみじみと考へた。八百八橋と云はれる程水路の縦横に通じてゐる都會の眞中に成長した私が、毎年斯うやつて幾重かの峰巒に取卷かれた高原に來て夏を過ごさなくてはならない。何と云ふ變化であらう。

『實際人の生涯程わからないものはない。』

そんなことを繰返して思ひ乍ら、私の心はいつしか故郷の夏の夕ぐれを思浮べて居た。



秋晴るゝ松の梢や鷺白し（子規）

濠割の水にちら/\と夕の灯の流れる頃になるとあちこちの船屋では涼み船の用意に忙がしい。やがてそれ等の船は注文主の家に一番近い河岸につけられると、身輕な船頭は急いで陸に飛上つて、入用な品物を運び始める。火鉢、茶器、赤い毛布、多くはさうした手廻りの調度のみである。私も小さい時はよく華美好きな祖母さんに連れられて、さう云ふ中にも大きい屋根のついてある船に乗つて涼みに出かけたのであつた。東横堀から船に乗つて、高麗橋、今橋

をくぐると最う大河に出るのである。公園の輝やかしい火影は遠く水に映つて浪花橋の上を渡る提灯の色も美しく中の島の劍先きの柳も夢のやうにけぶつて居る。カチカチと鳴子を鳴らして近づいて來るのは豆賣の船であらう。意氣な聲で『豆やさやあ豆』と呼んで居るのを呼び止めて豆を買つてやると、金高に應じて辻占をくれたり、端歌をうたつて聞かせたりして、藝事の好きな祖母さんはその意氣な聲と姿とを喜んでは、よく歌はせたものであつた。船で流して行く新内の節が、夜の水にふるへて哀れに響き消えるとこれも船で廻つてゐる花火屋が客に



緣端のぬれてわびしや秋の雨　（太祇）

すすめて揚げさした花火がポンと鳴つて青や赤の焔が夢のごとくに波に散りかゝる。綱彦から料理が來る頃になると、祖母さんは豫て用意して來た三味線等を取り出した。

あゝした華やかな遊びは漸々に廢れて了つたと云ふことであるけれども、今も尚その頃の面影を偲んで、船涼みに行く人のないことはあるまい。よしや最うさう云ふ美しい風俗は、凡ての雅趣に富んだ習慣と一緒に消失せたにしても、所々の街に開かれる夜店の樂しさは、今も尚昔に優る賑ひを以て續けられて居る。華やかに景氣づいた夜店の火に照らされて實際の二倍も三倍も美しく見える人の皮膚、

物の陰影、そこには夜といふものゝ不可思議な誘惑がひそむで居る。それからまた、出盛つた群集が漸々に減つて了つて、ぼつ〳〵店を片づける者のある頃場末の方に並べられた植木屋の花が淋しく匂ふ時のほのかな哀愁の心持、都會の夏の夜は軟く、華やかに、又新鮮な快味を覺えしめる。それに較べて見ると、たゞ深綠の一色に包まれた天地が、蕭やかに蒼茫と暮れて行く山國の夏の黃昏と、夜は、眞に單調だと感ぜずには居られない。夕靄のために微かに薄れて居た山々の輪廓が黑く瞭然と美しい曲線を畫き、刻一刻と光を失つて泣くやうに白ばむでゆく湖の色、稻の葉のすれる音、やがて山麓の村々にちらつき始める帶黃色の燈火さへ、何となく一種の沈鬱と、索とを含むで居るやうに思はれる。都會の人達の、輕快で、暢達な、氣のきいた所を持つて居るのに反して、地方の人が、總じて根强い執着と、沈鬱と、深い思索計畫を有して居るのも、斯うした氣分の相違から自然とはぐくまれた性情の相違ではあるまいか。私はやがてそんなことに迄考へ及んだ。

併しまた考へ直して見ると、山國の夜といふものを、斯う頭から押へつけ來るやうに、重く强く感ずるのは、自然といふものに親しむ機會の無い都會に育つた私の僻見に過ぎ無いのかも解らない。

## 美人の身たしなみ

△皮膚を清潔にして、あれぬやうに保護すること。
△手と、齒を綺麗にして置くこと。
△目脂をつけるな、眼をこするな、長く泣かぬこと。
△眼は心の窓なり、淸らかに保つこと。
△常に微笑を帶びること。
△脣を赤く保て、さり乍ら餘り深く紅をさゝぬこと。
△髮の形は大切なれば、顏と似合ふやうに結ぶこと。
△白粉と、香水は、薄くほんのりとさせること。



# 人に對して口を開く心得

△凡そ人を諫むるには法あり。たとへ我が子弟をいさむるにも、聲あらゝげ、言をあらくして、惡口し、はづかしむるはあしゝ、きくもの腹たちうらみて心に服せず、かへつて其いさめにそむきて、したがはず、故に心を平和にし、ことばを順にし、道理を正しくいさむべし。

△よろこぶ時の言は、誠すくなし。いかる時の言は敬すくなし。喜びいかる時殊に言語をつゝしみ、喜怒のために心をやぶるべからず。

△人をいさむるには、誠あまりありて、言葉たらざるがよし、人のあしきを言ひつくさず、人の耳にさからはずして、人にそのあやまちをさとらしむるをよしとす。

△人の言ふことを聞きいれずして、唯我が道理のみをいひたてんとするは、甚だ無禮なり、人にも道理をいはせて、きゝて後、わが思ふところをいふべし。

△人に對して、ことばを出すに、事によりて道理を言ひつくさず、意を内にふくみ、ことばをのこせば、言に餘味ありて人感服してしたがひやすし、人をいさむるにも、辭はげしからず、氣性和順にして、かすめなしていひて、其人の過惡をさしあらはさず、是かへつて、人心を感ぜしむ。

△言をつゝしみて、一言を出すにも、よく思案して、物をいへば、言語は、おのづからすくなし、むりに口をとぢて、いはざるにはあらず。

△あやまちをはぢて、僞りかざるべからず、是、心をあざむき、人をあざむくなり、既にわがあやまちあらんはすべきやうなし、あやまらば直に言ひあらはすべし。

△言を出すに、其言さわがしからず、おだやかなるは、其心のやしなひあるなり、もし、言を出すに、さわがしく、けはしきは、心のやしないなしと知るべし。





△人のしわざ、我がこゝろに協はずとも、なだめゆるして、左こそありなんとおもひて、いかり恨むべからず、もし心の中にいかり甚しくも、いかりやみて、本心になるまでは、こらへて言を口に出すべからず、いかりの熾になる時、はやく口に出せば、必、過言いでゝ、後悔あり心をやはらげ、氣をたひらかにし、怒やみて後、言ふべきことはいひ、なすべき事はなすべし。

△人のあやまちを正して、言ひきかせ、改めんことをなしへすゝむるは善事なり。既に過去りたるを、かへす〴〵言出し、とがむべからず、人の過ちてなせる事は、告げきかすべきも、しば〳〵言ひ出してせむべからず、其人我が身をばせめずしてうらみ怒りて背くものなり。

△面前に人をほむるは諂にちかし。もし、ほむべきことあらば、其人に對せずして他人に對して、ほむべし。其人の惑も亦ふかし。面前に人の過を正すはよし、退き陰にてそしるべからず。

△人をそしるは、其人に對せず、陰にて、ひそかに言ふことなれば、其人知るべからず、何の害かあらんと思ふは、愚なり。そしりは、必らず、もれやすし、俗語に惡事千里を行くといひ又壁に耳ありといふがごとし。

△言を出すにも、わが身をかへりみて、分に過たることをいふべからず、人にそしり笑はる、恥づべし。

△わが身に、いかなる才能善行ありとも、口に出してほこるべからず、ほこれば才能をうしなひ善行をうしなふ、をしむべし。

△こと葉多く、無用の枝葉しげゝれば、相對する人つかる、同じことをくりかへせば、きく人厭く。此の如くなれば、すぢ立ちたる用ある道理はきこえず。ことばすくなく、用あることを言ひて、道理明らかに詳かなるべし。辭は簡要をたつとぶと、古人もいへり。無用の言を出さず、有用のことをいふべしとなり。





# 處女に別るゝの記

花散里

よみさしの「舞姫」へしをりをはさんで眺むるともなくふり仰ぐ初秋の空、さながら紺青のうす絹もてはりつめた樣に淸かに澄んで白きわた雲が北へ北へと流れてゆく。まだ殘暑が烈しいとは言ひながらそれでも鉢前の秋海棠や芭蕉わたる風もめつきり秋らしくなつて浴衣の着心地もサラリと快く思はれる。

あゝとう〳〵其の日は明日と迫つてしまつた。自由な華やかな斯うした處女の生活は今日がいよ〳〵最後の日、泣いても笑つても今日限り、あゝ今更に名殘惜しい。

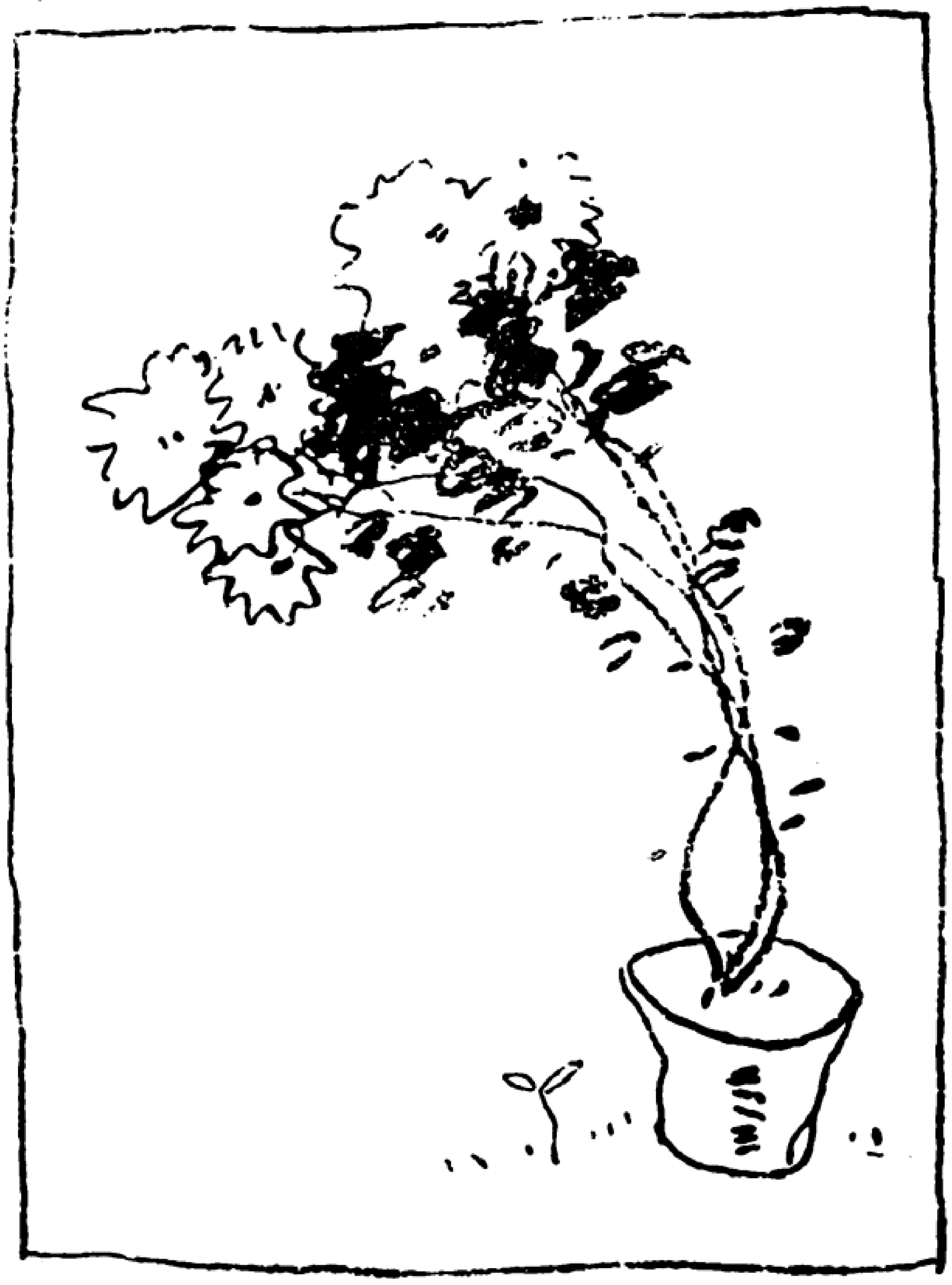
御大喪中のこと故よろづ質素にと遠慮はしてもそれでも二間の床に山の樣に飾られたかず〳〵の贈り物、祝つて下さる方々は誰でも必然良い御緣だ〳〵とおつしやつた。ほんとにこれが良緣かしら？　最初から私はあまり進みもしないのを第一に祖母樣や御兩親が今度のでなければならない樣な御氣乘りでとう〳〵極つてしまつたんだのに……。

甘いかなしみ、左樣だわ、甘い悲哀……私の今の心持は……。よそ目にはどんなにか嬉しく樂しさうにも思はれやう。けれど、生れてこゝに十九年、住みなれた家を去つて新らしく他家の人とならねばならぬ此の身には言ひ知らぬ怖しさと珍しい物でも開い

て見る時の様な好奇心とがこも／＼みだれてまた今更に………。

とりとめのない事を思ひがら、幼なじみの寄木の机にもたれて居ると朱泥ですゝきと水玉とを描いた細いしやれた封筒を辰が持つて來た。裏を返さぬうちに菅子さんからと直ぐ判る。

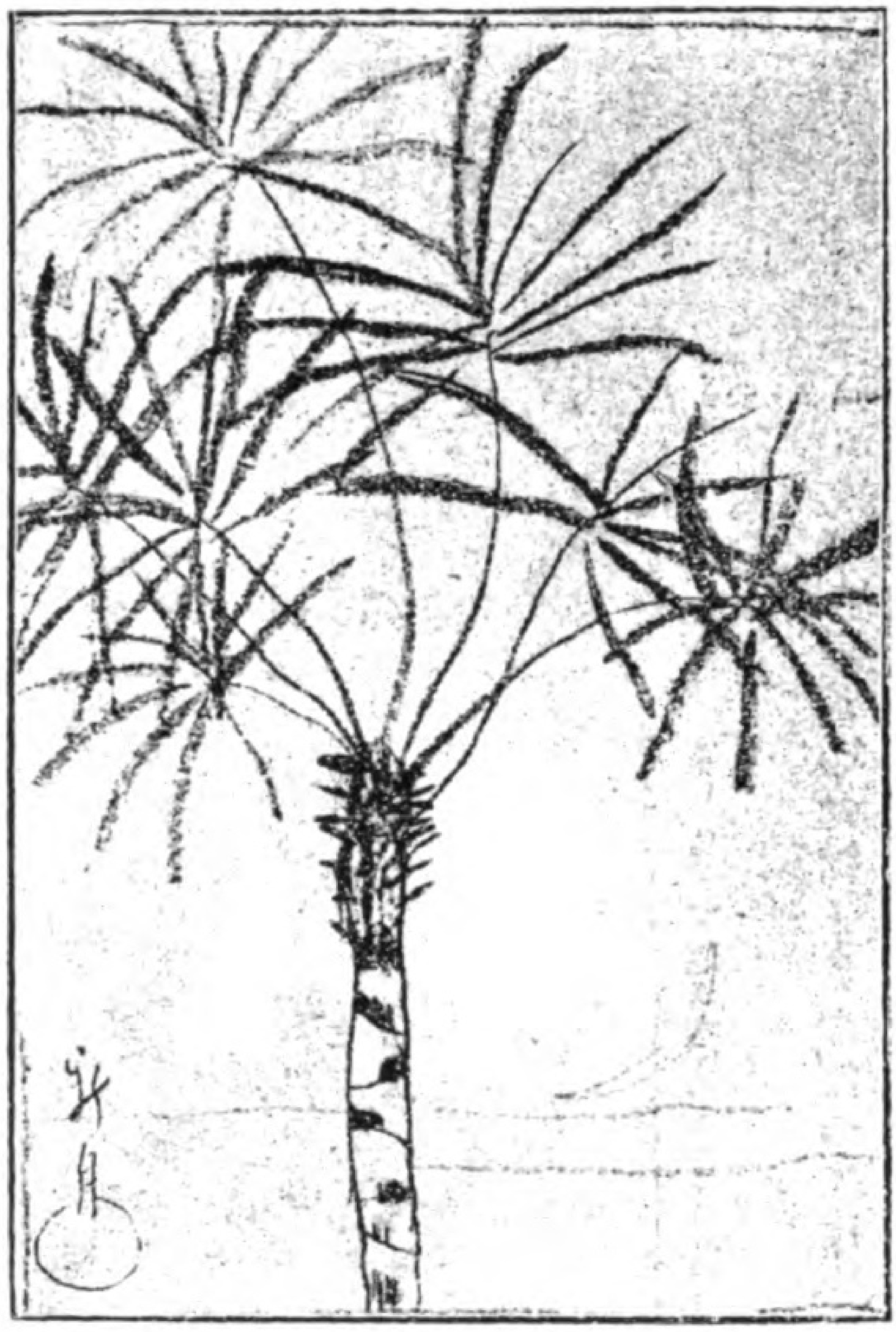
昨日神戸先生の御宅へお稽古日ゆゑ上つたら思ひがけなくあなたのおめでたいお話を伺つてそれに此の間もう御暇乞にまでお廻り遊ばしたとか先生がおつしやつた。それに何故私にばかりは知らしては下さらなかつたかとさん／＼のお怨み言だつた菅子さんだつて片山さんと御結婚なさる時 私には前日まで秘めてゐらしつたのだのに………。



きり／＼す燈籠消えてなきにけり（素秋）

御返事書かうと思つてそこらさがしてももう机の抽出しもきれいに始末してしまつたので巻紙も見あたらないから濟まないとは思ひながら其のまゝにして置く

母様は今日も早朝から私の道具類をならべた十五疊へ手傳に入つて來て居る。こま／＼元居た女中としきりに何か片付けたり納れ直したりしてゐらつしやる様子お祖母様まで離室から出てゐらしつて何か世話を焼いておゐでになる。お晝飯によばれた時、一寸私ものぞいてみたら、こまがまたあの紋紗のコートと無線織の丸帯とを一生懸命なでたりすかしたりしきりに感心して居たつけ。御苦勞様な事だわ。本人の私でさへ別



月見れば人の砧にいそがはし（羽紅）

段着物なんか嬉しいとも思はないのに他人が入れたり出したりしてさわぐなんて……。殊に長襦袢なんかあんなに幾枚も〳〵こしらへて下すつたつて手もとほさないうちに又どし〳〵流行は移つてしまふんだのに……。唯あゝしてズラリと衣桁にかけて人に見てもらつてお祖母樣や母樣が一種の詫を感じるだけであとはまた簞笥の底で朽ちさせてしまふばかり、全く勿體ないことだと思ふ。

けれども世間では良く出來た繼母樣、生みの母でも及ばない程　支度萬端に氣を揉んであんなに澤山のお調度でと母樣をほめぬ人はないといふ噂。だから矢張り私は默つてして下さるまゝにして置いた日頃から可愛がつて下さる母樣の積る御恩は決して忘れはいたしませぬ。

此間越村さんから頂いたドロンオークの涼紗織あんまりサラ〳〵と美しいので急に思ひ付てヴアヰオリンの袋に縫ふ。わざと裏はなしで一重にしてみたら絃が透けて更に美しい。今日の日になつて呑氣なかただと辰が笑ふ。

西野さんの奥樣（こんどの媒酌をして下さる方）また御來訪、母樣に呼ばれたので私も一寸御挨拶に出る。艶やかなお丸髷にヒスヰの五分玉、白粉氣のみぢも無い細い首筋に水玉をぬつたお半襟がいかにも好いいつもながら二十八のお歳よりはズツト老けたおつく

りが人一倍美しいこのかたに却つてしつくり似合つて細い金齒のチラ〳〵するお口元に遂見とれてしまふ。

いよ〳〵明日といふ日になつても斯うしてすまあして居るのを何と思召すかと思つたら妙に極りが惡くなつたのが鶴が吉井樣からお電話でございますと言つて來たのを機會に失禮してさがつてしまつた。

もう何もかもの打合せまでチヤンと濟んだはずなのに何御用かしらと一寸氣になつたけれど　屹度今宵の荷近りの事かも知れないわ。此の縁談のはじまり頃には此の奥樣が御越しになるとよく拔き足さし足ぬすみ聞きしに行つたものだと思ひ出すとをかしくなる。

弟の輝ちやんを輕く抱いて低聲に『をだまき』を謡つて居たらスヤ〳〵と寢入つてしまつたので西洋室の大きな寢臺の上に連れて行つてソツと寢かしておく。此頃はみんな忙しいため母樣になどは勿論遊んでは頂けず　女中達とばかり遊んで居たので私の顔をみるとうれしさうにニコ〳〵笑つてねへちやま〳〵といふのが可愛らしい。

今日もまだ明るい間にお風呂に入る。ゴムスポンジに石鹸を澤山つけてポンヤリと足の甲をこすつて居たら乳母が裾をからげて入つて來ていくら斷つても是非ながしませうといふから仕方なしに『ではぽつちりね』と言つて手拭を渡す。乳母のはいつでも痛いから御免だわ。

大きなタオルに半身をくるんだまゝ鏡臺の前にペタリと坐ると涼しい夕風が窓を吹いておゝ好い氣持。



山鶏柿食ふたやう嘴あかし　（來山）

わざと高髷花笄は遠慮したのでいつものまゝのコロネーション、どうぞ明日もこの樣に結へればよいがと思ひながら高く張らした前がみへ荒い櫛の目をいれる。

水おしろいをとかしながらふと氣が付くと右の無名指にさした指環の中央のエメラルドがぬけて居るのでびつくりして其の邊をさがしても見あたらないからそつと辰にだけ『見つけて置いて頂戴よ』と賴んで母樣には內密にして置く。少々かつぎやの母樣に寶石がぬけましたなんて申上げたら屹度また氣になさるに定つてるのですもの。あれは先の母樣のおかたみで日頃から殊に秘藏にしてゐたのだから、自分でも何だか心配で仕樣がないけれども、明日だけは他のどれかをさして胡麻化して置かう。



月日の栗鼠葡萄かつらの甘露落（其角）

此際のこと故荷物も白晝を憚つて今夜先方へ送るといふので夕方から家の中は何となくザワ／＼といそがしくなつた。うちの定紋付のしるし袢纏を着せた若い男達へは御酒が出るのとみえてこまはまだ歸宅らずに臺處を手傳つて居る。

奧の者だちも皆八疊の御座敷でよそ行じみたお頭付のお膳に向ふ。いつもなら別席でたべさせる輝ちやんも今宵は母樣の横にチョコンと坐つてお介添の鶴がおさしみを小さくお箸で千切つて居る。

お盆を前に控へた辰はお給仕のひま／＼にチョイチョイ上目をつかつては私の顔ばかりのぞいて居る、ほんとに失禮なことをする女だわ。私は矢つ張り毎日見

なれた千壽子ぢやないかそんなに見たけりや今までに何故毎日みて置かないのかしらと負けぬ氣になつてこちらでも見つめてやる。眞つ赤になつてうつむいたりなどするのは足もとを見すかされた樣で口惜しいから

『何だか今更手離してよそへ上げてしまふのは惜しい樣でございますねえ』

と母樣がおつしやると御祖母樣も御椀を擱いて

『ほんにお前の丹誠でこれほどまでにしてくれたのを一目でも可い亡くなつた靜代（私の生母樣）に見せてやりたいと思ひますよ』と老の目の早くもハンケチを當てゝおゐでになる。妙に氣が重くなつてのどもふさがる樣な氣持がするけれども折角私の好物ばかり選つて作へて下すつた母樣のお心づくしを無にしたくないから新栗のきんとんと鮑の酢貝とは殘らず頂いてしまふ。

お膳が引けると父樣母樣は直ぐもう荷物の方のお指揮、宰領には出入りの山田が羽織袴でゆくといふ。定紋付のゆたんかけてズラリと並んだ簞笥長持、机や文庫や鏡臺など幾つもの釣臺にのせてユサ／＼練つて行く樣を私も一寸見たいけれども何處から聞き傳へてか門外にはもう近處の人達が大分集つてるといふのできまりがわるいから獨り拔けて奥庭へ出る。

折からの月光は銀箭の樣に下草にそゝいで足許の芝生にこほろぎが鳴く　垣の夕顏も月見草もこよひ限りと思へばまた今さらに名殘惜しい。あゝ明日の今頃はどんな心持でこの月をながめることであらう…………。





# 借金する人としない人

佐治實然

## よい借金と悪い借金

日本では大抵家が一軒で表の方では商法をするし、奥の方は暮し向きと云ふ風になつて居て、商賣と住家とが別々になつて居るのは少ない。今日では大分合資會社とか合名會社とか云ふ組織も出來て來たが、まだ大部分は暮し向きと商賣、俗に云へば店と奥向きとは別になつて居ない。

處で店では代物を多くする爲に資本が足りないで借金をする事がある。借金と云ふてもこれは品物を殖やして利益を得る、即ち商賣のためであるか、少しも不思議はない。併しながら奥向きに借金が出來たらどうかと云ふにそれは甚だ困つた事と云はねばならない。

成る程家庭は子供が次第に殖えて行くと云ふ處から見れば積極的であるが、金錢の方からは家庭は何處迄も消極的である。であるから家庭向き暮し向きに借金を作つたらそれこそ容易にぬけつこはない。

## 細君の離れ藝

中流社會の銀行員、月給取の如きは貰つた俸給で暮すのだから借金の出來る筈はない。月に五十圓づゝ暮し込めば年に六百圓不足を生ずるのは判り切つて居る。しかし外に年末賞與がいくらと云ふてあるなら其を借金にあてはめる事も出來やうが、收入よりも支出の方が多いのだから借金が出來てもよいとは云はれぬ。家庭を堅固にもつには借金は絶對的にしてはなら

ぬ。病氣になつては困ると知りつゝ不養生をするのと同じ事だ。たとへば夫が七十圓の給料で子供が五人それ相應に世間も飾らねばならず、となるとどんなにしても借金しなければやり切れない。と云つて借金してもその借金が何年つゞくか、その人の信用と伎倆とでいつか行きつまつて仕舞ふ。すると遂に家庭がくづれるやうな憂目をみる事になる。そこを切りぬけるのが偉いと云ふて離れ藝を行つて細君が借金取に嘘をつくのは學校へ通ふ子供に嘘を吐く實地教授になるのでお母さんが嘘をつくから僕も嘘をつくのだと云ふ事は珍らしくない。



秋風の吹にし日より久方の天の川原にたゝぬ日はなし　（讀人不知）

## 自縄自縛とはこの事

借金せずにはとてもやり切れないと云ふても如何にかして借金をせず、暮す工夫をするのが借金取りを胡魔化すよりは遙かに偉いのである。世の中は被衣一枚の人から自動車で馳せ廻つて紙幣の束をやりとりしてゐる人も同じく暮して居るのだから、暮し方によると云ふ事を考へねばならぬ。そこに最もかしこき智慧と深き注意とを要するのである人は一度高い所へ上つたら下るのは中々出來るものでないが、上り切つた人、どうでも借金せねばならぬと云ふ人は下る事を考



へて改革する勇氣がなくてはならぬ。容易に下ると云ふ事の出來ないのはあまり各自が自分を重く見過ぎて居るからで、人が見たら何でもないのに、かうしたら世間で何とか思ふだらうなんて考へる、自繩自縛と云ふ言葉があるが世間では何とも思はぬのに我れとわが身を縛つて仕舞ふ。自分の都合でどうしやうと構はないのに自分から融通を利かなくして仕舞ふ。

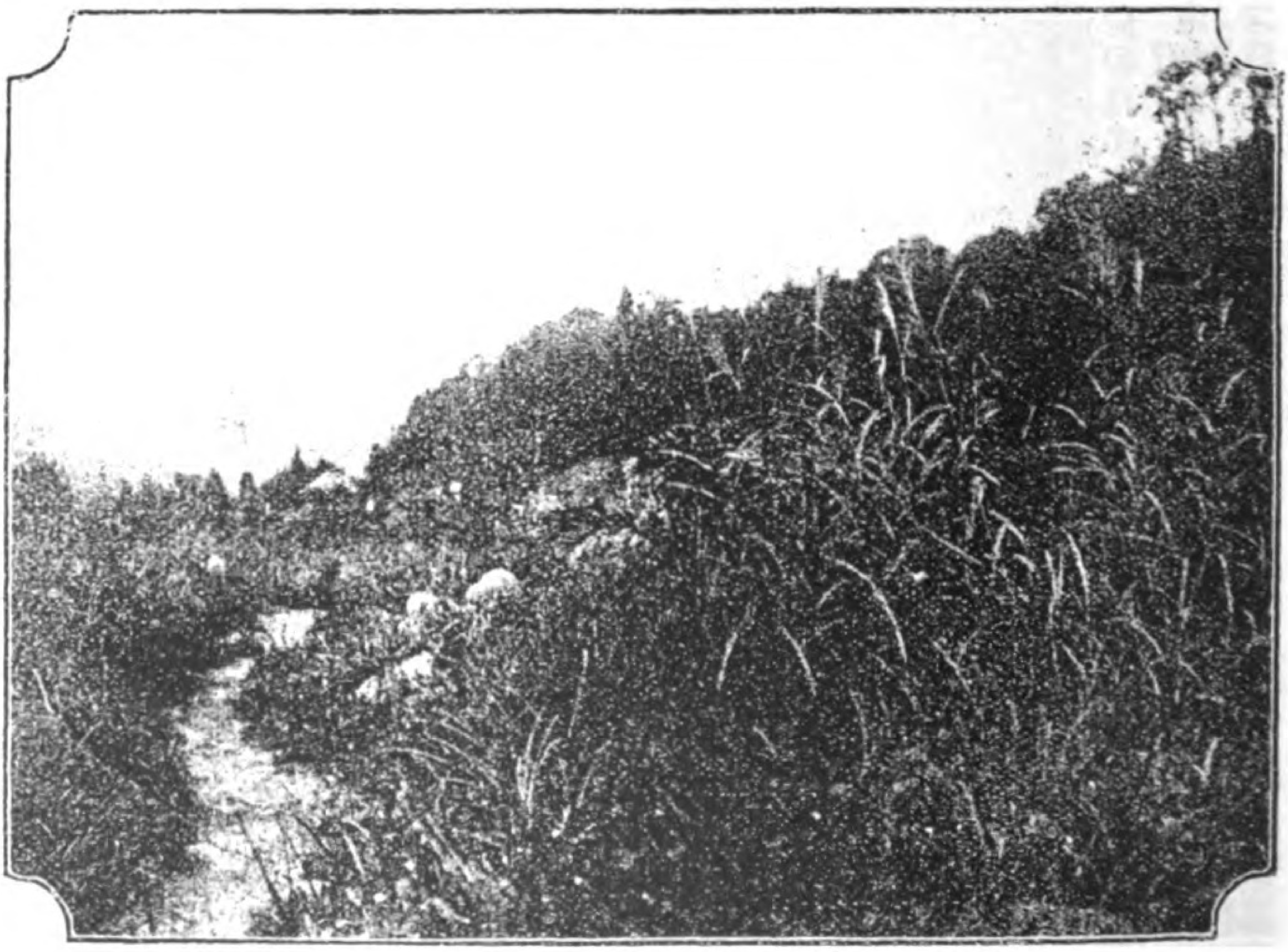
## 三度同じ服裝では

ある奥さんが他へ行くのに繻珍の丸帶に紋服を着こんで護謨輪で行かねばならないやうに思ふて居るものもあるが、もつと簡單な服裝をして一寸羽織でも引つかけて歩いて行つたつて少しも差し支へはない。ところが護謨輪で行くものと思つて居る人はどうしても紬の羽織位で使物を自分に持つて行つては自分に不釣合だと考へて居る。人は何とも思はないのに本人は土にもぐりたい位に恥かしがる。近頃貴婦人社會では同じ服裝をして同じやうな會合に三度出るのは非常な苦痛ださうだ巴里の交際

社會にのみそんな風があるのかと思つて居る間にもう日本の社會にまで推し寄せて來た。何もこの忙しい世の中に何處そこの奥さんはどんな着物を着たとか俥だとかおそろひだとかそんな事迄詮議する者もあるまいし、よしまた人が何と云つたとてそれが人に關係するのでもないから氣にとめる必要はない。しかるに大抵の人はそんな事ばかり考へるので借金をこしらへるのだ。

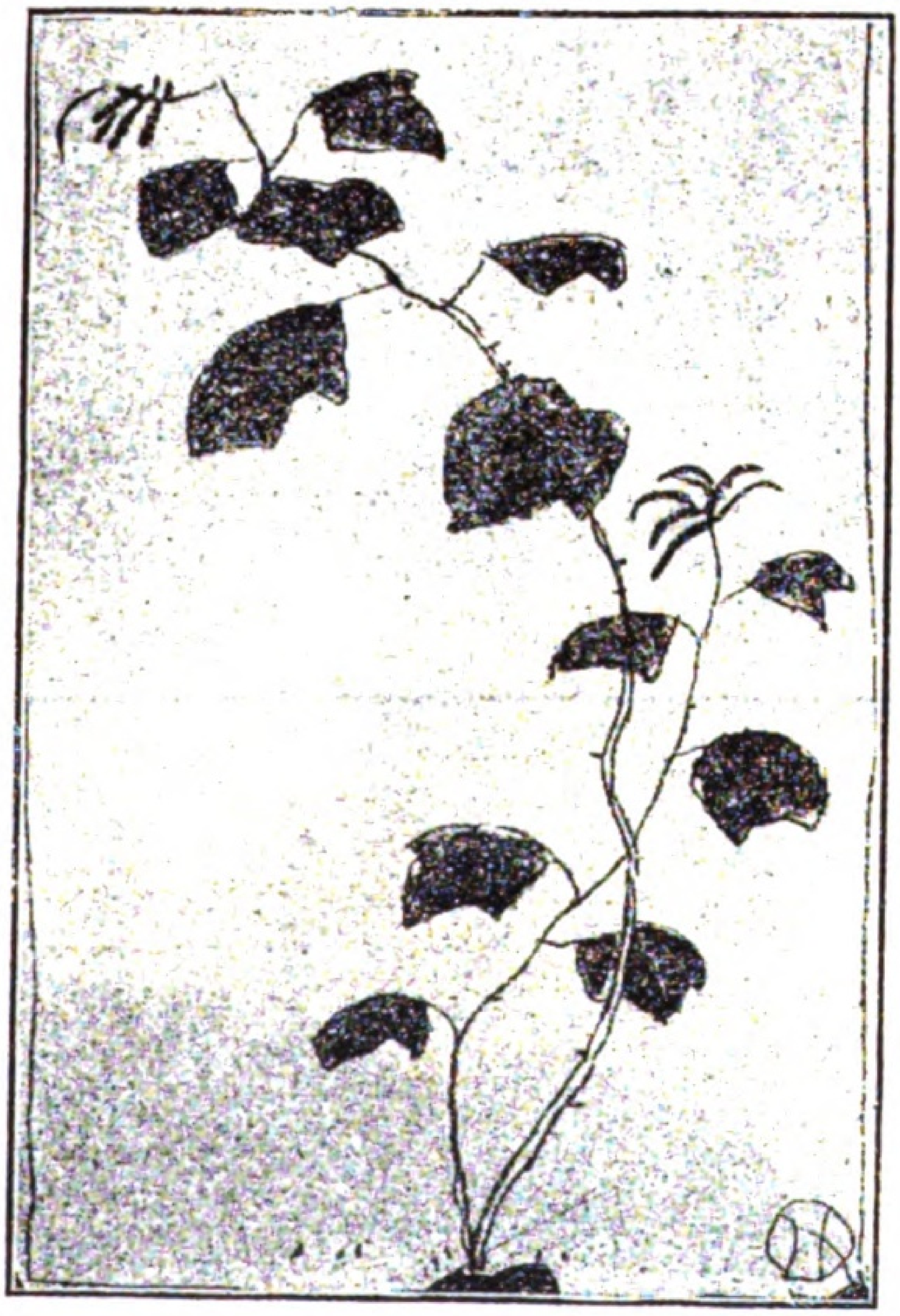
## 借金の出來るのは中流以上

一圓に三升五合の米で家内は七人、米代は一日に五十錢づゝ要る。主人の月給は二十五圓、一日に八十錢だ、どうしても足りる筈がないと云ふ家は借金もせずに暮して行く。處が月に百五十圓も收入がある、融通も利く、小汚ない事を言はずとも立派に生活して行かれる筈の家が却つて借金の山をなす事がある。所謂奥樣なる人即ち主婦のやりくりが下手な爲に高利貸にも米屋にも酒屋にも借金が出來たと云ふのは百圓以上の收入の家に多い。借金をせぬと云ふのは暮しに方法を立てる事が必要だが要するにその人の意志の鞏固なると否とにある。北海道廳の



小使をして居つたある獨身者の男が月七圓でどうやら暮していくらかづゝは貯金をして居たが給料が上つても矢張り初めと同じ暮し方をして居たので遂々小金をためて土地や家を買つて相當な暮しをするやうになつたと云ふがいつになつても貧しい時のやうにやつてゐればやりそこなひはない。ある事業のために手形を出して千圓なり一萬圓なりの借金をすればそれによつて事業が擴張されるとか學資金としてかり入れるとか云ふのと　暮し向き家庭向で借金するのと一緒にはならぬ　一軒の家であつたら足りる工夫をするより外はない。

## 借金整理の方法



草かりよそれか思ひの秋の露（李由）

借金が已に何程か出來て居ると云ふ人がそれを整理するには如何するかと云ふと先づ借金がどれ丈あると云ふ事を打ち明けるのが宜しい。債權者に支拂ふにも他から借りかへてかへすと云ふ事をしないで一年か二年の暇はかゝるがかう云ふ方法を以て支拂ふからと正直に話して貸し主に熟議をとげて借りかへる中に手數料や利子が殖えると云ふ事を省くやうにするのがよい。これは借金整理の第一の簡便な方法で誠實にやれば隨分相手になつてくれる人もある。借金の整理がつかないのは多くは出たらめの嘘をつくからである。債權者と相談が出來てその方法を實行するやうになつたら必ず違はないのが大切で一時を彌縫するのは失敗の基で

ある。

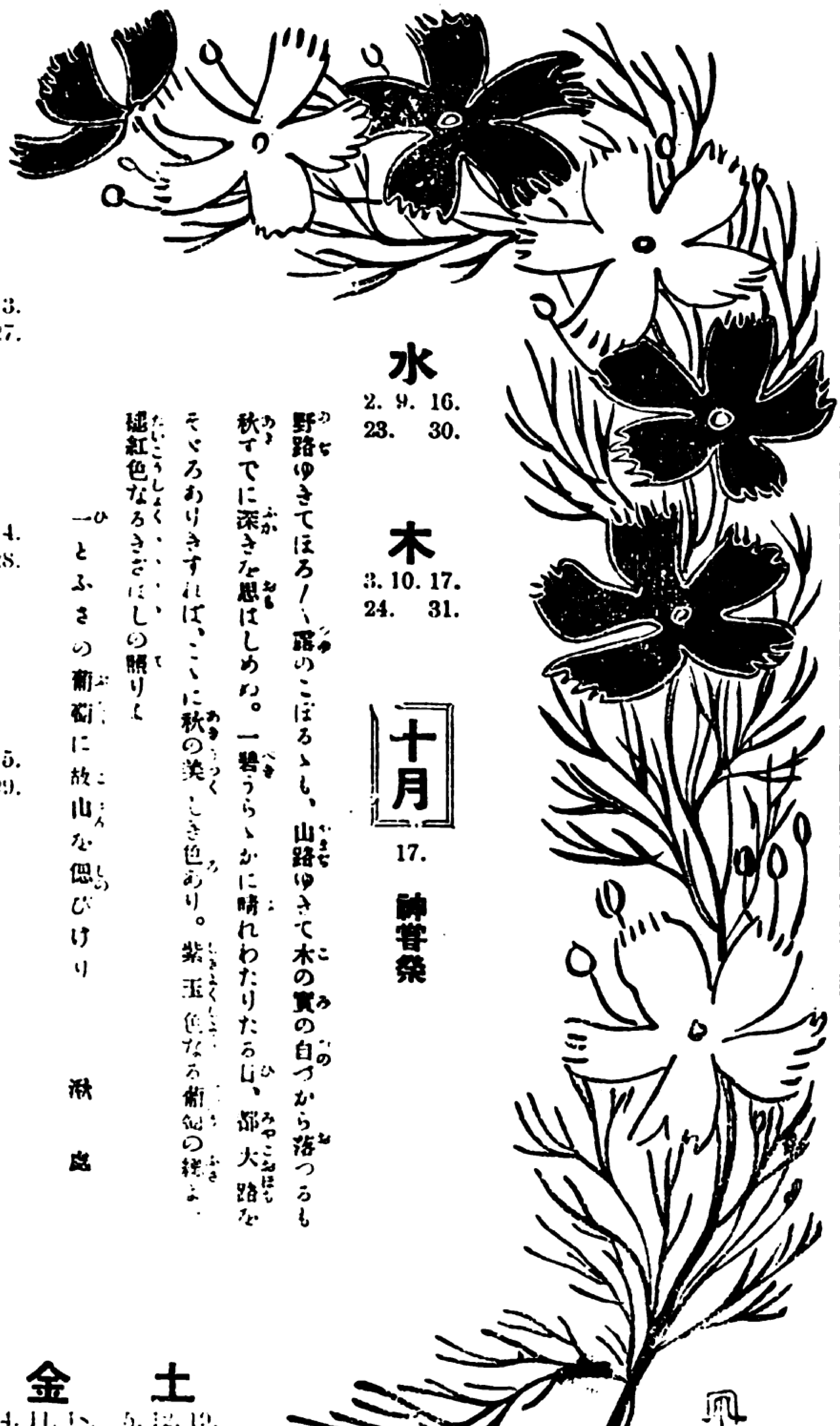
美くしい着物を着て俥にのつて人の見榮をする輩は誰に見榮をするのかと思ふとそれは皆自分と無關係な人々に對して虚榮をし、容態が作るので、さういふ人に限つて自分に關係ある人には無沙汰して借金をする男ならば電車や汽車に乘るのにあたりの人から偉さうに見られたいとか、女ならばこんなに着飾つたら通りすがる人が振り返るだらうなんてつまらない事に小さい誇りを滿たすので知つた人には自然不義理をする、利害關係のない人に見せて得意然として、世話になる人や自分を引き立てゝくれる人には不義理の借金をする、これでは丸で反對ぢやないか、借金の出來るのは多くこんな事に原因する。



草の實やきなふなりて散りもせず　見風

△古新聞と除蟲

毛織物のやうな兎角蟲のつき易いものは、古新聞で包んで密封して布海苔で貼附して置きますと、決して蟲に喰はれる恐れはないのであります。何故蟲がつかないかと云ふと、新聞の印刷に用ふるインキを製造するときにはコールターを用ゐます。其コールターの中にはクレシンも含有して居りますから、それが除蟲殺菌に効があるのであります。



# 十月

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| | | 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 6. | 7. | 8. | 9. | 10. | 11. | 12. |
| 13. | 14. | 15. | 16. | 17. | 18. | 19. |
| 20. | 21. | 22. | 23. | 24. | 25. | 26. |
| 27. | 28. | 29. | 30. | 31. | | |

17. 神嘗祭

野路ゆきてほろ／＼露のこぼるゝも、山路ゆきて木の實の自づから落つるも秋すでに深きを思はしめぬ。一碧うらゝかに晴れわたりたる日、都大路をそゞろありきすれば、こゝに秋の美しき色あり。紫玉色なる葡萄の房よ、褪紅色なるきざはしの照りよ

一とふさの葡萄に故山を偲びけり　　湫嵐

新潟耳鼻咽喉科院長 鍋谷傳次郎君著

# 家庭寶典 通俗臨床醫學

全壹册
洋装菊判上製
紙數約一千百頁

▲近刊▼

## ■本書の特色■

○臨床醫學の全科目を網羅すると共に總ゆる疾病は細大漏らさず、其原因、特徴、療法注意等を記載し特に家庭に行ふて可なる療法と必ず醫師の手を煩はさゞるべからざる療法とを區別し、療法の眞髓を知らしむると同時に誤解に陥らしめざらんことに努め特に急救療法等に對しては最も注意せり。

○著者は醫學と哲學及宗教上の見地より眞の健康は靈肉の一致に待たざるべからざるを論じ最大幸福獲得の道を説けり。

○内容は總ふり假名付にして精密なる圖畫を挿入し五號活字と六號活字とを巧みに配合し其記載の方法は秩序的にして而も索引に便せしは著者の苦心せし所にして活用と實益を併有せしむ。

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(ゐの二)

## 手本執筆者 御歌所寄人 大口鯛二先生



# 大日本習字速進會

### かりそめのそゞろがき

にも、その人格をあらはして、ゆかしくなつかしい思を起させるものは美しい手蹟でございます。女の寶は樣々あるでございませうが、わけても大切な寶は、美しい容貌と美しい心とそれから美しい手蹟との三つでございませう。

大口鯛二先生は現代女文學の泰斗と仰がれるお方でございます。その御書きなされたお手本を、最新式にして最正式との世評ある大日本習字速進會の新式習字法で學ぶのですものこれこそ眞實に鬼に金棒、どんなお方でも見る／＼能筆とおなり遊ばすに違ひはありませぬ。皆樣方の一生の幸福の爲に、兎に角見本付規則書を取寄せて御覧あそばせ。そして他の習字法とお比べなさいませ。

東京市神田區駿河臺鈴木町

見本つき規則書申込次第進呈 ● 此際入會者は大特典あり

# 燈下之好伴侶

文學士小原要逸　醫學士三原新太郎　農學士岸伴吉　合著

好評嘖々

# 實用家庭百科全書

家庭は社會萬般の源泉なり。家庭の改善は必ず社會の改善を誘致し家庭の頽廢は必ず社會の頽廢を惹起す故に家庭を改善せんと欲せば必ず本書を讀まざるべからず。從來家庭に關するの書枚擧に遑あらず。されど多くは一部一局の小事を指導せしものなり。本書は一般家庭に亙りて其顧問師友となり平易通俗に其要義を說述せり圓滿を望む家庭は本書を備へよ。

總クロース金字入
裝幀頗ル　全壹冊
三色版寫眞版
等無數挿入
定價三圓六十錢
郵税金拾六錢

五八の四

大好評

# 家庭の友 西洋料理法

日本女子大學教授　手塚かね子著

定價金壹圓　郵税十二錢

本書は女子大學に於て多年實際に教授せられたる經驗と歐米の料理界を視察したる見聞の新知識とによりて著したる天下唯一の好良書也

大好評

# 年中行事 家庭儀式料理

日本女子大學教授　笹木孝子著

定價金壹圓　郵税十二錢

本書の著者も亦女子大學に於て實地に教授せる經驗と深き學識を基礎として年中行事に關する儀式料理の事を詳述したるものなり

發賣元　東京本鄕　博文館　發行所　東京小石川　精美堂

文學博士
遠藤隆吉君著

# 女子補習讀本

全一册

菊判大和綴
紙數百四十餘頁
正價三十錢
郵税六錢

東京 本町
**博文館**

---

天下一品にきび取藥




此の藥液は氣休めの化粧水と違ひ不思議に効力を現し幾瓶も用ひずして有効卓絶大概のニキビ吹出物そばかすも跡形殘さず實にキレーになり艶美白色ならしむ

禮状來る

一取次各地藥店に(なき時は本舗へ)又は藥店へ取寄を頼め
△小瓶廿△中瓶卅五錢△特一圓送各六錢郵券一割増

本舗 東京日本橋新和泉町六番 長江校商店 振替九八二二番

◎御求めの節は必ず「艶美液」と御指名あれ

---

# 洋畫講義錄

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり

# 繪畫講習錄

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖忽ち上達せしむ毎號著色繪畫多し

當代一流大家數十名執筆、會費月册六錢 一ケ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目
電話芝三九六八番

**大日本繪畫講習會**




百餘頁の綿密なる圖解挿入したる[illegible]御一報次第郵税を要せず無料進呈す[illegible]畫家必携の好[illegible]

---

美術

# 造花材料

東京市淺草區[illegible]町十四番地

三階屋

# 關口商店

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送アレ

女(の五)

女（の六）

# 女子文壇

第八年第十號 十月一日發行

## 特別號

定價三十錢 送料貳錢

◎乃木大將の妻…………

忠誠無二なる乃木將軍と共に殉死節操を全ふしたる、大將夫人の平生は如何、性質は如何、言行は如何、之を本號掲ぐる處の朝野の名士婦人に聞け！

◎御大葬拜觀記……… 河井醉茗

◎明治年間の婦人 棚橋絢子、嘉悦孝子の諸婦人の談 立花中將夫人、渡邊博士夫人、辰野博士夫人、鳩山春子

◎山路愛山氏 特に明治年間の婦人に就いて其變遷を述べ併せて其意見を開陳せり

▲柳は綠花は紅 原田琴子

◎歸省 長曾我部菊子

◎桔梗ケ原 太田喜志子

◎若き婦人の旅行記 平塚白百合、松井紫花等の紀行文約八篇を收む

▲愛讀書目十種及び其解題

▲無名婦人傳

◎私の好きな小野小町 日向きむ

◎御前試筆の記 粒木つね

▲婦人が聲樂家に適する理由……沼田順次郎

▲東京市外篇 郊外一周記

▲耳袋

▲青鞜の女

◎花壇……窪田空穗

◎紅梅燒……兒玉花外

口繪…… 山中古洞先生謹寫 明治天皇御大葬儀の圖簿（石版彩色密刷 横長判額繪）……其外 寫眞 美觀數葉

女（八の七）

東京市京橋 大鋸町十二 女子文壇社出版（振替口座東京第壹七貳九番）取次販賣 全國各地書店

あはれ　明治天皇神隠れさせたまひてより小指かゞなふれば、昨日と過ぎ今日と逝きて早や四十餘り六日をぞ数ふ。未だ大御柩の殯宮に在しまし丶頃は、縦しや大御魂の九天高く昇らせたまひぬとも、なほ聊かは慰みつべく、なほ些かは安けかりしに、長月の十餘り三日といへる、秋霖やうやく歇みて愁雲なほ深く鎖す其夕べ、轜車の響いとも悲しく、挽歌の聲いとも愛れたく、大御柩は粛々として玉の宮居を出でましけり。億兆天地に慟哭して、大御魂い今一度はと祈りまつるも、あはれ此祈ぞ限りなりけむ。痛ましきかな。

されど恭しく惟んみるに、その御大葬儀の彌嚴かに、彌壯んなりしは、古へかけて曠しく、都の人のみならず、遠き鄙人までも、大御柩拜まむと堵をなして集りつどへるだに恐しかりしほどなるに、わきても外つ國王い御名代い儀容燦然として御大葬儀につらなりまゐらせぬるは、今更に　先帝の御遺徳の餘なりしを思ひまつりて、そゞろに涙の襟を霑すも消理ならでやは。

かくて大御柩は桃山に到り、十餘り五日の曉かけて、御斂葬の御事より御陵前祭に至るまで滯るところなく終らせられけり。抑も桃山の地は、千年の舊都に近く、山青く水清く、先帝のいとも愛で給ひし地なりとぞ承る。あはれ大御柩は平らけく安らけく、長へに桃山の底つ岩根に鎮りたまひ、大御魂は天翔りて、窮りなく我が天津日嗣を護らせたまひ我が皇國の上に幸あらせたまへ。謹みて啓す。

# 御大喪儀



## ▲靈轜の進御

明治天皇神去りましてよりこゝに四十有六日、靈柩は十三日を以て愈宮闕をはなれ玉ふにぞ、今上陛下をはじめ、皇后、皇太后兩陛下、皇儲殿下並びに各皇族殿下は申しあぐるまでもなく、近臣百官朝野庶民も限りなき御名殘を惜みて、ただ暗涙に咽ぶのみ、時針は進み五時を報じ六時を指すに至りては、遽に馬車自動車の軋り高く、大禮服つけたる大勳位親任官、勳一等從一位公爵以下正五位勳五等に至る百官の陸續として參内するを見る、かくて午後六時三十分に至るや、鹵簿第一先頭の松明は仕人之を奉仕し、鈍色の衣を身に著けたる大喪使事務官、衣冠單に帶劍の宮内屬は蓮池門跡を先導にして其任務の位置に着きにし列具を奉持する者は係員直に之を引率して東溜廊下に於て之を受取り列に復し、午後七時四十八分と云ふに轜車は五頭の牛靜かに曳き奉りて御車寄に至り、更に同三十分參内の諸員は東一、二の間廂並に東御車寄より天幕内に堵列して御靈轜を待ち奉る、かくて同三十五分前驅の御行

列たる先驅の松明は御車寄に並行の位置につきたる時、松明係より松明の配布を行ひ、同四十分に至るや宮城正門外の天幕內、貴衆兩院議員及び諸官衙等孰れも行進順序に整列し、かくて用立て萬端聊かも滯り無く取行はれたり、御行列に位すべき大木、天岡其他の各事務官 祭官 並に正親町祭官副長、鷹司祭官長は衣冠單にて腰に劍を帶び、威儀儼然として自ら敬虔の念を生ぜしむ、かくて列衛、列次全く整ひたるは實に七時三十五分なりき、是より先鹵簿先頭に警衛すべき警部、及安樂警視總監は、午後七時正門外に至り、御表列の先驅をなし奉る、同四十分儀仗隊の奏する悲哀の喇叭の響き渡れば、早先頭隊は馬場先門を出で御順路を粛々として進行せり。

### ▲御鹵簿の次第(一)

靈轜の宮城を發せらるゝや、二重橋外の廣場に馬を控へて靜まり居たる諸兵指揮官 川村大將、及び近衛師團長代大井旅團長等は、近衛諸兵の整列を指揮し、靈柩の二重橋渡御を待ち奉りて、徐かに全員最敬禮の喇叭を吹奏せしむ、次で近衛軍樂隊及び喇叭手は「命を棄てゝ」を調音低く哀れに吹奏し御靈柩通御の際一齊に捧銃の最敬禮を行ひて序列を正し、豫定の位置に儀仗 此時司法省前の近衛野砲兵及び重砲兵の一隊は、轟々たる弔砲を宵暗の空に響かせ始めぬ、御葬列の青山葬場殿着御まで殷々として百一發の弔砲を轟かせ奉らんとはするなりき、此時しも品川灣頭遙かに出羽司令長官の率ゆる第一艦隊河內安藝、香取、伊吹、三笠、敷島の諸艦よりは亦た一齊に分時弔砲を打出したれば、其の響殷々轟々として遠雷の如く、波動暗より暗に傳ひて一入夜氣の森嚴を加へぬ、御葬列は先驅の警視廳警部齋藤、小泉、山下、楠、岩村、多賀谷の六氏は、何れも喪章を附したる正裝にて先を揃へば、續いて安樂警視總監同じく正裝喪章を帶びて進み次で更に二列六人の警部之に從ひ次に騎兵聯隊、近衛軍樂隊、近衛步兵第一

旅團司令部、近衛歩兵第一聯隊、近衛歩兵第二聯隊、海軍軍樂隊、海軍儀仗隊聯合大隊司令部、海軍儀仗隊二個大隊之に續く、何れも負革を以て銃を逆に右肩に托し銃身を後方とし右手を以て銃床を握り歩調緩かに四列行進す、次に鈍色の雜色二人は、布徑一寸二分長さ四尺の大將松明、石綿及び麻蠟を用ひて製作せる松明を、各々列外に向つて捧持し、次に鈍色布衣の大喪使書記二名は、何れも日章旗に形れる柑子色絹布製徑一寸八分、白色の輪廓を施せる徽章を帶び、次に衣冠單に帶劔せる大木大喪使事務官は、同じ柑子色徑一寸二分十四の褶を作りて菊花の如き形を爲し、之に横六分長さ二寸五分の同じ布を二枚蝶々に交叉せる徽章を、左胸部に佩用して之に續けり。

## ▲御鹵簿の次第（二）

次に雜色の松明二本、次に布衣の大喪使書記二名、次に衣冠單帶劔の天岡大喪使事務官、次に松明二本、次に鈍色闕腋の内舍人六人二列となりて進み、次に鈍色布衣の仕人二十人二列となり銀地に白、藍、青にて雲形を描き周圍の火炎も亂雲とし同じく白、藍、青にて彩り澤消し黑塗枠を附したる鉦を各奉持し、次に同じ裝ひの仕人二十人同じく銀色徑八寸、周圍枠ある鉦を奉持す、次の松明二本、次に内舍人六人二列、次に鈍色布衫の仕人二十人、交互に黄白二十旒の御旛を奉持して進み、其間に手代り十人あり、御旛は各黄白の緞子を用ひ大幅一丈三尺、雲織模様の澤消なり。次に松明二本、次に鈍色布衣の大喪使書記五島武田の二名は黑艶消麻張の風折烏帽子を頂きて進み、次に橡色の袍を着し、鈍色の袴を穿ち、黑色艶消の絹張の冠を頂きたる磯野大喪使事務官劔を帶して進み、次に松明二本、次に鈍色闕腋の内舍人六人二列次に白羽の箭七本づつを入れたる黑塗澤消しの胡籙を鈍色絹の袋に納めて奉持したる仕人八人、次に白木造りにて同じく純色絹の袋に入れたる御弓二十人二列、次に松明二本、次に内舍人六人

二列先を清めて楯二十人梓二十人各二列を成して進みぬ、御楯は艶消し黒塗にして表に銀泥の雲模樣あり、御梓は銀色にして白色の比禮を附し柄は黒塗艶消しなるが何れも仕人之を捧げ二人の間に一人の手代りあり、次に松明二人、次に大喪使書記二名、次に衣冠單帶劒の上野大喪使事務官、次に闕腋の內舍人四名二列に先を掃ふて銀色の月像纛旛、金色の日像纛旛共に松明の焰に映じて燦爛たる光を放ち、鈍色闕腋の舍人各一人、鈍色布衫の手代り各二人、之を捧持して進む、次に內舍人二人手代り仕人二人によりて奉持されたる御弓櫃、及び吳床、雨皮（鈍色布衫の舍人二人手代一人）之に續きぬ。

## ▲御鹵簿の次第（三）

次に又松明二本道を照して進む其後より大喪使書記二名、中西大喪使事務官、福羽大喪使事務官之に續き又松明二本の其次には翠滴る二基の大眞榊は手代りとも各四人の仕人に捧げられて進み、次に鈍色布衣の祭官補二名を先導に衣冠帶劍の祭官子爵久世通章之に續き、次に御劍櫃吳床、雨皮は舍人四人手代三人、次に松明二人、次に祭官補二人、次に祭官 子爵裏松良光次に御幣櫃（舍人二人手代二人次に吳床、雨皮（舍人二人手代り一人）次に松明二本、次に祭官補二人、次に祭官子爵長谷信成、次に松明二本、次に祭官補二人、次に祭官伯爵飛鳥井恒麿、次に松明二本、次に祭官補二人、次に祭官 伯爵 大原重朝、次に松明二本、次に祭官補二人、次に祭官副長 伯爵 正親町實正、次に松明二本、次に祭官補二人、次に祭官 男爵 正親町季董同萩原員雄二名二列を前導とし祭官長 公爵 鷹司煕通氏は衣冠單に劍を帶び、悄然として步調緩やかに進めば、其後より松明二本四邊を照して行く、次に鈍色布衣の樂師二十五名、次に松明二本、次に更に樂師二名を前導に鉦鼓（手代りとも雜色五名）を先立せて樂長芝葛鎭氏は衣冠單に劍を帶びて進む、又其後には松明二本紅蓮の焰を吐き、夫れに續いては橡布衣の宮內屬

二人を前に、衣冠單に劒を帶び素服を加へ、左手に桐杖を執りたる山口諸陵頭首を俛れつゝ悲しげに進み、次に橡雜式の松明二本、次に橡布衣の宮内屬二人を前導に、式部長官戸田伯爵は山口諸陵頭と同じく衣冠單に素服を加へ左手に桐杖を執りて進み、次に又橡雜式の松明二本と橡布衣の宮内屬二名を前導に、宮内大臣渡邊伯爵同じく衣冠單に素衣を加へ、左手に桐杖を執り愁然として進み、次に橡闕腋の舍人十二人二列となりて手に〳〵松明を列外に向つゝ翳しつゝ進む、斯くて森嚴莊重を極むる葬列も漸次に進み行きぬ。

## ▲青山の御儀式

左る程に霞ケ關の弔砲の數も早發きて、代々木御料地より更に打ち出でける折こそあれ、轜車着御なりければ、先着の大勳位、親任官を始め、幄舍に參集せる程の人は、皆起立して迎へ奉る、さて親王、親王妃、王、王妃休所に參着あり、次に　天皇陛下御正裝に御章付させられ、御通常服めしたる皇后陛下と便殿に着御あらせらる、（皇太后宮は御名代）其の供奉の人々は、侍從長、侍從、侍從武官、皇后宮太夫、皇太后宮太夫、女官、侍醫、宮內書記官、皇后宮主事、皇太后宮主事等なり、前列の陸海軍儀仗兵、正門外程好き處に堵列すれば、先着の諸員起立して奉迎す、前列の大喪使事務官、幄舍の前に立てば、鉦、赤旛白旛などをば、第一鳥居の內なる左右の兩側に、胡籙、弓、楯桙などをば、第二鳥居の內なる左右の兩側に、さて日像月像の纛旛に、御節幡御弓箙を葬場殿前面の左右の兩側に布列して、大眞榊を建てければ、仕人等御饌櫃御幣櫃を膳舍に舁ぎ入る、祭官長、祭官副長、祭官等幄舍の前に立てば、樂師道樂を奏しながら、樂長と共に亦幄舍の前に立ち、續いて諸陵頭、式部長官、宮內大臣等、亦皆幄舍の前に立たれけり、天皇皇后兩陛下には、皇太后御名代　親王、親王妃、王、王妃、侍從長、侍從、侍從武官、皇后宮太夫、皇太后宮太夫、女官

等を從へて第二鳥居内に奉迎あらせられければ、黑橡布幔並に黑漆柱を以て立てたりける幔門に轜車を停め牛を輓く、次に靈柩を葬場殿に奉安すれば、曾て御側近う仕うまつりける高等官等便宜の處に候し、後列の諸員幄舍の前に立つを待ちて、天皇皇后便殿に入御、次に親王、親王妃、王、王妃休所に入り給ふ、かくて幔門を開けば、親王、親王妃、王、王妃幄舍の本位に就き、天皇幄舍に出御ありて、御椅子に着御あらせられければ、侍從長、侍從、侍從武官便宜の處に候し、次に皇后皇太后宮御名代幄舍に出御ありて、御椅子に着御あらせられければ、皇后宮太夫、皇太后宮太夫女官等便宜の處に候し、次に祭官副長、祭官等御饌廿一臺を奠しける間に誄歌を奏し、次に幣物として錦一卷、兩面一卷、五色綾各一卷、五色帛各一匹等、種種の織物を、蘇芳纐纈帛に之を裹み、縹帶二條に結べるを奠しける間、又誄歌を奏し、次に祭官長祭詞を奏し畢れば、天皇御拜禮あり、御誄を奏させ給ふ。

## 御誄

御名謹ミテ　皇考ノ靈前ニ白ス

皇考ノ登遐シ給ヒシヨリ夙夜夢寐溫容ヲ諼ル能ハス槻宮ニ殯殿ニ奉饌拜參シテ空シク靈前ニ感泣スルコト早ヤ已ニ四十餘日今ヤ伏見桃山ニ斂葬セムトシ轜車ヲ送リテ此ニ來レリ顧フニ曩ニ皇考ノ病革ルヤ上下憂懼シテ天地ニ祈ルアリ茲ニ其葬儀ヲ行フヤ朝野悲傷シテ已マス是皆國民忠忱ノ發露スル所ニシテ即チ　皇考德澤ノ感孚スル所ナリ此ヲ思ヒ彼ヲ念ヒ痛悼ノ情倍〻切ナリ

嗚呼哀イ哉

次に皇后、次に皇太后宮御名代、親王、親王妃、王、王妃御拜禮の後内閣總理大臣、宮内大臣拜禮、各誄を奏し次に大勳位、親任官、大臣待遇、親任待遇並に以上の夫人次に明治天皇御親戚たる華族總代

御違例中の拜診醫、大喪使事務官等拜禮、次に諸員起立一齊に拜禮、次に幣物御饌を撤し、此の間誄歌を奏す、次に幔門を閉づれば、天皇皇后皇太后御名代便殿に入御、親王、親王妃、王、王妃休所に入り給ひて、こゝに儀式全く果てぬれば、冷露湛々として衣を濕し、凉風颯々として身にしみけり。

## ▲靈柩發軔

靈柩は御式の後汽車に乘せ參らせ、さて幔門を開きて、大勳位、親任官、大臣待遇、親任待遇、並びに以上の夫人、次に親王、親王妃、王、王妃等停車場に參進、次に天皇皇后皇太后宮御名代停車場に出御ましませば列車は靈柩を載せまつりて、曉の風に咽ぶ汽笛の音物淋しく、轟々として搖るぎ出でにけり、御名殘も今は是までと、兩陛下を始め奉りみな御袖をぞ濡し給ひける、停車場に參れる人々、又幄舍に集へる人々は起立の儘送り奉りけるが、空に知られぬ一雫にハンカチーフぬらせるも有りけり、かくて兩陛下は、皇太后宮御名代を始め供奉の諸員を引き具して宮城に還御あらせ給ひぬ。

## ▲桃山の御斂葬

翌十四日午後四時四十分、伏見博恭王、久邇宮邦彥王、梨本宮守正王、東伏見宮、東久邇宮稔彥王、北白川宮成久王、竹田宮恒久王、朝鮮李堈公の各殿下を始め諸員桃山新驛に到着し、供奉諸員の幄舍に入るに間もなく、轟々たる轢聲耳を劈いて五時十分と云ふ豫定、時刻を一分一秒も違はず、靈柩列車は桃山驛に着御ありぬ。

折しも秋雨の降りしきる中に、靈柩は葱華輦に移御せられ四百五十間の御陵道を昇らせ給ひ御陵前廣場の御入口に達し給へるは十四日午後七時三十分なりき、此の間實に一時間を要したるが、廣場には電燈篝火の光り雲に映じて、肅たる秋夜の氣迫り、靜嚴を加へて、淨域寂靜、聲せず衣冠を正さしめ、先づ供物を奉持せる鈍色布衫の仕人は祭場殿の御入口前

に鼓、鉦、黄旛、白旛、胡簶・弓、楯、桙、月像纛旛・日像纛〇、呉床、雨皮、御弓槭等の順序にて居並び、今まで靈輦を奉輿し居たる四十八名の八瀬童子は、長柄を肩より下し、前膊部を長柄の下にして水平に舁き奉り、千鳥の足取にて靜々と其中央を進む、道樂の音哀れに、哀の極みの喇叭一入悲し、祭場殿の御前廣場の橋を上りて、祭場殿迄は一路雨に濡れたる荒菰敷詰められ、萬に一つも足踏み辷らす等の事ありては恐れ多き極みなれば荒菰の中央に幅一寸五分平面に五分の刻みを入れし板を置かれ葱華輦御金具の鏘々たる響きのみ樂の音に交はりて聞えぬ。

斯くて靈輦を殿内大床子の上に移御し奉るや、左右各五人宛の八瀬童子は進みて第一に御屋根を外し第二に御帳及び御外枠を取除き、第三に長柄を去つて靈柩のみを殘し、夫れより傾斜鐵道の末端に安置されたる御轜車に移し參らせぬ、大床子奉安は七時三十五分、御轜車移御は正八時、御轜車の將に上らんとしたるは八時を過ぐる事十二分なりき、傾斜鐵道の合圖は固より無言にして、西部鐵道監理局青山工作課長之に當り、山上左右に据付けられたる二個のウインチは各六名の作業員に依りて輕く回轉せらるゝに連れ、二條の綱索は徐々と卷かれ御轜車は滑かに動き始んとす、雨は此時漸く繁く默々の人を閉すさへあるに、些の微き音だになくする〳〵と展られ、靈柩の眞白き御被覆が左右の黑き山松の影の間に劃され軈て其の眞白き色も漸く小さくなりて、遂に山上に達せられんとする刹那、停止の合圖に、青山工作課長の下したる手を見ては將に腸を斷つの心地せり、人々は手を雨に押當てしも滴は尙ほ露と零ぼれ出で雨ならぬ雨に濡れたりき。

### ▲御寶穴に入御す

靈柩の兩側に奉侍して登りたる大喪使事務官各一名ヤオラ身を這はせて山上に到れば、靈柩既に止りて在たり、此間僅に十五分、夫より更に手押

にて御須屋迄の平面軌道を進め、御寶壙に渡したる木材の上に奉安し參らせたるは實に八時卅分なりき、是等の御事に從ひ奉れる白丁は鈍色の雜色に白き襷を掛け、白布を以て口を掩ひ、一言にても發語を禁じられ居たるも、重き御柩を差揚ぐる時には、是非共掛聲のなくては叶はぬ事とて、唯だ「シッ」と警蹕の聲のみを許され居り、軈て御須屋の棟木に取付けられし滑車を通じて約ふげられたる鐵索を靈柩に結び奉り、ウインチにて約一尺許りも釣し參らせ、其暇に手早くも御台木を撤し、夫れより御靈柩は徐徐に御寶壙に入御せられぬ、御名代宮殿下を始め奉り、御衣冠御正裝の影十數、御須屋を取圍まれ、總ての視線は唯一條の御綱の上にのみ注がれたり、秒一秒御綱はスル〱と展べられ、九時十五分七秒と申すに御綱はハタと弓形に緩みぬ、今ぞ玉體は御石廓内に白き檜節無しの用材を以て製し奉りたる御内廓内に納まり給ひしよと、人々の涙は再び新に沸き出でなか〱に容易くは去り得べくも見えざりし。

### ▲御斂棺終る

石廓と靈柩との間は木炭を以て塞がれし上、御内廓に厚さ一尺の木蓋を爲し奉れば、左右より各四名の石工前記の如き姿にて立現はれ、御壙穴の左右に三枚宛積重ねありたる研面、鏡に似たる御蓋石、及び大喪使總裁宮殿下の御染筆に係る「伏見桃山陵」の五大文字を謹刻せる御陵誌等を順次南方より一塲宛覆ひ、其上に二間の木樋を掛けコンクリートを流込み、厚さ二尺となるや御陵廓を其上に置き、更に淨砂を篩り且つ石廓の四隅に埴を立て御陵鎭護の神となし、斯くて最後の御土均らしとはなりたり時に十五日午前七時、是より先傾斜鐵道を敷かれたる御道は白丁八十名中の一部分が、默々の裡に右に馳せ左に往き總ての物の悉く除かれたる上、一面に芝草を植付けたれば、云ふばかりなく神々しさを増しぬ。

### ▲靈前の御告文

御須屋の周圍に白羽二重の壁代を張り、既に用ひさせられし月像纛旛御弓櫃御鉾櫃等の供物を其内に並べ、総つて祭場殿の東西なる白木檜の春日燈籠に、御陵番長火燧石を以て靈燈を點じ奉るや、大喪使事務官は御須屋の扉を開き、拜觀者は山上大石塔傍の調饌所にて調じたる洗米、神酒、鮮鯛、野菜、鹽の五臺を奠す、此時祭場殿には御名代宮殿下以下各皇族右には萬里小路祭官副長以下隨ひ奉り更に左には大勳位總代東郷平八郎以下御陵に北面して居並び、御豫定より遲るゝこと二時間、即ち午前九時と云ふに、御名代閑院宮殿下御拜禮あり御告文を奏させ給ふ、告文は夙に夢寐溫容を謁るゝ能はず、四十餘日の間靈前に慟泣したりしが、今や遂に此伏見桃山の淨地に斂葬し奉るに至りぬとの御意味にて長にいと安らけく在さんことを祈り給ひたるものにして、一人の頭を得舉ぐるものあらざりき。次で皇后陛下御名代皇太后陛下御名代兩妃殿下の御代拜を始め奉り、各皇族殿下并に參列諸員の拜禮ありて順次退下、同十時御撤饌と相成りたり。嗟吁哀い哉、夜來の秋雨は霽れたるも在はせし御面影の御墓しく悲しきに、今日も尚ほ袂の濕り失せやらぬを如何にす可き、御陵道を辿れば蟲聞徒に唧々秋風空しく啾々たり。

## ▲倚廬殿渡御

天皇陛下にて二十一日午前九時宮中正殿鋪設倚廬殿に出御先帝陛下御欽念の式を行はせらる、其御次第は午前八時御殿の周圍に緑黑橡布、鈎素銅、紐鈍色麻苧の簾籠を懸け桃山なる山陵の方位に面し青竹を以て御帳臺を作り御幄(薄墨染平絹)を懸け其上に御疊(緣鈍色平絹)御茵(鏡白色平絹緣鈍色平絹)を鋪設し午前九時天皇陛下には錫紵御服を召させられ戶田式部長官渡邊宮内大臣の前行により出御桂侍從長供奉侍從劍璽を奉じて御後に候し陛下倚廬殿に入御御劍璽を案上に奉安し次で陛下親しく山陵の方に向はせられ御欽念遊ばされ畢つて御座所に還御あらせらる。

# 現代婦人の一大刺戟

## 乃木大將夫人の自刃に就て

### 無言の大教訓

棚橋絢子女史は語つて曰く私は乃木大將の奥さんにはついお目に懸りませんでしたが或方から大將の奥さんは飽迄大將の人格に同化されて非常に率直な賢婦人であると承り、是非御交際を願ひたいと思つて居た矢先でありましたから一層無量の感慨に打たれました議論もありませうが、然し忠誠無二なる大將の心底に至つては我人共に等しく敬服する處でありました。今回の擧に付ては敢て其の可否の議論を上下すべき性質のものではないと思ひます。奥さんにしても、先きに旅順の役に最愛の二子を失ひ今又御大葬に遭て大將の決心を見る上は何條おめ〳〵として生き長らふ可き、我れも又美事御伴參らせんと決心をされたものと察せられますが、其健氣の心掛けは實に日本婦人の精華で人の妻として誠に見上げた行ひであると信じます。單に士氣振作婦道矯正の上から見ても大將夫妻の自殺は日に輕薄に流れんとする今日の士女に向つて無限の教訓を與ふるものと思ひます。

### 良人に殉せる賢婦人

三輪田眞佐子女史は曰く、逝去なられた後になつてこんな事を申すも異なもので御座いますが私は乃木さんの夫人さんと日頃お親しく致した譯でもありませんが唯二度お目に懸つて親しく御話した事があります。大將部下の仙波中將は私の遠縁でもありますから、よく夫人さんの平生を伺つて居ります。此度の事夫人さんの御態度はお可愛らしいと思ひます。お子樣方も

亡い今日、お跡をお慕ひなされたと言ふならば、もつと以前に御自殺でもなされたか、其迄でなくとも御病氣にでもおなりなさいましたらうが、彼の當時さへ實に泰然として居られて、私がお氣の毒と申上ましたら、夫の不調法から多くの人の子を失つて親々の悲歎を察しては何とも氣の毒で顏も世間に向けられません。二子が死んだのが切めてもの申譯で、私は小くなつて成可く世間の人に顏向け致ませんよ。涙一滴溢されない健氣さは大將のお心と同じ事で御座います。

で今日御良人と御一緒に逝かれた事は、死までも夫に仕へる從順な優しい妻の振舞で一ッとして非難攻撃致す點は御座いません。將軍にせよ夫人にせよ若し此を眞似る人があるとするならば實に立派な者ですが、逆もよくする人は御座いません。

## 美しい婦人の最期

矢島楫子女史は曰く、美しい事は實に忠君愛國の花です。けれど文明の今日決して奬勵する事は出來ません。唯だ乃木さんの態度は一點非難する所がありません。先帝陛下に仕へて殊功を樹て、軍職にあつて部下を愛し勵まし、果は學習院の多數の子弟を預かつて寢食を共にして躬ら武士の模範となり、武士的教育を後進に施された將軍の一生涯は盡くして居られるでせう。大將自身も或は先帝に仕へて其業を終つたと思はれるかも知れません。先帝陛下に別れ奉るの哀しい餘り、已に先帝の爲に身も心も捧げた以上、今日の事あるは當然の事で、何とも外に術はなかつたでせう。

將軍が假りに生存せられたとして、此上にすべき事は何でせうか、忠君の精神發露は、殊遇を受けたる陛下にお供するより外はない、無論軍事に教育に、あれ程の偉傑は今の生ぬるい世の中には居て頂き度いけれど、大なる忠君の心を死に依つて表はして、後進者を勵ました實際の模範は、將軍以外に誰にも出來ますまい。夫人に就いても、私は美くしい婦人の最期だと思ひます。君に仕へる夫の誠忠に感化された夫人としては、共に逝くのは當然の事、畢竟將軍とは一身であ

つて、餘念なくお夫妻の信賴して居らしつた有樣が、想像されます。迚も〳〵此心事が西洋人には解りません。

## 質素にして堅實なりし人

與倉大佐母堂は曰く靜子さんは私と同郷でムいますが二十七八年戰役の時迄は碌々顏も合せませなんだ。所が三十七年に谷將軍夫人の主唱で、報國婦人會が出來て、私も入り靜子さんも入會せられたので、夫以來非常に懇意になりましたが、三十七年に長男が南山で戰死された時には、三十日の喪に服して出て來られなかつた。併し別に悲しさうな風も更に見せられず。次で二男が又旅順で戰死された時も、亦三十日間は遠慮して會へは出ては來られなかつたが、喪中が濟んで出て來られた時には他の人々も何とも言へず、氣の毒な思をして居ますと、夫人は此時も更に悲し相な樣子も見せず、良人が多くの部下を殺しますので、皆樣に申譯がないと思つて居ましたが、是れで漸く少しの申譯が出來ましたと言はれたので、是を聞いた人は皆々思はず泣きました。それに將軍は出征に先達つて此度は三人揃つて戰地へ行くのだから一人位戰死しても葬式はするな、三人揃つて死んだ時一時に棺を出せと言遺して行つたから葬式は致しませんと言はれました。其後相續人の話をする人もありましたが、夫人は只後繼は要りませんとのみ言つて、何事か固く決心して居られたらしうムいましたが、今思へば其時から已に今回の樣な決心をして居られたと思はれます。夫人も將軍に似て眞に面白い好い人でありました。又將軍と同じく質素な人で家に居られる時などは、衣類も光る衣類などは決して着られませず。將軍も質素な人で、居間の飾りさへもせられない位でした。夫人は二子を失つてからは、時々那須野の別莊へ行つて野菜物などを栽培して樂しんで居られました。

## 貞烈なる婦人の龜鑑

乃木夫人の生家の湯池氏は私と故郷を同うし、父君

は湯池落笹と云ひ漢法醫で漢學にも上達し至つて嚴格淸廉なる君子人であつたので子女の敎育にも大いに心を用ひ、只だ、學藝を進めるのみでなく、人格の養成に深く注意し、殊に靜子は母の庭訓により武士の妻たるやう心術の鍛錬に心を注いで育てられた。されば靜子は飾り氣のない極めて質素寡言、妻として全く完全の人であつた。大將に嫁て後は克く夫に貞操を盡し大將の妻に與た感化は天稟の美質に愈ゝ光りを加へて、夫人は世にも稀なる賢婦人となつた。多分日露戰役の際であつたと思ふ。芝の琴平神社に日參して我軍の勝利を祈る婦人があつたが、其服裝の粗末なるにも似合ぬ熱心に、神官も定めて軍人の妻であらうと密に探て見と、果然乃木將軍の夫人と判つて、さもこそと感じ合たことがある。居常些の驕奢の風もないが、一面亦慈善博愛の情厚く、大將をして內顧の患なからしめたばかりでなく、大將の部下に對しては常に多大の同情を以て世話し懇切を盡すので部下の人々は大將に敬服するの外、夫人の德にも一方ならず感激して居た。大將をして今日あらしめたは夫人の功も與つて力多しと云ふべきである。

## 赤心罩めし守札

日露戰爭當時一般軍人の如くお守札を懷中されたしとは、靜子夫人の將軍に願へる所なりき、然も將軍は素と斯かる事を好む可くもあらず、容易に夫人の乞を容れざりき、兎角して戰雲終りし後三年、將軍の戎衣は御出入なる芝露月町の洋服店に修理の爲め送られたり、鋏は入れられぬ洋袴の縫目より現はれしは數個の觀世縒なりき、這は言ふ迄もなく將軍の身を思ふ餘り夫人の密かに縫込みし守札なりけり。日露戰爭後宇都宮地方大演習の折多量の燒芋を露營地に運び來りて軍兵を犒ふ婦人ありき。名を問ふも微笑するのみ、後に乃木大將夫人と知れ、美談として膾炙せり、愛國婦人會の總會東北の某地に開かれし際乃木東郷兩夫人に臨席を乞ふも容易に應せず、「此御方が乃木夫人、此御方が東郷夫人……」と紹介の際、單に頭を下げて下されば澤山なりとの事に漸く納得せりと。

# 警世嘲俗 一人一話(三)

屈曲凹凸の多い活世界に處し、荒い浪風を凌いで來た人には人一倍の自信力がある。一人一話は此の自信力が言はせる警世嘲俗の語錄である。

世間はひろい。人間の爲てゐることは多樣である。どこに何んな人間がゐて、何んなことを爲てゐるかその人たちは日頃何んな考へを有つてゐるか。まあそれを聽取つて見る事にした。ねがはくば活社會に動いてゐる活人の聲を聽かれよ。

**本號記載項目**



## 大學生と結婚政略

法科大學々生　木村開作

帝國大學は言ふまでもない我國に於ける最高學府である。その學生は如何なる希望を有つてゐるか。法科大學で古顏の木村開作君は、敷島をふかしながら髭をひねり〳〵語る。

や、だいぶ涼しくなりましたナ。そろ〳〵好い季候になつて來ます。しかし僕等の方は、まだ追試驗が殘つてるんで遣りきれませんよ。

これが往時なら、千頭清臣さんのやうに、卒業證書を引裂ぶいて男を揚げて見せるんですが、今ぢや到底駄目ですナ。總ての社會が組織的に出來てるし、我れ我れが社會に打つて出るにしても、みんな成績に依つて左右されるんですからナ。

たとへば七十點以下の得點ぢや、いくら內務省や大藏省に這入りたいと云つたつて、とても駄目ですよ。我れ〳〵の仲間では、得點の具合を斯ういふ風に分け

てるんです。(と鉛筆を出して精しく説明する)
地球には熱帶、溫帶、寒帶の三帶にわかれてるんですが、法科の成績は五帶にわけられてるんです。平均九十點以上が飛切優等帶、八十點から九十點までが優等帶、七十五點から八十點までが上等帶、六十五點から七十五點までが中等帶、六十點から六十五點までが下等帶一名無職帶といふんです。え、無職帶といふんですか? 折角卒業したつて、成績が良くない爲めに何處にも勤め口がなく、ブラ〳〵遊んでるものをいふんですな。

くはしくお話すれば、飛切優等帶には二種あります。才子肌のものは內務省とか大藏省とかに這入つて、純粹の官吏を希望するんですが、學者肌のものは大抵大學に留つて、講師なり助教授なりに成るんです。優等帶のものはヤッパリ大抵大藏省や內務省に這入りますどうかすると辯護士になるものもありますが、そんなのはマア例外ですナ。それから上等帶のものは鐵道院、遞信省、農商務省、銀行、會社などに這入りますが、好きな人は裁判官を好むものもあります。それから中等帶のものは大抵裁判官か辯護士志望が多いんです。稀れには主計のやうなものになる人もありますが、それは極めて例外ですナ。それから下等帶一名無職帶になると、無俸の司法官試補——これは當分俸給なしで勤めるんです。さもなければ、急には勤め口が見つからないんで、マア其間に高等文官の試驗準備でもしてゐやうかといふ手合が多いんですが、上等帶以上のもので無ければ、なか〳〵文官試驗の合格は覺束ないんです。實際のところ、この無職帶になると、名ばかり法學士でも頗るみじめなもんです。よく世間で、法學士はピンからキリまであるつていふでせう。上は國務大臣から下はお巡査さん、汽車の切符切に至るまであるつていひますが、マアそれは極端な話としても、それに近いものは決して少くはありませんよ。

アノ外交官ですか……? あれは趣味が無くつては迚も能きないんで、ツマリ學校の成績とは全く無關係です。外國語がよく能きて頓才がありさへすれば、隨分

合格しない限りはありません。

それから先輩の話によると、むかしの大學生は隨分氣概があつたさうですが、今の大學生は頗る消極的、受動的です。しかし一面から云へば、世の中が進步するに從つて、空理空想が容れられずに、なんでも眞面目なこと、着實なことでなければ通らなくなつなつたんです。

マア譬へていへば、昔の學生は理想的人物を擧げるにも、第一がナポレオン、第二がビスマークと云つた風でしたでせう。ところが今の學生は、理想的人物を倘つと手近い所に置いてゐます。たとへば學者にならうといふものは富井博士、司法官にならうといふものは平沼次官、辯護士にならうといふものは鵜澤聰明さん、鐵道院に這入らうといふものは小林源藏さん。ここいらが恰度いゝ理想的人物になつてゐます。外務省に這入つて故の小村侯爵や、內務省に這入つて平田子爵や、遞信省に這入つて後藤男爵のやうになりたがる者などは、我れ〳〵常識を崇ぶものゝ眼から見て、やつ非常識として排斥してゐます。

しかし斯ういふ風に、すべてが實際的になり打算的になつた結果は、どうしても人物が小さくなつてしまひます。一つ海外でも飛出して見やうかといふものは一人もなく、マア高等文官の試驗に合格して年俸千圓にありつけば、それで滿足する手合が多くなつたことは事實です。

ですから所謂る飛切優等輩の人物にも、隨分軟派のものが出るんです。軟派つていふんですか？ツマリ成績を良くして卒業して置けば、權門の令孃と婚姻も能きれば、それを手蔓に出世することも能きると、そんな考へから一生懸命になつて勉強するものをいふんです。

先日『萬朝報』にも出てゐたでせう。加藤高明さんのお婿さんになるつていふ人が、X光線で照して見たら肋骨が一枚足らなかつたといふんで、それで破約になつたぢやありませんか。軟派のものは、どうかすると斯んな恥辱を蒙むることが度々ありますよ。昨年優等

で卒業して恩賜の時計を頂いた津島君なども、その一例です。村井吉兵衛さんのお婿さんになる筈で、結納まで取替して置きながら、イザといふ間際に先方から斷られたんです。それも正々堂々の破約でなくつて、ホンの下男が來て、都合上すこし延して呉れと云はれたんですから、津島君だつて大に憤慨するのも無理はありませんよ。

兎に角成績だけは何うしても良くして置かないと、立身するにも、結婚するにも大損失です。御覽なさい。この風潮が年々猛激になつて來て、近ごろでは、成績發表の日といふと、お孃樣らしいスタイルの女が、大勢それを見に來るぢやありませんか。陸上運動會やボートレースは容貌風采を物色する好機會ですし、成績發表の掲示は將來の運命を示すバロメートルですから令孃だつてなか／＼疎かに見のがしはしませんからな、ハヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽ……………。

# 下町の女

## 請負師の妻　小原せい

深川龜住町におせいさんのお宅を訪ふ。おせいさんは元は公園一直の女中、今は建築請負師の世話女房。四十恰好の身長のスラリとし、物ごし言葉づかひがキビ／＼してゐる、眉を落して洗ひ髮の横櫛もなんとなく意氣地ものに見える。

人間は苦勞しなくつちや駄目ですよ。有りあまるお金で育てられちやア野暮つたくばつかしなつて、垢拔がしませんやね。いくら利いた風なことを云つたつて、爲ることがはんまちやア仕樣がありませんからね。その癖さういふ人にかぎつて、乾度自惚が强いから御覽なさい。度胸もない癖に鼻つぱしばかし强くつて、ラムネの栓みたいにポン／＼云ふんからして、第一癪に障りまさあ。

ですから借金の催促受けたり、質屋の暖簾くゞつたりしたもんでなくつちやア、ホントにお話になりませ

んや。おまんまは何時でもお櫃の中にあるもの、お錢は何時でも財布の中にあるものと思ふやうぢやア、甘味も酸つぱみも有りやアしまんやね。

イッカ新聞に何とか云つた女が出てゐたでしよ。お女郎買したぢやありませんか。昔つから女のお女郎買なんかチットも珍らしかアないのに、それが大層面白いんですとさ。可笑しいぢやありませんか。

良人の甥に慶應に通つてるのがあるんですよ。それに聞いて見たら、その女つてえのは立派な家のお孃さんなんで、一度男と心中しかゝつたことがあるんですとさ。ところが其のち男に振られたんで妙にひねつくれて、坊さんの學問するやうになつたんですとさ。けれど諦められぬが女の未練でせう。それからつと云ふものは氣が邊挺りんになつちまつて、男の千人斬をお願に掛けたんですとさ。よくある話でさア、千人斬は昔つから色きちがひのするこつてね……。

ところが夫れが、當節ぢやア珍しいつてえんで、學問のある人がワイ〳〵騷ぎたてるんですとさ。女の癖に男の向うを張つて、なんでもかんでも負けるもんかつてジヤ〳〵張り出て、ドシ〳〵お酒も飲めばお女郎買もする……。新聞屋さんなんかゞ訪ねて行くと、眼を白黑するほど嚇しつけるてえんで、大評判なんですよ。おまけにその組合つてえのが出來てゐて、二三十人もで、お互ひに血判して、連合して盛んに男を荒しまはつてるさうなんですとさ。驚くぢやアありませんか。あなた御存じでせう。ソレ新聞に四五日も出てゐたぢやありませんか。

私たちが子供の時分に敎へられたのには、女は下手に出るのが怜悧もんで、ドンナに男から云はれたつて口ごたへも仕ずに下向いてゝ、ソッと涙を拭くやうでなくつちやア、他さまの嬰物にはならなかつたんです。それが當節ぢやア、男が一言いやア二言いひかへし、男が藝者買をすりやア、此方も負けずに役者ぐるひするやうでなくつちや、えらかアないんですつてね。いつかも確かあなたの方の雜誌に出てゐたぢやアありませんか。何とかつてえ女の方は、旦那さんの前で餘所

の男の膝を突つくのが面白いなんて、ホントに呆れかへるぢやアありませんか。そしてお互ひに嫌になつたら夫婦會社を解散するつて、はじめつから約束がチャンと決めてあるなんて、マルで人を馬鹿した話ぢやアありませんか。おまけにね、甥に聞いて見ると、その女も大層えらいんださうですつて。まつたく呆れつちまひますよ。

いつか他さまに聞きましたらね、アメリカぢやア男よりか女の方が餘つぽどえらいんで、夫婦ものが汽車か何かに乘込むてえと、おかみさんの方が御亭主より先に腰かけるんですつて。すると御亭主はワザと日のあたる窓の方に倚つかゝつて、女房の身體に日があたらないやうにしてやるてえぢや有りませんか。おまけに女房が兩足投げだして新聞でも讀みはじめると、御亭主はおかみさんの足を大切に自分の膝に乘せるんですつて、ホントに馬鹿々々しい。

ですからね、そんなことを眞似する今のハイカラ女學生が、やたらに威張りたがるのも無理はありませんですよ。私たちの若い時分などは、一にも二にも自分の亭主を崇めたてまつゝて深いものに爲なくつちやア第一他から馬鹿にされましたからね。今どきの人はソンナ事には些ともお構ひなしに、始終張りあつてばかしゐて、マルで敵味方の寄合みたいぢやありませんか。私などは本當にマッピラですね。

やつぱり私の好きなのは、平常は無口で溫順しくつて、イザとなりやア癇癪玉の破裂したやうに、女房の頭を拳骨で打擲るやうなんでなくつちやア、身體がキビ〳〵しませんやね。自分の前で女房が巫山戲てるのを見て、指を啣へて引込むやうなのはシチリケツパイ、此方からサッサと追出て行きますよ。

## 米代の拂へぬ花客樣

白米商　河野喜三

喜三さんは越後の人である。わかい時郷里を飛びだし、十幾年かの間米搗をして成功した。今では

小石川方面で「米喜」といへば、その仲間で皆な知つてゐる。店頭の動力搗が殊に活動の目標になつてゐるのも面白い。

俺なんどは駄目ですよ。もう貸すまいと思ひながら、ツイお花客さまだと思ふと、やつぱり左樣は行かずに貸だふれになつて仕舞つて、これまで失敗したことがたび〱ありますよ。

え、どんな家が貸だふれになるんかと仰有るんですか……。さうですねえ、そりや種々ありますから一概には云へませんや。だけれど一番性のわるいのが安月給取ですよ。何といつたつて、お前さん考へて御覽なさい。二十圓か其處ら取つたつて、夫婦に子供の四五人もあつて御覽なさい。どうしたつて遣りきれるもんですか。俺が貸賣して危ないと思ふのは、斯ういふのが第一ですよ。

と云つて、最初つから貴方さまのお勤先は何處で月給は幾干取つてゐらつしやると聞くわけにも行かず、そこが却々難しいところなんですよ。

まあ小僧たちがお米の嚢を引背負つて、お花客さまの許へ行く途中か何かで、あたらしい表札を見つけると爲ませう。早速あがつてお出入を願ひますあね。最初の中は先樣でも現金でお拂ひになるんですが、其中に乾度御新造から、「通帳にしてお呉れ、月末に拂ふから。」つてお言葉が下るんです。さあ大變とは腹の中で思つたつて、まさかに斷るわけにも行きませんから、「へイ畏りました」と通帳にしたら最後、どうしても滯りがちになりますあね。先達のお米の高かつた時なんぞは、それで潰れた米屋が百何十軒とあつたぢやありませんか。

けれど考へて見りやあ、おなじ倒れるにも、貸して倒れるのと、借りて倒れるのとは、大變な違ひですよ。貸して倒れるものは何時か浮ばれますが、借りて倒れる身になつて御覽なさい。何年前からの借越が押せ押せになつて、二進も三進も行くもんぢやありません。ツイ先日もこんなのがありましたよ。內務省に出てゐる勤人なんですが、多分傭なんでせう、月給は二十四

五圓しか取つてゐない癖に、子供衆が四人もあるんぢやありませんか。ですからそのミジメさ加減たらお話にも何にもなりませんや。旦那は毎日割引電車にも乗れず巣鴨くんだりから丸の内までテク〳〵歩きでさあ。おまけにお菜は菜食主義、八百屋は借倒主義なんですから驚くぢやありませんか。けれど子供衆が鹽鮭の他は烏賊さへ見て知らないと云ふんぢやあ、俺は倒されながらもつく〴〵お氣の毒な家だと思ひましたよ。その御夫婦といふのは兩人とも三十四五で、馬鹿に痩我慢がつよく、夜逃げするまで出入のものに威張散してゐましたよ。

そしていよ〳〵破落した後で、差配さんが大勢出入のものを集めて貸倒れになつた分を書だして見ると、それが唯つた五十圓にも足りないのぢやありませんか。おまちなさい、たしか其處らに書附がありましたつけ。(と押入から出して來て見せる)

家賃　二十七圓(六個月分滯る)
米屋へ　九　圓(一ヶ月分)
八百屋へ　五圓九十錢(一ヶ月半分)
酒屋へ　一圓七十三錢(味噌、醬油、薪炭類)
牛乳屋へ　一圓八十錢(一ヶ月半分、小兒に乳が足らぬ故)
荒物屋へ　一圓七十六錢(筆墨紙、子供學校用品石鹼類)
菓子屋へ　一圓六十錢(子供の分と借金の言譯の手土產)
氷屋へ　三十六錢(氷水十二杯、お客の分)
清潔舍へ　九錢(三ヶ月分滯る)
　計四十九圓二十四錢也

御覧なさい。月三錢の厠掃除や氷水まで滯らせるやうぢや、俺の分なんか取れつこはありませんや。

それから相場師や鑛山師なんか、えらさうなラッパを吹いたつて油斷がなりませんや。こんな人たちは定つた收入がなくつて食つて行くのですから、まづ危い世渡りとしか思はれませんね。こんな人たちに引掛つちや、鬼のやうな高利貸だつて一杯喰はされますから

ね。まして俺等のお拂ひなんどは其時の風次第で、どうかすると「この不景氣に米代が拂へるもんか。」つて劍突くはせることがあるんでさあ。其時や「一體どなたのお蔭で命をつないでるんです。」つて言ひかへして遣りたくなるぢやありませんか。

それから書生上りの若い夫婦者も駄目ですね。まだ働くだけの腕もない癖に世帶を持つなんて、あんまり推が强すぎまさあ。开んなのに限つてハイカラ道具や活動寫眞にばかり屈託して、米代は些とも拂ひませんからね。此方から八釜しく責めたてれば「それでは一時證文にして呉れ。」と出るんでせう。もしか證文にでも爲やうもんなら、現金を拂つたやうな顏して平氣でゐるから憎らしいぢやありませんか。近ごろ斯んなのが目白臺や雜司ケ谷あたりに澤山殖えて、困つて仕舞ひますよ。

# 占易と氣合

占易家　赤法師

霞を食ひ雲に乘る仙人志願の赤法師事、高橋桂は易道の達人である。殊に九星方位に就ては其奥義に通じ、評判は的ること日本一である。住居は赤坂溜池。

わたくしがお客さまのことを亡者呼はりを致しては濟みませんが、何商賣に依らず内幕があつて、都合の好い符牒をつけるんですから、そこは偏へに御海恕を願つて……。

私は斯うやつて長い間易道を司つて居りますが、その間に世の中もいろ〳〵變つてまゐれば、私たちの商賣も餘程進歩いたしました。むかし……と云つたつてツイ二三十年前までは、漢學書生の喰詰者が往來を夜る「吉凶禍福、人相家相……。」と呼びあるく位でしたが、今の人達はなか〳〵そんな事では承知しません。もつとズッと大きく構へて、人生解すべからず、

解するものは神なり、解するものは我れなりと云ふやうに、まづその迷ふ人達を呑んでかゝらなくては不可ないのです。こゝがツマリ一寸の呼吸で、人を制するのも、人に制せられるのも、ホンの些かの氣合なんであります。

一昨年の暮から昨年の春にかけて、一時千里眼が非常に流行つたでありませう。その流行つたといふのが、ツマリ世の中の人たちが氣合負して大騒ぎしたからではありませんか。それと反對に一寸した念射の失策から、さも詐欺師か何かのやうに言ひはやされ出したら、間もなく御船千鶴子も長尾幾子も死んで仕舞つたではありませんか。これなぞも矢張り氣合負したので、自から滅びてしまつたのであります。

ですから私なぞは、自分自身えらいと思ふやうに努めるのと同時に、また成るたけ世間の人からも偉く思はれるやうに努めて居ります。私が若い時には、緋の法衣を着て大道を練つて歩いたことがありました。それでも未だ人が驚かないので、今度は天狗さまの風をして往來に出ました。其時はイクラなんだつて、皆な喫驚して、ワイ／＼騒ぎました。それといふのも、異體な風を爲なくては、世間を驚かすことが能きませんですから。近ごろ新聞を見ますのに、世の中に流行兒となるものは、みんな此手管を用ゐてゐるやうではありませんか。

これは先づ氣を呑むと呑まれるとの話ですが、全體易道といふものは、人の迷ひを判斷するよりも、成るたけ短氣を起さずに分別が肝心であることを教へるものであります。それといふのも、世間に起る大概の悲劇は、すこし頭を靜めて分別すれば、無事で濟むことが多いのであります。ツイ先日なども、女學生の方が來て、「申上げ難うござんすが、私は或方と深く言ひかはしたのですが、其方が近ごろサッパリ姿をお見せになりません。それにお恥しうござんすが……」と云ひかけて、じッと帶の下を見るのではありませんか。私は直ぐに判つたので、それからその女學生の年やら何かを聽いて卦を立てました。そして徐ろに、「あなたは

膽力が据はつてゐるやうで、割合に氣が小さすぎる、平常は物ごとの理窟がハッキリわかつてるのに、イザとなると兎角分別が無くなる癖がある、そして後になつて、アンナくだらない事に何うして心配したんだらうと後悔することがあるでせう。まあ心を鎭めて少し辛抱してゐて御覽なさい。其方は元來あなたを嫌つてゐるんでないから、遲くも一箇月ぐらゐの中に乾度見えます。其時よく心をしづめて相談すれば、今の心配が却つて幸福の基になります。』と、斯ういつて遣つたのです。すると其女學生は急に安心したやうにホッと息して歸つてゆくではありませんか。そして一週間ばかり經つと、其女學生が男の學生と一緒に遣つて來て、丁寧にお禮を云つて歸りました。

これは唯だその一例であります。人間は兎角まよひ易いものですから、これを救ふ爲めに宗教家なり、我れ〳〵が盡さねばならぬのであります。易道のことは勿論心の持ち方に依つて的ないこともありませんが、碎いて申せば、ヤハリ的るも八卦、的らぬも八卦で、的るとばかり限つた譯ではありませぬ。併し此方の態度が如何にも眞面目で、いかにも親切にして遣りますと、觀て貰ひに來たものが地方の言ふことを信じますから、的らない八卦も自から的るやうになるのであります。

それを、クダラない易者になると、ベラ〳〵と饒舌つてばかりゐて、妙にクスグルやうなことを云つたり、お世辭をつかつたりして、そして先方の顏色を覦つて、お金錢ばかり取りたがるのですから、少しも迷ふものの慰安にならず、害も害、大害になるのであります。かういふ者こそ亡者の着物を剝ぎとる生死河の婆さんよりも非道いのであります。

すべて何商賣にも依らずですが、殊に我れ〳〵は相手に接する時、ウンと力を臍下丹田に込めて、そして相手の面と瞳とを視るのが肝心であります。左様しなければ、氣合負してなりませぬ。先年、日比谷に居りました時であります。夕方知人と酒を飲んでゐますと、一人の女が來て、玄關先からニャ〳〵笑ひながら、「先

生、お酌でもいたしませうか。」といふではありませんか。わたくしは不意を打たれて何とも返事が能きず、大まごつきにまごついて、それから其女の人相から手相から皆な觀てやつたのですが、少しも的らなかつたさうです。其女は誰れだか。おわかりですか。久しい間浮名を流した本莊幽蘭女史です。この時ばかり凹たれたことはありませぬ。すべて此の世のことは氣合といふことが第一であります。

## 養生法三則

私は十九の歳から今日に至る迄、前後五十年、横濱で奮鬪して居るが、身體が頗る頑健で大した病氣に罹つた事がない。其と云ふのは平生の體の養生に注意して居るからである。

其第一は樂觀的精神である。諺にも病氣は氣から起ると云ふ通り、浮世の習ひで心配の生ずることも隨分あるものだ。併し私は君等の思ふ樣にならぬ事も終にはやがて我が爲めになることであると樂觀し、善い方へ考へなほして氣に留めない樣にする。

其第二は節食節酒と禁煙とである。酒は極く少量を用ひたが、喫煙は若い時からしなかつた。三度の食事は一回に麥飯を茶椀に二杯喰べるのが普通で、餘程空腹の時でなくては三杯と食したとはない。第三は鼻の掃除である。是れは少し風變りの樣だが、鼻は萬病の本故私は之を大切にするのだ。毎朝洗面後缺かさず幾回も鼻から水を吸ひ口に出す。初めは一寸心持が惡い。それからクッシャミが出るが、慣れて來ると却て行らぬ方が氣持が惡い。又入浴後には乾度冷水摩擦を行る。以上四十年以來一貫して嚴守して居るが隨分業務も多忙で、身心を勞するとは尋常人以上なる私も、頓と風邪も引かず、左して大患にも罹らず、此通り身體が頑健である。(大谷嘉兵衛氏談)

# 童貞人名錄

◎天は高く、雲は美しい。『理想』を戀ふる雲雀は高く、高く、憧憬の曲を奏しつゝ傍目もふらず飛び揚つて行く。今や彼女は、氣力の充ち滿ちた胸を押張り、自由の美しい翼を羽叩いて、金色の光輝く聖の宮に到らうと志してゐるのだ。譬へば、此の雲雀の心は若い女性の思である。

◎若い女性の眼は常に天上の美しい雲に憧れ、理想の影を趁うてゐる。おもむろに螺旋の首を擡げた淡い戀は、人生の『美』を捉へやうと焦燥るのみで、背景になつてゐる實社會などは念頭に無いのである。德川時代の女性の胸に萌しもしなかつた『學問』の芽は、女子教育の温室に置かれてから、摩天の勢を以て發達して來た。そこで、總ての女性は、其の功果の如何に拘はらず、『學問』の花に醉ひ、飽く迄も其の香を吸ふことを、人生の唯一の希望としてゐる。

◎お嫁にゆく人には、處女に別れる淡い哀愁がある。遠からず母になるのだと云ふ、胸乳をこそぐられる樣な瘙痒い、一種の微笑が浮んで來る。夫れが『新しい女』であつて見れば、敵の家に入るのだと、漫ろに屈辱を感じて、唯もう譯もなく泣きたくなるさうだ。如何に戀し合つた仲でも、結婚には嬉しいやうな、悲しいやうな感じが伴ふとすれば、見ず知らずの人に嫁ぐ處女には、宛ら胡地に送らるゝ照君の恐怖があるだらう。

◎早晩來るべき結婚の問題を控へ乍ら、結婚なぞと云ふ事を忘れて、『學問』の花に醉ふてる間は、處女としての大なる誇を持つてゐる。獨身の自由に活きてゐる。新しい教育を受けた若い女性は、何人でも一たびは獨身でありたいと思ふ。永久に心の若さを失ひたく無いと思ふ。其處に旺んな虚榮心があり、生命があるのである。

◎一種の獨身者は、現在名の知られた婦人に澤山ある。古來女性にして事業を成すものは、若い時に良人に別れた者と、相場が定つて居た。夫れは自然的に努力すると云ふ氣にもなり、人生と云ふものも味つて居るから、箍の締め所が違ふのである。が、まだ體のきまらない獨身者は、日向葵のやうに戀の日を仰ぐ情にもなり、餘りの淋しさに堪へ兼れて、『一度は嫁に行つてみたい』と衷心から叫んだりするので、みつしりした事業は迚も出來ない。

◎上野石子は數學家上野清の愛嬢で、二十にもならぬうちに文部省の數學の檢定試驗に及第した秀才であつた。

家には繼母があり、弟妹が多いので、家政を扶ける爲めに、獨身で暮さうと決心した小說の女主人公のやうな身の上であつた。而して、左手では一人の青年に學資を惠んで居た。夫れが幸か不幸か默契の成立する事となつて、獨身主義を棄てればならぬ始末となつた。青年は石子より二つか三つの年下で、まだ無名の新聞記者である

◎ピヤニストの天野愛子は、姉の前半生の黑い頁に鑑みる所があつてか、固く獨身主義を守つて居た。「藝術家は藝術が生命である、人格の如き暫く問はんでも可い」抔云ふ者があれば、色を作して『藝術家人格論』を辯ずるのであつた。斯樣な眞面目な女性であつたが、堅田醫學博士と何時しか戀に落ちて、其の後妻となり、音樂までも棄てゝ了つたが、奇しき運命に弄ばれて破鏡の嘆を見るに至つた。

◎獨身主義を捨てゝ人妻になつたのを、必しも罪惡視するのではない。又以上の三人を誘惑に勝てなかつた例に擧げて非難するのでは無いが、あくりの洋行は多少世間の非難を避ける意味があり、愛子の離緣は矢張り姉のやうに黑い頁を作つたのだとすれば、薄志弱行の獨身主義は極めて危いものである。

◎義務敎育を終へた位の者か、夫れから一二年實科敎育を受けた程度の者が、何れの方面にも向くので、早く緣付くけれども、高女卒業となると、年齡は恰度好いが良人の選擇に眼が掛かる。夫れ以上の敎育を受けるか、或は社會上に多少地步を占めた者になると、理想の良人が見當らないので、緣が遠い、齡は傾く。獨身の『あきらめ』を得る事が出來ない者は、尙好い緣談もあらばと待つてゐる。

◎疑問の獨身者！　是れが世間に甚だ多い。精力主義の嘉悅孝子などは、最う獨身の『あきらめ』を得てゐる事と思つてゐたが、四十前後になつて、急にお嫁に行かうと云ひ出し、夫れを龜井まき子に相談した。まき子は獨身を樂んでゐる女なので、ちよつと怪訝な顏をしたが、孝子の意中を酌み取つて慰藉し、切に熱讀な思ひ止まうした。精力を以て聞えてゐる孝子には、有りさうに思はれない話である。

◎三十前後で獨身でゐる女性の、物に觸れて動搖するのは無理もない。彼等の胸に描いてゐる家庭の樂みと、何かしら物足らぬ淋しさとが、相對してゐる冷たい壁に沁み出る。自身で家を持つて生活してゐる者はまだ可いが兄弟の家に寄寓してゐる者は、後めたい感じもする夫れに辛い、戀しいとでも思ふ事があれば男性に賴らうとす

る氣にもなる。青鞜社同人のやうに、『强き者よ汝は女なり』抔と、ビールを呷つて氣焔を吐いてゐるのは凄まじく惨たるものである。

◎青鞜社の一員ではあるが、木内錠子は一人娘なので、お父さんは頻りに好い婿がれを探してゐると聞いた『新しい女』の讃美する柔かな氣分の中に彳んで、獨身主義を終始する女性ではあるまい。中野初子は父の家に居ず某未亡人の許に同居して、筆を執つてゐる。自粉自活して、結婚の屈辱を受けないだけの覺悟はして居るといふ事だ。平塚明子は建部文學博士との結婚を傳へられたが全然虚報であつた。

◎女子大學の女教師には、獨身者が多い。家政科の出身で、日本料理通の縦木幸子も其の一人である。最う三十から角が出たらうと思ふが、派手な扮装をして、澄まして被入る。佛人鐵蕗が米國から歸朝する迄の獨身生活だとも云ふが、或はオールドミッスの孤棲を守つて、料理界の革新を圖る意氣組とも云ふ。獨身主義者としては、旗幟が甚だ鮮明でない。

◎『獨身生活の苦闘』を告白した、畠千代子は一寸珍しい女だ。成女學校の出身であるが、天秤棒を擔いでも、母と妹と自身と三人生活をしようと決心した。最初は本郷追分で下宿屋を營んだが暑中休暇で沒落し、次で道玄坂の新開地に氷水屋を開いたが雨の多い年で失敗し、暫く筆耕生活を試みたが、思ふやうに收入もないので、汁粉屋を開き傍ら煙草の小賣をやつた。夫れも廢して雞卵の行商を始め、昨年の夏再び氷水屋を開き、後其の利益を以て文房具店と商賣換をした。斯うして彼女は生活のために、獨身で奮闘してゐる。此の根氣が永く續き、踰越に陷ちさへすれば、天晴女丈夫の傳へ入るべき人である。

◎縁は天より投げられた彩絲である。何人か捲くに至るかは、易占者と雖も解らぬ結ばるべくして結ばれぬ縁もあれば、破るべくして繋がるゝ縁もある。要するに、縁は運命とあきらめるより外はない。如何なる理由や事情のあつたにせよ、今日獨身生活をしてゐる女性は、皆縁に『運』が無かつたのだ。

◎縦令女性の弱い心になつて、縁不縁は運命だとあきらめても、『獨身生活が可厭である、どんな良人でも可いから良人と云ふものを持つて見たい。』斯う叫んで、熱烈に運命の開拓に從事すれば、良人の一人や二人は荒野の中から掘出せない事はあるまい。けれども、其の掘出した良人と同棲して、果して幸福の日を作る事が出來るか何

うかは疑問である。さる地方の富豪の娘が、相當の教育を受け乍ら、緣の無いのに懊惱煩悶して東京に出で、盲目滅法に掘出しは掘出したが、飛んでもない爛熟性の危險物であつたので、遂に名譽をも身命をも葬るの緣となつた。氣の毒な事である。之は掘出し物に、碌の無い一例に過ぎぬが、他にも澤山ある事と思ふ。

◎そこへ行くと、自身の腕で生活して行ける女は、別に緣が無いからと云つて、箱入娘のやうに煩悶はしない。髮結でも、歌舞音曲の師匠でも、居候猫が來れば自身で養つてやる位な元氣でゐる。氣前の好い女になると、結婚などは全く眼中に置いてない。固より獨身の自覺などは無い、唯せつせと働くと云ふ事に一種の人生觀を得て居り、又音曲の師匠であつて見れば、其の華やかな空氣の中に一種靈妙なる慰藉を持つて居るのである。

◎夫れが高等の教育を受けたハイカラになると、虛榮が強い、自矜が高い、女教師をやれば自活しても行けるが、チヨークの粉を呼吸するみじめな境遇には長くありたくない、自動車を疾驅して、滿都の塵を捲き起して見たいと云ふ成金も好ましくないが、貧乏華族も可厭であると云ふ調子、まるで結婚を遊山同樣に心得、家庭の女王となるよりも、先づ樂しく生活して見たいと云ふのだから、却却に良緣が迎へに來る筈がない。

◎現代の女性は、結婚玩弄物のやうに考へてゐる。男性は又結婚を世帶道具のやうに思つてゐる。其の不眞面な思想が兩者の間に鴻溝を劃して、容易に相融和しない者となつてゐる。新舊思想の衝突が九天直下して、兩性間の結婚觀念の相違となつて來た。そこで、現代式の女性が結婚に失望すると、「童貞」といふ一つの新しい島を發見したやうに叫ぶのである。

◎最初から現代の風に吹かれず、虛榮の花を飾さうと思はなかつた處女は、運命に從つて獨身のあきらめを得るも早いが、然うでない際のお孃さんは、生慾から解脫する事が容易でない。平松時厚子の令姪の周麗が當年三十七、彼女の法臘が二十二で、現代式の女性には迚も堪へられまいと思ふ眞の童貞生活を行つてゐる。身は華胄のお姫樣と生れて、華やかな瓦斯燈の下に美しい夢を貪る妙齡を、習俗と舊慣とに從つて、藪蚊の多い尼寺に入つた。

# おもかげ草紙

玉露女

空には雲雀、地には陽炎、蓮華、たんぽゝ、クローバー、錦彩どる自然の床に、胡蝶の夢も長閑な頃、都に近い大森に集まつた幾百人。

實業に政治に皆それ〴〵の心勞れを今日の一日に慰まふと、催された射的會。

小雀の一羽射ち二羽落し、興まさに闌の折から急ごしらへの賣店には、おでん横に口にしたまふフロックの君もあれば、お鹽せん片手に佇み給ふ江戸褄の淑女もお在す、華やかな笑ひは到る處發砲の音に和して場内の賑はしさ。丁度其時、彼岸花赤く咲き亂れた向ふの土手に艶麗花の如き少女の一群、櫻のやうな米子樣の十六を頭に、お妹君のなでしこのやうな靜子樣、薔薇のやうな八重子樣は御洋裝。

「江副さん……」と呼ぶと彼方は互に微笑みかはして眞白い手でさしまねく。

うなづいて走つて行くと其中に十一二のお人形のやうな方がゐらしつた。

紅勝ちの友禪染の小袖の裾長く漆のやうなお下髮に薄くれなゐのリボン。

『可愛い〻方ね。どなた？』

と伺つた處へ丁度長髪の一紳士が見えられた。

紳士『律子、あつちに御馳走がありますよ。』

『ア、森さん!!』

私達はひとしく會釋した。

森『ヤ孃さん達も入らつしやい。』

これが森律子さんを知つた初めでした。




＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

大鼓小つゞみ、笛太鼓。ヤ。オ。のかけ聲おごそかに、黒紋付の地謡は袴のひだ正しく扇を取つてゆるやかに謡ひ出す小鍛冶の朗々たる聲、舞臺には赤頭に狐のついたシテの明神が今や合鎚を打ち下さうと構へた姿。

それは御主人の鹿島さんでした。

『ぽんたが!!!』

人々のささやきに何氣なく振り返れば、緞子の座ぶとんの上に目のさめるやうな美人。

二十二三かと見えるのが目立たぬ着物に銀泥の竹の丸帯して黒の角形の地紋ある羽織、水の垂れるやうな

丸髷に珊瑚のかざし金の櫛、あたりも輝くやうに思はれました。

私「あれが有名の新橋のぽんた?」おとなしさうな人ですのね。

と母樣に云つたら、

「あの羽織は此間家の座敷開きに鹿島さんが召してお出のとお揃ね。」

と被仰る。

成程あの角形の地紋のある黑の羽織でしたさうして鹿島さんのは裏一ぱいに團十郎の暫が染め出してあつた。

此間私の家へお招きして今日は此お家の能舞臺の新築祝ひに招かれたのでした。

貞女の鑑とたゝへらるゝ鹿島ゑつ子さんは其日初めて見たのです。

* * * * * *

校庭の白梅ひら／＼と散る下にネット釣つてはテニスしました。

すみれ色の袴銘仙の黃縞の袷着てたしなみよく取り上げたお髮には華やかなかざりもなく淑ましやかなお姿で見てゐらつしやる一級下の方。

「お入り遊ばせな。」

「私よく出來ませんけれど……」

と被仰りながらも靜かにラケット持つてお向ひになれば、ずゐぶんはげしい私のボールもお受けになる。

其時は整つたお顏にさつと赤味さして……。赤門の前、かねやすの角で、其後たび／＼、御一緒になりました。橋の方は遠いのでいつも連れ立つて幼稚園の方の門をくゞりました。級は下でも年はお少くはなかつたし成績も秀れて人望のある方、と承るものから、たゞしほらしうお交際申せば、先きは猶更どこまでも恭謙に……。お話もしみ／＼致しませんでした。勿論イプセンや、ゴルキーのものなんて讀んだ顏も致さなかつたのですが今考へれば先き樣でもパラドックス位はノートの間に秘めてお出になつたかも知れない。

何しろ平塚明子樣の事ですもの……ね。

＊＊＊＊＊＊＊

プログラムは最後のコーラスを除すのみとなりました。暫しの休憩に、塗骨の扇のひらめき、白麻の手巾のゆらぎ…、廣い樂堂は花園に風の渡つたやう！得ならぬかをり、人いきれ、と見るうちに早や壇上に打揃ふオーケストラの人々。

某外國教授の指揮杖縦横に動いて、立ち並び歌者の唇からは精錬された肉聲の美のほとばしる。



歌「漂ふ雲に星だも見えず空は暗し皐月闇篝火の影更けてあはれ立花の濡る香も小夜風に薫りつゝ。

楯の板敷き並べ帷幄垂れ籠め裏に唯親子の二人」

と橘の薫の幾段過ぎて。

歌「燈火幽か離の佛間人影さすは是は其も誰ぞや。

形見の刃にあはや危く生害死ねとは父の教か…」

と父の首級の斃れる面影を見て悲しみの極正行の死なふとする所となれば。オーケストラはいつしか止んで

獨唱の聲のみ靜かにひゞくやがて又母の諫めに心取りなほして、はかなき遊戲も朝敵襲たむと健氣の覺悟見する有様を歌ふので‥‥。

數ある歌者の中に際立てる美聲。數多の樂器鳴り渡るにも消されず瀏喨として限り知られぬ其音量よ。

水色地へ草花染め出せる縮緬の單衣の袖長く唱ふ時は何となく憂はし氣の面持ちする髪の濃い美しい人。

お丈はあまり高くなかつた。

「自轉車美人つて呼ぶ特待生です」

つて敎へて頂きました。

やがて一昔になりますの。今は帝劇のオペラ役者、

柴田環様。

# 女學生の望む嫁入り口

毎年市内の各市内の女學校から送り出す良妻賢母の候補者は、實に數千人の多さに上るのであるが、是等の女學校卒業者の嫁入には、何なところを望むか、其傾向に就て或女學校長の談を聞くに、近年女學校の入學志望者が益々多くなるに從つて、入學試驗も激烈となり、百人の募集に對し、三百乃至五百位の志望者のある例は敢て珍らしくない、夫れ故小學校でも中學の入學志望者に特別の便宜を與へて居るやうに、女子の方でも、特に補習の時間を設けて居る、中には六學年の始めに於て、女學校入學志望者を別級にして敎育して居る處もある、然んな小學校では、女學校へ進む者と、小學だけで卒すものとは、半々位になつて居るが、實際受驗する者は概して六學年全體の三分の一である、夫れが市中の女學校へ分れて行くのだから昨年の或る女學校の如きは、入學志願者が五六人しかないと云ふ様な慘めなのもあつた、一體學校により生徒の集る方は、矢鱈に集り集らぬ方は矢張集らぬ事である、又卒業生の志望を調べて見ると多くは家庭の人となつて良縁を求むるものであるが、本人達には別に何んな處へ嫁ぎたいと云ふ様な確かな考へはない、戰爭後は一時各女學校でも、大變軍人熱が盛んであつたが、今は軍人熱など云ふものはない、大抵は父の職業に似寄りの人に縁付くのが多い、尤も中には新付銀行男の令孃が銀座の機械商山口氏へ嫁いだやうな例外もある、卒業の年齢は十八歳と十九歳と半々位で、卒業後一二ヶ年の間に片付くのが普通ださうだ。



# 料理食品文盲手引（十）

小泉迂外

## △松茸の味

朝寒の風がそよ〳〵と吹きわたつて、街の柳が散り初めますと、もう、其處此處の八百屋の店先には松茸が現はれます。

松茸の料理はいろ〳〵ありますが、最も美味く食けるのは、山で採りたてのを其場で食くに越したことはありません。且つ空氣の澄み切つた秋の野山で終日遊樂に耽るといふ事は第一體軀の爲めにもよろしく、さすれば一舉兩得といふ次第です。

東京附近での茸山は先づ千葉邊から成田へかけての山々で、其季節になりますと割引汽車もつくられ、團體で一山買切つて行ふといふ大仕掛の催しも尠くございません。半ば色づく樹々の間から蛇のやうに立ち上る炊煙は皆茸狩のしるしです。

しかし茸山へ參つても、松茸はさう容易に見付るものではございません。知らない方は松茸の笠が地を離れて路傍に幾らでも列らんで居ると思はれませうが、そんな事は滅多になく、多くは松葉を被つて草に掩はれ、土中に潜んで居るのを杖か竹箆で掘つて行かなくつては見當りません。それを皆なで賭にして探すのが茸狩の趣味で、

　茸狩や鼻の先きなる歌がるた　其角

の通りに、探し方が下手ですと、他にばかり功名をと

られます。

山での簡易料理は、燒松茸といつて、松茸を燒いて柚酢に浸して食くと匂ひも宜うございますが多く食くと下痢を起します。又土瓶蒸と云つて土瓶に極く少し醬油を入れて、採りたての品を投げ込み、下から松葉などを燃して火にかければ、松茸の水氣と醬油とで自然に蒸せて最も美味うございます。

下婢でも連れてまゐれば『御膳むし』か或は土鍋などあまり嵩ばらぬ器具を携へて、松茸飯など炊かせて喰けば其味は又格別で、嗜みの淑い方でも三椀を代へるのは造作ありますまい。

京都は松茸の名產地だけに、流石に茸狩も昔から盛んに行はれて居ります。畏き邊りに獻るのを採ります稻荷山を初めとして、さては山科、金閣寺、御室等の足場よろしき處、遠くは嵐山、松尾、嵯峨、醍醐、宇治から遂ひうか〳〵と鞍馬、大原に、常は深窓に隱れ勝ちの令孃達が姉さん冠りに緋縮緬の蹴出あらはに遊び戲るゝ樣は茸狩ならでは見られぬ圖でせう。

## △時雨豆腐

しぐるゝや何か肴に湯氣の物　抱一

の句の通りに、其季節に入りますと、何うしても溫かい料理が歡迎されます。時雨豆腐はもと伊勢の名物で、これは桑名で名高い時雨蛤を應用してつくるので、古風なうちに雅味が見えます。

時雨蛤といふのは、蛤の剝身を大釜で充分に煮てから之れを鍋に移して、溜醬油に生姜を加へて煮あげるのです。それで豆腐は前に剝身を茹でた釜の湯で普通の湯豆腐のやうにつくつて、さて食くときに蛤を煮たドロ〳〵の溜醬油をつけるので、下戸にも上戸にも珍重されませう。昔一茶といふ俳諧師が、一瓢といふ之れも磊落な法師と桑名で落ち合ひ『東屋』といふ立場茶屋で盃を交し乍ら此料理を食き、其家の澁團扇に、

蛤のつひの煙や夕しぐれ　一茶

と題したといふ話は有名でございます。

△初　鮭

たゞ鮭といふと誰しも御歳暮に用ゐられる鹽引の鮭を聯想して下魚のやうに考られますが、初鮭と稱へて、走りの生鮭は立派な献立書にも記されて贅澤料理として珍重されます。

季節は舊の九月、乃ち現今の十月に、越後、越中、越前、信濃さては奥州邊から、雪詰にされて、東京に輸送されますから、魚河岸へさへまゐれば其潑剌とした姿を見る事が能きますが、昔は交通が不便な處から據無く北國の本邸から、江戸に在る藩邸に若干飛脚を以て送る許りでしたから、

初鮭や漆の匂ふ肴籠　　　抱一

で、餘程貴とばれて、町人の初鰹、大名の初鮭と申せば、對稱して珍物扱ひにされました。

●●也有の『百魚譜』に、「其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、麗はしく照りたるこそいみじけれ」とあるのは、いづれ染付の鉢などに盛られて、通人仲間の講釈種に鼻動ごめかすべき食品でございませう。

△燒栗の趣味

新栗が出ます。甘煮、含ませ、金トンとさま〴〵の料理に作られて其美味さを謳はれる季節となりましたしかし種々に手をかけて製られる料理よりも、懐かしいのは燒栗の味です。眞柴かる山里の爐邊に、親子兄弟、夫婦うち寄つて、秋の夜の更くるも知らで語り耽ける情話を思ひ、又は祖母の脊に揺られて縁日の歸るさ、路傍の燒栗屋に立寄つて一袋を家土産となし、桃太郎、勝ち〳〵山の話もいつか上の空に、之れの一片二片口に含み乍ら、その儘夢に入つた往時を追懐いたすと、此味は又格別でございませう。

中村不折畫伯の談に、雪降る頃の巴里の街をあるいて、一番目に入るのは大道の燒栗屋で、其匂を嗅ぐと祖國を思ひ出さずには居られないとか謂はれましたが異郷にあつては又一入でございませう。

燒栗に次で鄙びて嬉しいのは栗飯でせう。之の栗は

茹でゝ針の通る程の柔かさがよいと致してあります。しかし之れも目黒の名ある茶屋で食くよりも、少々針は通らずとも素人製らへの方が情味が深うございます

## △牡蠣

牡蠣は科學的に分類いたすと七十餘種もあるさうですが、素人が見ると「真蠣」と「イタバ蠣」ぐらゐの區別しか解りません。それに日本では到る所海を見る事が能き、到る處の海にも此れが夥しく獲れますから、さまで珍らしくもございませんが、歐米諸國では如何なる譯か非常に此れを持て囃します。殊に海に緣の遠い露西亞のやうな大陸續きの國では、此等の海藻類が容易に獲られぬところから、餘程贅澤な獻立でなければ使用はないといふ話です。

先年捕虜となつた露西亞兵が内地にまゐつた時、蠣のフライを作つて彼等に侑めました處、皆申合せたやうに肉叉をつけないので、通譯が之れ〳〵だと說明致したものですから、彼等は驚いて感喜の涙をこぼしたさうです。

又日本のうちでも、關東地方の者より、關西地方の者の方が此を嗜好んで食きます。之れは廣島といふ日本第一の本場が控へてあるのみでなく、毎年初冬になると大阪には蠣船と稱へて一種の船料理が初まるので自然大阪人の嗜好を促すからです。

一體大阪の牡蠣船といふのは、二百年程前に廣島の小西屋五郎八といふ人が牡蠣の養殖を起して、廣大な梁場を海に設け、盛んに船積にして大阪へ輸出して居つた處、寶永五年に大阪に大火があつて、其時繫留してゐた牡蠣船が、一同力を協せて罹災者の貨財を牡蠣船に積込んで、助けたので、その報酬として爾後、大阪では何處の橋下でも勝手に牡蠣の販賣を許したのがそも〳〵今の牡蠣船料理の濫觴でございます。

現今では淀屋橋、戎橋、本町橋、天神橋其他到る處の橋の下に屋形船を繫留めて、廣からねど一寸風雅な座敷を設け、蠣飯、酢蠣、どて鍋、から蒸、貝蒸、天ぷら、鹽燒、山葵かけ、いもかけ、田樂、海苔卷、蕪

卷、吸物等と種々な蠣一式の料理を求めに應じて製つて出します。

元來牡蠣は濕まるといふので、寝汗をかくやうな身體の弱い人には藥となるさうですが、寔に外形が盲人の眼のやうで醜いところから食きつけぬ方はどうしても箸が進みません。殊に婦人方には極めて同情が薄うございます。

## △亥の子餅

昔は十月、初めての亥の日、亥の刻に餅を喰くと萬づの病を除くといふ事を傳へて、上下擧つて、餅を食いて祝ふのを例といたしました。それで禁中でも畏多い事ですが其日には內藏寮から此餅を献つて御朝餉にに代へられたといひます。

此餅は、大豆、小豆、大角豆、胡麻、栗、柿、稷の七種の粉を合せて製るといふ事が古い書に見えて居ります。又民間では現今でいふ御彼岸配りのやうに、其日亥の刻前に贈答致したといふ風もあつて、元祿頃の句に、

重箱に散たばしる亥の子かな　沾水

といふのが詠んであります。しかし維新前には此餅を製るのが面倒な處から、江戸では大福餅を代りに配つたといふ話もあります。

又一說に猪といふ動物は頗る子を多く産むので一歲に十二子、閏年ならば十三子位は缺かさないといふ說に因つて、子の無い婦人などが一つの迷信から之の餅を喰くのだとも謂はれます。

又古は攝津國能勢郡八木村の門太夫なるものが毎年禁裡へ此の餅を調進して奉つたので之を一名能勢餅とも或は八木の亥の子餅とも傳へられます。

## △千木櫃の餅

現今、芝神明神社前の「太々餅」で土産などを求めますと、へぎで製つた千木櫃に餅を容れてよこします。其れが寔に古風なもので、蓋の上に丹と緑青でふじといふ縮文字を描いてある處などは雅味が非常に横溢れ

て居ります。それで昔から之の箱は餅を容れるのに製られたかと、よく〳〵穿鑿いたしましたら、此れは昔九月の神明神社の祭禮に餅を容れて販つたもので、彼の「風俗文選」といふ書を見ますと、吾仲といふ者が『飯鮓の銘』といふ文章を記して、

飯鮓はいづれの時よりもてはやしけん、此六條の名物にはいへり。今は公けの奉りものにかぞふれば、下ざまの人は日を限りても侍るべし。まして卯の花の咲く頃は、此物のけしきも清からんに、藤の花の咲く時にそれが節を合せたらん。いかなる人の深き心か侍けん。是にて二季草の名も世の人は云べし。器は杉の香もてつけたる折に入れて、此花をかざしにも又は文などにも付てやるべし。かくことく〳〵しきやうなれど、すべて上ざまのもてあそびものなり。

と述べてあります。

飯鮓は大昔京都の六條で鱧をつくりましたのが濫觴で、之れが享保頃に江戸にわたつて芝で賣られたのでございます。

千木櫃とは、もと社の千木の餘材で製られたので此名が付けられたのです。昔は酢つぱい品を容れたのが、明治に遷つて甘いものが這入るやうになつたのは面白いと思ひます。

### △名代の鹽煎餅

煎餅といふ菓子は千年も前からあるさうで、その頃には糯米の粉か或は小麥の粉などを水で硬く煉つて、それを平らに延し、型で拔いて油で揚げたものださうです。それから漸々變化つて、玉子煎餅とか砂糖引の煎餅などが能きたので、醬油を引いた今の所謂鹽煎餅は極く新らしい方です。

十年程以前迄は、此鹽煎餅の美味い家が東京に隨分澤山ございましたが、漸々物價が昂つてまゐるに連れて、醬油も薄くなり、手燒のところが機械を用ゐたり致して、種々改惡致してまゐるので、鹽煎餅の味はいたく下落てまゐりました。それで以前有名な家も漸々衰微して、現今江戸の名殘をとゞめて居るのは、今戸

の煎餅と團子坂の菊見煎餅の外は數へる程であります。

　今戸の煎餅は、今戸橋を渡つて、何とかいふ大きな寺の並び、即ち左側にある家で、常に店頭に客が絶えないので、燒く方が間に合はず、前方から注文でもして置きませんと『お生ひ憎くさま』を頂戴する事が珍らしくありません。つまり餘程よい拍子でないと其俤を見る事が能きないのです。形狀は都鳥、三日月、櫻の葉等が主で洒脫な點に趣味を有つて居ります。

　菊見煎餅は上野からゆけば橋を超えて右側ですが、支店は吾妻橋にも本所にも、深川にも、小石川原町にも、又日本橋の葭町にもあります。特色は粉の荒いためか、サクリ〳〵として舌障りがよいのと、四角な厚燒の燒加減が如何にも堅實い點にあるので、前者を婦人趣味とすれば之れは男性趣味を發揮して居るとでも申しませうか。

## ▲鶯の椀盛

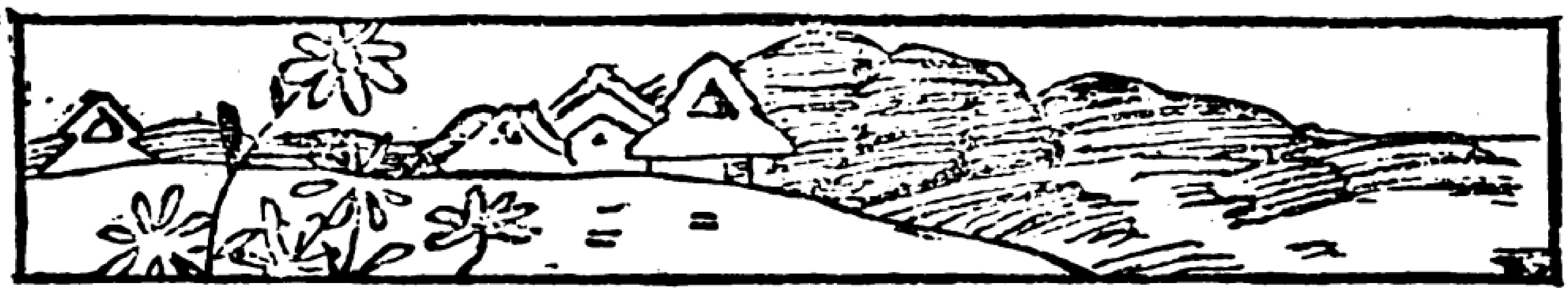
　昔、京都に中島棕隱といふ儒者がありましたが、晩年聖護院の森陰に隱居して料理屋を創め、家號を『銅駝餘霞樓』と附けて日頃の食通を昌んに發揮して、珍らしい料理を賣るといふのが評判でした。

　之れを聞いたある雅人が、一日夕飯を戴きに之處に駕を枉げて何か珍物をとの注文でした。

　然るに座敷に通つて、待てども〳〵容易に膳が運ばれず、折しも春の夕暮で、遠近で撞き出す鐘の音は空腹に諸行無常と響き渡るので、客も堪へ兼ねて促すことがしきりでしたが、漸く灯が附き初めてから恭しく膳が運ばれたので、見ると椀盛に野菜が一皿、空腹には些と物足りませんが兎に角是れで飯をすませて、いざ勘定となると客は尠からず驚きました。それも其筈請取書には墨蹟鮮かに書きも書いたり金五兩也。

　合點がゆかぬので、客は主人に其次第を訊ねましたら、初めに珍らしき品との仰せ故に、態々洛中に使を走らせて手頃の鶯三羽を求め、いろ〳〵其聲音を試み、最も美しいのを一羽屠つて調理致したので、決して高價なる料理にては無之、しかも他の二羽は不用な品を背込みし丈が却て損となりましたとの答でした。

　さては彼の椀中のは鶯であつたかと今更口惜しがつても追付かず、さらば原料の三羽の價は何程と重ねて訊ねましたら、當時の價で十五兩であつたので、客は益々膽をつぶしたと申す話です。



# 藻鹽草

蛩乙女

○

或る人、日頃秘藏しける硯箱をば、只、苟且に疊の上に置きにけり。折柄不圖入り來れる其人の妻女、如何なる機勢にか有りけん。過つて是に蹴躓き、あはれ蒔繪の蓋は、いと脆くも缺けにける。

良人色をなして、嚴然と其の不注意を責め懲らしけるに、妻女は言葉も無くて首垂れつゝ、徐にして、

硯箱文かく爲めの品なれば、ふみかいたとて誰か咎めん

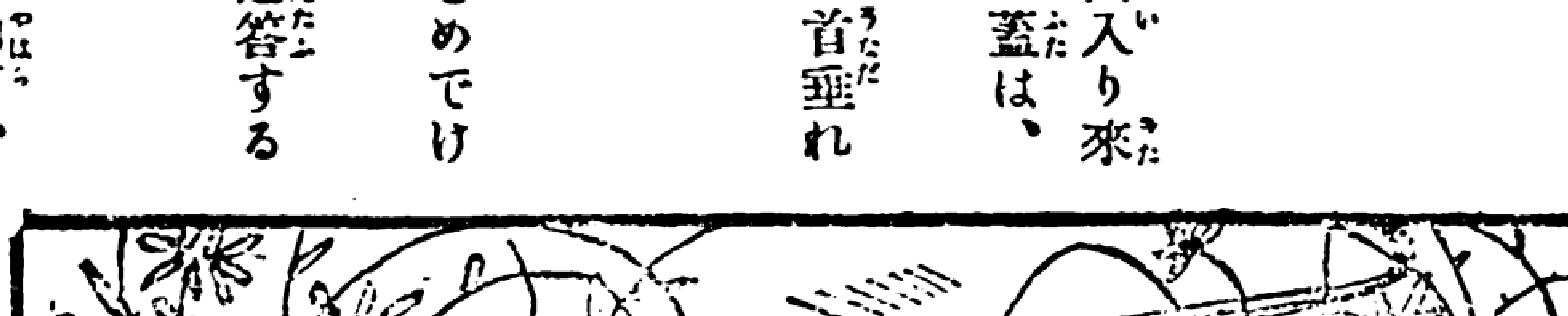
と申ける。

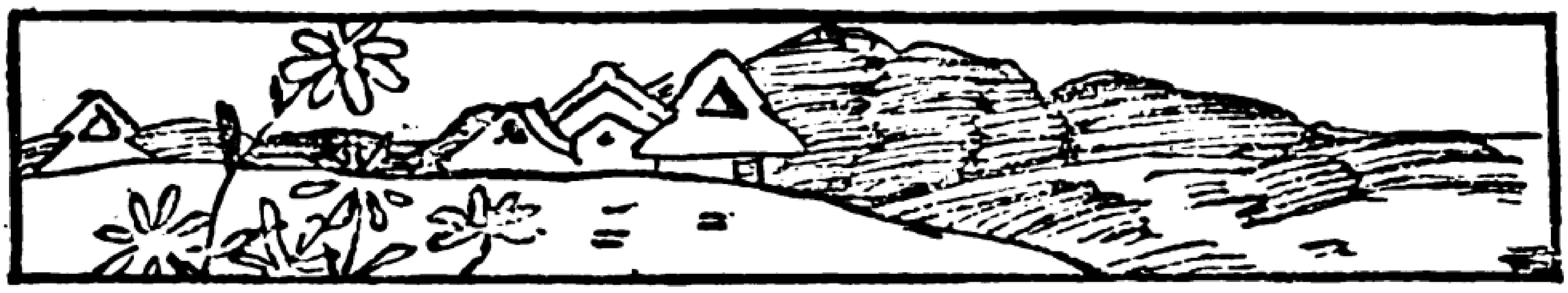
男是を聞きて稍心和ぎ、自身の置處惡しかりしをも思及びて、却ては其即吟をめでけりとかや。是、和歌の徳ぞとて、さる人の物語り給へる。

其男、優しき心にて幸なりけり。我如き無風流の者ならば、小理窟こねて口返答する女をば、一層叱り飛ばすやも知れず。さる時、和歌に何の徳有らんものぞ。

名に聞こえたる古今の序に、

力をも入れずして天地を動かし、眼に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、男女の中を和げ、

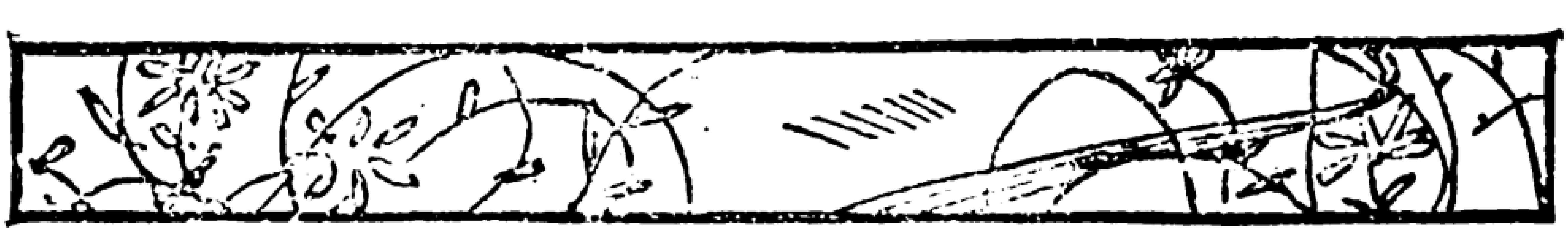


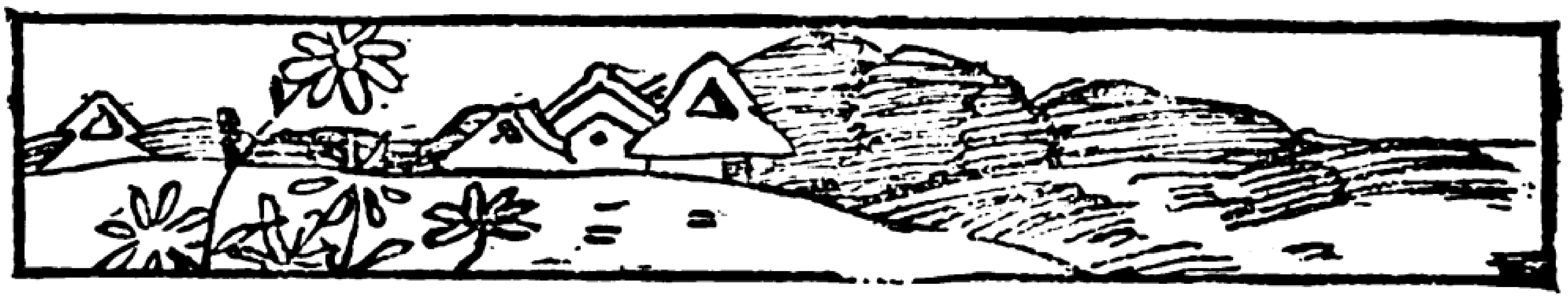


猛き武夫の心をも慰むるは和歌なり。
とて讃し置きけるを、蜀山人是を牛耳つて、
歌よみは拙こそよけれ天地の動き出されてたまるものかは
と申しけり。人は何方にか首肯給はん。
女の眼近きこそいとほしけれ。行きずりに知れる人に逢ひても知らぬ顔して打過ぎたる、愛嬌なし。眼鏡したるは憎さげにも見ゆ。さる邪魔もの、伊達に用ふる人は有らじとは思へども、眼鏡したる女を見れば、聞こえもせよがしに然口ずさむ人もぞ有る、いと、いとほし。
男の眼鏡は、殆、普通の様になりぬるに、如何なれば若き人の、皆かく眼近きやらむ。昔は老いての後ならでは、眼鏡用ゐぬものと思へりしに、此頃の學生よ、甲さんも乙さんもと、知れる人だけにてさへ指に數へ餘る迄したる、あはれの事哉とて、母の驚き居給ひけり。
さはれ、眼は如何に近くとも、盲目には優さりたれ。兩眼全き中はさも有らねど、一眼明を失ひての後の一眼は、他人の知り得ぬ迄に大事に思はるゝものぞとて、さる人の仰せし。實にさぞ思さるらん。

○

夏出づる蟲、大方は皆むつかし。蚊や蚤や、淸少納言にも憎まれけむよ。
かなぶん〱とか云ふめる、闇の軒端よりつと飛び入りて來る蟲、疊などにとまりた





れば、手にて掩ひて其上より、輕くほと〳〵と敲きておけば、宛然死したる如く身動も爲で、暫時が程はさて有るぞをかしき。

燈火に讀む文の上、優しき音たてゝとまる蟲、あへかなる姿して、青き色の淸さげなる、横笛と名のるこそみやびたれ。

其の名にて聯想すもの、何れ優しからぬはなき。

柏木の衛門の督の笛、戀の紀念と人知れずとゞめ置けん薫中將にめぐり來ては、限りをやひゞきぬらむ其の音色よ。

愛孃に末を契りの印とて、僧都より牛若に參らせたりてふ小枝の笛、名のいとゞ優しきに緣淺かりしぞ怨みなる。

さては彼の瀧口に道心起させけん横笛よ。

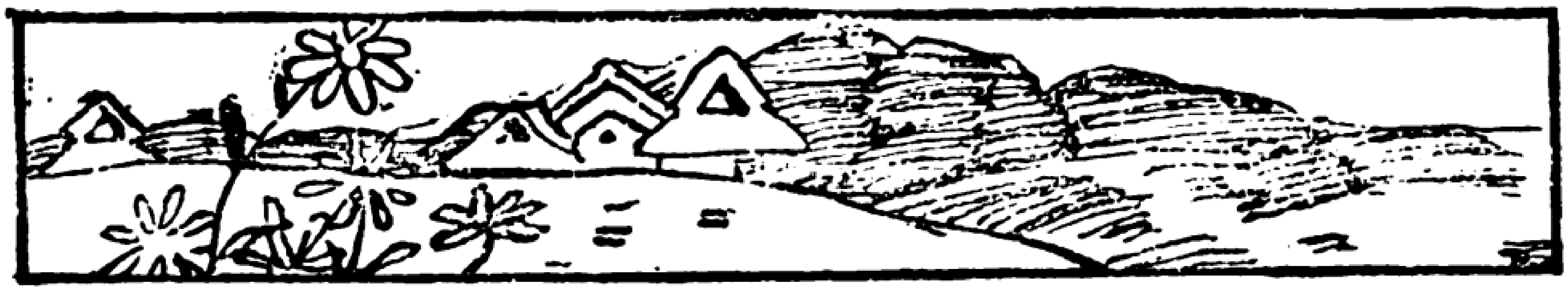
また、戀には有らねど靑葉の笛の、蕾乍らに散り行きし、花の後ろに哀の名殘とゞめたりつるも、淺くやはいかで。

○

心澄み上るもの、雅樂に用ふる横笛、音の限り、天空の涯までも徹れと吹き立てたる曲の名は何と知らぬものにても、心無き身の我かも不覺になりけりや。

尺八の音、はなちて聞けばいみじけれど、是に比較てはいと、いたうこそ劣りたれ。

日比谷の演奏　未だ我等に興味起さしめず、只、處々雄大なる音哉と驚き、纖細なる節よと感ずるのみ。譜にか有るらむ、紙片手にして、眼は皿の樣に、耳は兎の樣にして



足拍子とり、一心に聞き惚るゝ男、彼の人には了解るやらむと、有らぬ方に感心して見て歸りぬる、をかし。大方はさる人多けむと、己が心にて人を忖度したるいと、無情なるべし。

よく鳴る琴の一の糸、柱を押下してドレミの調に合せ、賑やかなる進行曲など掻き立てたる、遠くして聞かばピアノ宛然に聞こゆめり。こは試み給ひなば、それと知り給はむ。手風琴、よろこびたりしを風琴得てよりは見も返らずなりぬる人、又友の家にてピアノ弄りては、風琴の音如何にも耳よからで厭はしきなど云ひ居たるよ。

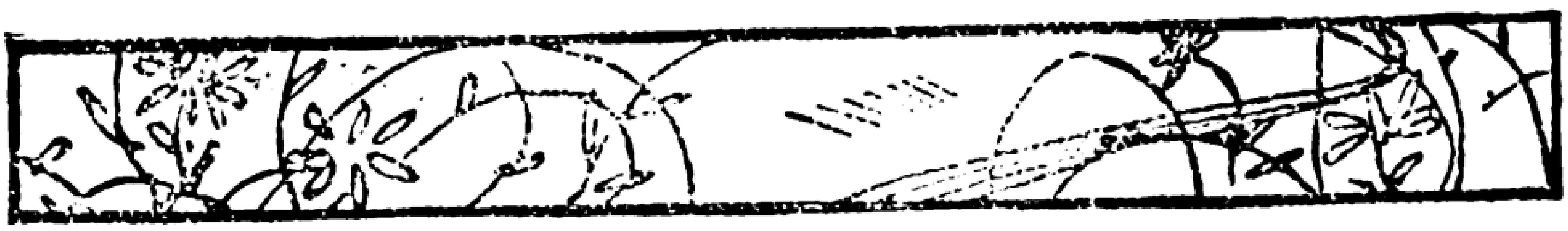
はかなき音色ながらにハーモニカの捨て難きや、何處ゆともなく、風につれて聞え來たる、さゝやかなるがいとこそよけれ。

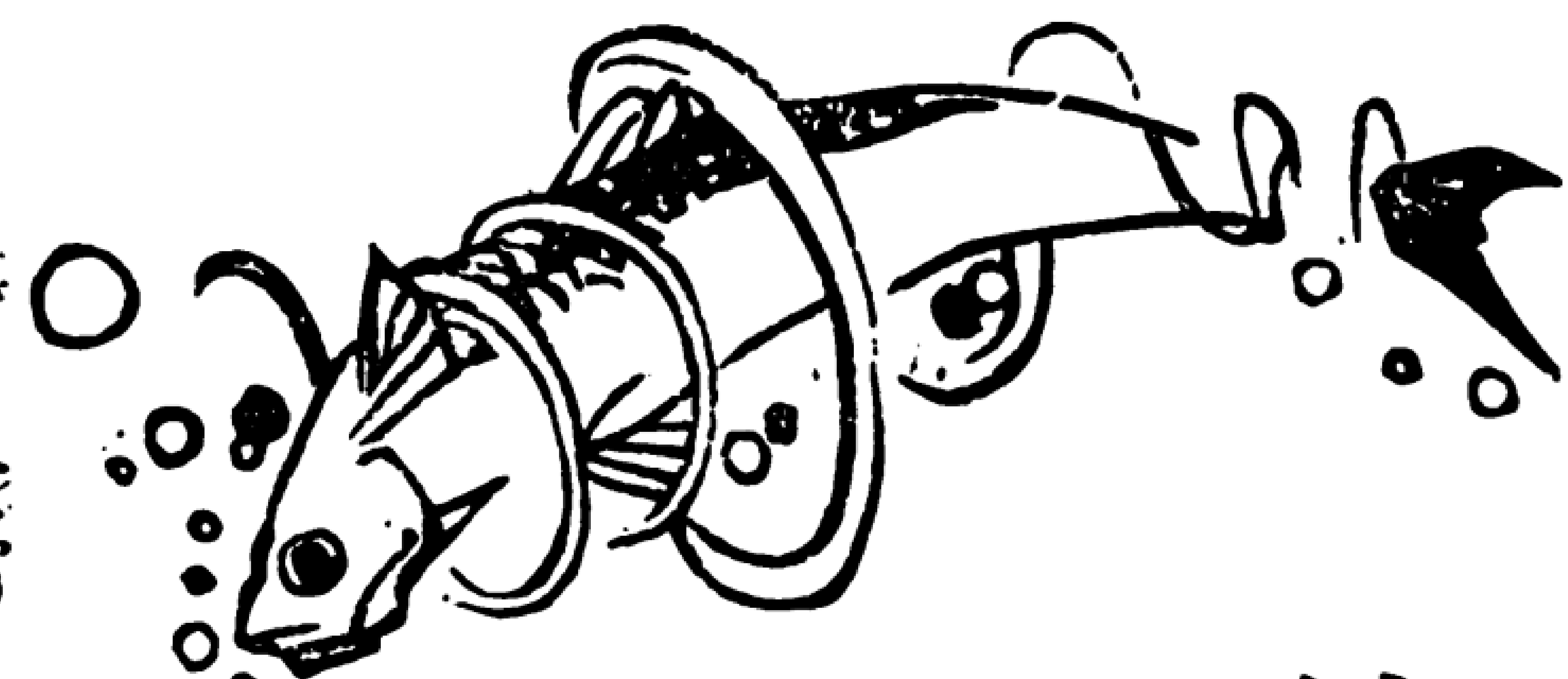
餘り近くて忩がはし氣に吹き立つるは、活動寫眞、耳にて聞くものならば斯う樣にこそは覺えんとなむ。

此頃はすたりたれど紙腔琴、又近くもてはやさるゝ蓄音器、何れも面白からずこそ。時計に入れられたるオルゴール、曉の夢にまぎれ入りぬるは、さすがにけたゝましう鳴り渡る鈴よりは、猶些優さりたらめ。

ひとりぬる床は草葉にあられども
　秋來る宵は露けかりけり　讀人不知

こほろぎの鳴く音しめりて更くる夜の
　軒端さびしき雨そゝぐかな　滾臣





# 川柳と紋

文學博士　幸田露伴

紋と云ふものは、普通一般に家に定まつて居るものでありまして、名高い家の紋は自然と世間にも知られて居りますから、別段氏を聞かずとも紋を見れば判る理窟であります。隨つて、紋の種類も、澤山でありまして、それに因んだ事情を云ひ顯はすことが出來ますから、川柳には時々紋が重なる體になつたり、又添へられる材料になつたりして居りますから、其句を透して、其時代の、紋に對する考へも知ることが出來ます。

　お味方に敵に二六が十二文

これは、眞田家の紋は六文錢でありますが、豐臣と徳川とが天下分け目の戰ひの折、眞田家にては、一方には六文錢の旗を飜へして、大阪方の味方をし、又一方徳川方にも、六文錢の眞田の一族が居て、大阪方を惱ましたので、六文錢の旗、兩方に飜つたと云ふ處から、二六の十二紋と洒落たのであります。

　日本の蛇の目唐迄睨めつけ

蛇の目は加藤清正の紋でありますから、其朝鮮征伐に行つて居まで睨み付けたと云つたのであります。

　富士は孝鷹は忠義の役討哉

富士は孝とは、賴朝富士の牧狩に、父の敵工藤祐經を討ちし曾我の兄弟で、鷹は忠とは、主君の仇を報じた四十七士のことでありますが、一富士二鷹といふ諺がありますから、富士の下に鷹をもつて來ましたので、それに、淺野家の紋は鷹でありますから、それをきかして、義士を顯はしたのであります。

　鷹の騷ぎに雀まで出る處

鷹は前に述べました樣に、淺野家の紋で、雀は上杉家であります。上杉は吉良の縁家でありますから、淺

奈良女子高等師範學校教授　錦織竹香著

（最新刊）

# 普通作法精義

作法は單に形式の整正を務むるのみならず必ずや禮の本旨に基きて內にこもれる恭敬の自然に外部に發することを期せざるべからず本書は著者多年研究講明せられし所のものにして平易簡明の文を以て坐作進退の禮節を記述し一々其出典を明かにして敢て流派に拘泥せず加ふるに故實に據りて多數の鮮麗なる參考圖を挿入し博引洽證至らざるなし。されば一たび之を繙く時は作法の形式禮節の精神一々之を掌に指す如く敎育に從事するものは勿論一般家庭の好伴侶として座右に缺くべからざるの良書なり。

和裝函入美本上下全二冊　定價金一圓六拾錢

洋裝函入布表紙全一冊　定價金一圓三拾錢

小包送料各拾貳錢宛

廣島高等女學校長　齋藤鹿三郎編

隱れたる偉人

# 模範女子

好評三版

大和綴美本定價金四拾錢

全一冊郵送料金六錢

（帝國敎育）女子敎育に就ての研究は、近來益々世上の注意を惹くところなるが、本書は、著者が十餘年來の經驗に鑑み女子をして修養奮發の指南車を得しめんが爲に編著したるものにして、自ら明治女大學の例解たらんことを期したるものなり。著者は偉人を作らんとするには先づ隱れたる偉人即世の所謂良妻賢母を作るにありとし、本書に於て其の模範を示したるものにて一面より見るときは女子敎育に對する其の意見の發表とも謂ふべきものたり。

東京日本橋鐵砲町角　發行所　合資會社　六盟館　振替貯金口座東京一二五五〇番

女（その一）

●萬世不朽の紀念至寶!!!

人格と技術とに於て斯界の巨人たる帝室技藝員東京美術學校勅任教授正五位高村光雲先生が、身後の光榮として一切の世務を抛ち　先帝陛下御在世の砌り屢々咫尺に並拜謁を仰ぎ、深く腦裡に感銘せる　御英姿と、拜領せる　御眞影に基き齋戒沐浴一刀三鐫謹刻し奉れる　大元帥御正裝御胸像にして朝野の貴顯紳士より其の　龍顏の崇高なるに驚かず頭を垂れしむ眞に天下無二の傑作なりとの賛辭を辱せる名實兼備せる　御尊像なり

# 先帝御銅像

其筋より指定

頒布元

博文館代理部

# 博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百四十番

振替口座東京五十番

## 實費頒布

御尊像御寸法（總御丈は實算に因みて玉座共六寸一分 龍顏は一尺八寸の御立像同樣の大きさ）

●青銅色合成金御像（御　金五圓

●青銅御像（筐　金廿五圓

●純銀御像（共　金二百圓

（送料）内地は五十錢臺灣樺太朝鮮清國は各八十錢

御筐の樣式（御製及御事歴を謹搨せる八咫の御神鏡形に刳抜き御簾を垂れ二重臺勾玉形金具付の神々しき桐材白木造

頒布趣意書　先帝御眞影光澤紙刷挿繪入美本御申込次第贈呈す

便宜申込所　全國有名書店にて取扱申候

●注意　各御尊像共既成　發送は申込順に依る　望みの方は至急御申込を乞ふ送達遲延の虞あり

女（ろの二）

文部大臣 長谷場純孝君 題
賞勳局總裁 正親町實正君 辭
賞勳局書記官 藤井善言君

武田仁恕君編

# 明治國民 善行表彰錄

口繪 褒狀雛形 褒章雛形 石版彩色刷

發兌元 東京本町 博文館

全一册

洋裝 菊判 上製
紙數三百卅餘頁
正價六十錢
郵稅八錢

本書ハ褒章條例實施以来明治四十五年末ニ至ル三十一ヶ年間内閣賞勳局ヨリ藍綬褒章ヲ賜與セラレタル全部約七百名ノ事蹟ノ要綱ヲ列叙シ各自日常ノ國家的行爲ノ指針トナシ併セテ現社會ノ大勢ニ鑑ミタル施政上ノ参考ニ資セシメンコトヲ期シタルモノ也世人或ハ現時此活キタル龜鑑ノ存スルアルヲ知ラズシテ殊更ニ其模範實例ヲ遠キ古ノ史乘ニ求メ時代後レノ事蹟ヲ採リ强テ今日ノ儀範典型ニアテハメントス難イ哉畏クモ詔勅ノ 聖旨ヲ奉體シテ此改進窮リナキ國家社會ノ發展ヲ企畫スルコト冀クハ本書ニ依リテ現代模範國民ノ事歷ヲ知リ德化ヲ奨メ風敎ヲ正シ公益ヲ擴メ國力ヲ充タシ進ンデハ一等國聲威ノ發揚ヲ企テ退テハ君子國忠良ノ臣民タランコトヲ期セラルベシ

文(その四)

## 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黑き男女にても本藥之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次肉體白色となり肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し絶美の容貌となる効果なる世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試みよ偉大なる奇効完全に顯る價並製壹劑壹圓廿錢特別製壹劑貳圓貳拾錢

## 色白飲藥

英國某學士輸入二種の全身清血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし完全に肉色を白色絶美ならしむる奇効顯著藥なり價英國製壹劑貳圓九拾錢獨國製壹劑壹圓九拾錢双方併用せば偉大の奏効容易に顯る前金即刻送藥す

## 腋臭根治劑（わきがひつしぢざい）

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる斯病唯一の理想的卓効新藥なれば他藥にて全癒せざる患者は早く試み病原を去り苦惱を脫せよ難重症は特別製を用ゆれば完全著効を奏す藥價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢小包寄送

（奇効顯著）
（最新發明藥）

## あざ及入墨ほくろそばかす。なまづ、いぼ

を美麗に除去すること著効ある新藥あり患部の大小輕重を問はず容易に治癒し假令顏面たりとも痕跡を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文の際は各自除去せんと望む所の病名及患部の寸方を明記し申込あれば其症に適應する藥を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑參圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）前金即刻送藥す

## 月やく下し通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に通經す長き滯り及び血塊には特製分を用ゐよ極安全に快通す流經す月々の月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる特効を知られよ近時無効類似藥多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢特別製分貳圓卅錢郵券代用貳割增し

## 婦人病の福音

本劑は最新の學理と多年の實驗とにより發見せられたる婦人病藥唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊抔と稱へ永年經水なきを快通滯下するに勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰或は子宮に痛ある人腰子宮部の擾亂等に用ひ偉大なる卓効顯著なり早く試よ

（奇効顯著藥）

## 毛生新藥（けはへしんやく）

本劑（藥名ヘーアグロース）は多年研究實驗の結果發見したる毛髮發生藥なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脫毛する人頭髮及はえきわの薄き人局部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人に用ゆれば毛髮早々と發生する特効あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛はへ藥とは其効大に異なるに付幸に玉石混淆視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢前金即刻送藥す郵券代用必ず二割增しの事

## やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる唯一の瘦身劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。あるのぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゐれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に保ち私かに美容健康を得る特効顯なり故に見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ゐ其偉大なる特效を知られよ

以上七藥專賣

東京市神田區五軒町十九番地

**日新館藥房**

電話下谷五百四拾六番
振替東京壹九貳四六番

女（ろの五）

成美
# 白色新劑フロラー
色黑人、ニキビ、ソバカス等にて困難の士女は速に本劑を使用せられよフロラーは他の危險なる内服藥と違ひ安全にして卓効を有する新發見美顏劑にして輕病は一二劑頑固なるも大一劑にて次第に皮膚を漂白し日ならず玉の如き美麗なる顏容を呈するに至る可し

定價五十錢、壹圓、貳圓、送料各八錢

發賣元 東京下谷中根岸四 愛隣堂

◎宮内省御買上の光榮ある

男女方に極くよき髮油
# みやげ油




本舖 東京人形町通リ 三宅堂
電話浪花六二〇番
振替東京八七五一番

◉定價 壹合入四十五錢 貳合入八十五錢 送料拾二錢

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讚好評を博したる諸奇藥を專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力藥を配合したる妙藥なれば世間に有觸れたる技術と學理に暗き醫が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する莞菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早むる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●
取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

ギノサール 一ヶ月分 貳圓
複方ギノサール 一ヶ月分 參圓

# らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其效驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども此病勢の甚しからざる中に本劑を繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴かしむる妙藥なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

本舖 三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷參拾貳番

醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞 鑑製

女(ろの七)

フロラー香水

廿錢、一圓廿錢、一圓八十錢



登録商標

美髪の御料には

柳清香油

けい志香油

が最も愛用されます

美術小間物化粧品

東京日本橋通二丁目

柳屋本店

電話本局二〇一

# 毛ぬき新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて皮膚に有害にして悪臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價壹圓
特製參圓
内地送料十五錢
海外三十五錢

女(るの八)

# 飲んで色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の悪液排泄劑ピオール錠は極めて強度の清血劑にして一般悪血悪液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし悪液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑壹圓
參劑半參圓
内地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地

百合園製藥所

野の浪士に、吉良を討たせまいと、氣を配つて居りましたので、鷹の騒ぎに雀迄と洒落たのであります。

　梅ヶ香は武鑑にしるき御大祿

加賀家は、梅鉢の紋でありますので、さう云つたのであります。

　九十ぬけても馬鹿でない軍師哉

それはぬけるとは、百の中から九十ぬくれば足らぬといふ意味でありますから、馬鹿であるべきですが、馬鹿ではない軍師だといふのは、九十六文は即ち百でありますから、九十六文から九十ぬけたら六文なる眞田の紋になりますので、さう云つたのであります。

　巳に餘り時宗家の紋にする

これは、北條時宗が江の島辨天の御利益を蒙り鱗を頂いたといふので、紋を三ツ鱗にしたからであります。

　加賀紋を引剝ぎ蛇の中に入れ

これは加賀騒動の中の女が惡事露顯して、蛇責めに逢つたのを詠んだものでありまして、加賀騒動です故加賀紋と云つたのであります。加賀紋とは當時ある一種の綺麗な紋の普通名詞であります。

　質草は倒澤瀉が初めなり

倒澤瀉の鎧てふ、裳裾にすがる鶴の紋といふ文句がありますが、倒澤瀉の紋のうちは倒澤瀉の鎧をまづ質に入れるだらうと、其貧乏を云つたのであります。

　祖師は橘尊體は柘榴なり

お祖師御存じの通り、日蓮で井桁の中に橘が其紋であります。尊體は柘榴なりとは、日蓮宗を守護する神樣は、鬼子母神で、この神樣には、よく柘榴をあげますから、橘と柘榴とかう詠んだのであります。

　三つ星や片手切られた婆來る

三つ星は、渡邊の紋でありまして、渡邊に手を切られた婆が來るといふ意で、これは芝居等でよくやりますから御存じでせう。

　天草勢を馬鹿にする御紋なり

天草の亂の時に、之を征伐に向つた大將は、佐賀の鍋島で、其紋が蘘荷でありますから、馬鹿にする紋と云つたので蘘荷を食べれば物忘れすると云ひますから

さう云つたのであります。

幸村は生きる氣でない紋所

亡者には棺の中に六文錢を入れてやる處から眞田幸村が、敗けると知れた大阪方に、味方したのは初めから、生きる氣ではないのだといふのを、紋所の六文錢にかよはしたのであります。

縞に紋縫はせる奴は數が無し

これは縞の着物に縫ひ紋させるので、今日では、粋




きな人は皆やつて居る様でゞが、この川柳を詠んだ時代は、多くの人が、縫ひ紋をするといふのではなく、着物の數のない人が縞の着物に縫ひ紋したとも取れますが、又さうではなく、縞の着物に縫紋する人は、至つて少ないから、たまにやつてる人を見るとめづらしいとも取れます。

錢の遣ひ様大阪知らぬなり

これも、眞田幸村のことで、大阪方が幸村の言を用ひ、幸村を甘く使

つたら、大阪方がさう容易徳川の爲に亡ぼされはしなかつたらうにと、例の六文錢の紋で遣ひ樣を知らぬと云つたのであります。

　下總の内裡紋からしてが下卑

相馬の將門の紋は、馬のはねて居るのでありますから、誠の内裡の御紋は菊、將軍家は葵といづれも高尙なのに引替へ、僞大裡なる將門のは、やつぱり、紋迄が下卑て居るといふ意であります。

　定紋であたりを圍ふよい花見

咲き亂れた花の山を、取り圍ふた幔幕の定紋で、誰れそれ樣と領づかれる高貴の方のお花見、幕の內では奥方や腰元衆が、今日を晴れ衣の煌びやかさも推し量られる、結構な御身分を詠んだ句であります。

　劔菱の大紋を着る俄雨

劍菱といふ紋もありますが、酒にも同じ劍菱の名がありますので、篠を束ねた樣な大粒の雨が、俄かにやつて來たので、傘のない身には屈竟のものと、そこにあつた劍菱の、酒菰引つ被り、驅け出した姿が、丁度大紋を着た樣だといふ意であります。

　蝶々と千鳥が鶴の引き合せ

芝居道で、曾我兄弟の衣服には、蝶、千鳥をつけ、朝日奈の紋は、鶴と定まつて居りますので、この句があります。

　猪に笹龍膽のゑぶを立て

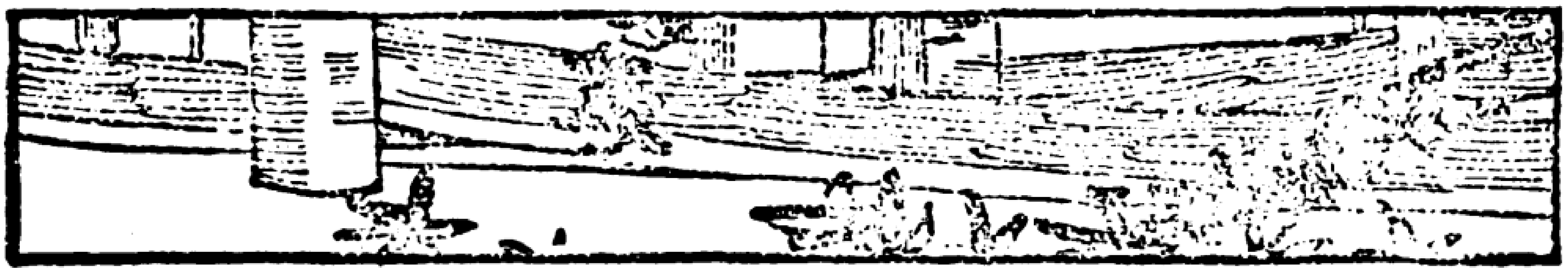
笹龍膽は、源氏の紋であります。賴朝富士の牧狩しての歸るさに、獲物の猪までゑぶを立てるといふのが、其句の可笑味であります。

　一曜が六萬石のお高なり

五十四萬石のお大名、御紋が九曜でありますから、一曜のお高は六萬石だと云つたのであります。

紋に因んだ川柳は、まだ色々ありますが、この位にして置きませう。





# 雜記帳

諦三世

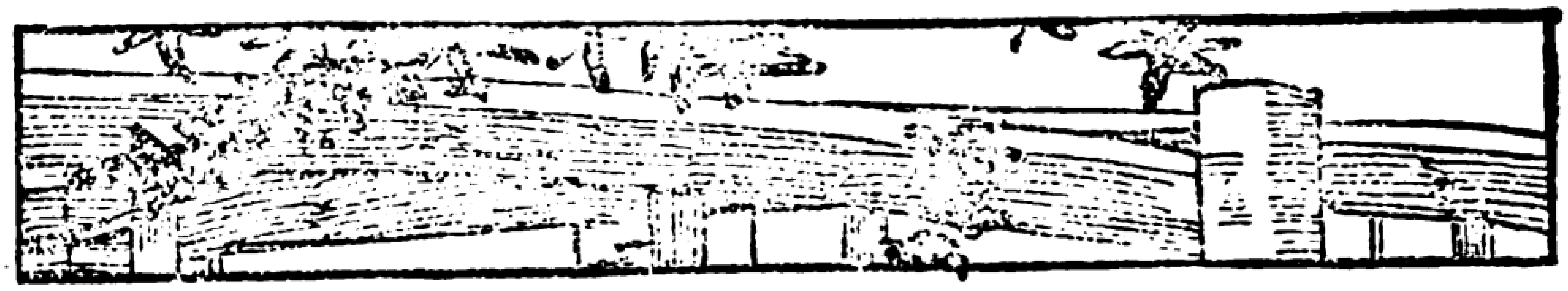
×

わが隣邸は往昔の知行多かりし格式みせて、もの古りたる長屋門をめづらしくも持ちこたへたる構なり。その家の御隱居、白髮童顔、繪にある住吉の大神のごとく髯長くたれて鼻高く、神々しき迄の品柄なり。繭紬の十德などはおりてはさほど曲らぬ腰の元氣よく四季折々、牡丹芍藥百合の花朝がほ菊と絕えず後園に自ら花を作る。

扨て〳〵御隱居樣はお風流な御なぐさみ、あの御身分になり度うてと、近所の内儀が無駄口たゝくを、この家の婢、何の〳〵、あゝしてお出でになりましてもあのお花は皆花屋におはらひになりまする。お拂になりました代はお活計向のたしになりまするもの、何がいゝ事が御座いませう。いつだかお子供衆が無心でお花をおつみなされたことが御座んしたら、御隱居の權幕、そばの私もおそろしうなりました。弓の折を持つてお出でなされて……と下司の口はうるさし。

聞説く、宋の隱士林和靖、疎影横斜水淸淺、暗香浮動月黃昏なんど、世づかぬ樣に氣取りしといへども、その邸宅の梅樹は、凡そ一年三百六十五日の數だけ植ゑつけありて、實は八百屋に葉は染物屋に、(但し宋の時代には何と申せしやら、その邊はたしかに侍らねど)





うりはらひ一本の價を一日にあてゝ活計せしと云ふにあらずや。働かずば喰らはずといふ西哲の言、尸位素餐とやら、何事もせで無爲にして日を送るよりも、天晴見上げたる御方と云はまほし。

花作りと云へばこゝにをかしかりしは、朝顔に我は飯くふ男かなといふ、芭蕉翁の句をさる男見てはゝあ芭蕉もあゝして居て、中々商賣氣がありましたなあと云ひしこそ興さめにけれ。銀河未だ大空に消えず、曉の明星のうすろがぬほどに起き出で、露のひぬ間の紅やゑりや紫の花ながめつゝ、朝飯すます趣をいひしものなる可きをば、入谷の里の植木屋の主人と同じう見られんとは、翁もかゝる句のこさざりしにならん。

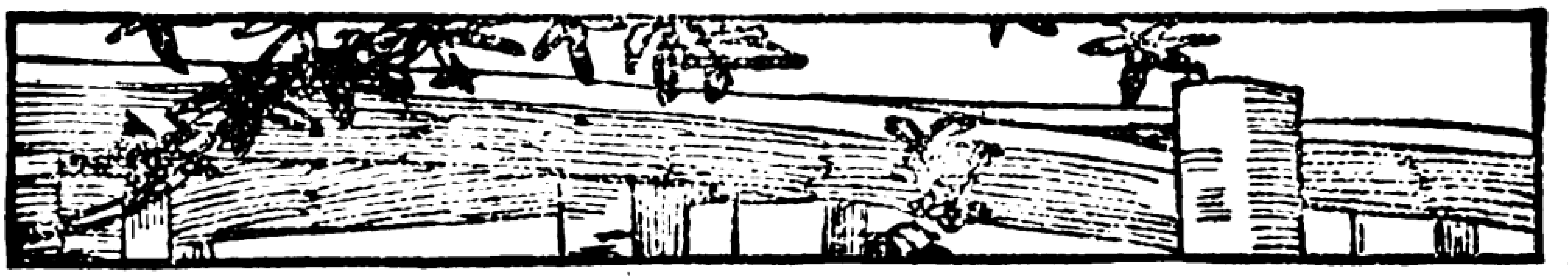
×

近頃この御隠居、蜜蜂を飼ひ初めたり。花多ければの思ひつきならん。さるからにその蜂、流石は慾深樣にやしなはるれば、あり餘る花の邸にあるに似ず花樹少き、我が家に飛びきたりて、咲き殘りたるうつぎの花に多く群れたり。そを見出したる婢、ほんとに憎らしい、箒でたゝき殺して遣りませうと云ふ。傍にありし妹、およしなさいうちの花から蜜を盗つて行たんですからつて、私お隣の小母さんに、それだけ蜜をいたゞいて來るわと云ふ。又そを聞きつけたる腕白の弟、馬鹿だなあ皆は、僕は母樣にさう云つてね、巣箱をこしらへるよ、さうすりあきつと女王がうちに引き越して來て、蜜をこしらへるからね、と。

三人が三人の智慧、いづれを賢しと云はん。

×

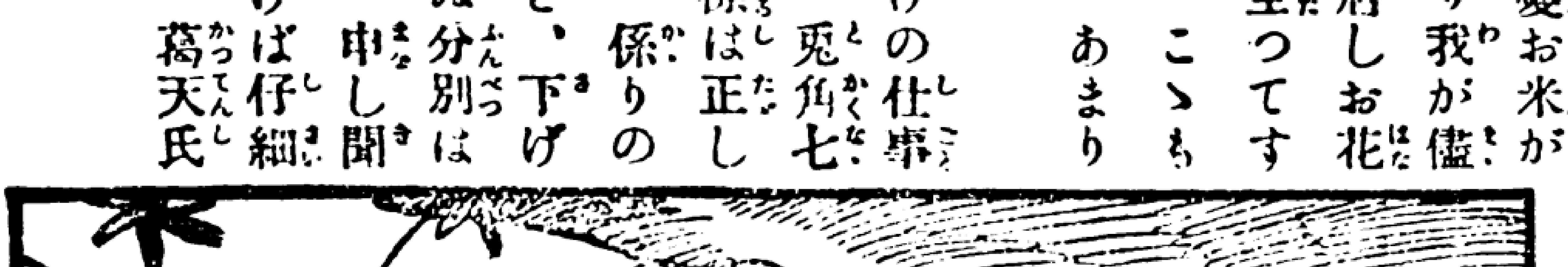


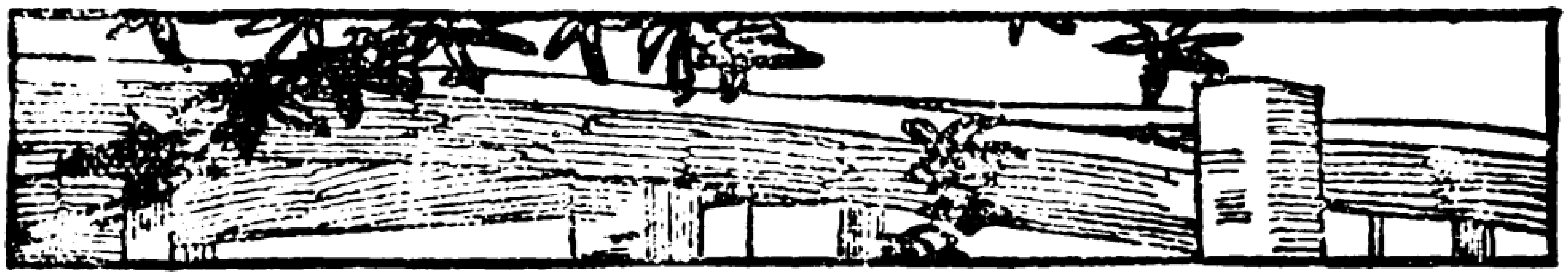


お花ちやん、そんなにお菜の叱言なんて云ふものぢやありません。この頃は大變お米が高くなつて御飯を喰べることさへ出來ない人があるんだつて云ひますよ。あんまり我が儘過ぎると罰があたりますと。母樣が諄々お聞かせになる言葉を、事もなげに聞き居しお花ちやんは、「御飯がたべられないんなら、お菓子やおいもを喰べてたらいゝわ」と至つてすましたものなり。今年十歳なるお嬢ちやんには、お米の相場も生活難も不景氣も、こゝもと何の痛痒もお感じなされぬのは、お無理もなき事ながら、聞かする役の母樣は、あまりの事に二の句がつげざりし。

これに似しはそれの大名華族樣、ある銀行の頭取遊ばされし時、銀行にお雇つけの仕事師ども、半季半季にいたゞく揃の仕着をば宵越の錢もたぬきほひ肌のもの共とて、兎角七つ屋の藏にしまひ込みて、いざ鎌倉の一大事、御用とありて勢ぞろひとなれば、標は正しけれど紺あせたる、さては又外所の半纒をまとひくるなど、ちぐはぐにて見苦し、係りの者ほと〳〵困じて、此方にそのまゝあづかり置きて入用の時着するはいと安けれど、下げわたす樣、しきたりしものなれば又さま〳〵と不平あらん。どうかして質入させぬ分別はないものかと首傾ぐるを、頭取きこして「うむ、それは質屋になど遣はさぬ樣、申し聞けたが宜からう」と鷹揚なる仰せなり。御飯が喰べられなければお菓子にてしのげば仔細なく、質草は何が故に入用かさへも御存知遊ばさぬ方々をしも、桃源境裡の住人、葛天氏無懷氏の民と云ふ可くや。

×



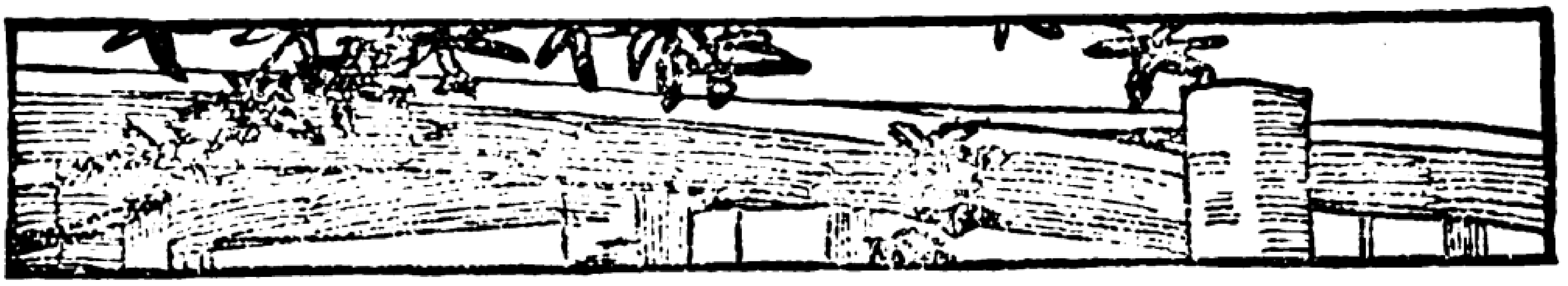


さほど、學校の成績めでたからぬ友がりおとづるれば机の上に、優等生勉强法、記憶術練習法なんど云ふ書のゝせられたる、まあ大變ねえと思はず口すべらせし我が顏を、友はきまりわるげに見てほし……しようがないんですよ。一生懸命に昨日までで、此方の記憶法だけは讀んでしまつたんでせう。よんで終つたことは宜う御座んすけど、始めの方はすつかりとつくに忘れてますの、彼れ此れする中試驗は來るし、盜人見て繩綯ふぢや、追つつきませんわ、えゝこれを工合よく實行する迄は前途中々遼遠で、いつのことだかわかりませんわ、とは心細き御詫かな、さうですわねえ. お藥の効能書許り讀んだからつて、病氣は平癒りませんもの、苦い味痛い思をしなければ、ほんとには行かないと思ひますの、現に學校でお習ひして居る事だつても、いざ實生活の上に役に立て、臨機應變自由自在に使用へる樣にならうつていふのは幾度も幾度も失敗もし、苦いきまづい思を繰り返してから後の事で御座いますわ、だからさうしてお讀みになつて置けば、即今目前に効能はなくつても、何時かお役に立つ時がまゐりますよ。あゝお腹が痛む、いつかよんだ効能書にあゝあつたからのんで見樣つて氣がつきます樣にねとさかしらに我云ひ退けて、末は二人して笑ひぬ。

×

とん〳〵ばた〳〵とんばた〳〵、大淸潔法施行せられて、我が住む町の邊りは、朝より物さわがしき日の午後、近所まで使に遣りし少婢、興ありげにかへりきたりていふ。お孃樣、私が只今某の町の共同井戸の傍を通りましたら、あの邊の裏長屋の山の神連が五六人



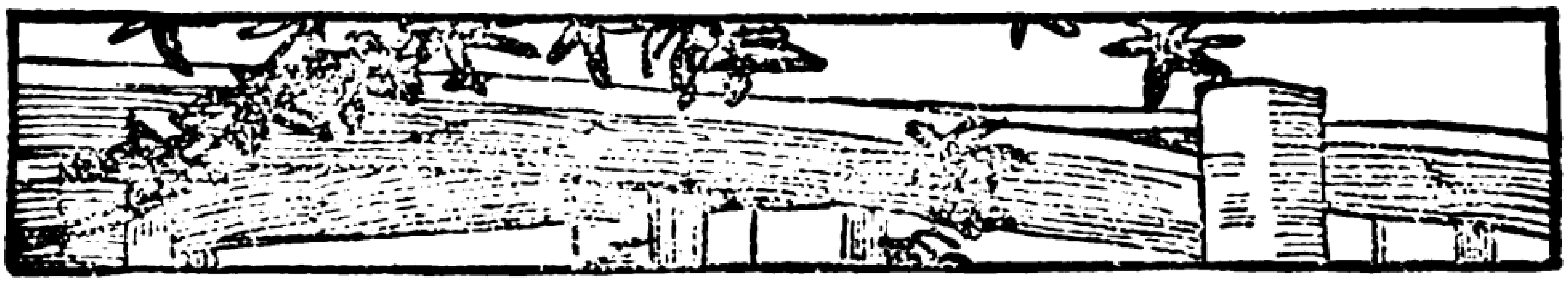


集つてたと思召せ、その中の一人が威たけ高になりまして、「何と皆さん、私だつて今はかうして居るけれど、元は近郷切つてのお大盡の娘だつたんだよ、毎年々々の暮には今日の様な煤はきで大さわぎしたんだが、私はほんとに煤はきがすきですきで待つてたさ、何故つて？、そりお疊をはぐると彼方からころ〳〵、此方からころ〳〵、一錢二錢白銅が澤山出たものだ、それを拾ふのが私達子供の役で、拾つたのは皆私達のお正月の小遣さ」と得意に申しますと、又一人が「はつ……、およしよ、そんなだらしのないお大盡があるものか、番頭だの帳面づけだのつてお大盡の處にはちやんとゐるからね、私達よりもお金は反つて始末がいゝものだ。一錢だつて五厘だつておろそかにするものか、それともお前さんとこは、お前さん見たいに長屋に零落れる人が生れたゞけにだらしが無かつたんかい」と、これも口から泡出して辯じ立てまする、すると今一人が「何あにさうぢやないのさ、熊さんの内儀の人は矢張り御大家のお子供衆さ・それも十六間四面といふ大御堂の縁の下に住んで御座つたのだらう。觀音樣の煤掃きには、お賽錢箱に入れそこねた錢があちらからもごろ〳〵、こちらからもごろ〳〵、其れをお堂守り樣が日頃の御功德にお施しになるんだよ、とこれは思ひ切つた毒舌・何だいも一度云つて御覽、よつて始めの内儀は怒り出す、周圍のは笑ふやら喚くやら、でもまああの手合はむき出しなもので御座りまするう、少婢はなか〳〵の話上手中休みにお茶のみてありし皆々、思はず噴飯しけり。

×

ある宿に名代の愚者ありけり。なすこともなくたゞはふれて暮しけり。人あり銀貨と銅





貨とを見せて、何れが好いと云へば必ず、大きいからと銅貨を取る、何といふ愚さと村人面白がりて午後のお茶時分には、必待ちに待つ程なり。こゝにある時行脚僧、泊り合せその話を聞き愚者を呼びて、村人のするらん樣に、銀貨と銅貨とを並べていづれにても好い方をお取りと云ふに、直ちに銀貨を取る、僧はさてはと思ひ、物蔭に呼びて、其方は銅貨がすきな筈ぢやにと聞けば、愚者にや／＼と打ち笑ひつゝ、いゝや私だとて銀貨の方がすきなのぢやけれど、銀貨を取ればそれ限り村の衆が愛想をつかし又呉れやしませぬ、お前樣はお坊樣の上旅の御人ぢやから私は銀貨を頂きました。何卒御情けにこの事を村の衆に云つて下されますなと云ひけるとぞ。愚者必しも愚ならずとはこの事か。

## 料理の最も進歩せる國

世界中で料理法の一番進歩して居るのは伊太利と佛蘭西であらう。之から見ると、日本人は實に粗末な食物によく滿足して居る。巴里や羅馬などで一寸した料理を出されても、何うして斯程に味い食物があるかと驚くの外はない。何ういふ物を食べさせるのかといふと、食物の材料は矢張り我々が食べて居るものであるが、唯だ料理の仕方が違ふ。佛蘭西や伊太利に行つて初めて料理法は日常生活上如何に重實なものかといふ感が起る。同一の材料を使つて、それを甘く食べるか、つまらなく食べるかは唯だ料理の方法一つである殊に社會が進み競爭が烈しくなるに從つて、食物の材料及び料理も當然進んで行かねばならぬ。さうでなくては迚も活動に堪へ得ない。





# 效果ある修學旅行法

經驗ある老教師

## 一　學校生活の三樂事

麗かな秋の日和がつゞいて、コスモスの花の咲き誇る頃となると、何れの學校でも、修學旅行を催すが常である。放課時間の芝生の上や、晝休の運動場などでは、こゝにも一團、彼處にも一團、生徒は皆一樣に、明るい秋の日を浴びながら、夢の如き旅の豫想を語つて、華かなる頰には、つゝむに餘る樂しさを漲らせて居る。

『何日頃でせうね旅行は』『貴孃もいらつしやるでせう』『はやく方面を知らして呉れゝばよいわね』『貴孃、海邊がよくつて』『海邊もよいが山も面白くてよ』『さうね、今年は何處になるでせう。──江の島、鎌倉、日光、函根、鹽原──まだ〳〵妾達の見ない所はいくらもあつてよ』

紺碧の空にフックリと泛んだ斷雲の行方をしても、話はすぐ旅行のことにむけられて、やる瀨なき待遠さは、小さき心を悶えさせる。變化と知識とを欲求してしばしも休止することを好まぬ若き人々は、自然の傾向として、單調な敎室の仕事の後で、變化多き旅に、異れる幾多の知見を求めようとするので、さながら、沙漠の旅に疲れたものが、遙にオーシスの影を認めたやうに、心の底に自らなる悅びの湧くをとゞめ得ぬであらう。何せよ修學旅行は、運動會や夏休とゝもに、學校生活の三樂事に數へられて居る程であるから、十月のころをきくと、學生の多くは、夜毎の夢を山紫水明の境に飛して、千秋の思ひにその日の來るを待つの

である。

　しかし、學校の旅行は遊山のための旅行ではない。平素教室で學んだ處を實際にたづね、見聞によつて活きた知識をもとめるとゝもに、日頃たくはへ來つた知識を實際に應用し得る機會を與へるを目的とする。限られた日數は極めて僅少でも、その間には、私の生活を離れて、共同生活の趣をも味はれる。同じ教室に机を並べ、朝夕袂を聯ねて通學する友でも、家郷をはなれての旅となると、その情味はまた格別なものである。長幼あひいたはり、師友あひいつくしむ美しき心は、知らず識らずの間に湧いて、知見の領土を擴むる以外に、教室內では迚も得られぬ道德上の所得も加へる。學校では、これらの所得を出來得る限り大ならしめ、なるべく旅行の効果を多からしめるやうに、各方面の注意を拂ふけれども、家庭に於ても十分之と力をあはせ、學生自身も準備や觀察に相當の努力を惜まず、身體に故障のない限りは、同行されるが得策である。

『可愛兒に旅をさせよ』と言はれた古人の訓も『百聞は一見にしかず』といへる語の眞理も、旅行を試みた後に、成程とうなづかれる。話が理におちると、興味をそぐ虞はあるが私は、教師の立脚地からみて、如何にすれば、修學旅行の効果を大ならしめ得るかを語らうと思ふ。

## 二　準備に意を用ゐよ

　教室に於て課業を授けられる時でも、その學課の豫習乃ち下調はして置かなければならぬ。下調が相當に出來て居らぬと、教師の說明をきいても、完全に理解し得ぬやうなことが尠くはない。斯くて、教授された所は、更に、その復習を怠らぬやうにしなければ、その日〳〵の學習も、眞の知識とはならないのである。すべての學課の學習に、豫習、教授、復習の順序が要するのは、人が肉體の養分をとるのに、先づ歯を用ゐて食物を咀嚼し、更に胃や腸の力をかりて、之を消化させるのと同じ樣な譯であるから、知識を求めるための學習に、豫習と復習を忽せにするのは、滋養物の鵜

呑とかはりはあるまい。そこで修學旅行を正課に準ずべきものとすると、これがために、豫習的の準備を要するはいふまでもないことで、學生が眞面目に、この準備をなすと否とは、旅行の効果を收める上に、大なる差を生ずることになるのである。尤も、旅行の前には、何れの學校でも觀察せしむべき事項を調査し、歷史地理の教師は史蹟と地理に關する講話をなし、博物の教師は、動植物等について必要なる説明を與へ、作文の先生は、觀察詳密ならしめるために宿題を課する樣に施設をするが、學生自身も、なほ、これのみに滿足しないで、その力の能し得る限りは、種々の研究を重ぬるがよからう。その方法は、




（１）書籍（參考）書によりて目的地に關する種々の事項を研究すること。

（２）旅行に經驗ある人につきて、目的地に關する研究をなすこと。

との二つがあるが、書籍についての研究は、歷史地理等を主なるものとするから、その受持の先生に相談して、何か、參考書の借覽を請ふがよからう。そして、

（イ）歷史に關すること　（ロ）地理に關すること

（ハ）博物に關すること　（ニ）殖產工業等に關すること。

といふ樣に、各方面にわたれる一般の調査をとげ、特に、觀察を要する點は、豫め之を摘記しておくがよいそれから、知人か先輩の中で、その地方を旅行して經驗のある者があつたら、更にその說明をきいて、書籍によつて得た所を確かめ、一面には、經驗ある人でなければ到底思ひうかべられぬ樣な細い注意にも耳を傾ける。これは、子女を有する家庭でも十分意を注ぐべきことで、なるべく見聞の效果を多からしめるやうに仕向けなければならぬ。旅裝等のことは學校により場合によつて同じやうにゆかぬから、こゝにとりたてゝ語らぬけれども、大體に於て次の如きことは必要であらう。

（一）携帶品は、他と紛れぬやう目印をなしおくこと。

（二）費用は學校にて定められたるものゝ外、餘り多くを持たしめざること。

若し、之を超へたる時は、その保管を教師にたのましむること。

（三）旅行中、身體に故障を生じたる時は、その旨を附添教師に申出で、適當の處置をこはしむること。

（四）宿泊先よりは、毎日、家庭にあてゝ旅況の通知をなさしむること。

（五）旅行中の見學は、詳細なる記錄となさしめ、歸宅後、父兄の許に差出さしむること。

## 三　眼と耳とを鋭くせよ

學校の施設と相俟つて、以上の如き努力を旅行の準備に惜まなかつたならば、目的地に於ける觀察に遺憾なかるべきはいふまでもない。目的地にあつては、先生からもそれ〲必要なものに對する說明もあらうけれども、路傍に笑ふ一莖の草にも、秋草に埋るゝ一基の斷碑にも一度眼を注いだ以上は、之を知り悉さねばやまぬといふ態度を持し、飽くまでも、二つの眼と二つの耳とを鋭くして、修學の目的にそふだけの研究をつ

づけなければ駄目である。史蹟だとか名所だとかいふものには、たゞうち眺めたゞけでは存外つまらぬ所が多いので、鎌倉あたりを訪ねたとしても、極樂寺口に戰歿した大館氏主從の墓を見落したり、東勝寺の址をとひながら、高時の「腹きりヤグラ」を見ずにしまふ者などが隨分多い。食後、隨意の散歩を許された時などには、なるべく土地の人に接して、その人の口からも傳說やら、いろ／＼の說明やらをきくも、有益なことである。附添の先生は、旅行地について、相當の調査はして居ても、もと／＼その地方で生ひ立つたものでない限りは、その地方については、土着の人程に知識は無いかも知れぬ。小學の教師、神主、僧侶などは、この點について、親切な指導者であるから、之を利用することを忘れぬがよからう。「つれ／＼草」にかういふ話がある。ある坊さんが、齢の傾くまで、石淸水の社を拜まなかつたから、急に思ひたつて、たゞ一人、徒步で出けかた。かくて、いよ／＼男山にゆきついて麓の方に在る極樂寺や高良などゝいふ末社末寺を拜んで、石淸水參拜はこれで濟んだものと思ひこんだからそのまゝわが住む寺に踵をかへした。そして、日頃親しうせる友に對つて「年來の宿望を遂し得て、この位嬉しいことは無い。かねてきいて居たよりも神さびた御社で、いかにもたふとく拜まれた。それにしても、參詣の人々が山の上に登る樣だつたが、あれは何のために上つたのやら、拙僧も一覽したいとは思つたが、神に詣づるが本意ぢやから、そのまゝ歸つて了うたちや。一體、山の上には何か催でもあつたであらうか」と物語つたといふのである。作者の兼好法師は、その終りに附記して「何事にも先達はあらまほしきわざなり」と筆をとめてをるが、修學旅行の先々で、眼と耳とを働かせぬ人は、男山詣の坊さんと同じやうな失敗をかさねぬとはいはれまい。故に、目的地に步を入れた時は、豫ての準備を基として、出來うる限り完全な觀察をとげ、二度來てみる必要のないまで遺憾なき踏査をしておくがよいのである。歲の若い人々などは、その春秋に富めるを誇りとして、再び來てみられるか

らなどゝ言ふ人もある樣だが、男と違つて、女の生涯には、その自由を與へられぬ場合が多い。一度一家の主婦となると、十中の八九までは、眼に見えぬ絆に縛られて、萬事心にまかせぬことが多いものである。それから、いま一ついふて置かねばならぬことは、史蹟などを訪ふ時の心の持ち方で、現在眼に見ゆる總べてのものは、感興を惹かぬやうなものでも、想をそのかみに馳せ、その人なりその事柄なりを目前に思ひうかべると、回想によつてうみなされる幾多の興味は、心の底から泉の如く湧きあがつて、何ともいへぬ一種の趣味を覺えるものである。たとへば、稻村が崎に立つた場合などに、此處は義貞が黃金造の太刀を投じて捷を海神にいのつた所だといふのみでは、一向つまらぬが、ひとたび元弘の昔にかへつて、その年の五月の末の有樣などを思ひうかべたなら、松風の音も矢叫びにまがひ、寄せ來る浪も人馬のをめきに通はせまいか。鶴が岡の社頭から、由井が濱に通ずる若宮の小路は、七百年の昔、頭大公賴朝もしば〳〵通はれた處ではないか。老松の間に聳ゆる一の鳥居も、曾て西行法師をたゝずましめた所と傳へられる。賴朝が之をみとめてその名を問はしめた時はどうあつたらう。東勝寺の裏山から鎌倉の大半を下瞰し徐に梟雄高時の敗滅の昔をしのべば、一塊の土にも古き歷史の俤を見出しうるであらう。『國亡びて山河あり』の趣に對しては、俳人芭蕉も『夏草やつはものどもが夢のあと』の吟をもらしたうち眺めたる處に眼をひく程のものはなくとも心眼を開く時は、いつも深き印象を腦裏に刻み得る筈である。名所舊蹟などを訪ふ時は、誰でも、この心掛を忘れぬやうにすると、そこに無限の感興を覺えるから、之に對する觀察もおのづから詳密を極めることになるのである。かくて、これらの觀察は、その要點に摘記して置いて、紀行文を綴る資料にあてる。路傍にあつた農夫の服裝にも、鋭い觀察の眼を睜り、路をたづねた賤の女の詞のはしにも、耳をたてるやうにすれば、こゝにはじめて効果ある旅行をなし得られる。心あひたる友と、心ゆく物語をなすは、旅行先にての樂みではあ

るが、興をこの方面にのみ求めると、教師の說明をきき洩すおそれもあり、また觀察を疎略にする傾をも生ずる。これは、お互につゝしむがよからう。

## 四　旅宿にてなすべきこと

草枕旅の宿りをもの憂きものに數へたのは、遠き遠き昔のことで、交通機關や旅宿の設備が完備せる今は、旅を樂しみの一つに數ふるにいたつた。修學旅行の折などは、ことに、この樂しさが深く感じられるので



うち開けた高樓の欄によつて、今日の見聞の樣々を語る人もあれば、小さき手帖に感想のいろ〳〵を記入するものもある。をさなき妹にと買ひ求めた土產を珍らしげにみまもる人の側には、名所繪葉書に友への音信をしたゝめて居る人もある。入浴の時はいはずもがな食事の時も、就眠の時も、嬉々たる談笑のやむ時は無い程であるから、いはゆる旅の哀愁を味ふことは出來ぬけれども。その間には、旅の經驗なき人の味ひ知ら

ぬ快味を覺えるものである。しかし、もと〳〵遊覽の爲めの旅行とは性質を異にしてをるから、斯る談究の間にも、相當に力をつくさねばならぬ仕事がある、それは、

(1) 觀察の要點を摘記しおくこと。
(2) 家庭への通信をしたゝむること。
(3) 携帶品を整理しおくこと。
(4) 足部に靴ずれ又は肉刺等を生じたる者は、便宜その手當をなしおくこと。
(5) 明日の行程について、一應の調査をなしおくこと。
(6) 攝生を重んじ、湯、茶、果物等を貪りとらぬやうにすること。

等である。このうち、第一の、觀察の要點を摘記するのは、いはゞ旅行に於ける復習的の仕事で、觀察した事項について明確なる印象を殘すの便あるばかりか紀行などを綴るには、これが唯一の資料となるものである。第二の家庭への通信といふは、その日その日の旅況を報ずるためで、安否を氣遣ふ父母への禮儀をつくすとゝもに、手紙をかく實習をなすことになるのである。手紙をかくことは、教室の課業として一通りは教へられても、學校生活の間には、之を實際に應用する機會を得がたいから、かゝる際に之を試みるは、一擧兩得の頗る有効な仕事と見なされる。第三にあげた携帶品の整理は、他の所持品と紛れるのを防ぐためであるが、中にも金錢の取扱ひは、特に鄭重にして置かねばならぬ。自己の不注意から之を失うて、他を恨み他を疑ひ、幾多の迷惑を同行者にかけるやうなことはその例に乏しからぬ事であるから、お互に之をつゝしむがよからう。第四の足の故障は、旅行するに最もこまることで、一個の肉刺がつぶれたゞけでも堪へえぬばかりの苦痛を覺えるから、靴などが足にあたる時はその部分に紙をはさむか、靴下をはきかへるか、或は「スキ油」をぬるかして、足の方にも絆創膏のやうなものでもはりつけるが宜しい。第五と第六とは、いふ迄もないことだが、興に乘りすぎるとこの注意を怠るにいたる虞があるので特に之をあげたのである。この他自由散歩をゆるされた時などに、その地の名物を求めて、家庭への土産とする如きも亦面白いことである。

それには、飲食物よりも器物がよい。これがまた旅行の記念となつて、長き思出をつなぐものとなるであらう。たゞし場所によると、奸商などが格外な價を貪らうとするから、之に乘せられぬだけの注意は必要なものゝ一つであらう。

## 五　紀行の整理と旅行記念帖

いづれの學校でも、修學旅行の後では、必ず紀行をかゝせるやうである。旅行の後に斯る仕事を課す事はたゞに文章の稽古のためといふばかりでは無く、一種の復習として旅行中に觀察したことを記述させようとするのである。しかし、やゝもすると、之がほんの義理一遍のものとみられて學生の多くは、之に對する努力を缺くやうな傾きがあるのは感服しがたいことである。尤も、文章を綴るに拙劣なることは、現在の學生が、一般に有する弱點とも見られるから、つまりその仕事に興味をもたぬ結果かも知れぬが、旅行の後に紀行の整理を行はぬやうでは、所謂功を一簣にかくものとなつて旅行の效果の大半を失ふであらう。旅行後、學生の手になつた紀行などをみると汽車汽船の發着表のやうに時間と場所とのみを列記し、「それより」「これより」などゝいふ詞を用ひて、その間をつないだのが大分ある。これらは材料の取扱になれぬ所から起るのであるから、紀行をかくには豫め觀察せる事項を一つ一つに別けて書くがよからう。前に鎌倉の例をとつたから、こゝにもその例を鎌倉にもとめると、普通の記行ならば何月何日に鎌倉に到つたことより筆を起して名所や舊蹟を巡覽した有樣をかくべきであるが、それを部分的にするには、

(1)極樂寺口　(2)稻村ケ崎　(3)長谷觀音
(4)大佛　(5)龍ケ岡　(6)賴朝の墓
(7)賴朝の館址　(8)懷古展覽會　(9)鎌倉宮
(10)若宮小路　(11)東勝寺

といふやうな題目を設けて、これに關する觀察や所感を記述すればよいのである。記述を部分的にすると、觀察もおのづから詳細となり記述の筆にもその人の創意を認めうるやうになるから普通の記述にまかせて置

くよりも優秀な作品をえられる。とにかく材料の取扱をかういふ風にして觀察せるすべてを記述し了へたら再三之を通讀して、自分の力で訂正しうるだけは、まづ之を訂正してみるがよい。古人も文章に上達するには「多讀、多作、多改」の三つにあると敎へてある通り多く改めることはたしかに文章に熟する方法の一つである。復習的の仕事として學生がこれだけの勞を拂へば、旅行の効果を收めるに遺憾はあるまいと信ぜられる。それから後日の記念として面白いのは、「旅行記念帖」をつくることで、それには、あらかじめ一冊の畫帖やうのものを求め敎師や同行の友に何か一つづゝ書いて貰ふやうにするが宜しい。寫生畫でも詩でも和歌でも俳句でも感想をつゞつた短文でも巳むを得ずばその人の姓名の自書のみでも差支ない。そしてある頁には自分の詣でた神社佛閣の印を捺し、ある頁には、その緣起を貼り、ある頁には名所や舊蹟にて摘み取れる花の一片をつけ、ある頁には繪端書や名物のペーパーを貼つて置く。多少取捨選擇に意を用ひると、これがまた得やすからざる好個の記念となるのである。旅行の趣味は半ば回想にあるので、學校生活を了へて家庭の人となつた後も、一度その頁を繰れば、師友手を携へた當年の記憶はどれ程の慰藉を與へるであらうか。その人の境遇によつては、家庭の人となつてからの再遊も期せられやうが、學校から旅行した時だけの人がうち揃うその樂しみは、長き生涯に再びしうる機會はあるまい。この點から考へると、この種の記念帖をつくるも强ち無意味なことゝはいはれまい。若き人々よ、願くばすべての行をして意味あらしめよ。これぞその人の生に大なる意味を附與する基ではないか。





# 同志社の女學生

京都同志社女學部舍監　富森幽香子

## ▲ミッションスクールとは違ふ

同志社は創立者の新島襄先生が基督の精神を本旨として設立したもので、創立當時は、傳道に重きを置いた男子即ち宣教師や牧師を養成する傍ら、其人達の配偶者として內助の功を擧ぐるに足る女子をも教育したのですから、男子教育の方が主で、女子教育の方は從と云つたやうな關係であつたのです。

さう云ふ趣旨ですから、最初は通學生よりも寧ろ寄宿舍生に重きを置きました。朝夕の祈禱や、集會にしても、基督の精神を養ふのは寄宿舍に居るものでなければ、どうしても都合が惡るく、教室で數時間教授しても、それは主に智識に關してのものゝみですから、宗教の感化といふとになりますと、數時間の教授だけでは迚も不充分です。今日でも、寄宿生の方が、自然に感化が行屆いてゐるやうです。朝夕の講話にしろ、日曜の禮拜、聖書の研究にしろ、日曜學校等に對しても、通學生に比較して大いに其差があるやうです。

寄宿舍には舍監は勿論、他の教師、外國婦人が常に注意してクリスチャン的の感化を充分に及ぼさうと努力して居ります。さらばと申して、他にはミッションスクールに屬する女學校も澤山ありますが、それとは大に趣を異にして居るのであります。是等他の女學校では、校長既にミス何々と云つた外國婦人の宣教師が多く、常に其の外國人が主權を握つて居るのですが、同志社では曾て宣教師排斥の運動があつた時代があつ

たので、それが動機で、多數の外國人は歸國し、爾來再び來た宣敎師もありましたが、要するに內外協力して國民敎育に重きを置くやうになりました。ですから基督敎の或る一派を主としての傳道的特色を發揮すると云ふよりも、國民的敎育そのものに本意を傾けるやうになつたのであります。これは創立者新島先生初め出身者先輩の希望する處であつて、他のミッションスクールと其の趣を異にして居る點であります。されば私共も、基督の精神を及ぼしたいのは勿論でありますが、幾分か手加減するやうになつて來るのであります。現今、在學年限は普通科五年、高等科三年、都合八年です。いづれも基督の精神は有つて居ますが、前に申したやうな譯で洗禮を受けて居らぬ者も澤山あります。

▲文學かぶれの女學生

在學中宗敎に不眞面目なものもありますが、何時か感化を受けるものと見えまして、卒業後少時しますと、可なり眞面目な信仰に這入つて參ります。

現に或る生徒などは文學趣味に醉はされてゐたので、宗敎の方は極く不眞面目でした。私がその生徒の將來を氣づかつて、文學もよろしう御座りますが、思想淺弱の文學は餘り感服しませんから、も少し眞面目な事をされてはどうでせうと申しましたが、其生徒は其後矢張り文學にばかり耽つてゐました。所が或る動機から救世軍の士官になつて、打つて變つて眞面目な人になりました。本人自身もさう云つて居たさうです。莫迦らしいことをした、同志社の八年間を不平で過ごして、僅かの文學に興味を以てゐたのは今更ら面目ないとをしたと、同窓の友人に向つて述懷したさうです。私は恁んな話を聞く度に、大いに私自身の慰安となるのであります。

▲リボンの幅の廣狹は問はぬ

同志社出身の婦人は質素で、しッくらして居ります。私は五年前から京都に參つて、此の限られた校內生活

で寄宿の女學生を監督して居りますが、私が就任當時でした。一理事者の仰有るには、どうも一體從からだから、少しハイカラにする心持です手加減を賴みますと申されました。成程さう云へば、すこし當世向からは質素過ぎるやうに思はれます。併しこれとても京都府立の第一、第二の如きやうに衣服なり、洋傘、袴、リボン等の制限したわけではなく、單に心の内に質素と云ふ意義を吹き込んだ爲めなのです。當校では、リボンの幅が狹からうが、廣からうが、そんなことは決して八釜しく申しません。

▲稍々控目主義

普通科から高等科にかけて前後八年間づッと同志社のみで育つたものと、神戸や大阪の女學校を出たものが、中途から高等科に這入つた者とは比較して見ますと、東京は云ふに及ばず、神戸や大阪で育つて來た者よりも、餘程質素で氣がきゝませぬ。マア惡くいへば鈍いとでも云ふのでせうが、私は斯うした鈍いのは、喜びこそすれ、惡いとは思ひませぬ。

例へば語學に於ても、五年八年の修業ですから隨分讀書の力もあるやうです。シッカリ頭に入つて餘り間違つた事は書きもせねば、言ひもしないのですけれど、それを巧者に振りまはしてペラ〳〵器用に働かすと云ふよりも、精々出來る限り働かさぬやうに控へ目にしてゐるやうです。

それから、或る集り、日曜の禮拜、金曜の祈禱、其他內外名士の講話に際して、男子部と女子部と一講堂内に同席することがあります。この男女同席に對しては、懸念なさる方もありませうが、男子部は存外保守主義でもあり、且つ女子部も精々控目にしてゐるので、其等の懸念は更にありませぬ。

この講堂でも、まづ男子が出た後でなければ女子は身動きもならぬと云ふ風になつて居ります。ですから他の人から見ますれば、歯痒ゆく思ふ位だらうと存じますが、私共は却て今日の女子教育として、さう云ふ傾向は、決して惡くはないと思ひます。斯ういふ風に

奥向きの方をシッカリして餘り派出にならぬ風にと云ふ傾きが、自然に習性をなしてゐるかとも思はれます。

▲歐米婦人にも笑はれぬ準備

恁んな風に質素過る位ですから、社交などに對しては餘りに保守的に傾きはせぬかとの疑ひもありませうが、同志社では内外名士の訪問が多いので、隨て御一緒に會食する機會が格別多いのであります。此の時には之が接待やら、料理やら、主客打交つての會食の間に將來大舞臺に出るやうな機會があつても少しもおびえぬ素養と用意とが作られるのであります。幾ら質素の控目のと云つても、一旦社交の大舞臺に立てば、歐米の婦人にも笑はれぬだけの準備はあります。いつかも文部省の高等官が見えられたとがありましたが、其の接待ぶりが如何にもみり〳〵と素人ばなれがしてゐるので、不思議さうにして居られました。此點に關しては二十年來同志社事業に盡瘁されてゐるミス、デントン孃の功績を賞揚せなければなりません。寄宿舍は飽までも家庭的にして居りますが、殊に專門科の者に對しては經濟全部を任せて見る積りで、目下之が準備をして居ります。現在の女學生は普通、高等兩科を合して二百名、内八十人が寄宿生活をしてゐるのであります。卒業生は創立時代に溯りますと、海老名さんや宮川さん初め牧師の奥樣になつた方は勿論澤山ありますが、内田外務大臣や長谷場文部大臣の夫人も亦たさうであります。今日では已に社會に教育方針を認めて居りますから、入學者も卒業生も社會の各方面に行き渡つて居ります。

京都は山にも水にも平和な女性的の背景がありますし、人情風俗、歴史的趣味と美術的趣味の多い土地柄ですから、此の天地と空氣の中で、しツくらした落着のある平和の女性美を養成するのに、人爲以外自然に觸れるとがまたなき仕合と存じます。



# 繪物語 波の夢

太田三郎

風に依つて結ばれたる水の上の赤縄。

昔、支那に呉君といふ人がありました。福州と云ふ所の太守に任せられて居りましたが、期が滿ちて還ることゝなり、家族を率ゐて其途に上りました。

それは洋々とした大江の浪に、幾日かの枕を重ぬる舟路でした。——匂やかな物語は此美しい滄波の間に起つて來るのです。

呉君には姿の麗はしい、心の慧い一人の娘がありました。何か知ら絶えず變化に刺戟せられずには居られない年頃の女は、行つても行つてもたゞ黄緑の水ばかりの朝夕に、殆どうんざりして居りました。

ところが或時——一行の船が順風を待つて、とある港に碇泊して居た時のこと、さうした狀態にある心は遽にはつと躍り上るやうな事に遭遇しました。

讀書に倦んで不圖船窓の外に投げた瞳が、思ひも懸けず、丁度其處に泊つて居た船の中からじつと此方を見詰めて居る異性の、華やかな瞳とぱつたり合つたのです。彼女は驚いて颯と帳を下しました。が、刹那に深く感得した其瞳の輝きに妙に唆られて、更にそつと物陰から偸み視ると、それは宛で繪のやうな、否繪も及ばぬほど美くしい青年でした。單調な夏野の路に不圖見出でた白百合の花、女の心は時めかずには居られません。ひた〳〵と寄せる潮のやうな春の思ひに、ふくよかな肌を顫動させる處女は、じつと瞬きもせず帳の隙に眼を當てたまゝ、つい恍惚として了ふのでした。

思ひ倣しか彼方も亦それと推したやう、絶えず流眄に此方を窺ふ其擧動に、溢れるやうな艶めかしさが見えるのでした。けれど幾百ともなく相逢ひ相別れ去る

船の窓に、ただ假初に見合した瞳と瞳の、もとより互の所も知らねば名も知らぬ間柄です。どうしてさうした思ひを輕々しく傳へる事などが出來ましやう。女はいひしとわが身を抱き締めて、押へ難い自然の情の發動に悶え苦しむ許りでした。と、折柄男は不圖此方の船の舷で衣を濯いで居る下婢を認め、何思つてか急いでそれをさし招くのでした。

やゝあつて、下婢は一葉の紙を手に、あたふたと女の室に還入つて來ました。

「お隣りの舟の方が、つい此字を忘れたから敎へて頂きたい、と係う申ました。」

見ると成る程それには一二の難字が、麗はしい手蹟で書かれてあります。けれどあの才學の豊かでありさうな人が、どうして之れしきの字を識らぬ事がありましやう。彼女は直ちに其難字の裏面に齎された使命を覺つて、思はず颯と双の頰に紅潮させるのでありました。軈てそれは、包み切れぬ歡喜と誇りとに雀躍りする手に、一々細註せられ、且つ豈有秀才而不識字者と書き添へられて下婢に渡されました。

すると、果して下婢は復一紙を携へて戾つて來ました。この度のは春詩一絕。慮りある彼の青年は、最初の試みに依つて女の意の何處にあるかを知つたのでしやう。



空復消吟托㆓臭烟㆒　樊姬春思滿㆓紅船㆒　相逢何必藍

橋路休レ負滄波好月天

潑剌として火焔のやう紙上に迸る文字に、女はもう目のあたり男の熱い血潮に觸れるかのやうな思ひ、直ちに又激しい情を筆に籠めて

自是芳情不レ戀レ春
春光何事慘ニ閨人一
淮流清浸ニ天邊月一
比似郞心向レ我親

凭うなつてはもう九天直下、其終極の事にまで到達せねば滿足し切れぬのが戀情の常です。終に二人の間には今宵を期する約が結ばれました。

蒼茫たる夜が四周の水



を覆ふまでに、彼女はあはれ幾度日の歩みの遲さを喞ちたことでしやう。月を待つと稱して宵闇の欄に上つた女の、常にも增して美くしく粧つた面は、嘗て經驗せぬ事に向つて抱く處女の好奇心と、期待と、而して恐怖とに緊張し切つて、碎けては碎けては暗い水に流れる星の影や、ぽたりぽたりと舷を打つ波の音に、ぱつと一時に花咲くやうな、又じめ〳〵とした陰影に吸ひ込まれるやうな、名狀しがたい一種の感觸を味はされるので

した。

する中漸く夜も更け人も定まつて、月の出前の東の空にぼつと薄明りする頃となりました。、、つと彼方の船にすつきりした外廓の黒影は現はれました。して、、、はつと思ふ間もなく此方へ飛び移りました。

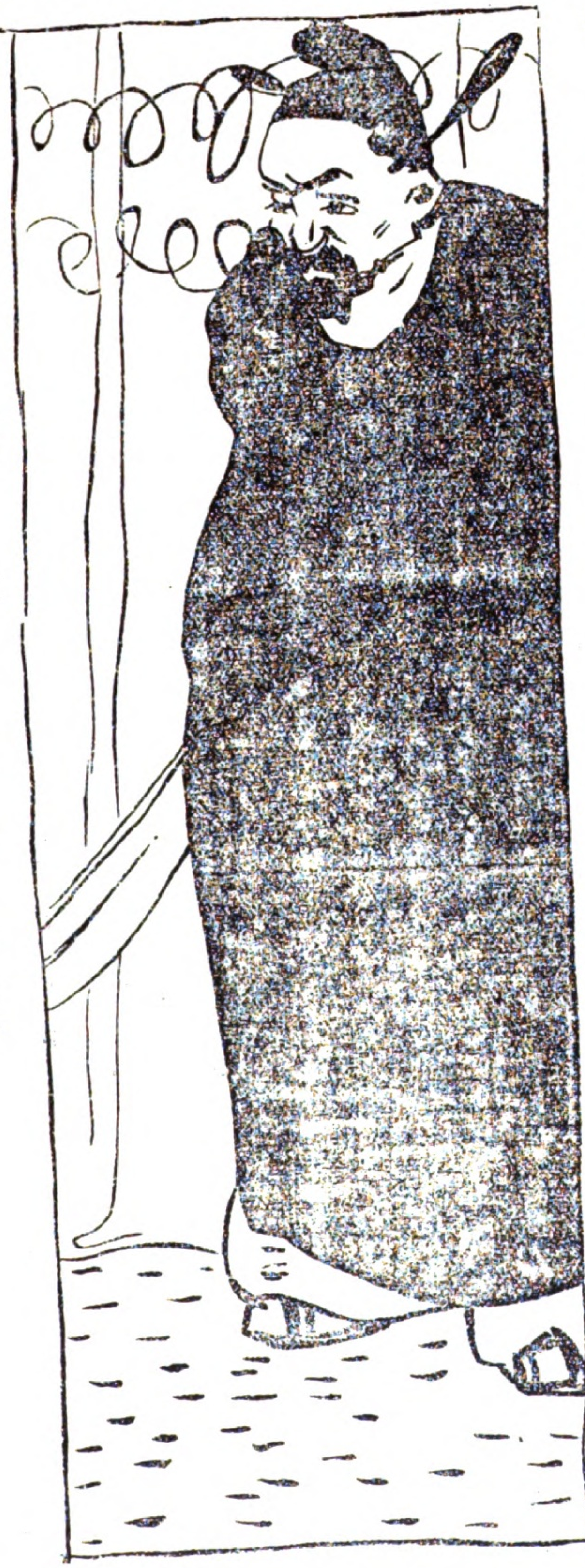
女は今更ながら一入激しい羞恥に頬が火照る、と感じたが最後、後は宛で夢中です。いきなりひしと其黒影に縋つて、轉ぶやう己が部室に入りました。……折柄窓外には今しも月が上つたらしく、白い爽やかな光は翠の帳を洩れて、夢のやう春深い歡樂に匂ひかゝるのでありました。

後朝はやがて來ました。逝き逝きて又逝く水の上に、二人は恁うして一夜を睦み合つたもの、一朝風便にして各自の船を開いたならば、又何日の日にか相逢ふ事が出來ましやう。それを想ふ二人の涙は頬に胸に袂に雨と落ちて、互に握り合つた手と手とは、宛で膠せられたものゝやう何時分たるべくもありませんでした。が、する中にも時は容赦なく消えて、今はもう家の人等の起き出るに間も無い時刻となりました若し萬一に見咎められた其時の拙なさを想つては、これ亦じつとしては居られません。男は漸く女に送られて其部室を出でました。



と、こは如何に、男の舟は何處へ去つたのやら其影さへも見えません。加之、驚愕の四つの眼を更に驚か

したのは、周圍の風物が昨日のそれと全く異なつて居ることです。今にして思へば、二人の船は、昨夜二人の夢が濃やかであつた頃、折しもの順風に遽に纜を解いて、東西遥かに相分れたのですけれど、ひたすら蜜のやうな甘さに酔つて居た彼等には、少しもそれが氣附かれなかつたのでした。――なほこれは後日に到つて知り得た事ですが、丁度二人が當惑の體を舷に立たせたと同じ頃の時刻に、分れ去つた彼方の船に在る男の父は、其子の影の見えぬのを水中に墜ちたものと斷じて、船を返して遺骸を水に求めたのださうですが、さうした事などは勿論此場合の彼等の夢にも知らぬところでした。



二人は遽に慌て惑ひ出しました。併し今となつてはもう施すべき術がありません。悒鬱々々する中愈ゝ家

人が起き出しましたので、男女は倉皇として兎に角に元の室に戻りました。かくて男は其處に晝は身を榻下に隠すこととなり、夜は衾を同じうして幾日かの朝夕を明し暮しました。命を繋ぐ糧は女が潛に己が料から割くのでした。不自由な氣懸りな生活ながら、然もなほ夜毎に甘い情の酒に潤ひ得るのを却て喜んで、今は結句この航路の何處までも何處までも續けかしと希ふのでありました。

併し匿すより顯はる。茲に一波瀾は起りました。此日頃たえて其室を出です、又遽に食量優に二人を兼ぬるやうになつた女の擧動が、母親の緻密な頭を傾けしめたのが緒となつて、秘密は厳格な父にまで知れました。可惜しい青年はむんづと髻を掴まれて、するくと榻下から引摺り出されました。



怒目鯨鬣の父呉君は、ひらりと寒い鋭利な刃を手に、はつたと二人を睨め付けました。——じつと觀念の眼を閉ぢて身動きさへもせぬ美少年と、ただもう身を投げ出して泣き叫ぶ娘と、——憎い憎い二人……併しあゝ何と云ふ美くしい男だらう。而して身を切らるゝやうな、愛孃の傷ましい泣き聲。刃は幾度か振り翳されましたけれど、何時も力なく下されるのでした。憎惡、愛憫、痛苦、と云つたやうな表情は、旋風のやうに老いたる父の顔に去來しました。が、少時してぱたりと刃は船板に投げられました。

「娘はお前に呉れてやる。」

泣くやうな聲で恁う叫んだ老人は

「えッ！」

と驚喜する二人の手を固く握り合はせて、ほつと深い吐息を洩すのでした。

其翌日のことです。突然船尾に當つてけたゝましい叫び聲が起りました。驚いて船人等が馳せ集つた時には、其處に一人の美くしい青年が舵上に罹つて、頻りに救ひを求めて居るところでした。直ちに援け上げて種々と恤りながら仔細を質しますと、渠は誤つて陸より水に墜ち、將に溺れ死なうとして居るところを、幸ひにも通りかゝつた此舟を認め、死力を盡して恁うして此一端に縋り得たとの事でした。折柄、呉君も亦騒ぎを聞き附けて、慌しう馳せて來ましたが、一瞥してはつと驚いた樣子、

「これは俺の友人の息子じや。」

と底深い眼を奇遇に睜らせました。



溺れ死なうとした青年は、呉家の賓客として船中に厚く待遇せられました。夫人や令孃にも紹介せられました。——併しこれは、一意世の名聞に心を惱す貴紳の老人が、船中の人々を觀客として演じた一齣の芝居です。溺れかゝつた青年とは、云ふまでも無く彼女の情郎でありました。かくて呉君は彼の青年をして、周圍に何等の疑惑なしに船中の人、而も憚りなく女に接近し得らるゝ人たらしめ、且つ毫も自家の名譽を傷くる

事なしに娘の意を滿たさしめる伏線としたのでありま
す。

二人の結婚は、船が濟州に抵るに及んで盛んに其式
を擧げられました。宴に與つた人々、誰一人として此
好一對の繪のやうな新郎新婦を讚美し、末長い未來を
祝福しないものはありませんでした。

それにしても、若しあの夜に順風さへ起らなかつた
ならば、二人は永久に相分れ去つて、恁うした結末を
見るには至らなかつたでしやう。靈妙不可思議なもの
は、天地の間に自ら運命づけられたところの、男女の
緣ではございませんか。

## 亞米利加の下女

亞米利加の下女は日本の人情風俗から見て著しい相違のある點がお慰みである。日本にも井戸端會議がある通り亞米利加でも五六人の婦人族に心隔てなき中流社會の細君連が寄り集まると必ず姦しい噺を出す。別けても話題となるのは必ず子供と女中の二問題である、子供の話は別として扨て女中問題になるとそれはくくいろくくの苦情を聞く、どうも此節のやうに女中に威張られては一體此先きどうなる事やら誠に心許ないなどと云ふ成程今日の樣で見ると女中の大多數は雇主から及ぶ丈け絞り取る事を工夫し仕事は成べく狡猾く構へて骨惜みを唯一の目的として居るやうである。中には毎夜の夜遊びをよい事にし、的もなく夜中何處彼處と彷徨いて來るのがある、約束は一週間三晩の夜遊を許すことにして置いても扨て實際となると否應なしに毎夜の外出を主張するのがある、又その、言草が宜い、夜分お内儀さんがお留守に御出なさるのに何も私が居なくとも差支ないぢやございませぬか、それに夜分はお客様もなし、若し不意の來客があつたにしろお内儀さんさへ御宅なら御自身でお取次も出來ると云ふもの殊更私などの居らぬでものこと、假しや夜遊びに出たところで翌朝の御間に合ひさへすればそれで宜いではございませぬか、終日汗水垂らして臺所仕事をしながら少しも骨休めもせず其儘下女部屋に閉ぢ籠るなどは餘り氣の利いた話では御座いませぬ、と先づ斯う云ふ事を平氣で言つてのける、成程淡白で面白い、それが御不承とあらば何時でも御暇を頂きたいと來る、誠に要領を得たものである、尤も皆のみな迄が斯うだといふ譯ではない。

紐育通信

# 婦人避暑の貯金會の景況

並木英子

暑氣にあてられて、死ぬ人さへあると聞えた紐育の夏を、初めて迎ふる私には、堪へられるかどうかと案じたが、今分では東京と、さして差異はないやうに思はれます。只、建物の樣子が全然違ふので、部屋の位置に依つては、空氣の流通が惡るくて、呼吸もとまる程の場所があります。

中以上の者になると、七月の始めから大概避暑に出かけるが、一月二月の暑熱をさける餘裕のない者でも、一二週の田舍行を企てるので、毎日の新聞は避暑地先の廣告で賑はしい。誰でも費用少くて、面白い場所をと希望するものゝ、新聞廣告位では、細々した點が不明ぬので、適當な土地を搜しあて、いざ出立となるまでには可成りの苦心が要るのです。殊に若い婦人が保護者もなくて旅行する場合などには、特更、安全な地を望むので、この必要に應ずる爲め、紐育市では、避暑貯金會といふものが設立られました。これは相應な避暑地を選定び、之に要する費用として、ふだん少額づゝの金錢を貯へさせる仕組なのです。

市民協會の婦人部では、去年の夏、避暑委員を立て各地の避暑地の中から、衞生と便利と安價とをかねた場所を委しく調べさせ、一冊の本に綴つて配布したさうです。處がその冊子を見て各自好な所に旅行した婦人が五百五十人もありました。それに一般の評判がまた非常によかつたらしい。

この好結果を見て、今年は一層事業を擴張げ、大勢の婦人に避暑の便利をあたへたいといふ目的で、昨年十一月頃から避暑貯金法を開始めました。

之は職業に從事して居る婦人連が、その給料の中から毎週少額づゝの金錢を割いてそれを蓄めおき、避暑に行く折の費用に充てるのです。

一週、十仙づゝ五十週間貯蓄すれば、五弗となり、

田舍に一週間の滯在が出來るし、少し奮發して、二十五仙づゝ五十週貯ふれば、二週日の避暑費には充分である。

貯金には三つの方法があります。

一、避暑貯金事務本部

毎日午前九時より午後五時迄。但火曜日は午後七時より九時迄の間に受付ける。

二、支部

之は市中の大商店、事務所、工場等に設けてある。




三、十人以上の婦人は其合意を以つて支部を設置することを得る。此の場合にはその中より一人の事務員を選ぶこと。

右のやうな仕掛けで集めた金は、銀行に預け二分五厘の利子が附くけれども、之は印刷費、郵税費、事務費などに使ふことになりて居ります。但し貯金の拂戻を請求する時には、一週間の豫告を以つて何時でも受戻が出來るのです。

此の貯金法をはじめてから、最う五千人の貯金者があると聞きました。是

等の婦人連は暑い中にも今年の避暑を夢見ながら望を以つて愉快に執務して居ります。

### △行先の注意

避暑地は、委員の人が苦心して精密しく調査し、殆んど五百個所の家に特約が結ばれたさうです。それで海岸、山間、村落とどこでも自分の望む處に行かれるのです。勿論、往復の汽車賃から、宿泊所の位置、道程地方〱の名所古蹟、風景等、詳細のことは委員が配付する冊子に、抜目なくのさつて居るのですどこまでも行届いたものです。

委員の特約した家に行くのには、事務所から切符を受取り、その半分は宿泊所に渡し、他の半分を自分で持つて居て委員は最後に雙方から集める仕組だとか。

この切符持參者に對し、宿所では、殊の外懇切に待遇するので、便宜でもあり居心地も快いさうです。勝手の知れぬ不案内の土地に、婦人方が安心して旅行出來るばかりでも、幾何丈けの利益あるかわかりません

要するに此の方法は、中以下の婦人で、市中の炎熱をさけ、一日でも靜養したいと希ひながら、一時に多額の出費ができぬので苦しみ、或は、費用の點の懸念はなくとも、適宜の場所が見當らないので困つて居る婦人の爲に設けられたものでして眞に親切な計畫であると思ふのです。

### △女子青年會夜學校

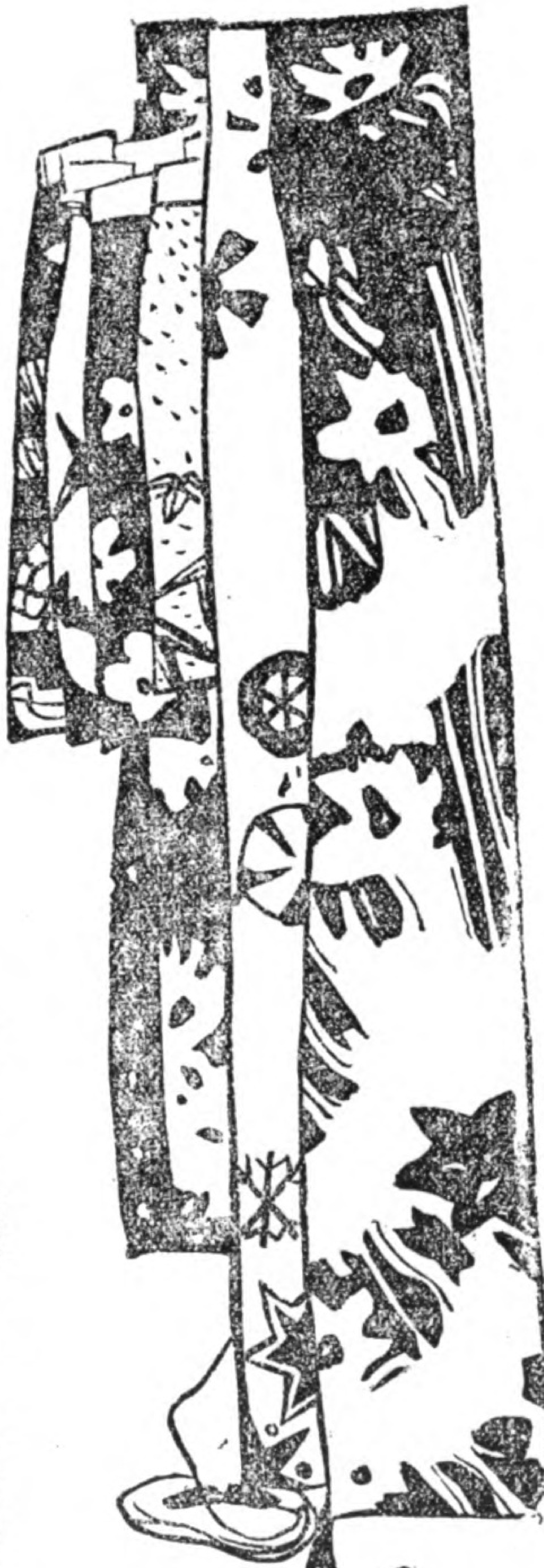
貧家の女子は、終日の勞働に疲れ切つて家にかへつても、蒸し殺ろされるやうな借家の暑さは、一日の勞を醫やすことが出來ぬばかりか、反つて苦惱を增す位なので、夕方になると三々伍々戸外に出で、此處に一團、彼方に一團、無駄話に花を咲かして居ります。軈てはこれが、子女に對し良からぬ感化を及ぼし、遂には恐怖しい結果を惹き起すことがあります。故に斯ういふ弊害を豫防し、同時に女子に必要な智識を賦與する爲め、女子青年會は六月二十四日から夏期夜學校を開きました。

入學志望者に對しては何等の制限もなく既に千人餘の生徒があります。學課は裁縫、造花、音樂、演説法及び遊戲の數課目で、月曜の夕方には音樂、演藝の催しがあり、火曜日には講演と決定つて居ります。

### △大學殖民事業

とは貧民町に建物を立てゝ此處を貧民のクラブとなし、教育ある人が貧者と接してその改善を圖ふといふ計畫なのです。夏の熱い夜、貧民町の青年男女が、面白からぬ場所で樂まぬやうに殖民館の屋根の上で、舞踏會が一週二度づゝ催されます。青天中であるから涼しいのです、數日前の夜、米人の案内で見物に出かけまた。三百五十名程の男女が一時に舞踏するので仲々の賑ひ、肩は相摩するといふ雜踏です。此の夜は紫の空に弦月がすみ、こゝより外に見られぬ色彩がありました。彼等の多く、否な殆んど皆猶太人だといふことです、綺麗な衣服を着て居ても、一文なしの者ばかりだといふ友人の説明でした。向ふの小學校の屋上にも女生徒の舞踏がありました。下は貧民の住宅で西洋にもこんな汚ない處があるかと怪しまれるほどですが屋上は實にパラダイスの趣きがあります。屋根に點じた花やかな電燈の下、浮いたやうなピヤノに合はして若い男女が醉ふた瞳子で無心に舞ふ。異性といふ特殊の關係を除いたら、舞踏も餘程趣味を減ずるだらうと連の一人は皮肉つて居りました。(東京市囑託となりて渡米したる法學士KM氏よりの通信)





# 女流の名句

岡本松濱

和歌には隨分熱烈な戀を露はに詠じたのが、澤山ありますが、俳句の力は和歌と違つて元來が人事よりも、自然から多く材料を取つてゐるのと其にもう一つは俳句は客觀的の態度を主として居る爲めに、實際は自分が何かの情に悶え難いやうな場合でも戀と餘所〳〵しくさり氣ない風に詠んで居るのが多いのです。ですから戀の句と申しましても、露はな戀愛を叙した句は大變少なうございます。併し其處が戀の和歌とは變つて居て珍らしからうかと思ひます。

碁盤出せ星さへ二人逢ふ夜なる　村女

これは申す迄もなく七夕の句であります。毎年七月七日牽牛と織女との二つのお星樣が天の川を越えて年にたつた一度の逢ふ瀬があるのです。偖此句の意味は『誰ぞ碁盤でも出さやれ、年中別れ〳〵のお星樣でさへ今日はたまの逢ふ瀬があるものを、二人向ひ合うて何もせずに居られうぞ』とでも申したやうな情を詠んだのでせう。俳句の事ですから露骨には云ひ切つて居ないが、たま〳〵相逢ふた切なる情が、自から句の上に表はれて居るかと思ひます。「碁盤出せ」と云ふのから見て、此女は物語などによくある、上臈と云つたやうな昔の身分ある人の上かと想像されます。

轉び合ふ小笹の露や二つ星　美稱女

此句も七夕のお星樣を詠んだものです。句の意味は時も丁度夕すがら

梶の葉の白露が何に露いてか一つが轉ぶと外の露も同じ樣に轉び合ふた天にはお星樣がお逢ひなさる夜である』と申す事で、餘り深く立ち入つては申し兼れます。唯眼前の景色と、七夕の感じとを結び合して見れら宜しいやうです。「御所櫻堀川夜討の辨慶上使の段」のお和佐の述懐に『あまた泊りの其中に二八あまりの稚兒姿、こつちに思へば其人も、云々』と云ふ一節が思ひ出されます。

暁を板屋に籠る妻もかな　　秋色女

板屋と云ふのは鳴子の樣な仕掛をして、夜畑を荒しに來る鹿や猪を驚かすやうにする、其番小屋の事を申すのです。句意は『宵から暁かけて板屋に籠つて居る、秋風の暁は殊更らに肌寒う淋しい山里の松屋である妻も共に籠つて居る』と云ふ事で、素盞嗚尊の「八雲立つ出雲八垣つまごめに、八重垣つくるその八重垣を」の歌から轉化したのでもありませう秋風淋き山里の狀態、賤が夫婦の優しい風情、さもこそと首肯かるゝではありませんか。

松蟲や我身一つを窓の先　　三千代

『松蟲が小止みもなくあのまア鳴く事わいの、我は一人このやうに淋しう窓に凭つて居るものを』と云つたやうな、和歌で申せば待戀の情でありませう。松蟲は和歌でもよくある通り、人を待つに掛けてなるのですが、句としては平凡とでも申しませうが、唯秋の夕べの淋しさに人待つ女の心持が命です。

笄も櫛もむかしや散り椿　　羽紅女

前のが待戀ならば、これは絶戀のやる瀬なさを詠んだものと見られませう。『あはれ春を盛りの美くしい椿もむざ／＼と散る事よ。我も椿よと時に遅れぬほどに粧ひ艶やかにしたものを。今は其の昔の夢になつたのか、丁度椿の花の散るやうに』と身の衰へを歎じたので、見やうに依れば戀の句でない唯の述懐とでも申されませうか、思ひに思ふ戀も早や秋風の吹くやうになつて、「誰に見しよとて紅鐵漿つけよ」と云ふ俗謡にあるやうな、自分ながら身を果敢なんだ戀の果と見た方が面白いやうに思はれます。

花にあかぬ浮世男のにくさかな　　千子

この句は又た餘程砕けて來ました。最初の『碁盤出せ』の句を土佐派の上品な極彩色の繪とすれば、これは歌麿の粋な浮世繪で、いゝ對照と思ひます。句の意味もずんと世話に出て、端唄にでもありさうな趣です。世の中は今様の、昨日は上野の花に遊びに行つたかと思へば今日は向島また飽き足らいで明日も又た何處へ行く事やら、粋の根から定めぬ男心の憎らしい事、『花に飽かぬ』は表面では花見の花の事になつては居ますが、裏面には戀の情を含んで居るやうですが、併し俗曲などのやうに露骨に現はして居ないところが俳句の品格でございませう。

# 公德の模範

倫敦の市中には塵一片、唾一滴でも落ちては居りませぬ。私が始めて倫敦へ參りまして、英國人の公德心の發達して居るのに感心したことは、友人某氏の案内で、市中を見物しました際に、其友人が卷煙草の空袋を路上に投じて、何氣なくゆき過ぎたのであります。すると後から輕く肩を叩く人があるので、振返つて見ると、一人の紳士が今投つた空袋をうやうやしく差出し「貴下の遺失物ではないか」と云ふのです。仍で友人も、今更棄てたのですとも言へませぬから、「有難う」と言つて懷へ入れました。日本のやうな不規律な道路に馴れたものは、心にもなく斯う云ふ赤恥を掻かねばならぬ始末になつたのです。

又或時、地下鐵道に乘りました處、丁度私共の前に一人の醉漢が腰を掛けて居りまして、私共に向ひ、何か一言二言かまへづらなことを言ひかけました。さうしますと、前から此光景を視て居りました遙か彼方の一老紳士が立つて來て、醉漢の前に參り、「お前は外國の方に對して英吉利人の體面に係はるやうなことを言つては困るぢやないか」と申しました。すると一車内の婦人も子供も、悉く總立ちになつて、此老紳士の言葉に贊成を表し、老紳士は更に私の方に向つて、「唯今は失禮をしました。此者は酒に醉つて居るのだから、今日の無禮は許して呉れ」と云て、丁寧に謝り、醉漢は四方八方から睨み付けられたので、隅の方に小さくなつて閉口して居りました。さうして次の停車場へ着いて、私共が降りやうとしますと、車中の人は皆「失禮をしました。御免下さい」と云つて陳謝しました。英吉利人が斯樣にその立派な人格を保たうとする美風は私をして我國の電車内の雜踏に想ひ到らしめ、却つて恥しさに堪へず且つ非常に羨しく思ひました。

倫敦の市中の繁華は今更申すまでもありませぬが、數十臺の自動車、馬車等が、須臾の際もなく右往左往して居りますが、往來の殊に烈しい處には、巡査が立つて居りまして、進行停止の命令をして居ります。巡査が一寸手を擧げてその進行を停止しますと、數十臺の車は一時に皆ピタリと進行を止めます。その命令は實に手足の如くに行はれまして、劇しい往來は一絲紊れず、整然として居ります。

# 洪水來る

松平鏡子



不安な日は三日つゞいて、暴雨烈風の中に川の水嵩は刻々に増しました。水嵩のふえる度に、カン〳〵と佗しやかな鐘が鳴る、ひた〳〵と垣根傍まで這ひ寄つた水の中の家に、まんぢりとも寝られぬ人々の胸轟かせて、堤防の切れた警鐘の鳴り響いたのは、四日目の曉方でありました。

見る〳〵うちに水は五寸増し三寸まして、框の低い百姓家は、もう床の上に水が上りました。毎年々々いくらかづゝの出水は免かれぬ土地柄ですから、兼ねて用意の丸太などを組んで、疊を上げた板の間に、荒繩縛つた急造らへの二階を作り上げ、その上には小さい子供だの、いろ〳〵な道具などを載せて、女達は炊出の用意にかゝりました。

周圍の低い田舍井の水は最前から濁つて、この村で綺麗な水は少し高臺に建つてゐる、旅館兼料理屋の、大野屋の井戸一つになつて了ひました。それも最早斯う水嵩の増した今は、何時迄もとは受合れぬ、今のうちに早く少しでも餘分に汲んで置かねばと云つて、幾箇もの樽の中へ荷で運んで注けました。

床の上へ一尺も上る事はほんの稀で、大抵の年には床上一寸か二寸か、それさへも無く濟む家もありますので、今年もその位なものだと見當つけてゐましたのが、一夜の中に本流の大堤防が破れて、水は烈しい勢ひで村のなかへ亂入して來ました。

出水の夜から出て行つた儘、歸り來ぬ人の身を氣遣ひて、寢附きもやらぬ女房達は、可愛い子を庇ふ一心、まづ天井を突き破つて、何年となく埃に埋もれた梁を脱けて、塵みどろな姿の儘屋根の上へ這上つた時には、滔々と碎くる怒濤の物凄さ、音して降る雨の中、月もないのに濁水はきら〳〵と光りました。女房達は身を震はせて人心地もない。

此樣時に一番氣の毒なのは老人です。冷たい雨には打たれるに委せて、空腹を滿たす食物のあらう筈もなく、今か〳〵と自分の命の終りと、當にもならぬ助けの手とを二つの心に待つうちに、やがて夜も白じらと、かくて慘劇の夜は明けました。

誰も誰も同じところに、自分の命の助を求めたのでせう。大方の人は皆屋根に出て震へてゐました。居竦んでゐる心を引立たせて目を放てば、茶黒い水の溢れた中を、丁度瀬に當るのでせう、そこ一筋は勢ひよく流れを作つて、石の樣に固まつた水泡が、くる〳〵とまはり乍ら流されてゆく。

　この勢ひで荒れるのだから堪りません。小さい木などはもう姿を沒して、大方湧き返る泥水の底に、悶えて泣いてゐるのでせう。草鞋や下駄の流されて來るのはまだしも、手桶がゆく盥ひがゆく、昨日までは無心な少女の手に、愛でられてゐたらしい人形が、禿切の髮振り亂して、浮きつ沈みつ。

　この騷の中に、それでもどうやら立つてゐる姿のみとめられるのは例の大野屋でした、粗末ながらも二階造の家でしたから、助けの船は屋根から屋根に巡つて、泣き叫ぶ人をみんなこゝの座敷に移しました、吻として顧みた人達の心はどんなだつたでせう。着替の衣も持たないから、濡れしよんぼりとした單衣を干てまた着ました。中には寢衣姿のしどけなく、憐れにいとしい者も居ます。嬉しいのか悲しいのか定めかねて、身をはじめて艶々しい手すりに寄つたとき、もう魂もくづれさうだつたと云ひます。

　見渡せば家々の屋根のなかには、もう姿のみえないものもあります。今迄あれに乘つてゐたらどうなつてゐることでせう。自分の命一つをやつと助かつた人まで、幸福の部に入れねばならぬ。その慘狀を思ひやつて下さいまし。

　竿さした小舟は、もう漕ぐに難しくなりました。この時雨は漸々に止んで、幸の日と同じ太陽は輝やきましたけれど、明るいだけ醜さは目立ちました。

　小道具などの流れて來たのは先刻までゝ、今では新らしい木材や大きい湯風呂や、半ばを水に隱されてちら〳〵と角のみ見せて流れゆく箪笥には、どんな美くしい衣裳が秘められてゐるのでせう。二十里も離れた町のくづれた橋の欄干がくる、屋根ばかりの家が流れる、それはもう、言葉や筆では盡されない位。

親子四人、藁葺屋根にしつかりとつかまつたのが、濁浪に弄ばれて漂ようて來るのは、逃れいでしまゝを攫はれたのか、助けを呼ぶいとまもなく瀬に卷かれて、立木にどつと打ちつけられると、そのまゝ、悲しい叫びを後に水中に行方しれず……。

　かなしく痛ましき禍の日はまた二日つゞいて、それからは水の減つてゆくのがわかるやうになりました。五日目の晝にはやつと三尺ほどに成つたので、今日の中にはこれも引いてゆくであらう。水の少しあるうちに家の內の汚れを洗ねばと、總立になつて、一まづ自分の家に歸りました。

　これよりさき、また八月の末つかたから、この大野屋の二階の一間に滯在してゐる、浦若い貴婦人がありました。姓は春日、名は雪枝、伯爵令嗣千彌氏の夫人で、華奢立のお品の好い、美くしい可愛い奥さま。

　夫人がこの大野屋にはじめて立ち寄つた時は、一行三人づれ、心地優れぬ愛妻の爲に、信濃に秋を迎へやうとて、侍女一人をつき從へ、發つたのは末の七日、途中まで來ると電報が屆きました。

　　至急用あり、一先歸れ

と云ふので、千彌氏はそのまゝ都へ引き返しました。先へ行くのも心もとない、お別れしたこの驛で、いつ迄もお歸りを待ちませうと夫人が云ふので、汽車の便は惡いけれど、學生時代の徒歩旅行に、一夜の宿を求めた情の忘れがたく、二人をこゝに殘しました。その後東京からは電報が二度、はがきが三度、すぐ歸る故待つて居よと云ひ來すのを賴みに、空に幾日かを過したけれど、待つ日は空しくまたも二三日、持つて來た本を讀む氣もなく、侍女の安といふ五つ勝りの女を相手に、いつも東京の噂ばつかり、いつそ歸つて了はうかと云ひながらも緣に立つて、夫のゐる都の方を眺めては、戀しい人の歸るのを待つのが、夫人の日課とはなつて了ひました。

　この二階の、夫人の部屋の緣のあたりは、下の崖を見下して向ふが桑畑、崖下の路は近すぎるからかくれて見えないけれど、半分の屋根と裏口の見える小さい

家は、大野屋の畑の小作をする平次の住家で、夫婦の校の木枕が二つ、疊代りに敷いたござの上に轉がつてゐるばかり、切裂けた古障子を通して、中には何一つ見えてゐない。

たつた二人の口すぎではありますけれど、取前の少ない所へ、平次は日にお酒を缺かした事がない。酒の上の惡い事は自分でも知つてゐるのですけれど、つまりは病氣の樣なものでせう。呑んで了つて妻のおるいに愚痴を云はれ、怒つて爭つた果は大聲揚げた喧嘩になるのがきまりです。おるいもどうせ他に何の樂しみがあるではなし、好きなものだから成丈厭な顏せずに呑ませてや



りませうと思つてゐるのですけれど、その日〳〵の遣繰が並大抵ではありません。人並の物一つ買ふ事もせず、つましく暮して居るのも行末の樂しみを待つてゐるからのこと、それを一杯機嫌に醉ふて歸られるからつい腹も立ちませう。あゝ貧乏は一番厭だ。有餘る程でなくとも、暮向の事に心をつかはぬだけのお金があつたなら、二人の中にかうまで爭ひなどはあるまいもの、と、平次を送り出した後の家に、おるいはさめ〴〵と泣かれました。

幸か不幸か、其年の出水は大きかつた。富むものも貧しい者も、ひとしく身一つになつて了

ひました。おるい夫婦は家の道具の少ないだけ心殘りはなく、人より先に屋根に出で、そして翌朝、大野屋に移つて、九日目に久し振の、我家の前に立つ事が出來ました。

崖の下の、當然に流さるべき家は流れもせず、にこやかに夫婦の者を迎へました。まだ床の上に少しばかりたゝへてゐる水で、おちやぶ／＼と柱を洗ひ戶を潔めて、恰度晝頃、水はめつきり引いて床から外へ逃れ出ました。おるいは家廻の塵を取り集めて、捨てやうと裏へまはりました。

家の裏の例の桑畠にはまだ、滿々と濁水をたゝへて、殊にその中央は、まだ勢の好い流れが川の方へ向つて走つてゐます。おるいは手にした塵をその中へ投げ込む途端、わづか葉先を表はした桑の枝の間に、浮いてゐる黑い手筐が目に入りました。

二

水は翌朝勝閧を擧げて退いてゆきました。またその翌日、村役場から人が來て、大水で拾ひ上げたものは殘らず差出すやうに申し渡したので、簞笥、幾竿、木材、小道具、みんな拾つた人の所得にはならず、其儘役場の人の手に取り集められました。

平次の家にも人が來たのですけれど、何一つ拾ひませぬと云つたので歸つて了ひましたけれども、人の口は五月蠅もので、誰が云ひ初めたか、おるいが裏の桑畑で黑塗の綺麗な手筐を拾つたと云つた者がありました。中には、羽二重の布にくるんで金時計があつたの、指輪が三つ入つてゐたの、お金ばかりでも百兩からあつたさうだと云ひ傳へられた果、昨日平次が酒屋で一圓札を出して拂つたの、今日おるいが五圓くづして貰ひに來たのつてうるさく云はれます。平次の家では長持を一竿上げたさうだ。何でも鬱金の胴卷にお金がぎつしり、どんなにしても千兩はたしかにある、あとは殘らず衣裳で、縮緬やら羽二重やらの裾模樣が幾重ね。外に緞子、帶、繻珍の帶、博多、繻子、帶ばかりでも十五本から、それに長襦袢、緋の下締、湯文字から白足袋まで揃つて、それも水氣一つ當つてゐぬなど、途

方もない事迄云ひふらす者さへ出來て來ました。
泥棒奴、かたり奴、とあらゆる痛罵の聲は、廣くもあらぬ村一帶にひろまつて夜になると閉した障子に石など投げる人まであります。たゞ平次が虚を云つて渡さなかつたばかりではない。自分達のを取上げられた、不平の交つてゐたのは無論でせう。

　或る朝、大野屋の二階の夫人が、朝湯をつかつてのんびりした白粉の肌の心地好く、縞博多の伊達卷姿のまゝ、みづから手すりに手拭を懸けやうとしたとき、はからず崖下の騒を耳にしました。

「どうしたんだらうね安」

　振返つて侍女に問ふと

「はい……何で御座いませうか」

　これはまだ氣が付かぬらしいんです。

「おまへにはまだ明らない？　あの崖の下の路が大變に騒ざうしい？　こゝからは見えないけれど、喧嘩でもあるんではないだらうか」

「左樣で御座いますね、何なら一寸、下で聞いて參りませうか」

「いゝえね」

　濡髮を掻き上げて立ち上つて帶を解くと後から、衣桁に懸けた平常着を取つて着せると、するりと肩を滑つた衣が、入れちがへに輕く疊に零れました。

「別段訊く程の事もないのだけれど、たゞあんまり怖い聲がするのだもの、どうせ用があるならその時でも關はない」

「いゝえ、あの」

　口籠つて

「ちやあ一寸訊いてまゐりませう。夫人さま」

　安は、ふみしだく褄下掻いづまんで、しとやかに手を下げると。やがて姿は段の途中からかくれました。

　夫人は亂れ箱ひきよせて、唐草の夏帶をきつちりとお太鼓に結ぶと、燃るやうな緋の脊負上が、またとなく初々しい。

* * * * *

「夫人さまがお伺がひ遊ばすのでございますけれど」

淑かに云ふ安の前には、荒くれ男が十數人、すはやと云へばこの家に亂入して、隅々まで探しつくして見せやうとしてゐるのです。崖の下は何となく殺氣だつてゐました。

「何となく御氣分がすぐれませんので、私が御名代、ほんとうに失禮でございます」

さういつて片唾をのみました。

「あの夫人さまが斯う被仰います。水がひけて皆さんが急にお歸りになつて了つたものだから、さびしくつてお緣に出てゐたと左樣……それはもう以前から、旦那樣のお歸をお待ち兼ね遊ばして、毎日々々、あのお廊下にお立ちなさいましては、東京の方をぢいつと御覽遊ばしてゐらつしやいますの、ですからそれはその日ばかりではなかつたので御座います。

黑塗のお手箱が、桑畑の中に浮いてをりましたのは、たしかに御覽になつたさうで御座います。何でもそのお品が、お亡なり遊ばしたお妹樣のと、まるで對な位よく似てをりましたものですから、ほんとうにお懐かしく思召して、お眼鏡を貴郎、こうしてあてゝ見てゐらしつたさうで御座います。どこから漂ようて來たか知らないけれど、このまゝ行方しれず流させて了ふのは殘り惜い。どうせ人樣の物だから、自分の手に入れたいなどとは露ほども思つてゐぬけれど、妹の手箱と同じやうに、紙人形の召物だの、淺黄や紅の角絞りの鹿の子だのが入つてゐるのではないかと思つたら、人の立合ふ前でも好い、一目開けて見たいと沁々思つたと仰有いました。そしてそのお手箱の主がまだ十二三の可愛い姫さまで、仲好のお姉樣がなんぞへお遺品にお殘しなさつたのではないか、自分の妹の殘たのも、水に浮かせるならまだしも、邸の火事の時炎の内に呑まれて了つた、折角の心盡を思うと、もう何と云つて好いかわからぬ程口惜しいのだから、その方のお姉さまもどんなにくやしくゐらつしやらうと、つい身に沁みて悲しくなつたつてね貴郎、さう思して見てゐらつしやいますと、恰度こゝのおかみさんが、竿でもつて搔き寄せやうとなさいましたさうです。どうかし

て上げて欲しいと祈つてゐらつしやいますと、どうしたはずみか箱が竿の下をくゞつて一度沈むと、今度浮んだ時にはもうずつと先の、渦巻に流れてゐる方へ近寄つてゐるので、はつとなさいましたさうです。泣きたい程なのを堪へてぢつと見つめてゐらつしやいますと、それがまあその瀬の中にまきこまれて勢よく流れる水の中に姿も見えなくなつたと仰やいました



出すの出さぬのと被仰いますけれど、あるなら兎も角、もう流れて行つて了ひましたものが、どうしてこの方々にお出しになれませう。……夫人さまのお話で御得心がまゐましたならどうぞ……まあはんとうにさしがまし失ばかり申し上げます……」

三

あるべき喧嘩は無く濟んで、崖下の家は靜穩になりました。

夫人の意外な心づくしを、現に謝する言葉もなく、その夜夫婦は、戸を閉した家の中に燈影細う、開けずにあつた手箱のふたを開きました。中には豫期した千金の寶はなかつたけれど、夫婦は愕然として眼を見張つた。

裡なるものを何とやすらむ。白紙の折雛の眉の緑、

友禪の千代紙は姉さまの着物か、淺黄鹿の子、京鹿の子、美くしい小布が目も彩ー

紙人形の帶の端に、紅筆細う

紫の姉さまへ　曉より

と書いたのは、何樣十二三の少女の筆らしい。

翌朝明に、しのびやかに大野屋の門を叩いたおるいはおくればせな禮の言葉と共に、密かに手箱を安に渡しました。

夫人はどこまでも辭むだけれど、どうせ埋れ木になるお手箱、他の人の手にするよりいくら嬉しいかわかりませぬと安に云はれて惑うたが‥‥嬉しい報知はまたも夫人を驚ろかせました。

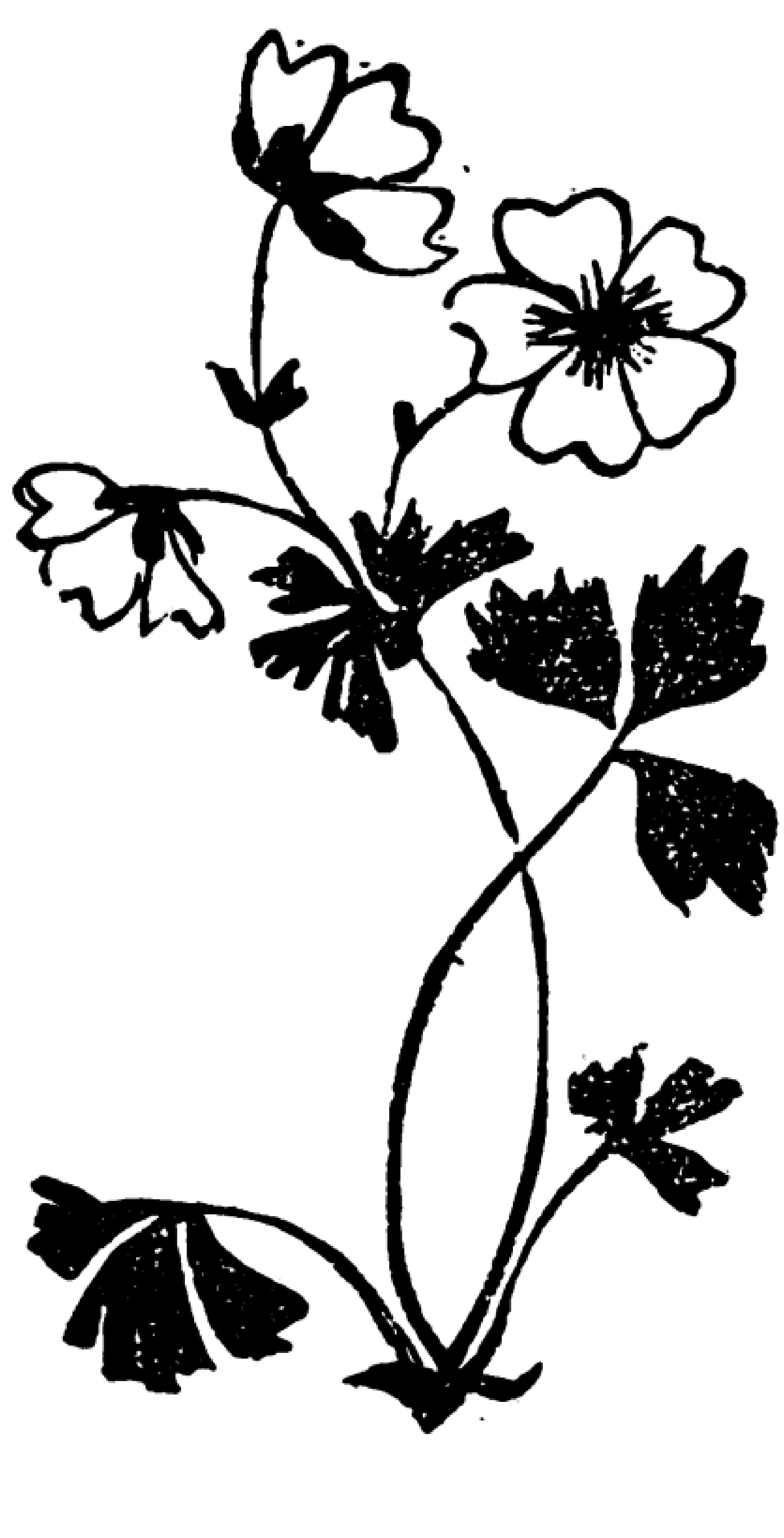
その宵千彌氏は夫人のほとりに立ちました。

久しく待たせて濟まなかつた。もう今日からは汽車も通ふ。さあ明日の朝は早く立たうといふ人の膝に縋つて、手箱の一條をこまや、けに語ると、好いさ貰つたと思はずに借りたと思へ、主が出るまであづかつて置くんだ、おまへもその少女の姉さんなんちやあないかと云はれて、嬉しさに手箱を抱いて泣きました。

朝まだき。霧立ち籠る中を、夫人は思ひ出の宿を捨てました、もうそのときは、數日のやつれも癒えたやうに、莞爾に夫の腕にもたれて‥‥。

* * * * *

水害は烈しかつたが、春日家よりの救恤の金は各戸を潤ほしました、一番多くの分配金を得たのは崖下の家で、手箱は今も夫人の手にあるのでせう。紫の姉を探してゐるといふ噂はきゝましたけれど、後の話を私はまだ知りません。（おしまひ）



# 戀の八郎潟

ちすゐ

## △自分は大蛇になる

羽後の西、日本海の海岸に八郎潟、一名琴の浦とて東西三里南北七里二十餘町周圍二十里ばかりの湖水があります。此湖水の出來たことに就て、土地ではかういふことを申して居ります。此湖水のあるところは、昔陸地で、山も有り畠もあり山林なども有り、又、一寸した村なども有りました。其村の八郎と云ふ樵夫が或日仲間のものと三人連れで仕事に出ました。山へ入つてから其れから其へと奥深く行く中に八郎は連れにはぐれて仕舞ひ、方々を尋ねまはつて居中お腹が飢て來たけれども、生憎其日に限つて辨當を忘れて來たので困つて居りましたが何心なく見ますと小川の流れに見たことのない妙な魚が泳いて居ましたので、ひもじい時のまづいものなしこれ幸と八郎が早速それを手捕りにいたしまして、傍の枯枝を火にたいて其魚を燒き乍ら、今の流れを見て居ると、其の魚が又一尾で泳で來ましたので又それを捕へると、又一尾泳で來ましたから、それを捕へて、これで丁度友達にも一尾づゝ食べさせることが出來ると喜びました。其中にもう初めの一尾が燒けたので其れを食べて見ると非常に美味いのです。友達にもと思つて燒て居るあとの二尾の美味い香を嗅では、とても耐りません。とう／＼その二尾も食べて仕舞ひました。處へ連れの男が其處へやつて來ました。八郎さんを探したが何うしても見附からない、其の中向ふに煙が上つたので誰れか居ると思つて此處へ來たのだと申しました。其中に八郎は非常に咽が渴きますので以前の小川のはたへ參りまして水を飲みましたが、いくら飮んでも飮み足りません。友の二人が、そんなに水を飲んでは體に惡いからよせと申しましたが、一向に聽入れません、果はうつ伏しに成て水を飲みましたが、少し經つと、自分は大蛇に成るからお前達は彼方へ行つて呉れと云ひますので、二人の

ものは驚いて逃げ乍ら、振返り〳〵後を見ますと今迄の細い流れが裂けて池の樣に成り。八郎は其の中へ沈んで仕舞ひました。兎角する中に空模樣が變り雨が降る雲は下つて眞暗になり、雷は鳴る電光はすると云ふすごい有樣に成りましたので、二人は早々逃歸りました翌日村の人々と一緒に昨日のところへ行て見ると何時の間にか大きな湖に成て仕舞ひました。其れが今の八郎潟だと申します。其れで其の湖の傍へ祠を建てて今も八龍神社として祀つてあります。



## △龍神の戀

八郎潟から東北に當つて陸中と陸奥の國境に十和田湖といふのがあります。其地方では、今の傳說は八郎湖では無く十和田湖の傳說で八郎は龍神に成て十和田湖の主で有つた。今湖畔にある十和田神社の奥の院はそれを祀つたものだと申して居ります。又仙北といふところの或山里におたづさんと云ふ十七八の美しい娘が有りましたが、八郎はいつしかこの娘と仲善に成りましたところが南僧坊と云ふ坊主が其娘の美人なのに懸想し僧侶の身分も打忘れおたづさんの色香に迷ひ五月蠅附き纏つて掻口說きますけれども何しろおたづさんには八郎さんと云ふ相思

の男が居るので、相手にしません。八郎は毎晩松明に道を照してたづ子さんの處へ遇ひに行きます、もうお互ひが夢中に成つて居るのですから少しでも永く一緒に居たいと云ふので、或る時おたづさんがすこしでも永く暗くなつて居る樣にと其の松明を投附けて消して仕舞ひました。其處が後に湖と成りまして、今でも時々水中から木片が浮び出します。其れはこの松明の燃え殘りだと云ひ傳へて其れを湖畔に祀つてあります浮木神社と崇めて有るのは、それだとの事です。それは後の事、偖も八郎とおたつさんは一日も早く晴れて夫婦になれる樣にと院内の觀世音へ祈つて居りましたがその樣を見るにつけても坊さんは劫が煮えて耐りません。八郎は十和田湖に住んで居るといふことを知つて其處へやつて來ては色々と八郎を苛めます、終には持て居る鐵の棒を振上げて打てかゝると云ふ始末に八郎は居たゝまれず、逃げ出して八郎潟へ行つたのだとも傳へて居ます。十和田湖では今以て決して水中に鐵を入れません船にも金物とては釘一本さへも使つて居りません。其れは八郎の戀の邪魔をした坊主が、鐵の草鞋を履いて居たからだと云ふことで湖水へ金物を拋込むと湖水の主が怒つて雨を降らせると申します。

### △お國さん鱒になる

八郎潟よりは東へ二十里ばかりの處に田澤湖とて東西二十六町南北へ十三町周圍三里餘りの湖水が有ります、爰にも八郎潟と同じ樣な傳説が有ります、けれどもこれは湖水に居る國鱒と云ふ一種の魚の由來に成て居ります。この湖の畔にお國さんと云ふ矢張別嬪さんが有つて、或時山の中を歩いて居ると咽が渴きましたので、清水の湧いて居るのを見附け出して其れを掬つて飲んで居ると、其處が裂けて今の田澤湖が出來、お國さんは魚に成つて其の形が鱒に似て居ところから其の名を國鱒と云ふのださうです。この邊は一體に美人の多い處で、八郎の戀人のおたづさんも矢張こゝに生れて、この湖の畔に住んで居たのださうです。其れで八郎は十和田湖を逃げてからはこの湖水へ來て居たとも

申します。一說にはこの湖水の出來るとき泉を飮んだ女はお國でなく、おたつだと云ひます。もつともこの湖水の主はおたつだと傳へ、それで里人はこの湖水を田鶴子潟と云ふのだとも申します。又田澤湖に就てはかうも傳へて有ります、たづ子が八郎を口說たが聞てくれないので煩悶して居る。一旦臂鐵砲を食はせた位だから、よせばいゝのに八郎が揶揄ぢらに田鶴子の住んで居る傍の川の水を堰き止めて其處を住家とした。そこへ出來たのが田澤湖で、おたづさんも一旦は思ひ斷つたやうなものの斯う目と鼻の先へ來られては忘れやうとしても忘れ



られない。再び云ひ寄つた處が辛くはね附けられたので、今で云ふ失戀の結果、この淵へ身を投げた、お母さんはそんな事と知らないから、娘は何うした事かと、わが子可愛さに娘の好き相な簪を買つて、其れを持つて方々探し廻ると、湖水からおたつが蛇體で現はれた、其れを見るとお母さん驚いて持つて居た簪もなにも落して仕舞つた、其れからこの土地では娘に頭の道具は決して手渡ししない相で有ります。それで八郎は蛇體となつたところのお田鶴には薄情ものよと攻められる。土地の山神はたゞさへ嫌な奴と思つて

居たところへ、可哀想に　おたづが非業な最期を遂げたので、おたづに一方ならず同情して、一緒に成つて八郎を攻めたてましたが、山神は山神だけ有つて、之れはたゞではいけないと石礫を拋げつけたりして攻め立てますので、流石の八郎も居たゝまらず逃げて行つたと云ひます。お田鶴がさう云ふ最期を遂げたので緣起が惡いとて其れからこの土地ではたづと云ふ名を附けないと今でも眞面目に傳へて居ります。

# 京の物賣女

朝つゆ

庭の白露まだ干ぬ晨、そゞろ歩きに逍つて朝蟬の聲にコーラスを口吟んで居つた時早くも、

「花や番茶いりまへんかいな」

と優しき手弱女の聲を塀外に聞いた。

私はつく〴〵と京の街に相應しい詩趣に富んだあの花賣女の風情を忍ばずに置かれないで、急いで生垣を開け外に出る。

今しがた通り過ぎた花賣女は帷巾の三巾前垂に同じく絣りの着物、白う〳〵洗ひ上げたる脚絆、絹縮緬の段々良染めの美しい襷。

五つ六つの色さま〴〵の五厘一錢の佛花白の手甲はめたる兩手に持ちて心ばかり端に紅さしたる手拭を左右の頰にたれ、其上の塵取形なる大いやかなる箕の中には綠したゝる青葉に包まれて咲き亂れたる赤に白に紫に黄に五色の草花匂ひ、零れて麗しい雅やかな姿に何處までも趣きを添へる。

番茶は花の下、女裝の裾の下に花の雫に濡りもせず巧に置かれてある。

隣家の表を覗いた花賣女は、

「姉さん今日は花に番茶いりまへんか」

嫣然笑つた面には美しい眼が輝いて居る。

家の内から何の返事かあつたらしい。花賣女は花束一つと五厘取り換へて、

『また買ふてや、おーきに』

と捨言葉を殘して、

『花はいりまへんかいな、花や番茶いりまへんかいなアー』

と優しい聲は遠ざかつて行く。

今のは白河女であつた。彼女等は大抵うら若い娘の身で主として御嫁入の支度の爲、星影戴く朝まだきより起き出で、自慢の美聲ふり上げて京の隅々までも賣り歩くのである。

○

九時は過ぎて暑い日ざしは漸く迫つて來た。急切つて呼歩く茄子の賣聲、我家の前で止まつた。

『叔母さんお茄子買ふてんか、安う負けとくがなあ』

茄子賣りは臺所へ來た。物めづらしいのでそつとのぞくと、御飯たきのお重は切りに掛け合つて居た。

『このお茄子は幾價だえ』

『叔母さんこれ十で四錢に負けとくがなア』

『オー高い十三で四錢に負けてお置きよ、まあこれは腐つてるぢやないか』

『叔母さんそれは當りがついたんだよ阿房らしい。ほんまにお茄子は加茂が名物やさかい甘味しいよ。十二で四錢に負けて置くわ』

二人はぐつ／＼云ふて遂々お重は二十五、八錢に買ひ取つた。

臺所の水、おいしさうに飮んだ茄子賣りは、無邪氣な聲を張り上げて重い荷を擔いで賣つて行く。

頭に卷いた手拭、後より前に被せ、名物のお茄子賣ちたる樣を見れば今のは必ずや加茂女であらう。

明暮切々と都の空に通ひながら鄙のてぶりを忘れず古雅なる里の風俗またなつかし。

○

九十度の日ざしも傾いて蜩の聲、梢に涼しい折、

『梯子や鞍掛いらぬかいなア』

『床木いらぬかいなア』と畑の嫗の聲して白拔きの紅葉の手拭頭にまきて重い梯子、鞍掛、床木等數々其上に積み乘せゆたり／＼とお臀から下を動かし三人打

ち連れて來た。
今度御得意様から申し付けられた處だから急いで、
「一寸待つて」
と呼び止む。
早速と頭上の鞍掛卸して腰かけた畑の媼は中々掛價がきびしいので松に來て價を決めて貰ふ。
松も中々の遣手で半値も値切る畑の媼は
「鞍掛一個二十錢」だと云ふし、松は、
「十錢にお負けよ」とねぎる。
二十錢―十八錢―十六錢―十四錢――と迄下りて畑の媼は、
「氣張つとくなはれ、そらな姉さん、嫁入するださかい」
黑く／＼鐵漿した美しい齒並を見せて連の女子を指さす。
指さゝれた畑の媼はさすがに血潮のもゆるにや初々しい顏を赧めてさし俯いた。やはり物賣女は娘が多い裁着をはいて三巾前垂腰に纏ひおばこに結つたる太古より其まゝの姿!!!　質朴な中にも歴史的趣きが添はつて居る。
漸う私は中を取つて二つ二十五錢に買つた。實際は一個十錢に確かに負るんだけれど――夕陽が西の空を染め出した時畑の媼は頭に荷物を積み出した。不圖思ひついて、
「あんたの御家は何處？」と尋ねる。
「高尾やなアー」と平氣だが此方は喫驚した。
野道山道を高尾迄三里半あまり、然かも日が暮れてから。
「歸らうかなあー」といひ出した一人は、
「紅葉見に來なはれや時雨がしたら傘な貸すわ」
と云ひすてゝ西へ／＼へと去る。
私はつく／＼と美しい着物に憧れ、女性美に心を傾ける都の乙女よりも働いたお腹に南瓜など山盛り食べて里の祭りを樂しむ村乙女の方が遙かに幸福の様に思つた。
今日の物賣女は白河、加茂、高尾（畑の媼）の三ケ

所であつたがこの外にもあの歴史に名高い八瀬大原の物賣りも常は市中に賣り歩く。手拭を屋根の如く被つた八瀬女、頭に卷いた大原女、いづれも花、酸漿、黒木の物賣りで其風俗、其習慣皆昔そのまゝである。優しい心は物の端々にもほの見えて腰に纒つたる紺の三巾前垂頭に被つたる手拭にまで

『いつともわかぬ、戀もするかな』

と若い女の心を讀める戀歌の下の句などが己が好む歌に應じ絲に選んで色さまぐに縫ひつけてある。京の街を飾る物賣女、やさしい女らしい風情は永久に長かれと祈るのである。



某小學教員生徒を叱て曰ふ『どうもあなたは進歩が遲い。あなたの年には私は如此な書物をスラ〳〵讀みましたよ。』生徒正直に『それは先生が私の先生よりも善い先生に習つたからです。』

女學世界 秋季増刊

# 嫌はれる人好かれる人

十月十五日發行

世に好かるゝ人あり。嫌はるゝ人あり。好かるは何の故ぞ。嫌はるゝは何の故ぞ。是れ處世の要訣として研究すべき問題にあらずや。

女子の世界は感情の世界なり。好惡の世界なり。人の好惡によつて、運命或は九天の上に昇り、或は奈落の底に沈む。希望と戰慄と岐るゝところの機、一粟子よりも微なり。

今や秋涼肌に爽かなるの時、一たび取つて之を繙けば、赤裸々たる百人百様の好嫌、雜然として送迎に遑あらず、唇頭自ら會心の笑を漏すを禁ずる能はざるものあらん。

## 目次概要



# 學校の優等生

衣笠女

君子さんお恨み申しますよ。何故私にも相談して下さいませんの。それはあなたの事なら、若し不合格した時にきまりが惡いとでも、思ひ遊ばしたのでせう。けれど、あんまりぢあありませんか。何も怒つて居やしませんよ。それはもうすんだ事として、好い事を敎へて上げませう。

優等生になる方法?、それは第一に先生のお氣に入る樣にせねばなりませぬ。えそれは解つてる、まあお聞きなさいよ。

國語の先生のお前では、私文學が一番すきよ。理科の先生のお前では、私科目の中で理科が一番面白いわネといふ樣な具合にネ。

お世辭たら〳〵萬事に、如才なく振舞ふのも必要ですよ。かりにも先生ともある人が、お世辭やお愛想で動かされやしまいと、思ひますけれど、實際はさうぢあありませんのよ。女先生には、先生の今日のお髮の格好は、ほんとに、よろしうございますのネ、とこんな事でもいふのですよ。

男の先生が、熱い時に、テニスをなさつた後で、お手洗を用つておゐでの時には、まあ先生非常いお汗です事、お暑いでせう、と云つて冷めたい水でも持つてきてあげて、お扇子であふいであげて御覧なさい。先生はどうも有がたう。と御禮を被仰りながら心の中では、氣の利いた生徒だなあ。

他の生徒に遠慮なんかしなくつても、よろしいから、せいせい出しや張つてするのです。さうすると、先生のお覺えは、いよ〳〵目出度なるのです。人からお花と羨やまれますよ。

それから贈物わるく云へば袖の下、これをしなければ不可ませんよ。これの功能は仁丹以上です。殊に歲

縫の先生などはさうですよ。出來のわるい褄先でも、お小言なしに、なほして下すつて、その上八ッ口衿先などのキッメをみんな自分でなさつた上に、仕立上つた時には皆さんゐらつしやいと、皆を敎壇の前にならべて、これは○○さんのです。美しく出來てるでせう。そのお褄なんか御らんなさい。そして早く出來上つて……と仰います。

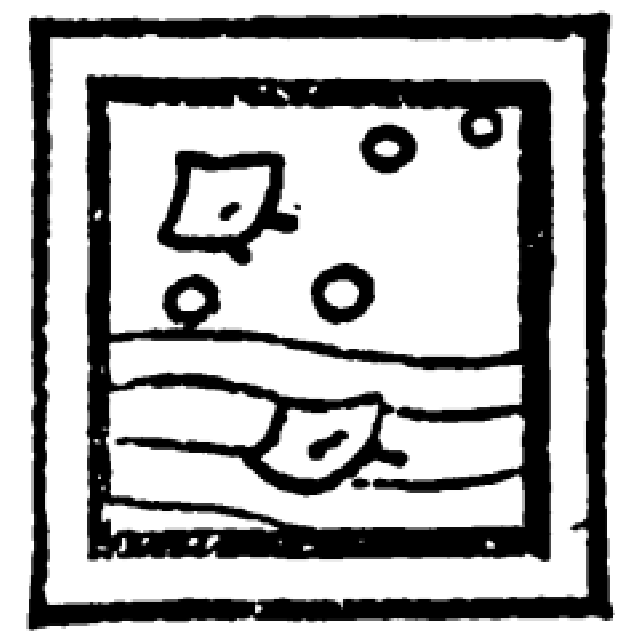
お氣に入りの人は、こんなものです。これに反して袖の下のしてない者は慘めなものです、いくら美しく出來ても、何のかのと難くせばかりつけて。仕なほしをなさいと、つき返されます。萬一不細工な事でもしやうものなら、それこそ大變、貴女は裁縫を侮辱して居るのです。とか何とかそれから嫌味やら皮肉やらを云はれて敎壇の前で泣き出す人はいくらもあります。

裁縫の先生といふと、たいていは、校長に巧に取り入つてゐらつしやるから高師出の若い先生方は、腫物にさはるやうに、してゐらつしやいます。

昔から僧侶と敎師と云ひますわネ。

すべてこんな有樣に敎へて頂くのですから、そのおつもりでネ。以上に云つた事をお忘れなく實行なさいませ。さよなら。





# 秋涼の御馳走

花野

## △二色水羊羹

寒天二本を水へつけて置く、それを四合位の水でよく煮て、全然溶けた處へお砂糖を充分入れてから、叮嚀にすれば裏漉へかけるのですが、それは爲ないでも宜しい。出來たら目分量で二分して置きます。而して手早く一方の熱い處へ、道明寺粉を霜降りになる程に入れて、よく攪交ぜます。而したら流し箱を水で濡らして、その中へ流し込む。お重箱を代用しても好う御座います。

殘して置いた半分の寒天汁へは、前以て作つて置いた漉餡を交ぜて も一度火にかけ、攪き雜し乍ら一寸煮る。先きに流し箱に入れた寒天が、すつかりと固まつた處で、其上に餡の入つた方をそつと注ぎ込むのです。

但し此後から入れる方は、固まらない程度で冷ましてからでないと、暖みで前の道明寺の方が溶けますから、兩者の間が劃然と黑白に手際よく參りません。最初寒天を煮る時、コンスタッチか葛粉を入れて置きますと、出來上つた時、道明寺や餡が沈澱せずに、斑なく交ざつて固まります。朝火の内にして置きますと、お八ツに恰度好う御座います。

客に進めます時は、手際よく庖丁して普通の水羊羹の様に氷の小塊でもあしらつて、涼しさうなお皿へ匙を添へます。

漉餡を作るのが面倒なら上等のさらし餡でも宜しい。然し味は劣ります。

## △葛餅

暑中よく懷中汁粉の様に吉野紙で包んだ、葛菓子を買ふ事が有りますね。その儘葛湯などにして呑んで了つては面白味が無い。一寸手をかければ風情が出ます。

お鍋へ其葛菓子を入れてサイダーで溶かします。それを火にかけて、よく〳〵練つて固く練りつめます。而したら火から下して濡れた大匙で一杯々々すくつては水へ放す、一方櫻の大きい葉を撰んで鹽水で洗つて置く、此葉で一ツ々々葛餅を包む。すると見た眼丈けでも美味さうになります。

上等にすれば此中へ、餡の様にジヤムを入れると結構になります。それにはストロベリーやアップリコットよりも、マムレードジヤムが色も風味も夏向きで宜しいでせう。尤も、人の好み〳〵ですけれど。又細切りにしたバナヽを入れても宜し、砂糖煮にした天津桃の一片を心に入れても綺麗です。

## △林檎の三杯酢

御飯のお菜には如何ですか御酒家には一寸悦ばれます。御酒の出る御客様に、一寸お刺身でも取り寄せる迄の繋ぎとして、焼海苔や是なんか宜しう御座いませう。

上等な林檎の皮と芯とを除つて、賽の目に切り、一旦淡水へ放ちます甘酢を作つて、水をよく切つた林檎を入れ、摺り山葵でも一寸のせて出す。もし三ツ葉でも有合せたら、茹でゝ添へると宜しい。

### △林檎のフライ

是は酒下物としても、お精進揚げとしても、一寸お茶受けとしても宜しい。

矢張皮を剥いて芯をとる、而したら半月なり、大きな賽の目なりに庖丁して、一旦水へ放してから引き上げて置く、メリケン粉を玉子でといて、それを衣につけてラードでフライする。衣が生で無い程度で、成る可く揚げ過ぎない方が味が好い。

### △落花生五色合へ

胡瓜の皮を剥いて繊に打ち、鹽でもんで絞つて置く。椎茸と、それから色どりに少許人蔘とを、矢羽繊にしてお砂糖と鹽とで一寸下煮して冷まして置く。鹽茹での枝豆を弾き出して、も一とつ茗荷の子を細かに刻んで、右の五品を落花生で合へます。落花生は炒つたのを小さな三角袋に入れて摺つてますれ、彼れが三袋も有れば五人前になりませう皮を剥いたらよく／＼擂鉢で摺ります。そして味醂とお酢と中々位で適度にのばす、それで合へるものです。一寸美味く頂けますよ。

### △魚肉のシチウ

是は極く日本化して試めして見ましたら、存外老人に悦ばれました鯛で潮汁に使へる様なお肴が宜しい。先づ鯛か鱸と云つた處で申上げませう。

普通の切身よりも小ぶりに人数丈けの切身をとります。残りはアラと共に強く鹽を打つて、其儘一時間も置く、切身は薄鹽にして置きます。鍋へ湯を沸騰させて置いてから、潮汁を取る爲めにアラを此中へ投げる。極鮮魚なら其儘入れて宜しいけれど、さも無い時は一旦沸湯へ潜らせてからの方が、生臭味が抜けて味が良くなる。よく／＼煮出したアラは引上げて了ふ。

普通のシチウの時の様に、人参、大根、玉葱、馬鈴薯などを細かく刻んで、此の潮汁の中へ入れる、椎茸も結構です。而して野菜類が溶ける程によく煮えた時其中へ前の切身をざつと洗つて、身の崩れ無い様に鍋の中へ並べる、而してお鹽加減が好かつたら、水で溶いたメリケン粉が、どろりとなる程度に入れるのですが、其時葛粉を代用しても好です、メリケン粉より淡泊です。是で出来ました。

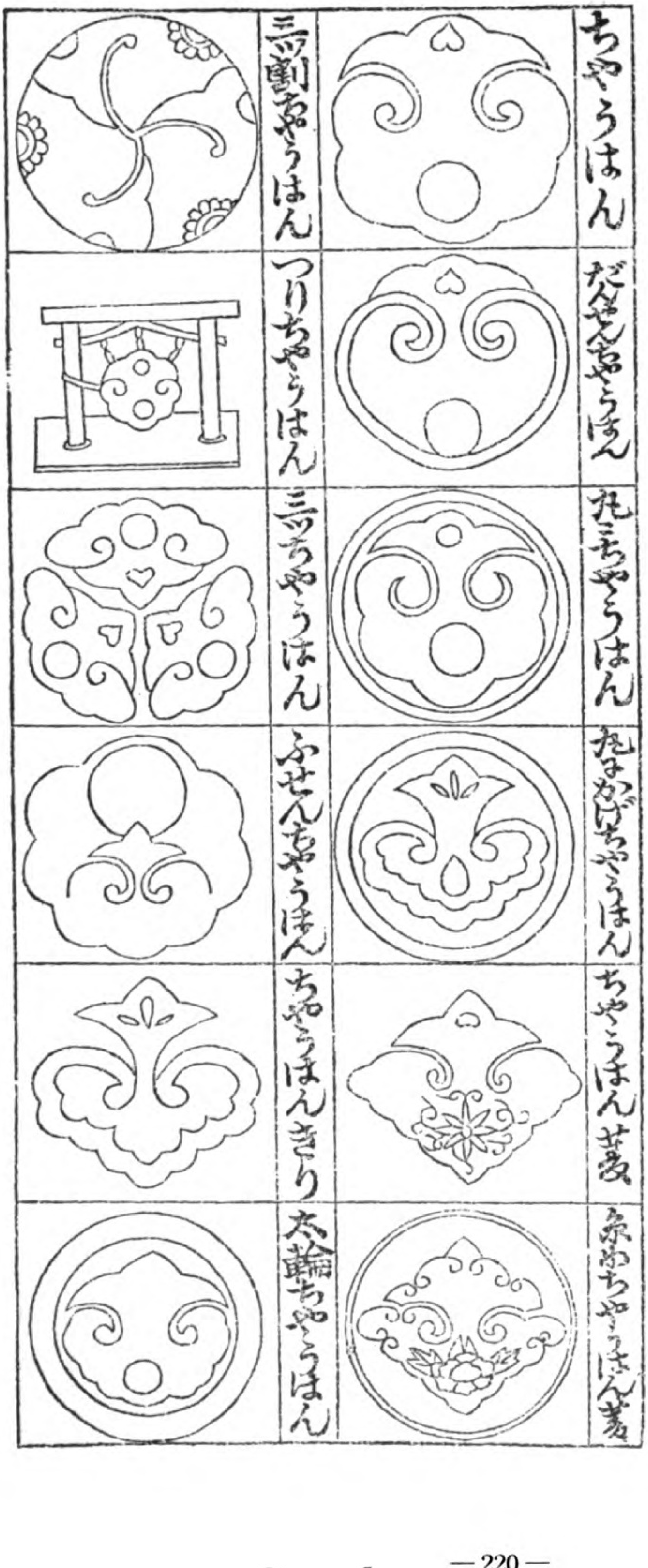
お皿へ切身一切と、野菜とを、體裁よく汁ごと盛つて、胡椒の替りに摺山葵を置いたのを、老人が悦んで食べました。

グリンピーか、又は生のさや菜豆を細引いて鹽茹でにしたのを、シナソの上へ色どりに交ぜる、眼に美味しく食べられます。

## 馬鈴薯の茶巾絞り

質の佳いシナガを丸のまゝ熱灰へ入れて燒く、其替りに茹でゝも宜しい、眞中まで火が通つて柔かになりましたらば、皮を剝いて擂鉢でよく擂る、そして砂糖食鹽で味をつけたら、ほんとは裏漉と云ふ處ですがそう御丁寧にも及びますまい。其儘よく擂れさへしたらそれで宜しい布巾をしめして置いて、それへ大匙で掬ひ取つてはお饅頭なりに布巾を絞つて形づくる、そつと取出してお皿へ並べて置く。恰度布巾の皺がついて、菊の花のやうになります。始め馬鈴薯を擂つた時、半分程取除けて紅を少し交ぜとくと、紅白の花の樣に、盛つた處が麗しくなります。是は子供の御茶菓子にも宜しいし、又お砂糖氣無しに作つて、燒肉の取り合せなどに至極好う御座います。

ちやうはんの意匠





# ゆく秋

山茶花

## 眞萩の露

筑紫戀しと鳴くてふ法師蟬の聲聞きつけて、やう〳〵秋の近きを知り、うれしと語りてかたみに暑さ慰るほどに、或夜また小緣の下にきりぎりすの音さやかにしぬ。一村雨の過ぎしあと、手なれし團扇をすてゝ、磨き出しゝ樣なる月に向へばいよ〳〵秋は來にけりと知られて晝の暑さもとみに忘らるゝ夜風の心地よき。きりぎりすは其の後庭の草むらに厨の隅に繁く鳴く樣になりぬ。今は見なれし垣の朝顔も朝な〳〵頻に咲きて盡きむともせず。桔梗撫子女郎花とり〴〵色を競ひたる朝の庭に下り立ちて、井の水汲み上ぐれば、茂りあふ眞萩の露に袖も裳裾もしとゞに濡るゝ涼しさよ。これ一もと打ち絕えし友に送らばいかにと腰折れ思ひめぐらすもをかし。ことさらに持たせやりてよくも惡しくも返しの歌使の者の持ち歸らばいかに嬉しからんを、物づゝみして歌も文も返さずば我がえせわざのいかばかりか恥かしうも口惜しうもならんかし。

## 秋風

我は秋の候に生れてこよなく秋の心を喜ぶ。生氣に滿ちておぼ〳〵しく霞める春よりは、晴れやかにしてさびれ行く方をゆかしとす。そも我れ何時の年のいかなる思ひ出によりてか、やう〳〵秋風の吹きそめぬれば、壁に立てかけし琴の高く空鳴りするを聞くが如き思のして、天も地も皆我が心にかなひ來るかと思はる

る。

## 雁の一群

突晴れ渡りし夕、野に出でゝ遠く見渡せば、入日の名殘は茂る洲の穗にうつりて遠白く、色美しう變りゆく空には遙にいそぐ雁の一群いづくをさしてと眺めやらる。小川を渡り小道を辿り野を一廻りして、野菊水引みそ萩小萩など、家へのつとに折り混せてやうやう歸る頃は、水車場のともし火細くきらめきて、堤の芭蕉影小暗く、堰越す水は音高し。かゝる時よ、いつしか月になり行くあたりを眺め、水の流れのはてなきを見てしばらくは立ちつくすが常なり。

## 野分のあと

野分のあとばかり心地よきはなし。雨の音風の響きに恐しき夜半を過して、明方やう／＼夢より醒め、戸を引き開くれば、木の枝の落ちちる塀の倒れしも物珍らしく、昨日の眺めは變りはてたるが中に、白き木槿の一輪二輪早くも咲き出でたるいとよし。小籠持ちてまた若き柚子栗柿など拾ひ歩くこよなくおもしろし。

## 茸狩り

年毎に思ひ立ちて年毎に障り多き茸狩、この秋こそはと樂みて縫ひ直し、袷、前の夜に仕付けの絲を取りぬ。重の物もあれよこれよと作るに疲れて寢れど、露葉かきわけて、ほく／＼出づる松茸見出でし夢も結ぶ間なく目醒せば、いつになき早起きに今日は雨となるべしと笑はるゝもをかし。あまたの得物待ち給へなどいひつゝ打ちつれ目ざす山にと朝すゞに急ぐ折よ、野山の景色もまたなくめづらし。

## 秋雨

心定らぬを秋の空の樣などいふ。げに朝晴れは甲斐なくいつしか大空かき曇りて見る間に篠つく大雨となりぬ。やう／＼小雨となりてより幾日かしめやかに降り暮らせば、野邊には月見草のみ宵々に咲きて、待ち

# 誰でも出來る 肺病自宅療法

## 肺結核新劑發見せらる

肺病の恐るべき事は今更云ふ迄もない殊に近年非常な勢ひで患者の數を增しつゝあるに至つては最も寒心すべき一大事である、隨つて色々の奇藥とか靈藥とか云ふ者が頗る澤山流行するが未だ完全なる特功藥のあるのを聞ない、誠に憂ふべき事である、所が獨逸留學より歸朝せられたドクトル松尾先生が効力の卓絶なる新劑を發見せられたと云ふ事を聞いたので未だ此喜ぶべき新劑を知らざる患者の爲に先生の治療談に就て敎へを乞ふた、先生快諾して曰く此病氣は極めて緩漫なる慢性傳染病で治療が仲々困難であるから療法も容易に發見されない私も隨分苦心しました此病氣の大體の容體を御話しすると別に感冒に罹らぬのに時々咳嗽が出るとか、又朝は何共なかつたのが夕刻になるとボーッと熱が出るとか、餘り澤山の熱でもないが定まりなく發熱するとか少しとろ〳〵就眠すると全身に汗が出るとか靜かにして居ても時々呼吸が苦敷なるとか、別段自覺すると云ふ樣な理由のないのに身體が何となく疲勞して仕事が厭になるとか、略痰が平常より多く又は血の腺が交るとか、夜間眠られぬとか、食物が進まぬとか、胸や脊が痛むとか、少しの事が非常の苦になるとか、下痢があるとか、略血するとか、非常に發熱するとか、甚敷衰弱して居るとか、夜の明ける時分になると呼吸苦敷なるとか、かう云ふ容態の患者は早く注意しないと再び起つことが出來なくなる、肺病の療法には種々あるけれど只藥を吞む許りでは全治せぬ其れは根本の療法を知らないからであると。

因に本療法は自宅にて誰にでも出來るのであるから詳細を知りたければ返信料三錢封入東京麴町區九段下飯田町四の十六如[illegible]堂藥院（電話番町二八八二番）へ本誌愛讀者なる旨記入し申込まるれば親切に委敷根本的療法を敎示せらるゝ筈である。

（其の二）

太陽 第十八巻第十四號 定期號 十月一日發行

# 御大葬記念號

三色版一枚
二色版一枚
寫眞版廿四頁
本文二百十二頁
正價四十五錢
郵稅四錢

明治天皇御大喪儀に於て弊館の特に謹撮したる森嚴崇高を極めたる**御大葬の御寫眞**并に**御大葬の御模様**を精錄せる記事を主とし其他重要なる時事問題を掲載し普通號より紙數と口繪とを増加し正價四十五錢にて發賣し讀者をして親しく**御大葬**を拜觀するの懷あらしめ既刊『**明治聖天子**』と併せて國民不朽の**好紀念**たらしめんとす。

第九版

# 明治聖天子

口繪三色版二色版各一頁
光澤紙寫眞版三十二頁
本文四百六十四頁
正價六十錢
郵稅五錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇

女その二)

女（その三）

中學世界 第十五巻第十二號 増刊

# 本年の受驗界

**第五版出來**

本年初夏に於て施行せられたる高等學校の入學試驗問題の全部を蒐錄し愼重なる試驗委員の講評を載せ以て次の受驗者をして試驗の程度を揣るの便に供せり是が爲め入學志望者に多大の便益を與へ三月發行増刊『入學準備號』と共に年々數回の増版を企て來れり以て學生間の渴望を知るに足る

附 官立諸學校入學試驗問題集

本文二百八頁
口繪石版
寫眞版十數葉挿入
正價二十錢
郵税二錢

博文館
東京日本橋本町三丁目
振替口座東京二四〇番

---

文學博士 遠藤隆吉君著

# 學校の意味

學校の目的は性格の陶冶に在り。中學師範の學科は何れも性格を陶冶する所以にあらざるなく、何れも常識を修養する所以にあらざるなし。修身教科書は道德の概念と名稱とを與ふるに過ぎず。本書を讀む者は身學校に遊び種々の教師より各種の學科を學び以て常識を得ると同時に高尚なる性格を養ひ宇宙社會と親密なる關係を得たるが如き感あるべし。且つ教師は各自己の學科の如何に道德と關係するやを知り、父兄は子弟の學校に對する注意を聞くを得べし苟も學問に志あるもの學校に關係あるものは本書を讀むで以て圓滿の知識を養ふべきなり。

全一册四六判
總クロース上製
紙數四百五十餘頁
正價七十錢
郵税八錢

東京日本橋本町
博文館
振替東京二四〇

中學世界第十五卷第十四號增刊 ▲大將肖像（原色版）中澤弘光謹寫 十月十日發行

# 忠烈乃木大將

本文三百四頁
口繪寫眞版饒多
總て一流名家執筆
本號に限り 正價三十錢
郵稅二錢五厘

蕭々たる大内山の夕、第一號砲、靈轜の御發靷を報ずる時、先帝陛下の大御後を慕ひまつりて、殉死を遂げたる乃木大將夫妻の英靈こそ、尊くもまた神々しきものなれ。

由來偉人の死は、一代の犧牲となりて、その罪過を償ふに似たり。將軍の死には千萬無量の意味なくては叶はず。何人かよく衷心に忸怩たるものなくして、この崇高なる道德的最後の悲劇に對し得るものぞ。今や吾等青年學生の前途には、暗雲厚く鎖せり。名を個人の自己意識に借りて、私慾を遂行し、逸樂に耽り、赤心犧牲の德を破りて恬然たるもの少しとなさず。慈仁神の如き大將の終焉は、次代國民に無言の大教訓を垂れたること幾許ぞ、わが中學世界が、「忠烈乃木大將」の一卷を編まんとするもの、また一に故大將の感化によりて動かされたる、一片至誠の發露たるに外ならず。幸にこの一卷が天下有望なる青年學生間に流布して、第二第三の乃木大將を得るに至らむか、以て乃木大將の素志の萬分に酬い、日東帝國はこれがために大なる祝福あらむ。

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（その五）

第一卷第七號……十月一日發行

# 淑女畫報

四六倍判 口繪光澤紙寫眞版四十頁 石版二色版數頁 本文百頁

正價廿五錢 郵稅二錢

六冊壹圓卅五錢 十二冊二圓六拾錢 外要和

## ◀畫　報▶



## ◀讀　物▶




發行所 東京市日本橋區本町三丁目 振替貯金口座東京二四〇番 博文館


女（その八）

にまちし名月には契りし人も來ず心設けの草々も榮えなく終るが多きぞ怨みなる。

## 紅葉

軈て紅葉の季節なり。紅葉は高き塔の下、落ちたぎつ瀧のほとりなどに、夕日の光を受けたるいと美々しくはなやかなり。淡く濃くいろ〳〵打ち重りて見ゆるいと美し。雨に濡れて松の木の間に交りたる一きはあざやかにて、見めぐる蛇の目に一葉二葉散りかゝりたるを折からめづらし。燃ゆるばかりとみえし色もやうやう盛過ぎて、吹き立つ風の一時に散りはてぬれば、秋も名殘と惜しまれてあはれはしろく、竹の荒垣夕風にきしめけば、枯れ枝の蟋蟀も父よ〳〵と聲を擧げてなくなるべし。

## 夕暮

それより假に冬の心設けに取りかゝり、障子のつくろひ衣の仕立にかゝづらふほど心ひまなし。壺の鈴蟲もいつしか夜寒に鳴く音の細り行くが心もとなく、今はと庭の芝生に放ちやれば、其の夜は僅に鳴きて次の夜より鳴かずなる。あはれ鳥にや食はれし霜にや死にしと暫くは忘られぬがつらし。晝は山吹櫻の返り花うらゝかなれど、日暮れの道を家にと急ぐいと心細くまして人待ちわぶる一人居るは何となく泣かまほしくもなるや。

## 落葉

池の蓮も吹く風にかさこそと音して、人怖ちする翡翠の光る翼もいつか見られずなり、垣の山茶花夕日にほろ〳〵と散れば、あとには菊のおのづからに瘦せ自らに咲き殘りて、破れし垣根のあたりに僅にかをりを止るのみ。箒とりて今は見る物も無き庭に出で、植込のもとふと掃き出せば白く霜置く落葉の中に、其の身の幸を舞ひ納めし蝶の彩羽のうちちりぼひたるなどいと哀深し。

# 秋茄子の價

野菊

姉樣かぶりにした手拭の端まで、紫色の露が染みて、しつとりと重くなつた頃、やう／＼朝霧がうすれてきて、新家さまの二番庫、三番庫、鯱のたつてる表門の甍も、松林の中から、ぼんやり唇氣樓のやうに浮いてきました。私共は、もう四荷の茄子を切り出して、三十把ばかりの生姜もこしらへて、里芋を一笊と、枝豆を少し束ねて、車に積みました。

けさは、兄さんに用が出來たので、お父さんと私とで市場へ持ち出すことになりました。

町まで一里餘り、道は平坦ですけれど、慣れない老父と、女の腕とでは中々骨が折れます。仕切場では、もう產地の人が澤山きてゐて、買出しの人も三四十人居ました。廣い場敷には、濃紫の茄子の山、新甘藷の俵、冬瓜やら新蓮やら、芋頭だの蘘荷の子だの、眞赤な酸漿の枝まで、今とりたての活々としたのが五彩美しく列べられてあります。

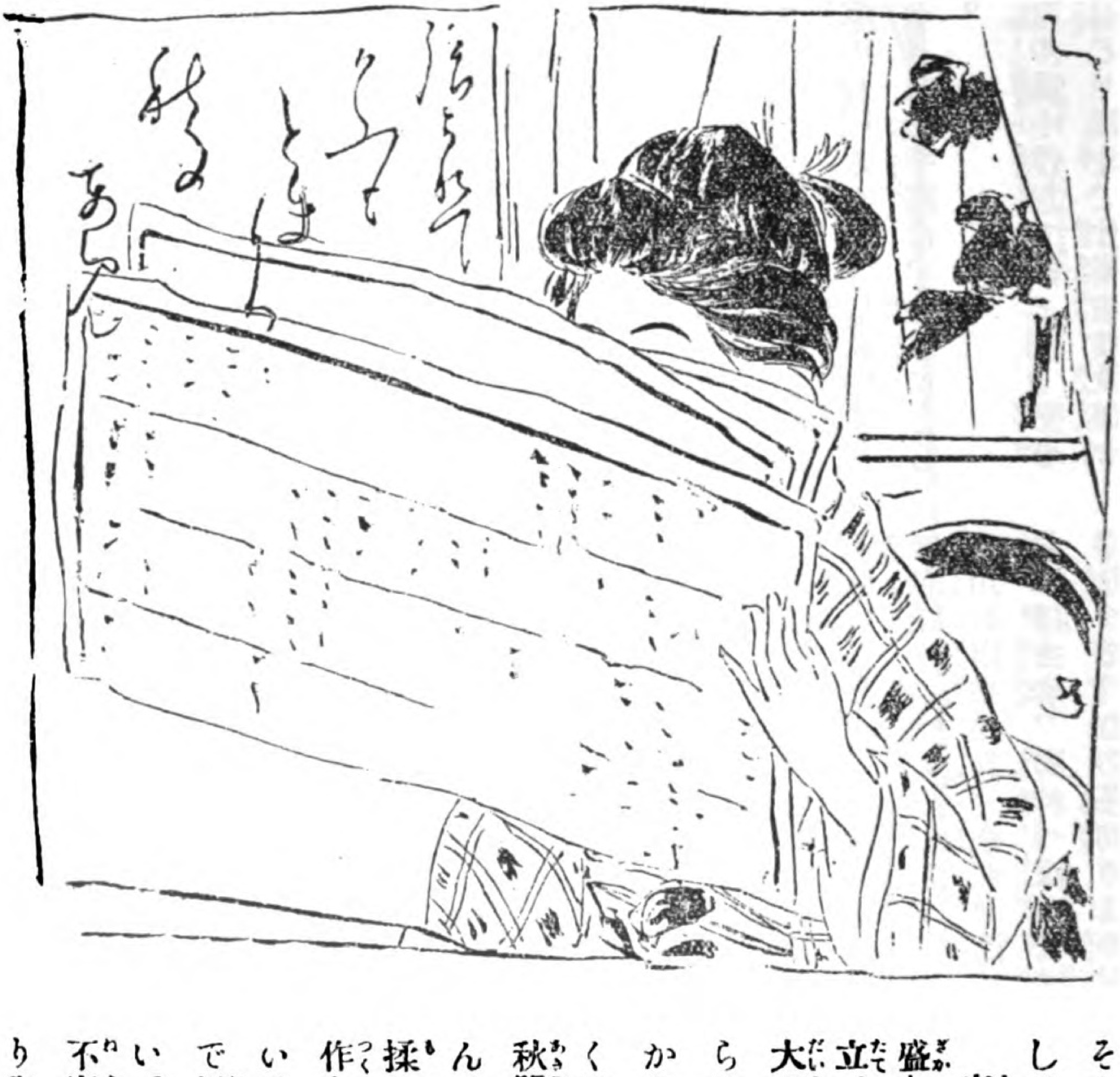
問屋の親方が矢立と帳面とを持つて出てくると、もう「サイクラ／＼」の懸聲につれて、「バンドウ」…「バンガレン」なんて、何だか、私達には譯の分らない符牒が、霰のやうに人々の口から投出されて、きまつた物は、さつ／＼と、附木つぱの札がついてゆきます。

土用中は、一籠八九錢にしか賣れなかつた茄子が、秋風と共に價も出て、私共のも、一籠十七錢宛になりました。――一籠といふと、漬茄子なら三百位、丸茄子で百五六十は、はいつてゐます。お芋はまだ少ないから一籠（一斗五升入）六十五錢に賣れて、けふ最高の價でした。生姜なんか一把一錢にしかつきません。それでも賣上締て一圓七十六錢もらつて、歸りに、砂糖十錢、水油三錢、元結二錢、乾物二十枚代十五錢、石油二升四十錢、晒木綿六尺、代十一錢五厘、四錢五厘の下駄緒二足分と買つたら、正味お父さんの財布に殘

つて、歸つたのは、大枚八十五錢五厘‥‥。

あゝ‥‥。

　玉簾ゆらぐ高樓の夕涼み、宵の歡樂に疲れた方達は、まだ甘い夢の深い時分から起出して、紺染の筒袖襦袢、黑桟の襟のかかつた野良着をきて、畑の中を屈んだり起きたり、茄子も千以上を切り出すのは中々樂でもありません。誰樣やらの「眞白き指を紫に染めて、色濃き茄子の露を切る心地よさ‥‥」なんて、噫、私も一時でもいゝ



そんな、のんきな思がして見たい。

　家へ歸るとすぐ、日盛りの畑で、甘藷の蔓立、草取をする、もう大根も蒔かなくちやならないし、赤小豆も拔かなくては、大豆も赤くなつてきた、けふは秋蠶もひきりが出たなんて、お母さんが氣を揉みぬいてゐる。蔬菜作りだけでも隨分忙しいのに、今年は秋蠶まで掃いたからたまらない。夜もひとりづゝは不寢番だもの尚更たまりやしない、でも秋蠶

は短い日限ですむのに、ことしは桑の葉が安くて、繭の方は案外値がよいさうだから、まあ骨折がひがあるでせう。

△△日。

けさは、青物の荷が出來ないから、兄さんと一緒に田の水車をふみにゆく。こんな遠方でも、作らなければ困るから、新家樣のを七段歩許り小作してゐるのです。稻はめつぽうの出來で、もう早稻は穗が重さうに垂れてきた。慾にはこゝらで、一しめり節に欲しいと皆いつてゐます。

うちの田は、五俵取といふのだけれど、この分でいけば、六俵どり充分だらうと、兄さんは大勇みです。でも、一朝暴風雨でもあつて、洪水でも出やうものなら、それこそ大變……。家中たべる米がないたつて、お定りの小作料、一段につき二俵半宛は、地主にとられるのだからなさけない。

宅では、畑も都合、一町歩程小作してゐます。麥小作は段に七斗、大豆は一石どり四斗、甘藷畑は段金十圓の作附料を納めるのです。外に肥料も、段四五圓の割には、入れなくてはならないから、小作人も中々骨折です。うちの唯一の財產としては、僅か二段八畝許りの畑地で、それに蔬菜を作つて賣るのです。どうか、早く働き出して、せめて四五段でもいゝ、自分の田が欲しいと、兄さんは苦心してゐるんです。

午からは秋蠶がすつかり「まぶし」にはいつたので大忙し。

……日。

けふは茄子五荷、甘藷二俵ほどこしらへて、兄樣が弟をつれて町へ持つていつた。

十時頃、澁買ひがきて、値段がきまりました。

前畑の隅に、二三本澁柿の木があるのを、いつもは、干柿にしたり、樽拔にしたり、子供達始め家内中が、晩秋第一の樂しみにして置いたのを、今年は急に金の入用が出來た爲、全部を澁に絞つてしまつたのです。

それは去春、隣村へ嫁いた姉さんが、もうお腹が大きくなつて、この冬初めは赤ちやんが出るといふんで、

此秋いよ〳〵本祝儀をすることになつたのです。それには前桐でも簞笥の一重ね、紬の紋附位はこしらへてやるのださうで、秋蠶を養つたり、澁を絞つたり、餘計忙しい目を見たのです。

東京でいふ地澁といふのは、埼玉の産で、その中でも、私等の方から良いのが出るのです。八月も中程になると、柿の木のある家では、宵々毎に、澁搗きの音で賑やかです。一箍四貫目位のが九箍、四九三十六貫ひ柿で、四斗樽一本の澁が絞れます。それから又二ばんも絞りますが、この方は一本四五十錢にしかなりません。宅では、やつと上澁四本許、隨分濃くて良い生澁だと、お父さんが自慢してたのが、澁やさんの密度計では、五度しかないさうです。それでも、初めての取引だから、勉強して買ふといつて、一本四圓八十錢づゝに約定が出來ました。二ばんや落柿のも合せて、二十五圓位になるさうです。そこで約定書の交換もすみ、引取日は九月末ときまつたので、吉例だからつて、蘘荷の玉子とじ



で、お酒を出しました。手つけ金五圓置いてゆきました。澁も新家樣位あれば、一時に五六百圓もあがるさうですから大したものです。弟は此春脊戸の流し尻へ生えた柿の若木を、南の畠へ移して大きくすると言つてゐます。

夜は嫂さんとお母さんと三人で、麻絲つなぎをやりました。十匁繋げば六錢になるから、せつせとやれば、秋にはメリンスの帶側位買へるでせう。新家樣のおせつさんなんかは、小學校ではいつも、びりつこけにゐたのに、今では東京の女學校へいつて、平素に縮緬だの博多だのゝ、帶を締めてゐる。私なんか、とてもお節ちやんの眞似は出來ないけれど、佐平さんとこのお君さん位の先生にはなつたらなれたらうにと、殘念でなりません。せめて紡績の工女にでもなつて、小ざつぱりした着物でも、きて見たいと、思ふこともあるが、いくぢなしは、思ひきつて家を出る勇氣もありません。やつぱり眞黑になつて働いて掘立のさつまいもでも、鱈腹たべてゐる柄に、生れついてきたのでせう。

## 水道中のバクテリア

バクテリアは空氣中は勿論、水の中でも土の中でも、到る處に存在して居るが、形が極めて微細な爲に、多くは特種の培養法に據らなければ、之を識別することが出來ない。水道の源水中から從來檢出したバクテリアも、矢張空氣中から落ちて來た者や、流域から混じ入つた者、水中に固有の者などの寄り集りで、其種類は頗る多いが、虎列剌、窒扶斯の如き病氣の原となる者は少なく、普通見るのは大概非病原種即ち病氣を醸さぬ種類のものであるどういふ理由かと云へば、普通の水生バクテリアは、其養分となるべき有機物の乏しい純良の水の中で、而も低い溫度の下でも、能く發育するけれども、病原バクテリアは、そんな水の中では永く蕃殖することが出來ない。例へばカルトン氏の研究によれば、窒扶斯菌の發育するには、水一リートル中に凡そ六七瓱の有機性養分を要し、虎列剌菌は四〇〇瓱を要するといふ。然るに水道の源水中には斯かる多量の有機物を含むとは餘りないから、從つて病原菌の蕃殖も少ないのである。併し其生存期間は比較的永く窒扶斯菌の如きは數週間、虎列剌菌の如きは二十餘日も生存して居ることがある。（理科大學服部廣太郎氏談）

# 離縁の原因

山梔子

　あのお美しいお優しい安子さんは只今またもとの山田さんにおなりになりましたつて、ほんとにわからないものですわね、醫學士の君のたつての御望みとやらで、卒業前に御結婚遊したあの安子さんが：：

　一昨年の校友會でしたわね？　餘り丸まげ姿のお安さんが可愛いゝので、見とれて居りましたらたしか貴女でせう？　羨しい事？　とおひやかしになつたのは財産家で學士で好男子の君ですもの、人しれず羨しいと思つた人も無きにしもあらずで御座いませうよ。でも樂しい新婚のゆめも、つかの間でしたわね。どんな深い理由がおありかはしりませんが、おとなし過ぎるといふのもたしかに、御氣に召さない重なる原因とか伺ひましてよ、やはり櫻川先生の仰つしやるとほりですね。どちらかといへば守舊主義の學校に教しへを受けた私共現代におくれがちのやうですけれども櫻川先生は快活なはき〳〵した人をお好きでしたわね、お安さんのこともよく融通のきかぬ人よと、仰せでした事も覺えて居ります。やはり人生はむつかしいものねまたそこに味があるかも知れませんけど、只今其學士の君目白出の方とホネイムーンですつて、私學士で候の何のいつてる人たちがにくらしくてなりませんわ。少しおとなし過ぎるといふ外何が決點がありませうまして、望まれて嫁いてお上げになつたのではありませんか。ありがたく頂戴して床の間の上ならずとも、座布團の上位に置いて大切にしてお上げにならなければばちがあたりますわ。どう考へましたつてお安さんの方から御離縁お求めになつたとは思へません、やはり男心と秋の空といひますね。人事ではありませんておそれ入りました。用心致しますわ。

　それにしてもみよちやんは御幸福な人ね、また羨しい？　などと皮肉りは御めんかうむりますよ。學校だつてやうやく下から二番で卒業になつて、しかもすゐ

分惡評があつたぢや御座いませんか。先生方もお手に除して、お出でのやうでしたわね、ですけれど陸軍中將の父君と美しい容色とをもつておいでのみよさんはどうしても幸福なのでせうよ。學校時代でこそ、やれ不品行な人だなどと誰一人親しむ人もありませんでしたけれど、やはり社會に出ればあの時分の級長の君代さん、福子さん等



秋の日の窓のはたてに風たちて
ころも手さむしむら雨の空
鶯氏

だつて今は足下にもつきやしませんわ。だから世の中は面白いのかも知れやしませんわ。誰が不幸か幸福か他人からはわかりませんわね。もうお美代さんの良人の君（〇〇男爵）もうみよさんが可愛ゆくつて仕方がないんですつてほんとに。だけどあのみよさんの美しいお目、お口もと、おこゑでは誰でもチャームされてしまひますわね。來世はせめて半分も頂き度いも

のだわ。まあ人の幸福を羨んで居ましたわ。馬鹿らしくなりましたわ。私だつてまた同情して頂かなくつてもいゝんですわ。可愛いい子供が居りますもの。誰より幸福ですわ。もう一人可愛いゝ人が足りなかない？て御質問？　お人のわるい……

秀子さんなんぞ、そらもう二三年前新聞で評判された不品行の○○音學學校長へ嫁らしたのですつて。しかももとの奥さんはまだ巣鴨の病院で、その音樂家の君をうらんでお出でですつて。おゝおそろしい事。何だつて秀子さんあんな所へ嫁らしたのでせう？　おまけに決して御不滿らしい御樣子も見えませんわ。女にすたりがないとかいひますが、男にもすたりは無いものね。それとも音樂家の名にあこがれ給ひてか。何にしても秀子さんの行末幸多かれといのりますわ。

そら〳〵學校に居た時分よくさわいだ、内藤千代子さんと上原さんの御寫し繪がやうやくの事で出ましてね、すゐ分じらされましたわね。上原さんは全く想像通りでしたわ。何と御上品な方なんで御座いませう。あのわざとらしからぬ御肩のあたりの衣紋。御扇子をお持ちになつたお手の美しさ。あゝ一度花ちる里の君のピアノが伺ひ度いわ。また誌上におふるひ遊せばいゝのに。ほんとに此君はもとからおしたはしくてなりませんでしたの。何ですからかうおくびをかしげてお淋しいお顔に拜見しましたのよ。氣のせいかしら？

おやもう四時かへる間も御座いませんから今日はこれにて筆とめますわ。貴女の大お好きな内藤さんの事を何にもいはなくて、失禮、此次に搔きます、さよなら。



「欄間に掛けし油繪に、秋の日射の射しそひて、笑むかと見ゆる夫の顏、うれし懷し
寄添へば、又もや陰る日の光。夫の笑顔の消えてゆく。」
その淋しさに堪へやらで、そと緣側に出でぬれば、庭面の小草
うら枯れて、蟋蟀低う鳴いてゐる。」
仰げば蒼き大空に、ほんのり浮ぶ綿の雲。私の身
はその雲と、なりて行きたや我が夫の側へ。」
いつかのお手紙に書いてある――學びの道
の忙しけれど、折には逍遥ふ菩提樹の
木蔭。北方獨逸の景色な、そなた
に一度見せたいと。」
あゝ私は御一緒なら、どんな所でも可いけ
れど、獨り眺むる晩秋の、この淋しい景色には、胸の悲しみ迫り來て、
そゞろ淚の流るゝも、どんな心と思してたまへ。」



異國の花

# 驚くべき高價な藥の産地

双蓮花

△開城行

あゝあの鐘がなる。フランス教會の……と夢現に起きねばならぬ事をぼんやり意識はしてゐ乍ら……、我にも非ずうつら／＼してゐた私は、フツト物に襲はれたやうに飛び起きて雨戸を繰つた。髮がこはれて肩に重く、ヘヤピンがパタ／＼と疊に落ちる。寝卷の長い裾に足を取られる程慌てた姿は自分ながら可笑しかつた。呼氣道つてはゐたが……矢張だめ……

夜來の微雨は未だ全く止まず、望めば南山の麓淡靄靜かに籠め、松籟幽かに通ふ。とすぐ私は電話口に立つた。開城行を聞き合せるため……。行かうといふ返事。流石に天氣も晴れた程の氣持になつて髮を結ふ。

伊藤組のゴム輪を乘りすて南大門驛に着いたのは九時を五分前、オヽ來てらつしやる／＼、美代さんも、兄さんも、白羽箭とか仰有る若い文學士も……そして今年十二の古都ちやんも……

人雪崩を打つた京釜線のプラットホームを左に見て、私共は新義州行の汽車に乘る。新しい車臺で革布團がふつくりと氣持がよい。

銀行の副理事をなすつてらつしやる美代さんの兄様は今年三十歳、總裁の御遠緣か何かでときがよいとは、人の嫉みの陰口であらう。濃いお髮を櫛卷いわけて、色のそれは白い、美代さんよりは餘程御綺麗。併し惜しい事には聊かお脊がひくい。

△赤い山赤い家

文學士と副理事とは頻りに朝鮮の産業政策についてお互の頭を披瀝してゐらつしやる。古都ちやんは外を眺めては『眞紅な家』『眞紅な山』と喜んでる。俯いて一週間程前にあつた校友會の餘興の復習に、お腹を抱へてゐた美代さんと私はドンと言つて窓に凭る。ア、紅

葉かと思つたのに…、これはまあ―朝鮮人が屋根一ぱいに、小さい丘の一面に胡椒を干してゐたのだ。こんなに刺戟性の物を食べる人種も少からう。一年三百六十五日、その三食毎に胡椒の加味された料理を喜ぶ…お汁にも、漬物は元より…パンでも、お饅頭でも…。その爲めに朝鮮人は髮の毛が薄いと某理學士も仰有つた。

耳なれぬので水色や一山などいふ驛名にさへ、面白味を感じてるうち、十一時前開城に着いた。思つたよりは小さい停車場、軍人や正服の警官の整列を不審思つたが、警務部長が歸京せらるゝお見送りなさうだ。一番に跳け出した古都ちやんは、日を受けて葉すれするポプラの並木道に立つて、向ふの黄色くなつた山を見たまゝ。

「こゝが開城？」とやゝ失意したやうな顔色に、驚ろきの目を睜つて、兄さんのオバコートの裾を引張つた。

「もつと行けば好い處があるよ。」

と兄様は古都ちやんの手をひいて、

「お天氣になつてよかつたねえ。」と空を見る。皆、

「さうですねえ。」

と忘れてゐた物を思ひ出したやうな面をして空を仰ぐ。雲母のやうに光つた雲が二つ三つ吹けば飛ぶやうに浮んで、靜かな森のどこかで鵲が鳴く。

二三町行くと總督府專賣局の出張所へ着いた。(つい昨年迄參政局といつてゐた有名な開城人蔘の專賣所)頭を五分刈に、瀟洒と書生のやうな姿をした文學士は、眞先に進んで玄關から上られる。

やがて局長や技師の方にお目にかゝつて、二階の標本室に導かれ色々の御説明を伺つた。今は人蔘と聞いても昔唯一の良劑、高價藥であつたと思ひ出すより外、若い人達には何の感興もひかぬが、この日本の醫界に捨てられんとせる人蔘も、今では獨逸の大家連中に、盛に研究され又、使用せられつゝあるといふ。心なきこれ等草木にも過不過は免かれぬ浮世であらうか。

私は半透明な飴色のその一莖を握つて、昔つては高麗王朝五百餘年の榮華を極めたこの舊都を代表し、延いては現今國家有用の産物として、此地の經濟界に大なる影響を與ふるこの紅蔘、私は見る目に興を湧かせ聴く耳に熱心の血を通はさぬ事は出來なかつた。

### △恐しい高い藥

今ではこの人蔘を栽培してゐる所は、世界中で我日本とこの朝鮮亞米利加合衆國と滿洲の四ヶ所ださうで、値段を言へば、日本の(白蔘)一斤四圓を最下に、滿洲産で九圓、アメリカ産で二十圓、開城のは一斤專賣局拂下の卸値が平均八十二圓であるといふ。而もそれが一旦海を渡つて支那へ行くと直ぐ倍價になる。良いのは二百圓もする。と聞いては私は――支那の大官連中の恢復の見込なき重患の床に、畏くも朝廷より人蔘を賜ふとある――を思ひ出してうなづいた。一匁づゝ煎じて湯呑に朝夕二杯呑んでもそれが四圓……この高價な人蔘を産する地は朝鮮にでも廣くはない。この開城附近僅か八郡だけであるさうな。多く出た年は九萬斤以上もあつたさうだが、此四五年は蟲害が多く、その爲め非常に産額も減じて今では三千斤内外といふ。併し、日々改良に意を用ひられつゝある事故、明治四十八年以後は四萬斤乃至、五萬斤の産出を見るべき見込の由にて、さうなると年々三百萬圓づゝ、あの利に敏き支那人の懐から我新領土へ落つることになる。

この人蔘は六年毎に収穫されるので……、一粒撰りに撰られた種を、花崗岩の碎砂と木の葉を腐らして粉末にしたものと等分に交ぜ、これで蟲害を防ぐ爲めボルマリン液で消毒した苗床へ撒かれる。珍らしい事には日光を厭ふ植物ださうで、その床は皆南を覆ふて北を僅に開いてある。斯くて其年十一月に葉落ち根だけ殘つてるのを、翌年の四月畑に移植する、その時に惡るい根は皆撰り抜かれる。それから五年、愈期滿ちて掘り出されたのは、蒸して火にかわかし紅蔘として輸出される事になる。

人参位捨て所のないものはあるまい。髯のやうに小さい所は、細微といつてこれも一斤五圓からの價があるし、蒸す時に出た湯氣は煮つめて濃厚な黒褐色のエキス、即ち参精として切創などの妙藥になるし、成長の見込なく一年目に捨てられた、赤兒の小指程のも、砂糖で煮れば糖参といふ高價な菓子になり、明治屋や辻屋の店頭に飾られてある。

特に私が珍らしく感じたのは、電氣栽培法であつたこれは増收の目的で今年から始められたさうである。製造場にも行つて見た。澤山の朝鮮人は男も女も、多くの巡査に監視されつゝ夫々の仕事をしてゐた。造幣局と同じに高價な物を取扱ふ事故、出入には皆身體を檢査されるのだ。

### △日本遠征の企て

興深く覺ゆるのは高麗朝の昔、此處は支那の使臣を迎ふる太平樓のあつた處で、ことに蒙古から高麗を先導として、日本遠征を企てた時は、この樓は征東公署として高麗王は其長官を兼ね、日本討伐の謀が盛に運らされた處なのだ。その建物もつい廿年前迄あつたさうなが、それが面白い事には廿七八年の戰役後、大韓國の獨立が愈世界に確認された日、何の故とも知らずこの館は倒れたさうで、ひとりでに。（奇蹟を喜ぶこの國民は皆さういふ）。其跡に建てられたこの專賣局が今は武力ならぬ經濟上の戰爭に、彼大國を降伏せしむべく孜々精勵されつゝあるのは、何かの因緣でもありさうで面白いコントラストではあるまいか。その樓の遺物として今は僅に一つの樓門と從者の室だけが殘つてゐる。私は目を閉ぢてこの妙を極めて彩られた丹青の繪具が、細絲のやうな春雨に溶けて流れん宵を想像した。

此土地第一のホテル開和館に着いたのは午後一時過であつた。眺望の好い二階の十疊に車座になつて御飯を食べる。其中古都ちやんがお待ちかねの柿も、バナナも、名物の燒栗も揃つた。思ひ〳〵に手を延べる。

## △美しい行列

「ヤア素敵。」と窓に凭つた文學士が呼ぶ、一様につと立つて窓から下を見る。五六臺車を連ねて美しい妓生が……

「ム、成程尤物だ」――副理事もお喜び。

お揃ひの眞紅な蝙蝠傘に衣と裳は綠や、白や鴇色や海老色や簡單なる色を調和よく……眞白に塗つた顏色も遠目には美しい。漆のやうな髮の金簪に秋日がキラリとまぶしく光る。




鼈甲のやうに艶ある栗を口へ入れた文學士は、

「明日は、と王宮跡の滿月臺へ行つて、……栗を拾つて……、それから忠臣鄭夢周の要擊された善竹橋を弔ふて、豫讓賢者のゐたといふ進鳳山にも行くかな？」

「まあ あの高い、岩ばつかしのお山へ？」と美代さんは辟易する。

茅屋の軒を掩でたコスモスの末に夕日は紅く躊躇て、窓際の櫻紅葉がはらはらと落ちた。

# クラス會の人々

萩の下露

ヂリ〳〵と燒きつく樣な眞晝時、疲れた身體を柱に凭たせると、烈しい光りをうけた樫が毒々しい程青う映えて目が痛い。マーお座敷の賑やかなこと、九十何度のこの暑さに、破鐘たゝく樣な伊藤さんの號令聲をきくと、頭の底まで響いてヅキ〳〵する。

今日はクラス會が宅になつたので、八時頃から口惡屋の伊藤さんを眞先きに、太田さん、廣瀨さん、伊達さん、林さん、主客合せて六人ながら、二十人も集まつてる樣な大騷ぎ。八疊の間にヅラリと並んで十年前を思ひ出の、お互の素つ破ぬきやら棚おろしやら。

山田が今ぢや知らん顏してるが、五年級の時だつたなー、授業時間におくれて垣を飛びこして入つた處を校長に見付つて油を絞られた時の恰好の惡さハヽヽ。

忘れやしないよ、さん〳〵油を絞られて一時間遲參にされて、次の時間に僕と校長のポンチを黑板に畫ておいたのは君だつたらふ。

「ハヽヽヽ。」

「ハヽヽヽ。」

三十にもなつてお鼻の下には黑いものさへある皆樣が、十七八の子供見たやうなこと云つちやお笑らひなさる。私共が當地へ來てから間もなく、廣瀨さんが東京からお赴任遊ばすし、大田さんも去年の秋から當中學に御轉任あそばしたので、同じ中學を同期に卒業したものが、銀行家としてチヤキ〳〵の法學士の廣瀨さん、中學教師の文學士の太田さん、工兵科の伊藤さんに重砲の林さん、郵便局員として日々お辨當かゝへてお通ひ遊ばす伊達さんに、歩兵科の夫と六人になりましたので、毎月一回日曜日に他人交らずのクラス會を開くことにしてから、今月で十回ぶり。この日ほど愉快なことはないつてよく皆樣お話し遊ばす。其の頃流行つたと云ふストライキ節だの、書生さんお金がない

とてお困りかえなんかを………、濁聲張り上げて恥かしげもなくお歌ひなさる、先月伊藤さんのお宅で開かれた時なんか、御主人樣がおもてなし振りに、これも一種のお肴とでも思し召してか、柄にもないカッポレをお踊り遊ばしたので、床が落ちて了ひましたつて、何卒そんな事のない樣に、直きお隣りがお家主さんですから……。

柱にもたれてヂッと聞けば、奥樣の品評めの最中。



要するに、女房には、常に頭を上げさせない樣にする事が肝要だ。僕なんか結婚した時にまづ夫妻の權利を五分五分として、妻にも相應の敬意を表してやつた處が、増長して來て始末が惡くなつたから、近頃はすつかり主義を改めてねえ、君主專制さ。初め頃には隨分不平を云つて理屈を捏ねてたが、この頃ぢや大分諦めたねえ。それでも時々生意氣な事を云ふから頭から、怒りつけてやるんだ。口では偉さうな事云つても、女だからね、こちらが強く出て見せると弱るねえ。もしその反對にでも出たら大變だ．直ぐ

クインになるよ。

實際女つてものにも困るねえ。僕の妻なんか何かすると、すぐに妾は高等女學校の教諭で御座る、と云ふ樣な面をして、朝でも僕より先に飯を濟まして、サッサと出かけるし、夕方は日が暮れてから歸る事もある僕だつて終日茶目を相手にして、代數が如何の、二次方程式がかうのと、かなりに疲れて歸つて見りや、猫の子が一疋も居なけりや、腹が空いても食ふ物もない、こんな事が一週間も續くと、いかな僕だつて腹の蟲が承知しないから、ツイ怒り度くもなる。僕が怒ると妻も決して負けちや居ないね。

職務を持つてる以上は、さう〳〵あなたの事許り心配してる譯には行きません。私が學校へ出るのは初めから分つてるぢや有りませんか。

からだ。女にして女らしからぬ程、男の目から腹の立つものはない。まして妻たる者が、何だ僅か許りの學問を鼻にかけて、夫に反抗して來る、實に時々腹が引つくり返る樣だ。これが恩人の娘でさへなくば：：と思ふと情けなくなる。あんな體裁で生徒にどんな事を教へるかと思ふと、冷汗が出るよ。まあ僕がいゝ手本だ、林君と廣瀨君とは今からだが、よく注意して、僕のやうな失敗をしない樣にし給へ。

サンキュー、君には氣の毒だが、僕等にはいゝ參考だ。一家の主人となりながら、ホームに何の樂しみも味もない位ゐ、つまらないものは有るまゐねえ。僕は未だホームなるものゝいかに樂しきものかは知らないが、今まで知れる限りに於て、細君に深い學問があるよりも、まづ高等卒業位ゐにして、世才ありて實際的手腕のある方が睦まじく治まる樣だねえ。その方が夫のためにも愉快なり、妻自らのためにも樂しみだらうと思はれるよ。云つちや氣の毒だが、大田の宅へ行くと、妙に宅の空氣が冷たくつて淋しいねえ。それに引かへて羨ましいのは、伊達と山田のホームだ。伊達の妻君は、いつもキチンとして、座敷もよく片付いて、何とも云へぬ心地がして、つい長居をするし、山田の宅はいつ來ても春の樣に陽氣で、花やかだ。

君等は幸福だよ、細君も幸福だ。

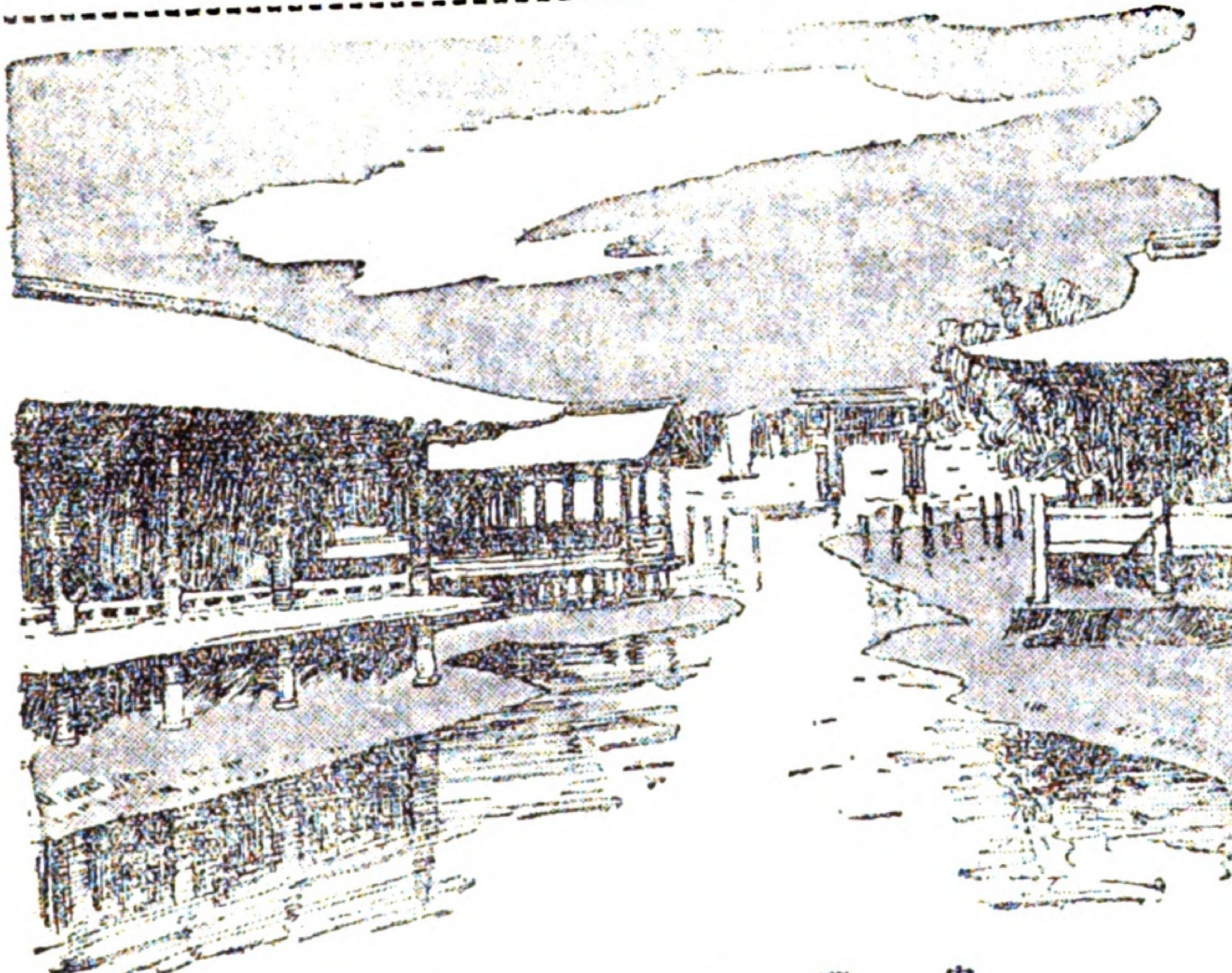
君の樣に云つちや赤面するよ、實際山田のホームは圓滿だ、山田だつて今まで苦勞の味は知らず、士官學校時代や初級時代の苦勞だつて分つたものだからねえ。奥さんは僕の宅と近所だつたから、幼少の時からよく知つてるが、これ又苦勞知らずの秘藏つ子で、荒い風にも會はないでお育ちなしたのだから、君のホームの圓滿なのも當然さ。それに比べると僕の妻なんか氣の毒なものだ。早くから父に別れて母親の手一つで苦勞の中に育つて、其上僕の樣な意久地なしの女房になつて、苦しい苦勞のやりくりを一人で心配させるのだからねえ。俸給かい、先月漸くお情けで三圓增して二十七圓さ。これで親子三人はかなり苦しいよ。どんなにしてやつて行くか知らせない丈けに、猶更氣の毒で、夜が更けるまでセッセと縫物してゐるのを見ると、頭が痛くなる。如何かしても少し收入を增す方法はないかと種々考へて見るが、一向心當りもなし。

生活難は君許りぢやないよ、僕なんか慘澹たるものだ。酒保の拂ひから小遣錢とで十七圓餘り、さし引いて殘りは皆妻に渡すがねえ、いつも〱月末には大騷ぎさ。先月なんか十五圓も不足だと云ふから、怒つてやつたよ。

足りないかつて、それを心配するのが貴樣の役目ぢやないか。夫婦に下女一人で八十圓で暮せない事があるものか。十五圓位ゐもらつてる巡査の妻を見ろ、立派に立てゝ行くぢやないかつてねえ。そしたら酒屋、肴屋、八百屋、米屋、あらゆる出入商人の通帳を持つて來て算盤出して、

妾がわるいか、眞に不足なのか、當つて見て下さいと云ふんだ。當つて見りや僕も惡い。家賃が十四圓に酒屋が十二圓、魚屋が十圓もある上に、呉服屋にも十圓餘りあるものをね。足りない筈だ、近日の内にも少し家賃の安い宅に移つて、酒を七八圓位ゐにして、其の代り呉服屋へは手を出させない樣に命令を下しておいたが、實際弱る……、山田の宅は如何だい。

如何して行くんだか僕は少しも知らないが、一ヶ月



安藝宮島廻廊

に七十圓づゝ渡すよ。初めの頃は隨分弱つてる樣子だつたが、この頃は何とも云はないから、僕も危きに近づかずハヽヽ、知らん顏してるよ、何も君等の云ふ樣な理想のホームとは行かないさ、時によると僕が怒る、妻が泣くと云ふ面白い芝居もするけれど、今まで末つ子で甘かされて許り育つたもんだから、氣が弱すぎて困る、少し僕が大きな聲をすると、直ぐオド〳〵して涙を出す泣蟲さ、只溫順に育てられた丈けが僕なり妻なりの幸福さ。いくら僕が怒つて歸つて來ても、オドオドして懼れるのを見ちや怒られもしないからねえ、ムツとして、歸れば門の柳かな、ハヽヽヽヽ。オイ廣瀨、マレーヂはいよ〳〵何日かい。

來月の三日に決めたよ。いづれ改めて通知はするが、何卒來て呉れ給へ、奧樣御同伴でハヽヽヽ。第一に奧さん達に御懇情を願ふよ。

美人かね。

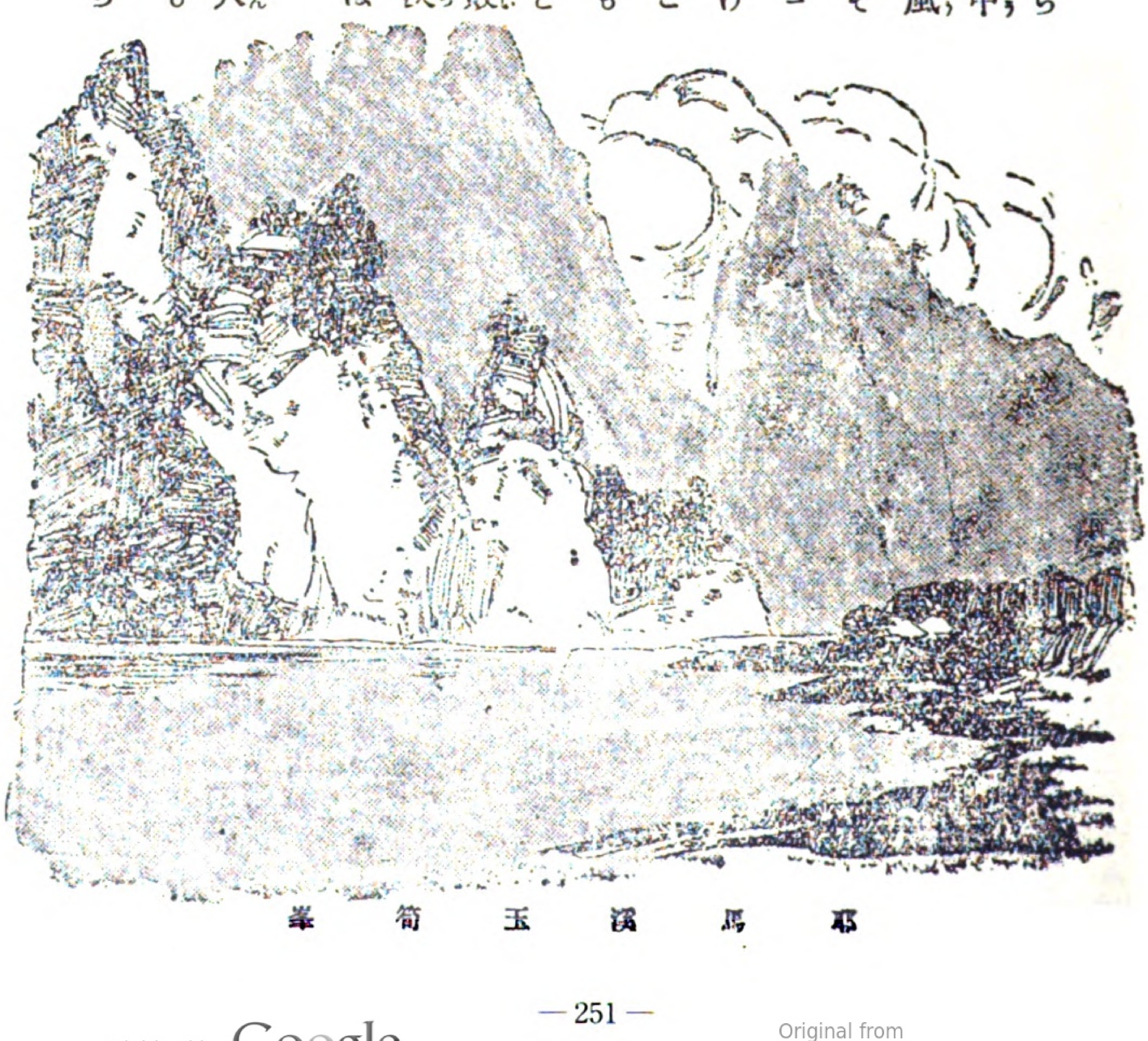
ハヽヽ、如何して〳〵。

一體君は如何云ふ望みで探したのだい、參考のため

に聞かしてくれないか。

格別望みと云ふ程の事もないけれど、第一に國から貰ふ事にした。義姉がいゝ手本だからねえ。僕等は中國、義姉は仙臺だから、食物の嗜好を始めとして、風俗なども大變違ふから、お互に困る事があるんだ。それで僕は是非國から貰ふ事に決した。少し位ゐおデコでも、愛らしい顔立ちがよく、健康が第一、血統丈けはよくたゞして、年頃は二十から二十五まで、まづこんな事だつて。隨分いろんなのが有つたよ。美人でも性質もいゝ、金もあるし、こりやいゝと思つて種々と苦心して探つて見たら、天刑病だつたなんて云ふ失敗もしたよ。いよ〱決めた奴は二十二で、美人ぢや決してないが、丸い顔の、丸くよく肥えてる、目丈けは當世式でねえ、この目が氣に入つたんだハヽヽヽ。

實際細君は國から貰ふに限るよ。ツイこゝらで美人だなんで手を出さうものなら、酷い目に逢ふからなー。なか〱この頃の令孃は恐ろしいよ、僞物が多いからねえ。



耶馬溪玉筍峯

全體女つてものは德なものさ、大田の細君のやうに女學校にでも出て、三十なり四十圓なりの金を持つて歸りや、共稼ぎと云つて大きな顏するし、平凡で何も出來もしない僻に奧樣面して、汗水ながして稼いで來る金を勝手に使つちや、ソレ旅行、ソレ何と云つて借金を作る。叱れば泣く、すねる、甘い顏見せるとすぐ增長する、五月蠅いねえ。

それがいやで今日までチョンガーで暮すと云ふのかい、いゝ口實ハ、、、、、。

ハ、、、、。」

君は女と云ふものを惡く見るからいかんのだ。善の後には惡あり、惡ののちには善ありさ。借金はしても、時におくれぬ衣を作つて交際に出るのも、矢張り夫に相應の地位があるから、いやでも致し方なくするのだ僕の妻なんか亭主に働きがないから、先で返せる目的がないために、借金もし得ないで、一枚の衣も着ずに、セッセ〳〵と働きつゞけてると、交際の必要がないから訪問すべき家もなし、哀れなものさ。たとへ借金しても人並の衣着せて、人並の交際をさせる事が出來たらと思ふよ。時々は女房ながらも濟まないと思ふが、一度だつていやな顏も見せず、無いながらにも僕を慰める其の心、影ながら禮も云ひ詫もするよ。女だつてそれ程始末に了へないものぢやないと僕は思ふねえ。

實に君の細君は感心だねえ。君は不遇を嘆くが、決して不幸ぢやない。あんな賢夫人を持ちや大なる幸福さ、僕の家庭を見給へ。

僕は此の間國から遊びに來た妹から聞いて非常に感心したが、クラスに沼田つて俊才が居たねえ、中學を卒業するなり直ぐに渡米した、あの細君の話さ。

ウン少さい男だつたねえ。いつ結婚したんかい。

元來、極く幼少の時から親と親とで約婚を決めて居たさうだ。勿論その頃は沼田の宅だつて資産も有つたさうだがね、如何してか父親が死んでから、見る間にあんなに成つて、渡米して了つたから、いつか疎々しくなつて居たさうだ。その中に細君の方は女學校を卒業する、金持の獨り娘と云ふので、方々から申込みが

有つたさうだけど、沼田との話が有るからつて、當人が如何しても聞かないで、廿四の去年まで、ミスで通したのを沼田が聞いて非常に喜んで、去年の冬九年ぶりに歸つて來て結婚して、二人連で又渡米したさうだ。人情紙より薄しと云ふ今の世の、而も若い娘の中にも、そんな感心なのがあつたかと思つてうれしかつたよ。ノラだのマグダだのと云ふて浮れ歩く隙に、こんな話でも聞くがいゝ。

感心だねえ全く。現代が何だ、自覺が何だ。女は貞順にして温和なるべきものだ。僕の求妻條件は、貞順!! 温良!!! これだ。

而らば夫も妻をして、滿足せしむる丈けの愛情と物質的供給なかるべからずハヽヽヽ。

サーどーぞお茶を、お煮花を出しましたから……

……。

## 避姙は亡國の基

生活難救濟の一方法として、近頃避姙奬勵の聲を聞く。其說によると、餘裕なき者が無暗に子供を拵へては、益々生計に苦むばかりか、生れた子供をも營養不良に陷らしめ、且つ敎育も充分に屆かぬ爲、却つて不健全なる愚民を增し、國家に煩累をかけるばかりだ。寧ろ養ひ得るだけに子供を制限して、完全な人間を造つた方が宜い。と云ふのである。一應尤の樣に聽えるが、併し茲には猶熟考せねばならぬ多くの問題が橫はつて居ると思ふ。藥劑若くは器具を用ひて絕對に安全無害な避姙が出來るや否や、或は此事が道德及び法律の上に如何なる影響を及ぼすやは暫く之を論外に措くとするも、之を實行するに當りては、大に其國狀に鑑みる所がなくてはならぬ。若し現代の日本に於て、避姙を奬勵し之を實行するが如きことあらば、實に奇怪至極の話である。驚くべき誤りである。マルサス論者の言によると、現在地球上には十五億の人が居る。而して地球が人類を養ひ得べき最大限度は六十億であつて、今の割合で人口が增加して行くと、二百年を待たずして其最大限度に達するといふことである。若し以上の言をして事實ならしめば、人種と人種との生存競爭は刻一刻激烈となるべきは言はずして明かである。其激烈な競爭に際して最後の勝利者たるべき最大要件の一は數の問題である。六千萬の純日本人種は、十五億の二十五分の一にしか當らぬ。此點から見ても同胞百年の大計を思ふ者は、避姙などゝは口にするだも汚らはしいのである。國が狹いの、米が高いのと、ケチ〳〵した小言を並べる暇に、一寸でも朝鮮や滿洲、西比利亞の地圖でも見るがよい。(永井醫學博士)



おほ空のいろ、瑠璃にすみわたりて、跡と照らせる日射しに、物の色のあからさまなるは、たとしへなく、心地よけれど、胸に秘密のつゝまれぬる身には、いかばかり情なく、うしろめだき心地しけむよ。

日脚みじかき秋の日の黄昏るゝまゝに、騒しき大都の響き自づからわかれて、電車のきしりさへ、物賣の聲さへ、一つ〳〵聞ゆるも、頼りすくなに、いと哀れなり。

夜は夜すがら、蟲の聲いたく鳴きすだきて、なにとなく此世の果敢なげに思はるゝ折から、有明月のほのかに照りわたるを眺むれば、あはき戀のくるしみ胸をせめぎて、我れ知らず涙ぞながるゝ。



# 妻の計略

玉かつら

都會の生活が羨ましい。私の境遇が羨ましい「何不足ない。」つて云ふ言葉が私の今の身分の代名詞だ。とはまあなたもお世辭がお宜ろしく御なりなさつた事。仰御尤、世間人並ちや私も至極平凡に面白さうにして居ますさ。けれどもそれは陰氣だと人にいやがられるから、そして若も愚痴をこぼして内心の不平を訴へたつて、口先きでは「よく辛抱する」の「何世の中にはもつと不幸な人もある」のと、體裁よく同情したり慰めたりして呉れたつて、眞から成程とも思つて呉れる人はありやしませんもの。此上さらはれては浮ぶ瀬がないからそれで何事もない風をして居るけれど、つく／＼私しや此世に飽きましたの。羨ましいなんてお世辭にも云つて下さいますな。

生活難の聲の高い當世に物質の苦勞も知らず體は丈夫、男女二人の子供はあるしつて被仰るけれど、體が弱くたつて短命だつて生き甲斐のある身ならば下らなく長いよりはましでせう。子供が何になりませう。大きくなつてお嫁にやればやつた先きで何だ彼だと惡く云はれて其度びに第一母親が苦勞知らずだから子供に十分の仕込みが足らないんだ。と私も引合に出されるし、さう云はれまいとしても子供の方で今時の子供はなか／＼母親の云ふ事なんか聞きはしないし、男の子は猶更の事嫁でも來ればまづ／＼早く死んで呉れゝばいゝ位なもの。イイエほんとですよ、來る時からして姑は煙たがられますもの。現在私にした處が姑のないので此家へ來たのですよ。

然子供なんぞ力にするのは原より心得違ひな話で、明治の人間でさへ個人主義とかつてのが多かつたのに

大正の時代となればまたどんな主義が流行りませうか。まァ私なんか子供はいやだ〳〵と思ひながら生んでしまつたから仕方なしに育てゝ居ますの。實際義務的で別に行末世話にならうなどゝも思ひませんね。

「エッそれぢや夫に賴るかつて、ホヽヽ何をおごりませうねエ。三度の御飯を不足なく頂かせて下さる。畢まり高等下女として無給金に飼ひ殺しにして呉れる其點は十分厭けなく感謝して居りますさ。又其御禮として妻らしい行をちやんと致して居りますさ。たゞそれだけ。エヽたゞそれだけですよ。至極睦ましいものですよ。

一番始めに自分で子供を育てゝなか〳〵骨が折れたので二番目のは乳母にして見ましたが、これもなかなか樂ぢやないんで此頃の御暑さには夜もろく〳〵眠られませんのよ。百日咳にかゝつてね。二人とも夜半にも度々せきをするのでせう？。好い幸に離れた間に乳母と私と子供二人と寢ますの。すると小さい方が咳で苦しがつてもがいたり泣いたりしても乳母は白川夜船でせう。私も大きい方の蚤を取つてやつたり汗をかくので寢卷を代へてやつたりしなければ眠らないでぐず〳〵云ふから、小さい方は是非ともしてもらはなければ世話が屆かないのに此始末でせう？。ちり〳〵と氣が起つて目が皿のやうに冴えて頭がぴん〳〵して來るんです。

そこへ夜更けて醉眼朧ろに御機嫌よく旦那樣お歸りとなれば、夫「今夜は待遠だつたかい？」非常に持てゝね歸るにも歸られすさアハヽヽ燒ちやいけない……此間の話の照葉も來たよまだ子供でねエ言葉はまるで上方式さ、小指を切つてるよ、男にやつたんだとさ、感心だね子供でもないかな？　なか〳〵美人だよ。」

などゝ仰せられゝば意地にも、

妻「まあそれはよござんした事、其外には誰々？　へエすま子さんてお婆さんも來たんですか、三味線が上手ですつてね、私も一度はすま子の三味線が聞いて見たい。」

なんて調子を合せなけりやならないんですもの、くさ

くさしてしまひますわ。

夫「聞きたければ聞かしてやらうさうして僕の見せたい人も見せてやらうか奥さんに逢ひたいつて云つてたよ。」

ですつてさ、天下泰平なもんだ。先ちや今頃お氣に入りの天下の藝術家一名馬の足でもしやぶつてますわねエ。

さう〱其女で思ひ出しましたがあなた都の生活が羨ましいつて被仰ると矢張り三越や白木へいらしつたりお芝居が御らんになりたいの？　成程お美しいあなたを肥たご臭い田舎で八兵衛田吾作にばかり拜まして置くのは勿體なう御座いますのね。「時に月清き不忍池畔をうすもの丶袂もかろくクラブのかをり……」なんて白粉の廣告になつてしまつて失禮々々何しろ東京の女は美しくなりましたよ、帝劇へ此間もいつて見ましたけれど一ヶ月金二十圓也の借家から出て入らしつたとは見えない程新ダイヤも光れば空氣草履もなりましてね。




帝劇の話を聞かせろつて被仰るの？。今其御話しやうと思つて居た所なの……其女なるものを説明する爲めにね。

帝劇の西の入口で夫が「オヽ!!!」つて食客が棚の牡丹餅でも見付けたやうな聲を出して江の島の貝細工にある面のやうな顔をして笑つて居るんでせう。オヤ？と思つ

てよく見ると居た〳〵。

向ふにお誂のたび長ぬき衣紋と來ると丁度似合つて居るけれどこれはまた當世紳士が崇拜愛慕する文明ゲイシヤガール○○家○○つて申す其人は洋裝で出現ましましたわ。スラッツとしたれどもお尻は多きく、美しいけれども一向艶やかでない……憚りながら校中の花と呼ばれ交際社會の星と輝いた私と云ふ才色双絕の愛妻を忘れてまで現をぬかす其對手がこれちやあ一向榮えないと思ひましたよ正直に申すとねエ。まあ私が及ばない所は英語の非常に達者な事でなか〳〵ナショナルリーダーの四なんかではお話にならないと承つたがフレンチなら私だつて「今日はよくお招き下さいました其上かやうな御馳走になつて御主人があなたの御手厚い御あいさつを頂いては光榮これに過ぎません。」位は云へるけれど……

よし〳〵今から一生懸命會話のお稽古でも初めやうかしら？　アヽ駄目ですわ今日帝劇へ來てさへ女中達は留守にどんな熱を吹いて居るか子供の世話なんかそつちのけで。

女中「皆お止しよ馬鹿々々しい主人は芝居見物で子供を預きつ放しにして行つたのに何でそんなに働いてましよくに合ふものかね今夜はおそくなるんだね、ちつと居眠りでもしやうぢやないか。」

萬事がこうなんですから、英語のけいこなんてとても出來やしません。昔の主と臣との義の固い事一度其家の祿を食めば一命は捨てゝも主の爲めに盡したものですが、今の女中なんてものは猫を飼ふより仕末が惡うございますよ。德をかければ增長し氣をつけてやれば氣を付けてもらふのが當り前として當てにするやうになつてしまふのですからねエ。

こんな事を考へてるうちに例の我國の何とやらだと云ふ歌をうたふ人が出て來ましたよ。舞臺の片すみには見覺えのあるあなたも御存じだけれど、ありや何とか云ふ西洋人でした、其人が伴奏するんですよ。

トントンと微かにピアノが響いたと思ふと大きな口を眞丸に開けて、「サーユーラーサーキユーラー」ツは

てな白木屋で賣り出した變な格好な外套がたしかこんな名だつたが其歌を唱ふのかしらと思つたら、まあ琴歌の櫻々、ですとさ、そら私達がおかつぱさんで紅葉の樣な手々でコロリンシヤンと彈いてうたつた櫻々の歌ですよ。それが一日何十圓かで歌ふのですつてさ。それで其次に鳥の鳴き合みたやうなものがあつて、それで三十振袖の御姿が引込んでしまつたら滿場の紳士貴女達が煙に卷かれたやうな顔をして、

紳士「全く新らしい試みです。」

淑女「新らしいわ。」

つて新らしがつてゐらつしやいましたよ。

あなたと二人して湯島の天神樣で頭の毛の黄色い飴屋がかんなくづで奇態な笛を作つてハピーヒユルヒユロつて吹いてたでせう? それを感心して立つて見て居ましたつけね。まあ早い話がとんとあんなもんでしたよ。



あゝさう〳〵百合子樣にお目にかゝりましたよ、素敵な御容姿でね、白リンネルに黒色ネクタイ金縁眼鏡の若い男の方とお二人でね、賣店の役者の寫眞を頻りと見てゐらしつたので私大きな聲で、

私「何をそんなに見てゐらつしやるの?」

つて云つたら。

百「まあお珍らしい。お二方で?、さう私あの東のボックスの三よ。お出遊ばせな。一脚あいとりますの。」

つて被仰ると其眼鏡の君が、

「百合樣お友達？　ア××の奧樣！　お名前はよく伺つて居ります。僕は百合さんの兄樣と義兄弟です。春山と申します。さ是非入らつしやい御一緒に見ませう、さ一幕だけでも御一緒に。」

　とヘリオトロップの匂ひ高い白麻のハンケチで眼鏡をふき／＼手を取らぬばかりに被仰つてはまた顏をのぞき込むやうに腰を曲げる表情の見事さ。其間々に百合子樣の華やかなお聲が美しく交つて、お芝居よりも調子がよく行きます。

　それも其筈、外の事は何にも考へず毎日／＼笑ふ時の脣のゆがめ方はかうしたはうが可愛いだらうか、後を向く時の頸のねぢり方はどうした方が品がいゝだらうか。なんて事ばかり研究してゐらつしやるんでせうもの。

　あゝ然し。日本國民の全部が帝劇へ來るのぢやあるまいし、電燈輝く樂園に音樂を聞く人もあれば同じ其夜を親子兄弟相抱いて貧に泣くあはれな人々もありませう。自分達ばかり「輝くよそほひ」などゝ題して婦人雜誌の口繪に毛はえ藥や、やせる藥の間にはさまつて顏をさらして喜んで居たつて、同胞同國民がぼろをまとつてうろ／＼と銀座あたりを、さまよつて居られちや、見つとも無いぢやありませんか。

　百合子樣はたしか十九でゐらつしつたと思ひます。十九と云へば乳人淺岡が伊達家再興をした年ですわ。日本人は女だつて魂一つで一國を保護したぢやありませんか男と生れては猶更の事、春山樣とかも法學士男爵と云ふ御身分に對しても頭の油や香水の種類になつたら腦味噌をおつかひ遊ばさすとも。山とつんだ外債の仕末でも考へて下さればいゝに、何も私風情に何の彼のとお言葉賜はるには及びませんわ。

　私馬鹿々々しいから、たゞ「ハイハイ」つて微笑んだばかり……。　エ？。「ハイハイ」つてお品振つたつてお馬のひん位なものだと被仰るの？　オヤ／＼これは恐入ります。

　だん／＼風向きが變つて參りましたから、「それではこれで失禮致します。御身御大切に遊ばしませ。

思へば昔「二人は女並の生涯は送るまい北海道の端を開拓して其處に二人して家を持つて、密獵船を捕まへたり農業をしたりして暮しませう。荒くれ男幾人か配下にして板子一枚を命の瀬戸大海原の荒浪も自由自在に漕ぎまはつて女船長ともならう。目もはる〴〵との大田園の女主人となつて日本の富を益す事もしやう。」つていつも〳〵話し合ひましたつけが、理想と現實とは三角形の三片の如く、常年の意氣未だ消えざるに、身は平々凡々としてお互に愚痴の云ひ合ひ……あゝ〳〵命短かく思ひは長く身は囚はれの籠の鳥、女はつまりませんわねエ。

いたづらに我は死なじと人は云へど
名もなき墓の多くこそあれ。

つてまつたくねエ……。さよなら

## 英國女皇の御質素

私は主に英國に居りましたから他の國との比較は出來ませんが、一番私の喜ばしく感じましたのは英國の人は鳥渡好きは米國人の樣に宜しくはありませんが、氣が合ふに從ひ一種言ふに言へない心盡しが深く〳〵身にしみる事です、流行も激しいには激しいですが、上流の方々は至つて質素で儀を守つて身分の品格を落さない樣に努められます、御存じの通り新皇后は誠に御質素の方でございますから、其邊には殊に御注意遊ばされ、先年スカートの板の樣なのが流行致しました時などには、其流行服では御拜謁が出來なかつたさうです。服裝も日本とは反對に娘時代には飾一つなく指輪一つはめないと言ふ風習です。其上羨ましい事には、英國の人々の語學に通じて居られる事で、まだ赤ん坊の頃から四ヶ國位ゐの國語をそれとなく教へられて居りますので、自然日本の人の樣に苦勞もせず語る事ができるのです。音樂の發達は日と共に盛んになり、音樂の趣味のない人は無い位ゐです、國情も違ふからでもありませうが、英國の上流の方々の夫人等は毎朝自動車で日用の入用品を自ら買ひに出られるのですから、日本の上流の方も英國では其習慣を用ゐられて居りますので中々の活動振です。過日女子參政運動で一時は戰爭の樣で其有樣は丸で狂氣の沙汰でした。それが爲今は世間も同情せなくなつた樣ですが、それでも運動は盛んに續けられてゐます。併し上流の方々はこれを悲しんで居られます。（山座參事官夫人の談）

# 十月の惣菜料理獻立(一)

| 日 | 朝 | 晝 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 一日(火) | 油揚、葱、うの花汁 | 鰆鹽やき | 初茸、里芋煮しめ |
| 二日(水) | 小芹、味噌汁 | 鹽とび魚、やき | 鰯、葱、酢みそ和 |
| 三日(木) | さつまいも、葱、清汁 | 蛤みそ煮 | まぐろつけ燒 |
| 四日(金) | 里芋味噌汁 | 初茸、にんじん、こんにやく白あへ | 酢だこ |
| 五日(土) | いり豆腐、もみのり | 鰯しほやき | 竹輪麩、はす、雁もどき、煮しめ |
| 六日(日) | 葱、豆腐すまし汁 | 茄子、しぎやき | まぐろ、さしみ |
| 七日(月) | 和布味噌汁 | 鯛あら煮 | 章魚くず煮 |
| 八日(火) | 鰹節でんぶ | あなご天ぷら、おろし大根 | 蓮根、油あげ、ごま酢あへ |
| 九日(水) | 小かぶ、油あげ清汁 | このしろ附やき | 松茸、葱、煮びたし |
| 十日(木) | 里芋味噌汁 | 鰯しほ燒 | 豚カツレツ |
| 十一日(金) | やき松茸、大こんおろし | 鰤つけ燒 | 蓮根、里芋煮しめ |
| 十二日(土) | 豆腐うす葛 | 八つ頭芋、生あげ豆腐煮しめ | まぐろさしみ |
| 十三日(日) | 和布味噌汁 | いか附やき | ひしこ酢煮 |
| 十四日(月) | うづら豆、やき海苔 | 牛肉、じやが芋うま煮 | ずゐき、油あげ、ごま酢あへ |
| 十五日(火) | 小かぶ味噌汁 | 松茸飯 | わらさ煮附け |

# 十月の惣菜料理献立（二）

| 日 | 朝 | 晝 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 十六日（水） | やき海苔・生玉子 | 鰯酢むし | しのだまき、子芋・こんにやく煮つけ |
| 十七日（木） | 福神漬 | 竹輪、里芋、こんにやく・雁もどき煮込 | まつだけ、豆腐清汁 |
| 十八日（金） | せん大根味噌汁 | いか附けやき | こんにやく、生揚げ里芋煮しめ |
| 十九日（土） | いり豆腐、もみのり | このしろ附けやき | まぐろさしみ |
| 二十日（日） | わかめ味噌汁 | 鰯フライ | 栗・くわゐ、さがら鉄ごま和 |
| 二十一日（月） | 八杯豆腐清汁 | 牛肉、蕪根・じやが芋旨煮 | とろゝ汁 |
| 二十二日（火） | 鶉まめ煮豆 | 車海老天ぷら | 蓮根、里芋・生揚煮しめ |
| 二十三日（水） | 豆腐味噌汁 | ぎせい豆腐・松茸つけやき煮しめ | まぐろ、わかめぬたあへ |
| 二十四日（木） | 焼パン・ジヤムつけ | 鰯煮つけ | 玉子やき、大根おろし |
| 二十五日（金） | 和布味噌汁 | 小鰯鹽やき | こんにやく、牛蒡・雁もどき煮しめ |
| 二十六日（土） | 豆腐あんかけ | 鰹土佐煮 | 蛤なべ |
| 二十七日（日） | 葱味噌汁 | 鯛鹽やき | 蓮根、生揚、豆腐煮しめ |
| 二十八日（月） | 油いり牛蒡・煮豆 | 栗飯 | 鰯、玉葱・酒打小かぶ酢味噌あへ |
| 二十九日（火） | 豆腐味噌汁 | 牛肉鍋 | 酢がき |
| 三十日（水） | やきのり、生玉子 | いか、蓮根・里芋煮附 | 玉子汁 |
| 三十一日（木） | 葱、あさり清汁 | 貝はしらかき揚 | まぐろさしみ |



# つむじ風

元祿姉さん

ほゝゝゝお腹がよれますわほゝゝ、冒頭から笑ふなんて失禮だつて、まあそんなに怒らなくつても好いことよほんとに、貴女は肝ッ玉が小さいのねいゝえさお胸が狹くつて被在るのね、神經過敏なお方樣ね、姑小姑二千疋三千疋からにらまれてる花嫁さんだつてそんなぢやありませんよ。何ですつて、小さなお聲で、え何ですよ貴女は!

何もさお嫌なら無理に强つてお交際は願ひませんよ押しかけても行きはしませんよ。御迷惑なら御迷惑でさうちやんゝと直接に私に被仰るがいゝぢやありませんかあんな、「あばづれの自墮落ものがしよつちう自宅に押しかけて來て困ります。一寸お身柄を考へても解るぢやありませんか。いくら、藝術家を氣取つたつても田舍廻りの鈍帳役者の癖に臆面もなく眞白晝、派手な着物を引き曳つてべらべら多辯に遣つて來るんでせうもしか生徒にでも見られたら大變ですよ」つてな泣言をわざわざ札幌三界まで、云つて遣つたんでしよ、御苦勞樣でしたこと。さうよさうよ、貴女は御立派な方よ御身分よ、現今の婦女子として最も高等な教育を受けて被在る、さうして女學校の先生でしたわねえ教育家だつたのねえ、へえもう御立派で御座んすとも竪から見ても横から見ても八面玲瓏、四角四面、御見事よ御立派よ、さあその御立派御見事と見まゐらすればこそそんじよそこいらにゐる手合より、一寸は話せるつ

もりで推參したわけなのです。えその時貴女は何と被仰つて、ほんとに天分の豐富な貴女がかうして藝術に身をさゝげてお出でになるのは、何と云ふ美しいうらやましい頼もしいことなのでせう。御一身の幸福も毀譽も褒貶も何も彼も藝術の爲めに打ち忘れ、勇猛精進どうぞ一大藝術家になつて下さいまし。現今の劇界には眞に腕のある女優の出現を俟つこと久しいんですからね、奮つて頂戴努力なすつて下さい……でもお羨しう御座んすわ。御自分の趣味に合つた生活がお出來になつて、それに比べると私などは空意氣地がありませんの、こんな氣の利かない袴を引き曳つて毎日毎日白墨の粉だらけ、「行けかきく」てな文法の講義をするのはもう「あきあきして居ますつて」な臺詞だつたわねえ、こんな見え透いた甘い甘いサッカリン入りのお世辭は憚り樣ながらその當時から、例に依つてお怜悧なこと被仰る哩と、お臍でお茶沸かしてゐたんですよ。何故つて？　血の循環のわるい方ね、ほゝゝ兎角あてられるものですからね、巧言令色つてものは、丹田の邊りに力を入れて警戒しませんとねほゝゝ戯談はさておき改めて伺ひますが二枚舌と云ふものは善いことなの？　まさか孔子でも耶蘇でもお釋迦さんでも、衆生濟度のためには隨分かけ引きをしたり虚僞を吐いたりして居るからこれも方便さつて濟すわけにも行かないでしよ。卑劣よ卑怯よ、お時ちやん、高が仰せのごとく私は鈍帳芝居の女役者です田舍廻りの馬の足です大根です、だから貴女の樣な立派な方のお眼からは吹けば飛ぶ塵埃と同じことです。要けないと思召したらずんずん高飛車に出かけてお叱りつけになればいゝぢやありませんか。へん置いてもらひましよ貴女のお眼からは墮落の骨頂かも知れないけれど私はこれでも虚僞と蛇類とは天性大嫌な人間なんですからね。善にしろ惡にしろ私は私の眞實を以て何事でもして居ますからね、私は假初に云ふことでも行ふことでも、都合が好くつてもいけなくつても終始一貫して何處迄も責

札幌

任負ひますよ、さあお時ちやんはどうなさる？ 本音なのお綱さんに云つておやんなさつたことが、本音なの それとも私に被仰つたことに責任お持ちになる？ 然し考へて見れば貴女のお身分としてお無理はないかも知れない。お可哀想に、社會に生存してゐる限りの人類の誰にも惡く云はれまい思はれまいつて無理な御注文なさるものだから、私のやうな馬の足にもお世辭を被仰るつて始末に立ち至つたわけね、透し大黒なら六枚、護王様なら只の三枚それ丈けつゝの月にお手當いたゞく爲めそんなに自己を僞はらなければならないこと、豈五斗米のために腰を折らんや處の騷ぢやないのねえ、やれ視學官の鼻息がどうの校長の咳ばらひが變だのお髯に塵がたまつた樣の、あの娘は勢力家の愛娘だからうまくまるめ込んでやらなければ損だのつて扱て扱て教育家つて妙な職務があるものね、今迄野暮な私はそんな面倒いものとは知りませんでしたの、矢張り一圖に立派な堅實な情愛のふかい婦人を作り出すのが、一ぱのお役目かと考へてたのでした。無論先生つてものはそれ相當な威嚴も入用りませうさ。人望もなくてはなりますまいさ。德行は元より何は置いても必要で御座んせうさ。けれどその威嚴や德行や人望が口の先のお世辭や阿諛や瞞着で贏ち得るものと思召す？ いやに浮世と遠ざかりつゝ、つんとすまさなければ道德は完全に行ふことが出來ませんのえ、傍目もふらず鞠躬如として撒水の泥濘によし大切な袴の裾はよごれよと西日がかんかんてりつけて大切な庇髮がみだれよと、左側を通る可しとあるからには左を一直線に五分も外れずお徒歩なさるが――それは表面と云ふもの――人の見ない裏ではね…ほゝよしませうねえ、唯でさへ氣の小さい方なのに洗ひざらいの棚下しはお氣の毒だから、

然し考へれば考ふる程、貴女があんまり御自信がなさすぎやしませんこと、わからない世間では私のことを不眞面目とも墮落したとも云ひませう嘲笑もして

居るでせう。が盲目千人の世間がさうだからつて、それに氣を兼ねて幼な友達のしかも再從姉妹までふりすてたいほど貴女は御自分の人格に對して侮蔑して何ともないのね、私と交際するから自分の人格を疑はる——そんな生意地無しの先生は一向たのもしくないわ、それに嫌なんなら嫌でずんずん絶交を宣告すれば事が早くすむのに、それ丈けの勇氣にさへ缺けて被在るつてのは餘りでしよ。眞實その方の衷心から出た人格的光輝つてものはこれを磨いてもうすろがず、くろくしても蹈まない、砂の中でも黄金は輝きます。どんな陋巷にすんでどんな階級の人と往來し一緒に歩いても、誰一人疑ふものがないと云ふ位にならなければほんとぢやないと思ふんだわ、貴女と私の場合だつて、扨て扨て先生は御身上げした方だこと、いくら遠い親類とは云ひながらあゝした階級の女まで廣く交際もし諄々と教へ導びいてゐなさる、到底尋常婦女子の企及して出來ることではないと云はれても不思議な現象ぢやないことよ倫理だの道德だのつてのは妙にかじかんでいじけて見ざる聞かざる話さざる、庚申塚の野猿坊の眞似することなのね、沐猴に冠するといふことはかねて聞いても居ましたが、ほゝゝゝお生憎、かう云ふ場合に使用する文句ではない樣でしたね。私はね道德的觀念て最と内的に充實した立派なものかと考へましたわも少しは自律的のものかと信じて居ましたわ、心の欲する處に從ふて規を超えないと云ふ境界はずつと遠く隔たつてますにしろ、俯仰天地に恥ぢない自信があればずんずん積極的に行つてたぢろがない見地は誰でも普通以上の人にはある可きだと考へましてもいゝんでせう。一體教育家つて何をするものなの？　云ふまでもなく人間を仕立てるお職務ねえ、何が美しいつても凡そ人間の美しいほど美しいものはなく美しい人間の中で純潔な少女ほど形而下ものゝ中で貴く清らかな者はないんでしよ、無邪氣な華かなやさしい美しい十二三位から十七八、ほんに花守りの樣な貴女の御上はね

誰だつてうらやましいと思ひますわ、現に二千年近くも前の支那人だつて天下の英才を得て之を教育することを、王者の誇りに比較してもつと上に置いたではありませんの、ほゝゝゝこんな柄にもない理窟を云ふ筈ではなかつたのね、先刻御承知の趣でしたもの、貴女の大切な畑を犯してしたり顏の罪、平に御容赦下されませ、ほゝゝゝ。だからさこんな尊いお天職にお從事なさるんならも少しお眼を高くおつけになつて頂戴厭にしやつこばつて堅くならないでもいゝぢやありませんの世間は廣う御座んすよ。元來人格を以て相手を感化しなければならない位置にある方は、淸濁合せ飮む位の氣概と浮世の有象無象の四苦八苦に對し一掬哀憐の涙そゝいで遣る位の器量とは備へてほしいことよさうして最も大切なことは前にも云ひました通り御自信の厚いことぢやないでせうか、世間の兎角の風評よりも自分で自分に疚しくないのが何より肝要のことではないか知らと思ひますわ、人を感服させる半面には天地をも貫くばかりの誠實と金鐵をも鎔す仁慈が無くつてはだめよ、あの四絃を抱く窈窕たる辨天樣の半面は野猪を蹈みしだく摩利支天だつて誰かが云つてましたもの、秋霜の威は春日の照煦たるがありまして始めて見られますのよ、世間の批評ばかりくよくよして居る僞善者の行動が何の權威を以て人に臨みますものか貴女の擔任の生徒さん、五十人が五十人種々の境遇でいろいろの天質をうけて生れて來たものなんでせう、それを氣が利かない、お鮨やお團子や新粉細工ぢやあるまいし七むつかしい六號活字の校則だの訓誡だの校風のつてがみがみ、叱りつけて小さく押し込まうとするのは無理よ、無理どこか徒勞よ、徒勞ではない馬鹿な仕事だわ、え、こゝ一番、貴女は奮起して教育界のレコードを破つてまでも一大慈悲心を發願して下さいな眞實生徒を、可愛がつて下さることはお出來にならない!? 左に行く可き娘ならずんずん左へ導き右へ行く娘なら右へ行かさせるがいゝでしよ、白い花ならば

彌白く、紅い花なら燃ゆる樣、十分個性を發揮させてお遣りになりなさい!? たしかに人助けで御座んすよ。近頃の女學校出の娘さん逹がね妙にこましやくれて美しい情熱もなければ大きな理性の力もない輕薄なうすつぺらなのが多いのは、たしかに教育者に適當な中心人物がないせいぢやないこと? え貴女どう思召す? ほゝゝこれはしたり、私としたことが大變なお說法をお釋迦さんにしちやつたものだわ、どうしませう、ほゝゝ御免なさい。貴女怒つてお出でなさるの、いいわ怒つても恨んでも一寸もこはかないから、次手に化けてゐらつしやらない!? 持役の研究材料にして上げるからほゞゝでも御安心なさいな。爾今爾後、お宅にも學校にも參上しませんからね。さよなら。

## 髮結泣かせの頭

人間の頭は十人十種で圓いのもあれば尖つたのもあり後テコ、前テコ、薄禿などさまざまあるを一々其の顏立に似合はせて結ふ女髮結の苦心は却々一ト通でない▲中にも厄介なのは薄禿である薄禿は大きな髢を入れなければ髷にならず髢を入れゝば兎角根が釣りたがる斯う云ふ頭は髢を輕く入れ根を堅く締めないで髷を持たせる樣にするものだが之が名人にならなければ容易に出來ず大抵は根が釣れ結立から毀はれて仕舞ふ▲藝者上りの奧樣、頭痛持、ヒステリー式の婦人は多く薄禿だが第一藝者上りの奧樣は其地頭が旣に厄介な上に馬鹿に註文が六ケ敷いので御意に召す髮結は滅多にない▲名は預つて置くが某實業家の奧樣は髮結には非常に好く當り用のある節は俥で迎へ入れ其上多くの心附を與れるので何れの髮結も初めは非常に喜んで行くが其代り結ひ方の註文頗る六ケ敷く幾度も幾度も結ひ直ほさせられるので業を煮やし果ては誰一人行き手が無くなつたので其奧樣もしやうことなく今では抱車夫の嬶に結はせて何うにか間に合はせて居る▲薄禿に次で厄介なのは縮れ毛であるが縮れ毛は癖直しを使ふと直るとは直つてもそれはホンの一時で忽ち元の樣に大波小波を打つて仕舞ふ▲又た見た處が左程の縮れ毛でなくても前髮や髷の割れるのがある斯う云ふのは熱湯で直せる、其他種々の癖があるが其癖と其人の顏立に應じて格好を附けるのが髮結の腕だ▲頭の形から云つて一番厄介なのは尖り頭と後頭の扁平なので此は何ちも髮の恰好が取れず薄禿に次で髮結泣かせのものである。

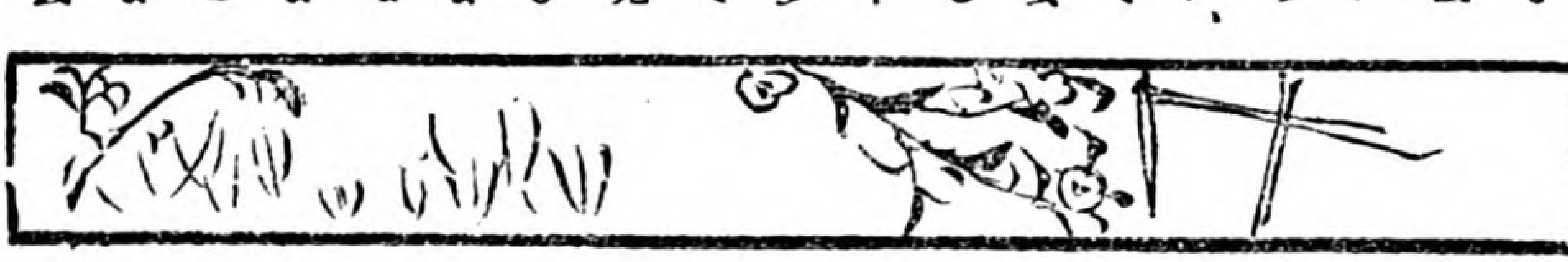


# 寒天の利用法

白桃

今日は一つ奮發して默齋の間にお八つの水羊かんでもこしらへやうと思つてノートを出して見る「水一升五合、寒天三本、メリケン粉五合小豆あん五合、砂糖適宜」と書いてある、末をよんでそれ〳〵用意にとりかゝる。あんは罐入のを明ける事にする、私はお鍋で寒天を煮立てながら、寒天は美しいものではあるが、仕方のない物ね、これでもお菓子の外に使ひ道があるだらうか、何だか味もなんにもない、ほんとうに便りないものだと云へば、粉をふるつてゐた末はお嬢樣さう仰有いますけれど、これでなか〳〵馬鹿に出來ませんよ、寒天版といつて早ずりにも使ひますし、ベツカウ紙にも作りますし外國ではこれで糊をこしらへたり、お酒を澄ますゼラチンのかはりに使ふと申します。まあ末は大さう物知りね。よく外國の事迄知つてゐること、イーエ寒天の事だけで御座いますよ。

何故と仰有るので御座いますか。これは私の村の大切な産物なんですもの、私は寒天の中から生れたと申してもよろしい程で御座いますでも寒天は海草でせう。末の里は丹波の山奥じやないの。はい其丹波の奥の山間に夏になると海草の山が出來、八九月頃から雪ならぬ白いものが積りますので、僅か五百戸ばかりの村で御座いますが、何んでも年々二十五萬圓のお金をこれで取りますさうですよ。製造しますのは寒中で御座いますが、丁度夏の頃から原料を買ひ集めて九月から晒しにかゝりまで、そして來年の二月頃に出來上るので御座いますから、一年中これにかゝつて居ると申してよろしう御座います。數多の酒職人が水に浸りながら、歌面白く一生懸命になつて働いてる勢ひまことに勇ましう御座います。夏の中は兎に角十一二月の寒空にはどうして辛抱が出來るかと思ひますが、寒い仕事丈けに却て元氣が增すさうで御座います。その職人は大抵與國の人ばかり使ひます。さうでないと辛抱が出來ないと申すことです。一釜に五人附きます、其の中重な人を統領と云つて、水加減や煮方を任せます、これが四人を指揮してすべての取締りをいたします。年は十七八から四十歲位、賃錢は四十錢から五十錢位で、別に仕上の善惡によつて賞與があります。



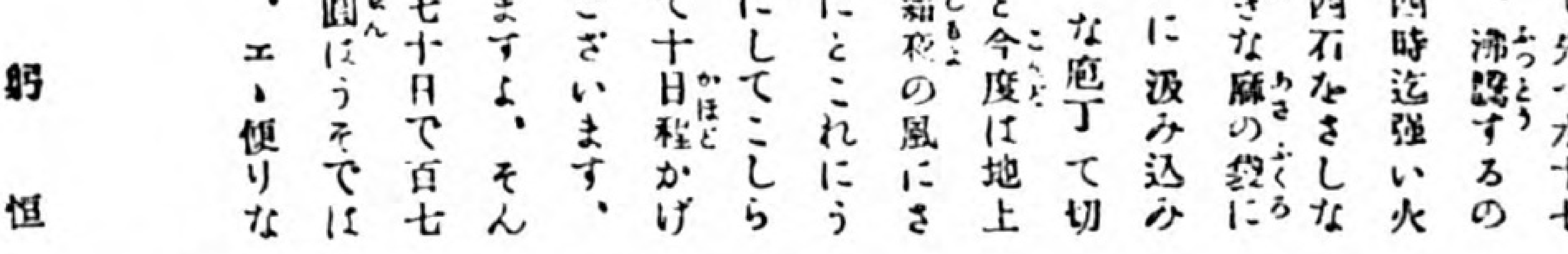


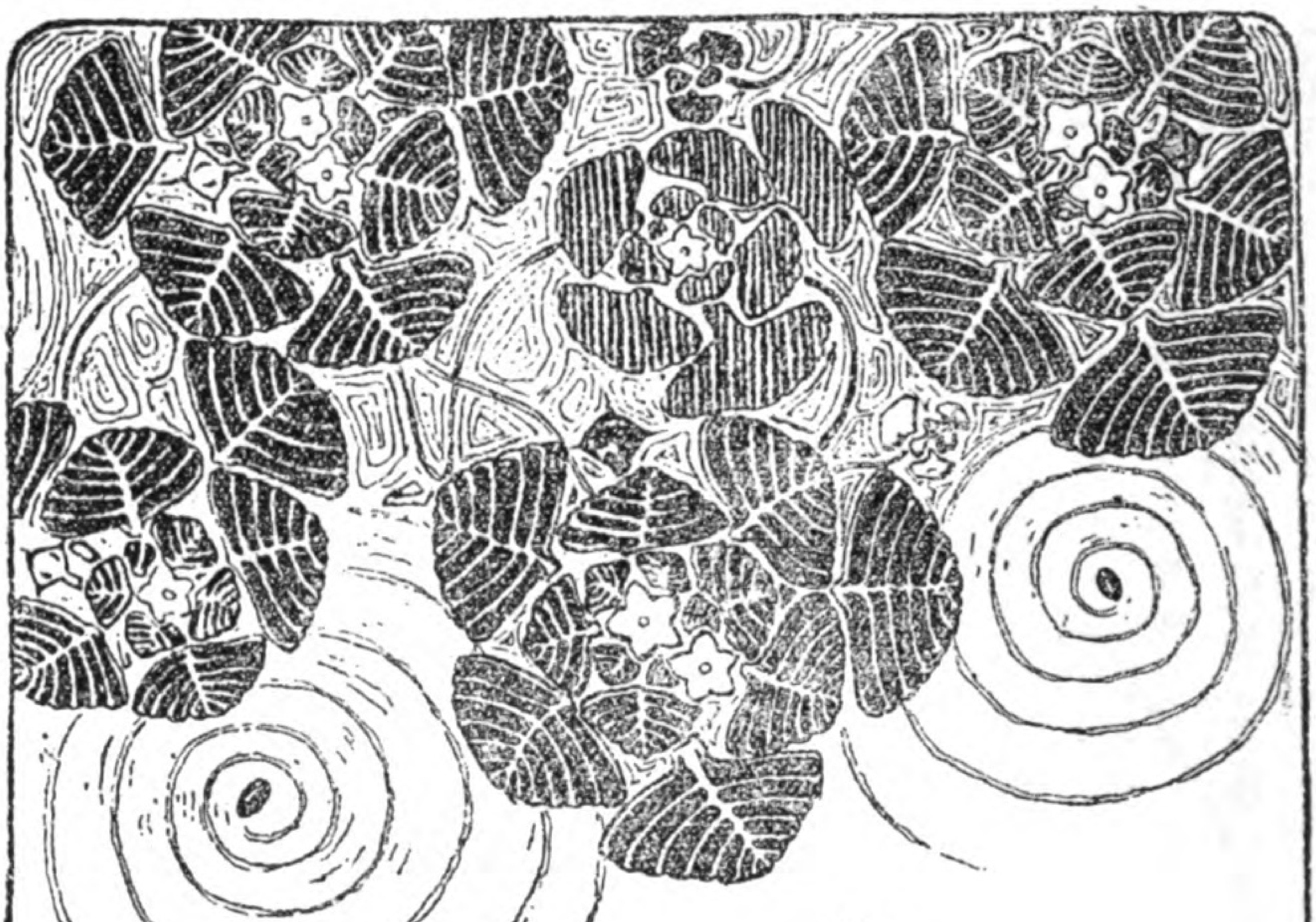
寒天の原料は石花草（藻草）頭髪草（エゴ）などで、夏の暑い最中に海から取つて來まして、谷川で洗ひます。川には唐臼をすゑて置いて、水に浸けては搗き、搗いては浸して貝殻などの附いて居ない樣に洗つたのを、芝生の上にひろげて晒し、九日か十日の間其儘にして置き、今度は表を下にし、裏を五日程晒して水を切りますこれを一番晒しと申します、これがすむと今度は其乾いたのを又谷川に浸し搗いて莚の上で二三日また晒します。これが二番晒と申しますので、其時分には背かつた海草が大分白くなつて來ます、三番晒しがすむ迄には、十月中旬まででかゝります、それからいよいよ釜をたきかけて製造にかゝります、私の村には十五六の釜があります、大家では六釜ほど持つて居る家も御座います、釜は四尺の高さでこれに三尺程のコシキといふ底のない桶のやうなものをかぶせてあります。

此釜の水加減、火かげんが一ばん大切なので先づ水十七八石を入れ、午前四時頃から火をたき初め、沸騰するのを待つて晒らした原料二十貫を入れ、午後四時迄強い火で煮沸し火をひいてさまし、更に水三四石をさしながら交ぜて又しばらく煮て、九時頃に大きな麻の袋に入れてしぼります。それから其汁を箱に汲み込み外に出して固まらし翌朝針金の網の樣な庖丁で切つて、漸く寒天の形になります。すると今度は地上二三尺許りの棚の上へのせて乾かし、霜夜の風にさらして凍らせます、夜になると早く凍る樣にとこれにうち水をします、また少しも風にあてない樣にしてこしらへる國もあるさうです、それから水を切つて十日程かげ干しにしまして、それで漸く出來上るのでございます、一つの釜で一日に四千本出來るのでございますよ、そんなら六つもある家では毎日二萬四千本……七十日で百七十萬……大變なものね、なるほど二十五萬圓はうそではない、末のいつた通り馬鹿に出來ないねえ、エヽ便りない所ぢや御座いませんでせうと得意滿面。

白雲にはれうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月　　躬恒

さもこそは物の悲しき秋ながら夕日こさへもぬるゝ袖かな　　景樹





# おさいの局

右京太夫

鑿と云はゞ槌の譬はちと舊いが、小豆島と云へば誰しも寒霞溪を連想する。瀬戸内海の中程に狗兒形をして控へてゐる面積八方里の一孤島がそれで、寒霞溪についでの名物は醬油とおさんどんとに指を屈せねばなるまい。

島の歴史はなかなか古い。古事記に「あづき島を生む」とあるのを見れば、神代の頃伊弉冊伊弉諾の二神が生める島

の一つで、應神天皇の御歌にも「あづきしま、よろしき島」とある。古名は訓讀のあづきで、今の音讀のせうどになつたのは後の事である。

舊くから知られた島丈に史蹟は可成多い。その中で特に島人の口に上つてゐるものは、これから書かうとするおさいの局の夫飽浦信胤の數寄を極めたロマンチックな生活の跡である。撫子の花に暑を知る皐月の頃私は數日を小豆島に送つて、親しくおさいの局の事蹟について興味ある見聞を恣にするを得た。

以下——事實に起つておさいの局と信胤のはかなき戀物語を書く。

## △おさいの局の木像

福田八幡宮（福田は本島の東北、本土に面した一漁村也）の攝社に中の宮として崇められてゐる小祠がある。流行病の守神さまで、祭神はおさいの局、やしろの狐格子に摑まつて透見すれば、光に疎い神前に一基の木像あり。就て問へば「それが局の木像でごわんす」とある。

洛中菊亭家の侍女、宮居の中深きにゐて、夕々のつれ〴〵を灯盞の油の盡くるを惜み、三十一文字におもひをのべ、十三絃の清掻に殿居の衆の血を湧きたゝしめたる一代の美女おさいの局は、その香しき容姿振にかへつて身をそこなはれ、遂に人稀な内海の一孤島にほとんど流罪にひとしき晩年をおくつた。

あゝ思へば更に新しき涙がにじむ。ものゝ哀れを知るは決して秋のみではない。小町に、小督に「美人薄命」の數語がもたらす悲涼の感は、寂れし心頭に一掬の涙を灑がしめる。が小町と云ひ、小督と云ひその哀史は傳説や口碑に依つてのみ傳へられた迄で、おさいの局の如く流行病の神樣として、そのあさましい殘骸を木像にされる程みじめではなかつたのだ。

試にその木像を見よ。手は落ち、鼻は缺け頭と云はず、足と云はず鼠の齒牙にかけられて、洛中の美姫おさいの局は、凹凸の多い木片になつて大正の世に曝されてゐるではないか。私はその垢染んだ木片を眺め

ながら、しばらく感慨に耽つた。

——格子を漏るゝ日光が、木像の半身に幽な光を漂はしてゐる。

△師秋とおさいの局

おさいの局の生立については、これと云ふ記録が殘つて居ない。唯洛中菊亭家の侍女でその頃京の三美人と稱せられた一人であつた。

美人魔多しの諺は古りたれど尚耳新らしいひゞきがある一說に局は「浮氣女の標本」だとも云はれてゐるが、事實は決してさうでなかつた。晨夕の爪琴に、色紙に、短册にその優しい心の程を見せて、溜々の女房達がみだらな話に笑ひ興ずる暇も、己れは只管女としての清い生活に人たらんと心掛けた。

けれども時世は局の清廉を許さなかつた。時の權門高士佐守師秋は、遂に玉垂の間を求めて局に言ひ寄つたのである。——あゝ局は餘りに弱かつた。

口ぎたない女房達は面を見る度に、

「おさいさま、ホツ〱大きなことは云はれませぬぞい。」と笑つた。

局は泣いても泣き切れなかつた。あゝ色香を知らなかつた生娘の昔が戀しい。

かくて悲しい月日は過ぎた。



### △思出多き舞樂の一夜

神無月の十日、宮中で舞樂の催しがあつた。

その日おさいの局は特に指されて榮ある一曲を彈でた。金屏に揺ぐ百穗の灯影を隈なく浴びて、徐に琴爪を濡す美くしき局の風姿は、並みゐる公卿殿上人の眼にどんな印象を與へたらう。師秋は殆ど涙を落さんばかりに喜んだ。

然し嫉妬の眼はそこゝから二人の身に注がれた。尊氏もその一人であつた。信胤もその一人に漏れなかつた。信胤の祖は源平の戰に藤戸渡先陣の功をたてた三郎盛綱である。祖父の胤泰の時飽浦の城主であつた縁故から、一に飽浦の姓もあるが、然し本姓は佐々木である。父の長胤は嘗て薩摩守に封せられてゐたが、信胤に至つて左衛門尉備前守に歷任して、北朝方の猛者の一人に數へられてゐた。

信胤はバイロンの詩にでもありさうな、ロマンチツクな感情的な男であつた。表面は剛勇であつたが、剛勇の人元より情を解すで、當時洛中三美人の一と稱されたおさいの局の美貌を垣間見て、人知れず思を焦した。けれども局には師秋といふ大木がある。切つて捨つるはいと易いが、それでは却て局の怨を買ふかも知れぬ――彼はかなしき戀の傷手に悶へた。

舞樂の一夜は信胤の遣瀨なき悶々の情を、彌が上にも掻き亂した。

夜は更けた。月影淡き廻廊を寢間へと急ぐ局と行きずりに、何やらんその袂に投入れて過ぐる男があつた部屋へ歸つて衣を脫ぎいつもの通り衣桁に掛けんとする時、零れて落ちた一葉の紙片がある。何心なく手に取つて、封を解いた局の顏は小娘のやうにあどけなく紅かつた。

行燈を引寄せ燈心を掻きたてながら、何人の惡戲ぞと、いさゝか胸を波立たせて讀み行けば、思ひも寄らぬ左衛門尉の艶書である。

局は恐ろしさに身を慄はせた。

### ▽局を奪つて小豆島へ！

信胤は局の心のわが上にあらぬを知つた。けれども張り詰めた心は、容易に緩みさうにもない。かくて幾日を思寢にやつれた彼は、遂にいのちに代へても局を吾ものにしやうと決心した。

その年の冬も暮れていつか菜種の頃となつた。近く師秋は伊勢の守護職となつて局と共に下向すると云ふ噂がたつ。信胤は極地の人が黎明の季を待焦れるやうに、その一道のうす明に初めて喜の色をなした。彼は心に深く思ふ處があつたのである。

その日となつた。雨の中に日は慌しく暮れて、もの寂しい夕が來た。信胤は宵のうす闇に紛れ



て師秋の行を伊泉路に襲つた。京を出てから六日、馴れない旅に勞れた一行は不意を衝かれて一方ならず周章たいくら力んでももうどうする事も出來ない。地理には暗し、殊に宵闇の、雨さへ意地惡く降り頻るが信胤にとつてはこれこそもつけの幸であつた。彼は隙を見て局の乗物を奪ひ、日に夜を次いで領地備前を指して、ひた走りに走つた。

局は涙にかいくれた。がもう仕方がない。泣いても及ばぬ。叫んだとて今は來る人もないけれども、ああ己を奪つた信胤の心よりも、奪はれて行く自分の方がどれほど淺間しからうぞ。しかし——

局は思ふまいと觀念の眼を閉ぢた。未練は起すまい。此上は信胤のするが儘になるより外に道がない。美しく生れた身は遂にあだ人の玩具たるべき運命を擔つてゐるのかも知れぬ。あゝ。

駕の中にも朝夕の光は射した。思ひ疲れて、辛と城門に着いた時、局は病人のやうに痛しくほゝけてゐたがその樣子は案外浮々して、いさゝかも取亂した風がない。信胤は寧ろ擽たいやうな氣がした。壓へがたい微笑がおのづと頰に浮ぶ。

然し歡樂の奧底には恐ろしい不安の影が附纏つてゐた。師秋もさる者である、よもやこの儘では濟ますまい――かう思ふと一刻もじつとしてはゐられない。寝覺めては、風の音にも耳を欹てた。

で思ひ惱んだ末、彼はしばらく戀の妨げられざる海上の小豆島へ隱れやうと決した。

### △黑木のまゝの假住居

春も末に近い頃、信胤とおさいの局は愈々國をたつことになつた。が思へば思ふ程局には信胤の心が判らなかつた。女の爲に身を損つた人の例は屢々聞くところであるが、わが爲に落ち行く信胤の心事を思へば、漫ろに後めたいやうな氣がしてならぬ。然し信胤の身になつて見れば、眼中國も家も何ものも無い。たゞおさいの局と安らかに同棲することが出來たら、それ以外に何の欲望も無かつたのである。

一行の初めて上陸したのは、小豆島の福田である。人馴れない島の人達の驚き訝る中を、新しい島國王は花に紛れ局の手をとつて靜々と歩を移した。

その頃島は人烟に乏しかつた。現今の人口四萬五千に較べたら、恐らくその五分一にも及ばなかつたらう山は山に續いて、晝尙猿の鳴く音さへ聞えた。村と云ふ名ばかりで、猫の額ほどの田畑が海邊の一部分を劃つてゐるに過ぎぬ。信胤は尠らず當惑した。來たのはいゝが住むべき家とてない。

そこで意を決して山深くわけ入つた。住むには海邊の朝夕ほどこよなく美しいものはないけれども、城を

築くには山中の嶮を求めねばならぬ。と島國王は思つたのである。しかしか弱い局は山を斥けて、海を慕つた。

小島に似ず山は高く嶮しかつた。とある溪流に沿つて進んで行つた時、

「殿、ご覽じろ、斯様なものが川上から流れて參りました。」

と家來の差出したのは、剝いて間もない柚の皮であつた。信胤は遽に喜の色をなした。人家ありといふ念はすぐ彼の意識にのぼつた。草をわけて進むと、果して一軒の獵師小屋がある。

來意を告げると、獵師の爺は、

「猿奴が惡戲を致しまするので、」と腰を低くした。

「猿が、それも一興、」と信胤は軈て住むべき日を胸に描いて興がつた。

いづれは假の住居である。手數のかゝらぬやうにとあつて、生木の儘の遽造り、屋根は枯蘆を折つて敷き黑木の柱に、木の葉の壁、床と云ふも名ばかりの、板の間から意地惡の草がピンと頭をもたげるといふ始末、がとにかく島國王の屋敷は出來た。二人につゞく一族郎黨の者は、各自にその新しい家に寢起することになつた。思へば醉興の極である。

春とは云へ朝夕の冷かな山氣はきやしやに育つた局の肌に堪なく沁みた。今は流罪に等しい有様である。隙漏る風は灯を消し、夕の雨は床を濡す。かくて侘しい幾日は過ぎた。昨日の夢を偲んでは、枕濡る夜半もあつたが、それもわが身から——と覺つては、女性の誇と悲哀とを身に沁みて思ひ煩つた。

### △糧食盡きて海賊となる

二人は落人である。しかも手をとり合て道行と洒落たのだが、その道行も梅川忠兵衛のやうにせつぱ詰つて身の遣場を探す爲ではなかつた。信胤は苟も時の大名である。北朝方の武將である。落人といへば誰しも心中と、鐘の音と、夕暮とを連想するが、二人は家來眷族を引具して堂々と駈落をしたのである。

その年も暮れた。

新しい城の甍は星ケ城山の翠微の間を彩つた。局は信胤に伴はれて城に移つたが、海を好む心にはどうしても猿のお伽をする氣になれなかつた。山に育つた野兎も人に馴れては驚かぬ。昨日の局は今日の局でない戀に馴れた女には男の心ほど御し易いものはなからう局は心のまゝに振舞つた。

移つて間もない日の夕方、局は酒機嫌の程を見計つて、海べに館をしつらへたいと甘へた。

「うむ。住愛いと申すか。」

と信胤は頷いた。

館の工事は日に夜を繼いだ。初めは尾形﨑に、次は小部に、大部に、長濱に、安田に數寄を凝した別邸はそれ〳〵に趣深い島の一角を選つて建てられた。局の喜びは譬るにものがなかつた。

島の百姓達こそ土下座に脛の皮を剝いたらう。額に泥の乾く間とてなかつたらう。今日は明日はと局の乘物は、八方里に足らない島の村人を驚かせた。二人は心の趣くにつれて其處此處と移り住んだのである。戀にほゝけた信胤は局の云ふが儘にその後を追つた――あゝ彼は曾て自ら奪つた戀に捉はれの身となつたのである。

かくて島は信胤の有に歸したが、領地は狹し、士は多し忽ち日々の糧食にも差支へるやうになつた。それで彼はすべての思を斷つて、海賊にならうと決心した海賊の主魁となつて財を得やうと企てた。

武器を積んだ黑塗の船は日ならずして內海に出沒して、罪もない船頭の心を寒からしめた。今日は讃州の船がやられた。明日は攝津の三百石積がやられたといふ噂がたつ。洛中の諸侯はこの爲に領地內の交通にどれだけ不便を感じたか知れぬ。が大名の海賊はなかなか手强く荒れ廻つた。

海賊の女房はどんな心で朝夕夫を迎へたらう?――國の大名も食に窮すれば海賊となる。おさいの局も妖婦の一人に漏れなかつた。

### △局の最後

信胤の晩年はあはれにも華々しかつた。

「太平記」に依ると、

康永元年、彼は足利方に叛かざるを得ざる境遇の成行として、兵を揚げて南朝方に應じ、脇屋義助を援けて四國山陽の北朝方を制すべく出陣した。しかし南風競はず、義助の病歿と共に彼は全く孤立の地に陷つたので、兵を率ゐて島にかへり、再び近海を犯した。

とある。信胤が足利方に叛いたのも、畢竟するにおさいの局の色に溺れた結果であると見ることが出來る。云はば足利は戀敵である師秋なくば再び本土の土を踏んで、局と共に長閑な晩年を送りたいと思つてゐたからである。けれどもその謀もうたかたの夢と化して、又も潮風に吹き曝されねばならなくなつた。




翻つて、おさいの局の最後はどうであつたかと言ふに、それには「讃岐史」に記されたものが、尤も眞に近いやうである即ち、

貞和三年細川師氏、阿、讃、備の大兵を以て攻撃し、小豆島信胤の城堡皆燒失し、信胤の一族悉く殘害に逢ひ、信胤は星ケ城山の城（方士城）に籠りたるも力敵せず細川氏に降る。

と殘つてゐる。

加茂の水に育まれ、几帳の蔭に人となつた才媛おさいの局の屈折に富んだ生涯も、茲に漸く終局を告げた。やがては逝くべき運命とは云へ、名もなき下司侍の刄に斃れるのは、どんなに悲しく口惜しかつたらう。玉の肌に迸るいたましい紅の血の色を偲んでは、そゞろに涙のにじむを禁じえぬ。

あゝ汲めども／＼盡せざる、そのいぢらしい半生の哀史よ。かくて局は戀に生きて戀に死んだ詩中の女であつた。

戀人を失つた信胤の心中もまた察するに餘がある。彼は暫らく捉はれの人となつて、侘しい明暮を唯妻戀しさの思に驅られてゐたが、翌年の春、遂に細川氏の爲にあへなく刺されて果てた。

美しい戀の虜は血にまみれて死んだ。あゝ恒に――常にと云ふことは人間にはない。

### △俚歌に雅味あり

信胤とおさいの局の半生は、二人の死と共に終結を告げねばならぬ。二人の事蹟は今尙ほ島の至る處に遺されて、婆は寢物語にも信胤のことを「おそろしい殿樣」だと孫に傳へる。

島には二人の戀に關した俗謠が二三遺つてゐる。その中で、苗羽から橘邊に唄はれてゐる小唄に、

「ヤレヨウ、木の庄茂平の嬶、婿取りかねて、やろか……橘の長九郎はげ」

といふのがある。木の庄の茂平の女房が不緣になつたから、橘の長九郎といふ禿頭の男にくれてやらうといふだけの歌であるが、信胤の愛妻おさいの局は、或は茂平の嬶たるべくして嬶たることが出來ず、遂に奪はれて長九郎禿の嬶になつたのではあるまいか。

おさいの局に懸想した尊氏、師秋の輩は茂平であつた。局を奪つた信胤は長九郎式であつたかも知れぬ。俚歌に雅味がある、俗謠に神韻がある。茂平と長九郎は、信胤とおさいの局との戀を說明し、また現代の男女を語つてゐる。

長九郎の信胤は自から好んで女難に斃れた人である

それを明らかに意識しながら、女の魅力にいつしか心の髓まで腐らして、遂に終るところを知らなかつた。思へば彼ほど派手々々しく戀に斃れたものはない。國を捨て、家を捨て、海賊となつて迄局を忘れなかつた彼の哀しい戀愛史は、如何に美くしく、また痛々しい限であつらう。けれどもあはれは局の上にも懸つてゐた。

戀といふ浮氣男の囮にかゝつた局は、いつしか昔の自分を忘れて、危い玩具に似たる生活に馴染みそむるやうになつた。山家育ちの賤の女も一度び廓の風に染めば、おそろしい妖婦となる。傷けられたる優しい心は、永久に癒える期を知らない。あさましい男の心は遂に局を引擦つて戀の玩具たらしめた。おそろしい妖婦たらしめた。――あゝ誰の罪ぞ。誰の罪ぞ。

言ひ後れたが信胤の墓碑は、同じ島の安田にある。

## 米國の下女氣質

米國にも紳士ばかりが居ない下女もゐる下男もゐる。そして雇主の命に隨つて掃除から給仕から食物の煮焼きまでする。しかし米國の下女下男は日本のそれのやうに朝起るから夜寢る迄雇主に身を任せ切りで束縛されては居ない恰も日本の官吏や會社員のやうに時間勤めで、約定以外の用務は一切辨じないのが普通だ。然るに米國家庭の主婦連には隨分下女下男の權利など蹂躙しかねないものもあるので、或家庭の雇人は氣樂に幸福に勤めて居る代りに他の家庭の雇人は酷使虐待に泣いて居る。そこで今回ニウジヤシー州の下女連一同總勢六百人は大會議を開いて下女權擴張の爲め下女組合を組織し萬事此組合規約によつて進退し、共同の行動を執る事にした。滿場一致で通過した規約原案は△第一條、一日の最多勞働は八時間を限りとす△第二條最低月給は五十圓を下るを許さす△第三條食事は必す定刻に與へらるべし△第四條毎日午後主婦は七人以上の來客を謝絶せしむべし。但し主婦が自ら門口に出て挨拶するならば何人にても勝手にすべし△第五條毎夜八時から十時まで朋輩を自分の室に招き寄する事を得ん△第六條土曜夜より月曜朝まで絶對に自由行動を執るを得ん△第七條夜分何用ありとも決して呼び起されざる事△第八條夏期は十一日間の休暇を與へる事△第九條主婦がピヤノを用ゐざる際には勝手に之を奏するの自由を與へらるゝ事等である。

# 秋の七草

なでしこ

秋の野に咲きたる花を小指數ふれば七種の花。
萩の花、尾花、葛ばな、撫子の花、女郎花、また藤ばかま、あさがほの花。

秋の七草とは、右に擧げた山上憶良の歌から出たのであることは誰でも知つて居りますが、時節柄私は其花言葉に就て述べて見ませう。併し花言葉は元來西洋から渡つたものですから、七草の中で花言葉の無いものもあります。

## △萩

花言葉では閨怨とか愁思とか、艶つぽい哀愁の意味を含んでゐますが、これは露に伏す姿のしほらしくも婀娜なるところから出たのであります。古來歌人が萩を讀む場合に、多く艶なあしらつたのを見ても解ります。

人は來ぬ草葉の床の露の上に
　かたしき寢たる萩が花妻　蓮性

うつろはむことだにをしき秋萩に
　をれぬばかりもおける露かな　伊勢

白萩や露一升に花一升　蓼太

などが其例であります。一體萩は普通原野に生じて居ますが、その花は蝶形の小形で、色には小萩の淡紅、姫萩の白、夏萩の眞紅、木萩の紫白交り、蓍萩の乳白など、いづれもそれぞれの趣味を有して居ります。なほ萩の異名には鹿鳴草、濃染草、庭見草、野守草などの澤山あります。

## △尾花

尾花は薄の花を云ふのでありますが、其形が一寸尾に似てゐるからであります。花言葉はありませんが、我國では昔から「野邊のすゝきの穗に出でゝ」とか、「ほに出づることはすゝきにならはぬな、露けき袖の何まれぶらむ」とか、「秋の野の草のたもとか花すゝき、ほに出てまねく袖と見ゆらむ」とか、いづれも忍ばれぬ戀や、誘ふ戀に擬らへてゐます。

## △葛

紅葉山人の書いた物の中で、「野邊の眞葛ののさばり放題」と云ふ句を見て、非常に面白いと思つたことがありました。その如く葛は蔓草で、長さは四五丈に達し、林木を害することが夥しく、秋になつて紫色の小さい花を開きますが、大して見榮えのするものではありません。只だ表面が綠で裏面の薄白い葉が風の爲にひらひら裏返るところに趣があるのです。

秋かぜのふきうらがへす葛の葉の
　うらみても猶うらめしきかな　貞文

## △瞿麥

我國の原野に生ずるものは所謂る大和撫子であります。花冠は先端が細く裂けた五瓣の離瓣花で元の方は相接して筒狀をなし、花色は通例紫がゝつた淡紅色ですが、園藝家の變種させたのにはいろいろあります。

花言葉は快活又は無邪氣の愛情（紅花のもの）、才能又は藝術（白花のもの）純白な愛（單瓣のもの）拒絕又は辭退（雜色のもの）等であります。

又瞿麥と親族のやうなカーネーションの花言葉は輕蔑又は擯斥（黄色のもの）、哀れなる我心を救へ（深紅色）、拒絶（雜色のもの）等の意味を有してゐます。スウヰートウイリアム、これは日本では美女撫子と云つてゐますが、小形で可憐な花に似ず、勇氣、豪放等の意味を有つて居ます。我國では撫子を屢〻愛兒の意に通はせてゐます。之れは撫子の名を音のまゝに通はせたのでもありませうが、又その花の可憐な姿態を愛づる心より起つたのでもありませう。

たれしかもおふしたてけむ人すまで　　敬　儀
　あれしかきれのなでしこの花

## △女郎花

昔から美人には花が屢〻引合に出されてゐますが、其中でも女郎花は最も多く美人に擬らへられて居ます。

なみなへし妹がとかめん花の名を　　長　流
　しらでぞ家のつとに折りつる

斯う云ふ意味の歌は甚だ多いのですが、本朝文粹に源順が詠女郎花詩と題して甚だ面白いのがあります。

花色如蒸粟　　俗呼爲女郎
聞レ名戲欲レ契二偕老一　　恐惡二衰翁首似一レ霜

右の意味は花の形を云ひそれから俗に女郎と呼ぶから戲れに偕老を契つて見やうとは思ふが、併し此白髮首を見たら頭を横に振るだらうと思ふと氣がひけるといふのです。要するに女郎花の文學から思ひ付いた洒落であります。

女郎花の花は、源順の詩にもある通り、蒸粟をバラリと散したやうな格好であります。又女郎花によく似て花の色の白いのがあります、それはオトコヘシとて女郎花とは別種であります。

## △藤袴

藤袴は草丈三四尺ばかり、秋に至つて筒狀花を梢頭に開き花色は淡紅で、花からも莖葉からも妙なる香氣を放ちます。又藤袴に似て、香氣のない且、花の白いのはヒヨドリバナと云ひます。花言葉は是等のものを集め猶豫又は遲滯の意味を含んでゐます。

やどりせし人のかたみか藤袴　　貫　之
　わすられがたき香ににほひつゝ

## △朝顔

秋の七草の朝顏に異說があつて一定して居ないやうですが、現今では桔梗であるといふ說が勢力があります。昔は總て美しいといふ意味に顏の字をつけたので、朝顏は朝咲く美しき花の意味で一物に限られた名ではなかつたのであります。木槿のことをアサガホと云つたなどは隱れもない事實であります。又桔梗をもあさがほと云つたのです。今の朝顏は奈良朝時代に支那から渡つたので、當時はこれを牽牛子と云ひ一種の藥草として知られたゞけであつたのですが、其花の美しいのと朝い間だけ咲くために、朝顏といふ名を獨占するやうになつたのであります。

朝顏は、日本では露の干ぬ間の果敢ない運命を有つところから「薄命」の意を含められて居ますが、西洋では「愛者の羈絆」又は「虚飾」の意に用ゐられてゐます。又木槿は勸誘を意味し　桔梗には別に何の意味をも附して居ません。



# 和歌

## 一等

○夕ぐれはいとも淋しや桃山の御陵冷たく秋の雨降る　横濱　齋藤とし

評　好歌題、寂寥の中に追慕しまつる情のほの見ゆるも嬉し。

## 二等

○大比叡の岩角痩のやゝ見えて江州一路秋の風吹く　浦和　田代雪子

評　豪爽なる歌なり、雄大なる歌なり、女性の詠みたるものとも思はれず、めでたし。

○この底によき國ありと磯の夜な泣ける二人に寄する白波　長崎　山下よね子

評　ことば足らず意深き歌なり、業平朝臣のに似たるもありて、めでたし。

## 三等

○野薊のうす桃色の花もよし素足をぬらす朝つゆもよし　栃木　はる枝

評　花もよし、朝つゆもよしといへる間に、野の曉景の心地よきを味はしむ、情趣といひ、歌調といひ、なか〱に侮りがたし。

○とつぎ來て都大路に秋三年そゞろに戀し柿あかき村　福岡　井上みよ子

評　柿あかき村の一句、なんぞ夫れ振へる、俳句の思想をよく和歌に用ひたるものといふべし。

○そと踏みぬ廊下に赤き絹糸の一尺ばかり光りてあるを　麴町　淺井ゆき子

評　秋雨しとゞに降れる日などにやあらむ、物懐しげなる優しき情の不圖動きたる、佳き歌なり。

## 秀逸

○夕立の一むら過ぎて土の香のたかきあたりを蟬飛びかふ　京都　秦泉寺かね

評　田園のありさま能くあらはれたり。

○つく鞠のそれたる庭の片隅に蟋蟀鳴きぬ秋の夕ぐれ　駒込　松井時子

評　蟋蟀の歌多かりける中に、此歌最もめでたかりき、鞠のそれたると云へるが爲めに、其處の景色も目前に浮ばれて。

○ 麹町 豊子

鳴子引く賤のわらべの影長し田づらの里の秋の入日よ

評 十里の稻田に入る秋の日のさまよく描かれたり。

○ 水戸 川和美代子

草枯れし牧場のほとり黄昏れて夕べさびしく羊啼くなり

評 荒涼たる晩秋の景よくあらはれたり、さながら油畵の如くに。

○ 埼玉 野の雨

からくと椽の葉の散る峽の出湯の里の小雨わびしや

評 出湯の煙はあたゝかけれど、木の葉をさそふ木枯さむく、そゞろに山間の淋しさを思はしむ。

○ 豐後 佐藤雅子

壞れたる人形抱きてさめぐと秋の夕日を扉に泣くをとめ

評 夕日さす扉によりて壞れたる人形いだきて泣ける少女、小さき胸に堪ゆるは何の悲みぞ、秋なればこそ一入情趣深けれ。

○ 小石川 波多野波江

つかれたる瞳閉ざして人戀へば倉の間に蟋蟀の鳴く

評 蟋蟀の切々たる哀韵と瞳疲れたる女、對稱すでに面白し、あたかき血汐燃えむとする戀の希望も、神身の疲勞には堪ふべくもあらず、さりとて尙ほ消えやらず燃えむとする戀のかゞやき現代はかゝる疲れたる女、かゝる淋しき戀の彌多くなれるを。

○ 上澁谷 國分常子

やる瀬なき我心かも無花果は物はかなげにほろゝ落ちぬる

評 哀韵深き歌なり、再誦油然として悲しみの情胸にあふる。

○ 本鄕 橫田佐久

夕波に汐さし來れば淡路島狹霧の中に灯のゆらぎける

評 歌調すらくと美し、須磨舞子などの景色いそれに似たり。

○ 大分 財部房子

名も知らぬ野邊の小草に醜草に距てなく置く露の恵みよ

評 歌意古めかしけれど、敎訓の歌として珍らしきを取る。

## 佳作

○ 成田町 白梅幸子

夕日影さすや山路の花すゝきうら枯れ果てゝ秋暮れんとす

○ 芝 たち花

秋ふけてあはれもいとゞ深からん御陵てらす桃山の月

○ 水戸 石川鈸子

男のみ集へる家の厨より琵琶うたもるゝ初秋の朝

○ 神戸 深草しづえ

堂朽ちし廢寺の庭にたゝずめる狂女が髮を吹く秋の風

○ 兵庫、增井かつ子

燈臺の火影さみしく夜は更けて敏馬の浦は浪しづかなり

○ 大坂 野村德子

小夜時雨軒端音してすぎゆけばもろごゑあはせ蟲ぞなくなる

○ 駿河　高瀬てつ子

胸に挿す喪章の蝶にそよと吹く秋の夕風身にしみわたる

○ 石川　德久逸子

旅に行く君を送りてとぼ〳〵と歸る夜道をこほろぎの啼く

○ 京都　淺井はじむ

懷しき明るき顔の乙女子に又逢ひにけり青き灯の街

○ 茨城　今泉義子

あゝ葉月何の凶日ぞ神在せど日照れど悲し無きに等しく

○ 茨城　今泉義子

瑞西の女詩人のたゝずみて歌誦するを思ふ夕燒けの湖

○ 神奈川　山本皐月

磯近き日向の丘を走りきぬ赤靴下の皮膚白き子等

○ 福岡　靜枝

ふく風に岸の糸萩さゆらぎておちし花片にさゝ波の立つ

○ 丸龜　喬子

かたあげをとれば悲しも人は皆オールドミスと我を呼ぶなる

○ 靜岡　初田實子

峠にて折りし撫子さす髪に黑き蝶とぶ暮の山路

○ 福島　坂本雪仙子

秋の日の夕映の雲あかくしてそことなく思ふ君の病む窓

○ 埼玉　綠枝

草むらを辿れば蟲の聲やみてもすそぬらす玉の白露

○ 橫須賀　前田きみ子

明けやらぬ淋しき野路を親子にや小姫先きに花賣の行く

○ 長崎　範枝子

かりほ干す軒端の日影搖らぎて一と村時雨過ぎにけるかな

○ 四谷　竹内縫子

小松原露散る朝ゆくりなく昨日の磯の人に逢ひぬ

○ 靜岡　山内蓮江

松が枝に十五夜の月上る見えて水首輕く小魚をどりぬ

○ 淺草　竹内富美子

初秋やわがこすもすは舞姫の笑むごとくに咲きにけるかな

○ 高知　藤村紫華子

夜店にて買ひ求め來し手ずれたる聖書の中より押花の出づ

○ 下總　智田てい女

病む者が枕邊近くこほろぎの鳴く音や悲し秋雨の宵

○ 埼玉　菊枝

九月號とる手おそしとひらき見て讀者と見しは千代子孃なり

○ 四谷　杉本靜江

枕邊の花瓶に咲ける常夏に藥香迷ふ君病みし室

○ 近江　瑠璃香

電燈の光佗しき初秋の小川のほとり蟋蟀の啼く

○ 大阪　竹本稻子

小春日や御堂の緣に腹這ひて鳩に餌をやる寺男かな

○ 京都　白桔梗

沈の香のほのかにもれて雨細し尼君います白萩の寺

○ 靜岡　北川和子

白銀の小琴の如き響きして風渡り來る初秋の森

○ 米澤　宮城白百合

鳴き渡る雁の一つら空に消えて江の水さむく秋の風吹く



# 俳句

## 天

秋晴や乳呑む小牛おとなしき　小樽　鈴木若草

## 地

夕風に吹かれて虹のうすれ行　福岡　井上かつ子

## 人

祟り井や秋の夜長を雨しとゞ　青山　森野ひで子

## 秀逸

今朝の秋喪章の襟を正しけり　奈良　西田豊

煉瓦場や野中の河岸の秋晴るゝ　小樽　高橋末子

白萩は夢のやうなる姿かな　阿波　美馬とら子

落葉焚いて栗燒く杣の子供かな　横濱　吉川香郁子

秋の海盥の如き入日影　神戸　山村香枝

## 佳作

秋風や鳩病みて日に蹲る　朝鮮　佐藤露子

三千の町の弔旗や秋の風　上總　坂口みどり

新陵に小鳥なく秋日暮れたり　麹町　月野暎川子

茸山へ登れば遠き刈田かな　彦根　花月

川魚の淺瀬にむろゝ小春かな　伊豆　土屋いそ子

暫くは紅葉明りや木曾の暮　水戸　小湊潔子

露草の露に白粉ときにけり　名古屋　原美子

白萩の宿淋しくも小雨ふる　京橋　本間たち子

菊の香や釜日の路次の清くして　京都　平林ぬい子

花すゝき石置いて渡る野川かな　土佐　中川るい

夕雲の紫寒し秋の水　麹町　本吉清子

稲妻やコスモスの花繚亂と　深川　津谷すゑ子

花芒島振り見ゆる女馬子　福島　山中よね子

廻國の笈納めけり萩の寺　岩代　川原田りう

白萩や水無瀬御殿の朝灯　品川　小林道子

松毬に焚く馬の湯やほろ時雨　香川　大井久子

落栗や夕日のころ塔のさき　京都　和歌子

佛手柑に尼語りよる夜長かな　瀧の川　山田水月

秋風や柳なすべる桐一葉　熊本　大塚いと

萩の露散す雀の朝機嫌　熊本　倉富いち子

鷄頭や禪寺の庫裏の秘し妻　淺草　山本はる

秋の夜やふるき日記を枕讀す　神田　今井明子

明け方を栗落る山に猿の鳴く　京都　長谷川まき

小流や萩にこぼせし齒磨粉　下關　山本芳子
偉人眠る丘を斜や天の川　京都　田井中とく
露に更けし野は茫々と蟲の聲　横濱　大村すゞ子
桐落て夕へ淋しき古廟かな　下谷　鈴木すゞ枝
朝霧や崖の細道險にして　門司　福田八重
蜩や陽明門の入り日影　深川　増田林
萩月夜露晃々と遠砧　尾張　紫人
潮滿つる洲崎の風や蟲月夜　尾張　鈴木照子
釣舟をよせて堤上の蟲も聽く　山口　加藤ふじ
風絶々砧蟲の音雁の聲　大阪　松本かへで
夕映の屆いて長き絲瓜かな　下關　西村文子
奥庭の灯影ゆかしや雨の萩　駿河　高瀬てつ子
はらからのなくて淋しき月見哉　京橋　笹本文子
撥折れて琵琶冷たしや秋の暮　埼玉　秋山いのこ
賜暇歸國病餘を花野散策す　大和　平井富美子
鐘澄めば蟲澄めば夜氣濕りけり　紀伊　中島まさ子
廢校の細き灯や秋の雨　四谷　佐藤操子
柳知る古城の濠や橋朽ちて　大阪　山川すみ子
朝立の目にしむ風や秋の旅　深川　鈴木翠
ゆく秋の大河音なし碧徂徠　京都　但村和歌子
芒野や一と筋白き細流れ　芝　篠崎きみ子
盜まれし佛捨てある花野哉　芝　小倉みどり
火灯せる隣の村や蟲の原　横濱　大柴幹子
時雨るゝや墨繪の山京を繞る　淺草　山本はる子
秋暑う石ほてる河原控え住む　松江　上野靜緒子

秋の灯や押花に思ひ出づる文　下谷　杉島鶴子
朝寒むや見上げる程の石佛　京都　郡路村子
蜻蛉の糸瓜に止る日和哉　芝　早船吾友女
琵琶一曲萩サラ〳〵と動きけり　京都　船木夢子
月淡し碑にのこる蟲の聲　箱根　對木まき子
尼寺の灯ともしころや初時雨　埼玉　清水たか子
銅壺の灯を淋しがる夜寒哉　小石川　中川ふれ
名月や戀に浮かるゝ女繪師　小田原　關清子
お話しの絶間を蘭のかほりかな　肥前　黒田てい子
尼寺の月の馳走やきぬかつぎ　大阪　酒井すゑ子
蟋蟀道ふや夜長の文机　瀧の川　山田水月
里神樂稻のほなみをわたる笛　深川　三重野加智
蘆そよぐ海の夜明や露の汀　愛知　かく子
行き暮れて灯たどるや萩の宿　上總　横尾保子
砧うつ女二人の何かたる　大阪　竹本稻子
三合の酒足らざりき月の庵　吳　森靜子
傾きし海水茶屋や秋の風　靜岡　山内蓮江
萩咲くや庭に灯す姉妹　福岡　高畑けい子
萩の宿女主人は歌しよむ　小田原　關清子
白雨をよそに見て越す峠かな　茨城　小濱鋼子
新涼の窓や美人の朝化粧　神戸　山村香枝子
鎌倉は銀杏落葉の古跡かな　横濱　村上浪子
盃洗に萩の花浮く月の宴　茨城　岩川さち子
畑荒れて茂る尾花や風そよぐ　島根　堀江昌子
露けしや月戀ふ花も水邊草　麴町　川越季

# 誌友倶樂部



▲おや！九月號は、全く新しい女號ですれ、一體新しい女とか、覺醒した女つて、どんな意義が含んでゐるんでせう、世に超越した意義か、はたまた、世にすれた女を指すのでせうか、ともかく今日までの、從順とか貞操とかを以て賞めたゝへられた、所謂良妻賢母の名稱ぢやない事は明、さらば、戀にやぶれたる若き女の、その反抗（と私は思ふ）に火酒を呷り、十二階下を荒したりする、まるで氣狂ひじみた行爲がなければ、新しい女と呼ばはれないとすれば、新しい女てふ文字は所謂世のすれつからし女といふ意に同じになるではありませんでせうか、そしたら夫人にして、譬ひ内外の憂なからしむ敏腕家であつても、新しい女てふ賞語がいたゞけぬわけ、明子樣だつて鹽原で茶番は演じても、歡樂の夢を結べたら、今頃は立派な奥樣、それでも只今の如く左手に美少年を戀せればやまなかつたでせうか、否々、今頃は膝上の美少年を愛して片頰に笑くぼは絶えざるの時、それで明子樣のみ新しい女と呼ぶ事が出來ましたでせうか、結局新しい女などゝは世の閑人が或種のオテンツクに用ゆる流行語に外ならぬと思ひますが皆樣如何？（淸涼）

▲先帝陛下の御製を拜讀して私は泣きました陛下の御高德は新聞紙上などで拜見して居ましたけれど御製の中に含まれた尊い御教訓や厚い御慈愛は到底伺ひしる事は出來ませんでしたどうぞ御惠みのほどを後につたへるよすがとして澤山の御製を一册にして我々臣民の手に殘るやう記者樣御ほれおり下さいましな、恐れ多い事ですが博文館から御出版下さる事は出來ませんか皆樣も御同感だらうと思ひます（赤坂すみれ）

▲花散里の名を以つて絢爛の才筆をお揮ひ遊ばす綾子樣の御寫眞あかず眺めましたわ月の御眉にパッチリした御目もと見るからチヤームされさうで御座います事れ何だか私あの御英姿拜見して一入御慕はしく存じましてよどうぞ此後も益々お揮ひ遊ばして頂戴な（紫河のほとりにて文子）

▲栃木りりー樣誠に恐れ入りますが本誌增刊月宮殿御持ち合せでございましたら何うか御ゆづり下さいませんか御禮は必ずいたしますから（福岡縣三池郡大牟田榮町下川三枝子）

▲一人一話は全く世の中の哲理を含んだものと思ひます。活きた世間の活きた聲として、どれだけ活きた教訓になりませうか、どうぞ毎號盛んにお願ひ申します（岩代、冷露）

▲七月號の龍岡すみ江樣のあの美しい御作實に遺憾なき御發表私の眞の理想幾度かくり返し拜見致しました以後益々御振ひ遊ばせ。エンゼル島の良子の君其後は如何御暮しですか又時々の御消息御もらし下さいれ御兩人樣の御幸福を祈つて居ます。枯小草樣何事も運命とあきらめて希望と愉快を以て過さればなりませんよ御住所御知らせ下されば及ばずながら如何樣にも御力添へ致しますよ。京都の諸姉樣方に御尋ね致します私は女學校卒業後今は故鄕の田舍に歸つて淋しく過して居ますが御地で良家庭に勤め度いと存じますが若し御心當り御座いましたら御住所誌上で御知らせ下さい。大八木しま樣、月見草樣益々御振ひ遊ばせ。さらば皆樣よおすこやかにませ（京都山家にて箕浦鈴枝）

▲毎月待たるゝ女學世界名を聞いてさへ嬉しさに胸はをどる雜誌ほんとに當地の本屋から持つて來るのが何よりの樂しみですあゝ九月號には上原内藤樣の御寫眞が出まして誠に嬉しく拜見致しましたいつかの本にたしか花散里樣は出て居らしたやうに思ひ升きつとさうでせう又萩香樣も今度は意氣な御姿振つて居ます事れ以後も益ゝ御双方樣ともいよゝ御才筆の程を祈ります（薩州の月見草より）

▲九月號の一人一話面白く讀みました。殊に西谷きよ子さんのお話、なんてキビ〳〵してゐるでせう、弱い女性にもこんな方がゐるかと思ふと心強うございます（牛込、秋色女）

▲凡そ物淋しさは秋が一番ですと申しますが私にはその淋しさが是れまで只漠然として居ましたが今年はしみじみと感じ得てその瞬間は如何にも心細く死と云ふ事を思はせましたそれは丁度朝早く霧ある井戸に可弱い自分の手をあてました時傍の庭木の枯れ葉の中で細い聲で草雲雀が鳴きましたのでした私は此の日は晝も夜も此の春亡せた妹や又今病の床に居る友を思はれて涙が止まりませんでした（菊香）

▲思ひかけぬ、九月號の本誌で内藤千代子樣や

上原綾子様に、御目にかゝり、やうやく安心いたしました、随分久しく、私等友人の疑問の種となつて居ましたが、モゥ以後は決して口論はないでせう、やつぱり御二人様とも、人並以上の天才が、御顔に溢れてますワ、ほんとに幾百萬　誌友が此の口論を如何な御心で見て居るでせう、オホ………一言もなく、御口をふさいだ方が多いでせうよ、併しまだ、二三人残つて居ますが、何卒か御願ひですから、また御ついでに御出しなすつて下さいませ、そしたら思ふ事は皆解けますワ、相變らず千代子様も綾子様も、本誌のために、天才を振ふて、頂戴、皆々大きな目で、待つてますよさらば（福岡縣後藤文子）

▲互のむつみは永久に變らじと契ひし友の幾人とも今は離れるともなくはなれて淋しう暮して居ります私、桐子様御言葉嬉しう存じます。きつと御美しいそして私よりもお若い方と想像いたしてをります。私は逆境に育つたすれ者、冷たい女で御座いますの。どうぞ御見捨なく御交はり願たう存じますわ御住所はどの邊でゐらつしやいますの？親しい御文が頂きたう御座います事御身體おいとひ遊ばせ（横濱市須美子）

▲秋もやう〳〵最中よなりました美しうけはいし給ふた月姫様のもとに夜毎々々勝りゆく蟲の音ほんとに秋は眞うございますのれ、九月號には嬉しんでいた効もなう千代子様のお作はなくて失望しました花散る里様の御おもかげ何と云ふ嘉はしい方でせう綾子様どうぞおふるひ下さいまし萩香様のお寫眞が出て讀者諸姉の御満足やさこそ………（濱波、幽美）

▲有髮尼様とやら御同情下すつて誠にありがたうございます、實に私は一時の感情に導かれて斯くも思つたのでございます。あゝ思へば何だかお恥しう御座います私もこれからは氣を取りなほして仰せの通り心を清淨に高潔にもつて趣味の世界に身を投じませう。けれど一と度心にゑがゝれた尼の一字は消えるでせうか？灑遠の幸代様京都の八木こま子様筑後の操子様私のやうな者に御同情下すつて誠にありがたうございます私の住所お知らせ致たう御座いますけれど誌上では少しさしつかへますから：（枯れ小草）

▲宮城の齋藤靜子様其の後御變りもない事よく和歌俳句に御投書遊ばすのれ、靜さんます〳〵御ふるひ遊ばせ永久に御見捨てなく此の誌上で御交り下さいませネそして時々は赤い記章を付けたスメイルにてテニスなしにいらつしやい、雨ふる時は私の校舎の窓と貴女の方の窓より互に顔を出して!!!（仙臺、露香）

▲吉野の蘆邊様毎度御手紙下され誠に御うれしう存じます、此末よろしく御見捨てなく御交りを願ひ升、都合により同村ですけれど他家にて御世話に相成るやも知れませんが其時は又御知らせ申上升金龜城下の穗月様私は城下の松原ですの行末御心安く願ひ升（滋賀縣、花月）

▲誌友倶樂部を讀むに、人々（投稿者）の評の多き、殆八九分を占め、敬慕と、ソネミの言を以て満つ、むべなる哉、さもありなん、さもありぬべし。といひたくなるなり。敬慕果してソネミならざるか、否進みて敬慕たらざるか、他人の隆々たるを見て、其才、其意氣を稱して直に敬慕する人、世に幾人かある。敬慕といふ名の元に、内心其人を妬み羨くすを觀る。而も遂には自己の才の「彼等に到底及ばざるを知つて」「をゝわれは彼の人を敬慕す」と、歎ずる如き聲音を投出すなり。まことに油斷のならぬ敬慕にこそ最初よりソネミの言をなす人は、意地强くして敬慕の名の始めより語らずして、胸中の悶？を有のまゝ發したるのみ。早晩彼等より自己の劣れる性を覺るに及んでは遂に又「あゝわれも彼を敬慕す」と。眞の敬慕は、余り言の葉に上らぬものと聞いたり。（京都、金桃）

▲誠に〳〵恐入りますが東京の皆様に御願ひいたします私は只今田舎の小學校に奉職して居る者で御座いますが今度東京の中流以上の家庭へ見習ひに參りとう御座いますからほんとうに不躾な御願ひでは御座いますが何卒御世話下さいませんか口さへ御座いますればすぐにも參へられますから誌上で御敎へ下さいませ（千葉の誌友）

▲悲劇十番へお出し遊した、但馬白百合様、あなたも京都の第二を昨年お出になりましたのれ！ほんとうにおなつかしい事、おさしつかへなくば、御名前をお明かし下さい、お願ひでかすら、私もあなたと同じクラスなのですわ、誰かおわかりになつて？私れ、山下先生の組でしたのよ、絶えず、同窓の皆様おなつかしう存じて居ります、あなたどなたでしようれ、但馬の出石の結城様の其後の御様子御存じ？誌上で是非お交り願ひ度きものです、では又お目に懸りませう、御機嫌よく（中國コスモス）

▲誌友倶樂部はハガキに限る、又他の投書は餘白へ必ず住所氏名を明記されたし（記者）

# 新刊紹介

○いろは子供四十八景（スケッチ）(巖谷小波著)
無邪氣なる子供の日常生活の中より殊に面白いことゝを撰びて、これをいろは四十八景にわかち、それに一々美しき繪を挿みたり。帙入の頗る美本なれば、良家の子女への贈物として此上なきものなり。(定價壹圓、中西屋發行)

○明治天皇御傳(須藤光輝選)
此度の大事にあたりて、先帝の御傳若くば御事蹟の世に公にせられたるもの甚だ多けれど、大概は新聞雜誌の切拔を編輯したる、所謂る一夜作りのものに過ぎざるに、此書は深く、先帝の御事蹟と明治年間の歷史の變遷とに留意し、且つ行文甚だ流麗なれば、此種の書中の白眉たるは云ふまでもなく、卷頭二十餘葉の寫眞版及び挿入の御尊影を附錄とせるなど、其用意の到れるは嬉し。(定價貳圓、金尾文淵堂發行)

○自然と趣味(物集梧水著)
本書は女學世界誌上にて常に彩筆を揮はれし梧水子の文集なり。或は自然の風景を歌ひ、或は事物の趣味を說き、樣々の文體にて樣々の趣味風景を描きたるものなれば、敘事文を作り和歌俳句を作らんと欲するものには絕好の參考書たり、敢て調義に嗜みある諸姉に薦む。(定價六拾五錢、嵩山房發行)

○現代處世指針(中島德藏述)
現代ほど道德問題の混沌たる時代はなからん、新舊思想の衝突、姑嫁の衝突、家庭問題、戀愛問題、かぞへ來れば唯だ長歎息するの他なし、此時に當りて道德問題、殊に婦人問題に就て研究深き著者が、一々實際問題に對して之が解決を與へたるものを輯錄したるものなり、「ノラの將來は何うなるでせう」以下百數十の項目あり。(定價八拾錢、東洋大學出版部發行)

○小說北の國(田口掬汀作)
材料を北海道に取りたる極めて複雜且つ面白き小說なり、今淨海と云はるゝ沼田金助に配するに學者肌の瀨田子爵を以てし、それに花の如き令孃も出づれば、豪傑肌の青年も出で、舊式の叔母、名聲ある辯護士、硬骨なる公證人など、さま〴〵なる人物が樣々なる活動をなすさま、變化多くして興趣限りなし。(定價九十錢、有倫堂發行)

○家庭醫典(音尾博士編)
一般の家庭の爲めに普通の病質及び豫防衞生等に關する知識を普及せむとて編纂せられたるものなり、理論を說くこと稍繁に過ぎ、通俗的ならざるは惜むべし。(定價貳圓七十錢、東亞堂書房發行)

○明治天皇御製集(鹿野千代夫謹編)
明治天皇には古今に稀れなる歌聖にまし〳〵けり、御親から御造詣深くおはしましけるのみならず、普く萬民にもこの道を奬勵せさせたまひぬ、本書は御製二百有餘首を春夏秋冬雜にわかち記し、携帶に便利なるやう寸珍の小册子たり。(正價三十五錢、趣味社發行)

○やまとにしき(酒井開治編)
明治天皇の御製三百餘首を輯めたる小册子なり、神祇、國事、軍事、人事、新年、四季、雜、歌道の諸神にわかてり。(非賣品、中外商業新報社發行)

○小說町むすめ(前島優梨子作)
お濱以下二十餘篇の短篇小說を輯めたるものなり、水野葉舟氏の序文に「この作者は極めて從順な優しい、小さい心を持つてゐる人であるらしい、この作品には凡てその心が映つてゐる」と云へるは同感に堪へず。(定價三拾錢、女子文壇社發行)

○花男と浪子の手紙(無名氏著)
德富蘆花氏著『不如歸』を更に書簡體に書きかへたるものなり、おの〳〵の手紙の中に其人々の個性のよく現はれたるが著者の自慢と見ゆ、若き男女の愛讀措くあたはざるものなるべし。(定價參拾五錢、豐文館發行)

# 募集（十月八日〆切）

## ●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲短文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事 △字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす △名宛は博文館内女學世界行とし △特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

### 賞品

△短文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢


每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）…前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）…前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）…前金二圓八十錢
内（定刊數…十二冊
　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税 一冊 二錢

廣告料

| 廿四字詰 | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 一行 | … | … | … | 五十錢 |
| 四半頁 | … | … | 十圓 | 七圓五十錢 |
| 半頁（卅二行） | … | 廿三圓 | 十九圓 | 十四圓 |
| 一頁（六十四行） | 五十五圓 | 四十五圓 | 三十八圓 | 二十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●送目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

大正元年九月廿三日印刷納本　第拾貳卷
大正元年十月一日發行　第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話 本局 二千六百二十番 三千二百二十九番
三百三番
千十八番

（後付の一）

# 家庭整理の指導

# 家庭百科全書

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

全部 五十册・每月一回發行

和裝美本◎紙數各三百頁
石狀彩色口繪一葉挿畵十數個

正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松[illegible]文雅君 [illegible]幸齋理常君 共著
- 第七編 育兒の務 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 簡易治療法 藤井靜子女史著
- 第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衞生 牧野清子女史著
- 第十三編 敎育お伽噺 木村小舟君著
- 第十四編 女德の養成 前田長太君著
- 第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養 鹿野[illegible]骨君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤[illegible]み子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 子女の敎養 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第二十編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君 著
- 第廿一編 書道手引 井田秀生君著
- 第廿二編 歌の手引 大和田健樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著

東京日本橋 發行所 販賣用電話本局二六二〇

# 婦女必讀の大全書

第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著

第廿六編 室内装飾法 近藤正一君著

第廿七編 衣服の調整 石崎篁園君著

第廿八編 洋樂手引 前田久八君著

第廿九編 兒童訓話 母の知識 木村小舟君著

第卅編 洋食の調理 東京治庖會講師著

第卅一編 衛生と衣食住 福田琴月君著

第卅二編 東西名婦の面影 高須梅溪君著

第卅三編 婚姻のかゞみ 河崎酔雨君著

第卅四編 交際と談話 福田琴月君著

第卅五編 婦人日常座右銘 高須梅溪君著

第卅六編 日用家庭理科 一戸清方君著

第卅七編 偉人の妻 前田雪子女史著

第卅八編 家庭日常 公けの心得 小西眞雄君著

第卅九編 歐米 魚介新料理 赤堀峰吉君著

第四十編 **家庭新飲料** 一名 調合酒、清涼飲劑製法 赤堀峰吉君 小原總雄君 共著

第四一編 **洋菓子の調製** 赤堀峰吉君 赤堀道子女史 共著

●西洋菓子を拵へます時の心得●一月より三月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）●四月より六月に至る西洋菓子の拵へ方（八十八種）●七月より九月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）●十月より十二月に至る西洋菓子の拵へ方（九十種）

第四二編 **續編物指南** 新刊 石井とみ子著

●第一章編物の基礎とする二十四種の編方圖●第二章杖折の編方五種●第三章銀貨入の編方五種●第四章花瓶敷の編方六種●第五章寫眞挾みの編方三種●第六章ひぢつきの編方二種●第七章手提袋の編方五種●第八章帽子の編方四種●第九章ネクタイの編方●第十章足袋の編方四種●第十一章襟卷の編方●第十二章肩掛の編方五種●附錄……編物の友……第十二種

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

洋裝菊判總洋布特製函入美本
紙質精良印刷鮮明各冊千頁以上

# 名家小

第一版以下數版を重ぬ

新文學の勃興以來、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏文運の變遷一にして足らず、大家相踵きで出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛漫、秋草の温雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸の恐あり。本館此處に思ふところあり、**名家小說文庫**を發刊し、毎卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

## 露伴叢書　全二冊

前編目次


## 秋聲叢書　全一冊

後編目次


## 澁柿叢書　全一冊

目次


## 柳浪叢書　全二冊

前編目次


後編目次


女（後付の四）

# 說文庫

各冊正價金貳圓　小包料各二十錢

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇

目次
●氣まぐれもの ●濁らぬ水 ●里の女 ●老骨 ●學士の戀 ●花園
●みち芝 ●藪かうし ●はぬ罪 ●狂學士 ●紗海寺の五日
●愚物 ●春の月 ●お靜 ●通譯官 ●一念
●ひとり樓 ●みだれ心 ●見え坊 ●古巣 ●肖像畫 ●危機

## 鏡花叢書

全一冊

目次
▼外科室 ▼勝手口 ▼外國軍事通信員 ▼脚本深沙大王 ▼鷺の灯
▼海城發電 ▼鷺花徑 ▼そら解
▼化銀杏 ▼梟物語 ▼月夜遊女 ▼靈象 ▼星女郎
▼慈善會 ▼やどり木 ▼少年行 ▼[illegible]白 ▼紫手綱

## 花袋叢書

全一冊

目次
▼名張少女 ▼女教師 ▼新築の家 ▼春の別墅 ンスドオテエ） ▼寫生の花 ▼一家の妻 ウクス、メーテルリンク（ ソウ、コッペエ） ▼二人 ▼思ふどち ▼澤山窮谷 ▼みやま鷲 ▼悲劇
▼島の心中 ▼姉家の日記 ▼冷妹 ▼涙 ▼初戀の人 ▼不慮の出來事 ▼山小屋 ▼老僧 ▼孤島
▼老夫婦 アルフォ ▼花笛の名手 ▼無辜（モ へフランン ▼懺悔記 ▼小桃源

## 小波叢書

全一冊

目次
▼あゝ京都 ▼男の心 ▼血 ▼かつら川 ▼軍國女氣質

## 水蔭叢書

全一冊

目次
▼女房殺し ▼新潮來出 ▼旅役者 ▼林間の高塔
▼湖心の誓 ▼紫海苔 ▼地底の人 ▼巖下の家
▼鬼 ▼水棲記 ▼別莊守 ▼紙子くらべ
▼つぎ紙子 ▼石地藏 ▼濁流 ▼海上の饑渇
▼惡道路 ▼花井お梅

## 美妙叢書

全一冊

目次
▼阿千代 ▼里見勝元 ▼のゝみうり ▼迷耶悟平 ▼帝國海軍 ▼たかせ川 ▼𫝆至丸
▼錢旦那 ▼若白髮 ▼惡の善 ▼磯千鳥 ▼決鬪 ▼怪空上人 ▼太郎定綱
▼峰の殘月 ▼古根 ▼孫右衞門 ▼妻琴 ▼外刑 ▼犬傳士 ▼二郎經高
▼後の殘月 ▼いのり首 ▼馬丁仙吉 ▼若葉の露 ▼囚の饑海 ▼破壞主義

## 篁村叢書

全一冊

## 新刊

目次
●紅雀●果報者●三鱗●火雨洞●よしやあしや●まかぬたね●當世金の草鞋●武玉川●つり的●十年一昔●油蟬●福神揃●滿地黄金●御蔭參り

女（後付の五）

第十八巻第十三號……十月一日發行

# 文藝倶樂部

○菊判本文紙數三百頁
○原色寫眞版一枚
○寫眞版光澤紙刷八頁
○普通四枚。二色刷光澤紙二頁
○木版彩色數十度刷錦繪一枚

正價二十五錢
郵稅二錢五厘

塚原澁柿君が歴史小説家の唯一大家にして、其の筆路の流麗なると、其の考證の該博とを以て、夙に覇を稱するは何人も知悉する所、しかも同君作の脚本は、本誌が載する「命乞ひ」を以て嚆矢とす。正史に據れる同君の脚本は、必ずや斯壇の珍たらむ。尚本號には三島霜川君作「博士の娘」及び君竹水君作「うらだな」の二小説を收む。共に其の構想の清新、其の文章の幽婉、近來稀に見る傑作たらむ。次に栗島狹衣君作舞踊劇「胡蝶」を掲ぐ。是れ新たに世に出づる有樂座女優諸孃の爲に近く實演せらるゝもの、舞臺の花は此の好脚本を得て色をも香をも増すなるべし。活社會の諸欄其の他例號に倍して充溢する趣味と實益との天下に冠たるを見よ!!!



東京本町 博文館

女(後付の七)

女（後付の八）

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界　第拾貳卷第拾參號　（毎月一回廿三日印刷納本）

明治三十四年十一月廿五日第三種郵便物認可

（大正元年九月廿三日印刷納本）






定價貳拾錢　郵稅貳錢